松山市文化財調査報告書 97

東山古墳群 Ⅱ

－3次調査・6次調査－

2004

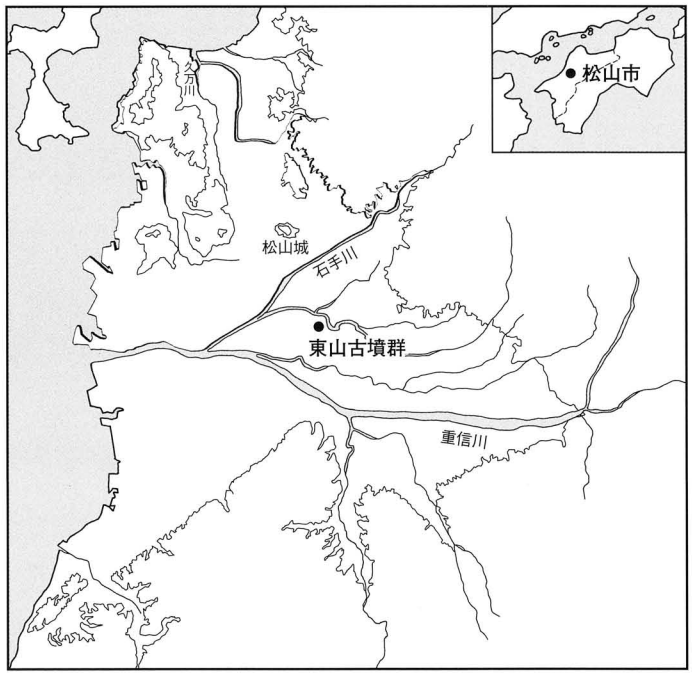
松山市教育委員会

財団法人松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

東山古墳群 Ⅱ

―3次調査・6次調査―



2004

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版1　東山古墳群（南上空より）

巻頭図版2　29号墳出土鉄鉾・鉄刀

序

松山市は、市内東石井の公園整備に伴い、事前の発掘調査を実施しました。本書はその調査成果をまとめたものです。

調査地は松山平野のほぼ中央に位置する独立丘陵で、『伊予国風土記』逸文に記されている「伊予三山」（天山・星岡山・東山）の一つとしてよく知られています。周辺には縄文時代をはじめとして古墳時代から中世にわたる数多くの遺跡が存在しています。とくに、東山は、現在までの調査によって23基の古墳を検出し、松山平野の中でも有数の古墳時代の群集墳であることが判明しています。

今回の調査からは、縄文土器、弥生時代前期の土壙墓、古墳６基、中世の土器を検出した。とくに、古墳６基からは古墳の墳形と石室構造など松山平野全体の古墳形態を考える上で貴重な資料となっています。また、弥生時代前期の土壙墓は松山平野で数少ない出土例である。

このような成果をあげることができましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力をたまわったお陰と心から感謝申しあげる次第です。

なお、本書が埋蔵文化財の調査研究の一助となり、文化財保護、教育文化の向上に寄与でき、今後各方面でご活用できれば幸いに存じます。

平成16年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　言

1．本書は、松山市教育委員会文化教育課（現文化財課）と財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが平成元年と平成４年度に実施した松山市東石井乙39－１外所在の松山市市有地内における発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、松山市公園緑地課が公園整備に伴う事前調査として実施された。

3．遺構の作図・製図、遺物の実測・製図は高尾和長の指示のもと志賀夏行、水口あをい、仙波ミリコ、仙波千秋、東山里美、金子育代、高尾久子、田﨑真理、中村紫、宮内真弓が行った。

4．遺構は呼称を略号で記述した。土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、性格不明遺構：ＳＸである。

5．写真図版は高尾と大西朋子が協議し、遺物の撮影及び図版作成は大西が行った。

6．遺構の写真撮影は高尾、松村淳、大西が行った。

7．遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に記した。

8．本書に使用した方位は、すべて磁北である。

9．本書に関わる遺物や記録類は、松山市立埋蔵文化財センターで保管している。

10．鉄製品のＸ写真撮影及び分析では、東山古墳群６次調査出土の鉄鉾・鉄刀は（株）京都科学に業務委託し、東山鳶が森古墳群１次・２次・東山古墳群６次調査出土品と寄贈品は愛媛大学村上恭通、田中謙氏に指導・協力を賜った。記して感謝申しあげます。

11．本書の執筆は高尾、山之内志郎、梅木謙一が行った。

12．本書の編集は高尾が行った。

13．製版　写真図版175線
　　印刷　平版オフセット印刷
　　用紙　カラー写真・本文　マットコート110kg
　　写真図版　マットコート135kg
　　製本　アジロ綴

本 文 目 次

第１章　はじめに――――――――――――――――――――――――――― 髙 尾 …… 1

1 調査に至る経緯
2 刊行組織
3 環境

第２章　東山古墳群３次調査――――――――――――――――――――― 髙 尾 …… 5
1．調査の経過
2．調査
3．小結

第３章　東山古墳群６次調査――――――――――――――――――――― 髙 尾 …… 17
1．調査の経過
2．遺構と遺物
3．２区の調査
4．小結

第４章　東山鳶が森古墳群１次調査・２次調査、寄贈鉄製品 ――― 髙 尾 …… 73

第５章　考察　　愛媛県内出土の渡来系遺物 ――― 山之内…… 81

第６章　まとめ ――― 髙 尾 …… 131

附章　南中学校構内遺跡（１次調査）の調査 ――― 梅 木 …… 135

挿　図　目　次

第１図　遺跡分布図（縮尺1/25,000）…… 3
第２図　東山古墳群調査地位置図（縮尺1/5,000）…… 4
東山古墳群３次調査
第３図　調査地位置図（縮尺1/500）…… 8
第４図　遺構配置図（縮尺1/150）…… 9
第５図　ＡＴ１区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 10
第６図　ＡＴ２区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 11
第７図　ＡＴ３区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 12
第８図　ＡＴ４・５区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 13
第９図　ＢＴ３区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 14
第10図　ＢＴ４・５区遺構配置図・土層柱状図（縮尺1/20・1/80）…… 15
東山古墳群６次調査
第11図　１区・２区遺構配置図（縮尺1/500）…… 19
第12図　１区調査前地形測量図（１）（縮尺1/400）…… 20
第13図　１区調査前地形測量図（２）（縮尺1/200）…… 21
第14図　１区遺構配置図及び調査後地形測量図（縮尺1/200）…… 22
第15図　24号墳石室測量図（縮尺1/40）…… 24
第16図　24号墳石室展開図（縮尺1/40）…… 25
第17図　24号墳主軸断面測量図（縮尺1/40）…… 26
第18図　24号墳床面・遺物測量図（縮尺1/20）…… 27
第19図　24号墳石室内出土遺物実測図（１）（縮尺1/3）…… 28
第20図　24号墳石室内出土遺物実測図（２）（縮尺1/2）…… 29
第21図　24号墳周溝内出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3）…… 30
第22図　25号墳床面・遺物測量図（縮尺1/20）…… 31
第23図　25号墳展開図・出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3・1/30）…… 32
第24図　ＳＫ101測量図・出土遺物実測図（縮尺1/2・1/20）…… 33
第25図　ＳＫ102測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4・1/20）…… 34
第26図　ＳＫ103測量図・出土遺物実測図（縮尺1/2・1/20）…… 35
第27図　ＳＫ104測量図（縮尺1/20）…… 36
第28図　ＳＫ105測量図（縮尺1/20）…… 37
第29図　ＳＸ101測量図（縮尺1/100）…… 38
第30図　ＳＸ101出土遺物実測図（１）（縮尺1/3）…… 39
第31図　ＳＸ101出土遺物実測図（２）（縮尺1/3・1/4）…… 41
第32図　ＳＸ101出土遺物実測図（３）（縮尺1/3・1/4）…… 42
第33図　ＳＸ101出土遺物実測図（４）（縮尺1/3）…… 43
第34図　ＳＸ102測量図（縮尺1/80）…… 44
第35図　２区調査前地形測量図（縮尺1/200）…… 45

第36図　２区遺構配置図及び調査後地形測量図（縮尺1/200）…… 46
第37図　20号墳石室測量図・展開図（縮尺1/40）…… 47
第38図　20号墳床面・遺物測量図（縮尺1/20）…… 48
第39図　20号墳出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3）…… 49
第40図　27号墳石室・周溝測量図（縮尺1/60）…… 50
第41図　27号墳石室展開図（縮尺1/40）…… 51
第42図　27号墳床面・出土遺物測量図（縮尺1/20）…… 52
第43図　27号墳石室・羨道部・周溝出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3）…… 54
第44図　28号墳測量図・周溝内出土遺物実測図（縮尺1/3・1/40・1/100）…… 55
第45図　29号墳測量図・主体部出土遺物測量図（縮尺1/20・1/100）…… 56
第46図　29号墳主体部出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 57
第47図　ＳＫ201測量図（縮尺1/40）…… 58
第48図　ＳＤ201測量図・出土遺物実測図（縮尺1/4・1/40）…… 59
第49図　ＳＸ201測量図（縮尺1/40）…… 59
第50図　ＳＫ202出土遺物実測図（縮尺1/3）…… 60
第51図　その他出土地点不明出土遺物実測図（縮尺1/2・1/3・1/4）…… 61
第52図　東山鳶が森古墳群１次・２次調査地遺構配置図（縮尺1/500）…… 73
第53図　東山鳶が森古墳群１次調査地１号墳・３号墳出土鉄製品実測図（縮尺1/2）…… 75
第54図　東山鳶が森古墳群１次調査地４号墳出土鉄製品実測図（縮尺1/2）…… 75
第55図　東山鳶が森古墳群１次調査地６号墳出土鉄製品実測図（縮尺1/2）…… 76
第56図　東山鳶が森古墳群２次調査地８号墳出土鉄製品実測図（縮尺1/2）…… 76
第57図　寄贈鉄製品実測図（１）（縮尺1/2）…… 77
第58図　寄贈鉄製品実測図（２）（縮尺1/2）…… 78
第59図　遺跡位置図(縮尺1/100,000)…… 82
第60図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(1) (縮尺1/3)…… 84
第61図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(2) (縮尺1/3)…… 85
第62図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(3) (縮尺1/3)…… 86
第63図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(4) (縮尺1/3)…… 88
第64図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(5) (縮尺1/3)…… 89
第65図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(6) (縮尺1/3)…… 90
第66図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(7) (縮尺1/3)…… 91
第67図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(8) (縮尺1/3)…… 92
第68図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(9) (縮尺1/3)…… 93
第69図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(10) (縮尺1/3)…… 94
第70図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(11) (縮尺1/3)…… 95
第71図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(12) (縮尺1/3)…… 96
第72図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(13) (縮尺1/3)…… 97
第73図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(14) (縮尺1/3)…… 98

第74図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(15) (縮尺1/3)……99
第75図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(16) (縮尺1/3)…… 100
第76図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(17) (縮尺1/3) …… 101
第77図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(18) (縮尺1/3) …… 102
第78図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(19) (縮尺1/3)…… 103
第79図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(20) (縮尺1/3) …… 104
第80図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(21) (縮尺1/3)…… 105
第81図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(22) (縮尺1/3)…… 106
第82図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(23) (縮尺1/3)…… 107
第83図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(24) (縮尺1/3)…… 108
第84図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(25) (縮尺1/3)…… 109
第85図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(26) (縮尺1/3・1/4)…… 110
第86図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(27) (縮尺1/3)…… 111
第87図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(28) (縮尺1/3)…… 112
第88図　市場南組1号窯跡関連資料実測図(29) (縮尺1/3)…… 113
第89図　東山古墳群調査地位置図(縮尺1/2,500)…… 133
第90図　調査地位置図(縮尺1/2,000)…… 135
第91図　出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4)……136

表　目　次

表１　溝一覧
表２　土坑一覧
表３　性格不明遺構一覧
表４　24号墳出土遺物観察表　土製品
表５　24号墳出土遺物観察表　鉄製品
表６　24号墳出土遺物観察表　装身具
表７　24号墳周溝内出土遺物観察表　土製品
表８　24号墳周溝内出土遺物観察表　鉄製品
表９　25号墳出土遺物観察表　土製品
表10　25号墳出土遺物観察表　装身具
表11　ＳＫ101出土遺物観察表　鉄製品
表12　ＳＫ102出土遺物観察表　土製品
表13　ＳＫ103出土遺物観察表　鉄製品
表14　ＳＸ101出土遺物観察表　土製品
表15　20号墳出土遺物観察表　土製品
表16　20号墳出土遺物観察表　装身具
表17　27号墳出土遺物観察表　土製品
表18　27号墳出土遺物観察表　鉄製品

表19　27号墳羨道部出土遺物観察表　土製品
表20　27号墳周溝内出土遺物観察表　土製品
表21　28号墳出土遺物観察表　土製品
表22　29号墳出土遺物観察表　鉄製品
表23　ＳＤ201出土遺物観察表　土製品
表24　ＳＫ202出土遺物観察表　土製品
表25　その他出土地点不明出土遺物観察表　土製品
表26　その他出土地点不明出土遺物観察表　鉄製品
表27　東山鳶が森古墳群１次調査地１号墳出土遺物観察表　鉄製品
表28　東山鳶が森古墳群１次調査地３号墳出土遺物観察表　鉄製品
表29　東山鳶が森古墳群１次調査地４号墳出土遺物観察表　鉄製品
表30　東山鳶が森古墳群１次調査地６号墳出土遺物観察表　鉄製品
表31　東山鳶が森古墳群２次調査地８号墳出土遺物観察表　鉄製品
表32　寄贈品遺物観察表　鉄製品
表33　松山平野の古墳時代朝鮮半島系遺物出土遺跡一覧
表34　東山古墳群古墳一覧表
表35　南中学校出土遺物観察表　土製品

写真図版目次

巻頭図版１．東山古墳群（南上空より）
巻頭図版２．29号噴出土鉄鉾・鉄刀
図版１　１．東山古墳群遠景（南西より）
　　２．３次調査地現況（南より）
図版２　１．ＡＴ１区完掘状況（１）（西より）
　　２．ＡＴ１区完掘状況（２）（西より）
図版３　１．ＡＴ２区完掘状況（１）（西より）
　　２．ＡＴ２区完掘状況（２）（北東より）
図版４　１．ＡＴ３区完掘状況（西より）
　　２．ＡＴ４区・ＡＴ５区東西ベルト土層状況（北より）
図版５　１．ＢＴ３区完掘状況（北東より）
　　２．ＢＴ４区・ＢＴ５区完掘状況（北東より）
図版６　１．６次調査地１区現況（北より）
　　２．６次調査地２区現況（南東より）
図版７　１．１区検出状況（北より）
　　２．１区完掘状況（北より）
図版８　１．24号墳石室完掘状況（西より）
図版９　１．24号墳石室・周溝完掘状況（北より）
　　２．24号墳床面検出状況（１）（東より）

図版10　1．24号墳床面検出状況（2）（東より）
2．24号墳閉塞状況（1）（南より）
図版11　1．24号墳閉塞状況（2）（東より）
2．24号墳閉塞石除去後状況（東より）
図版12　1．25号墳検出状況（奥）（東より）
2．25号墳床面検出状況（西より）
図版13　1．25号墳遺物出土状況（西より）
2．25号墳床面検出状況（西より）
図版14　1．ＳＫ101・ＳＫ102完掘状況（北東より）
2．ＳＫ101完掘状況（北東より）
図版15　1．ＳＫ102完掘状況（北東より）
2．ＳＫ102遺物出土状況（北東より）
図版16　1．SX101・SX102完掘状況（北より）
2．SX101遺物出土状況（北より）
図版17　1．SX102完掘状況（1）（南より）
2．SX102完掘状況（2）（東より）
図版18　1．２区検出状況（西より）
2．２区完掘状況（西より）
図版19　1．20号墳石室内遺物出土状況（南より）
2．20号墳床面検出状況（南より）
図版20　1．26号墳・27号墳・28号墳完掘状況（西より）
2．27号墳完掘状況（西より）
図版21　1．27号墳周溝内遺物出土状況（東より）
2．29号墳完掘状況（南より）
図版22　1．29号墳鉄鉾出土状況（西より）
2．29号墳鉄刀出土状況（北より）
図版23　1．24号墳主体部・周溝内（62）出土遺物
図版24　1．25号墳（63～65）・SK102（67）・SK103（68、69）・SX101（70、71、99）出土遺物
図版25　1．ＳＸ101出土遺物
図版26　1．20号墳（123、125、126）・27号墳石室内（128、130、132～136）・羨道部（137）・周溝内（139～141、144）出土遺物
図版27　1．29号墳出土遺物
図版28　1．29号墳（147）・その他出土地点不明（169～173）出土遺物

第４章　東山鳶が森古墳群１次・２次調査出土品・寄贈品

図版29　1．東山鳶が森古墳群１次調査地１号墳（1001）・３号墳（1002～1008）・４号墳（1009～1018）出土遺物
図版30　1．東山鳶が森古墳群１次調査地６号墳（1019～1022）、２次調査地８号墳（1023～1032）出土遺物
図版31　1．寄贈品（1）
図版32　1．寄贈品（2）

第５章　愛媛県内出土渡来系遺物

写真１　高坏(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真２　高坏(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真３　壺A(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真４　壺B(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真５　壺C(土壇原古墳群Ⅴ遺跡12号墳)愛媛県教育委員会蔵
写真６　壺C(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真７　甕(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真８　把手付鍋(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真９　把手付椀(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真10　甕(土壇原古墳群12号墳) 愛媛県教育委員会蔵
写真11　陶質土器　長頸壺(松山市小野周辺)
写真12　陶質土器　長頸壺(朝倉村樹之本古墳) (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター蔵
写真13　陶質土器(伊予市猿ヶ谷2号墳封土内) 愛媛県歴史文化博物館蔵
写真14　陶質土器　小型器台(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真15　陶質土器　高坏・短頸壺(朝倉村城ヶ谷古墳・朝倉村) 朝倉村教育委員会蔵
写真16　陶質土器　短頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳)　宇和町歴史民俗資料館蔵
写真17　陶質土器　高坏(宇和町伊勢山大塚古墳) 個人蔵
写真18　陶質土器　台付長頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳) 宇和町歴史民俗資料館蔵
写真19　陶質土器　長頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳) 個人蔵
写真20　陶質土器　長頸壺(宇和町) 宇和町歴史民俗資料館蔵
写真21　陶質土器　坏付壺(<上>玉川町別所・<下>土壇原古墳群9号墳)
<上>玉川町教育委員会蔵　<下>愛媛県教育委員会蔵
写真22　陶質土器　壺(宇和町岩木)　個人蔵
写真23　陶質土器　壺(底部)
写真24　朝鮮系軟質土器(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真25　朝鮮系軟質土器(船ヶ谷遺跡4次調査地)
写真26　算盤玉形紡錘車
(<手前>猿ヶ谷2号墳封土内<左>伊予市片山・太郎丸遺跡<右>筋違B遺跡)
<手前>愛媛県歴史文化博物館蔵<左>伊予市教育委員会蔵<右>

第1章　はじめに

1 調査に至る経緯

平成元年と平成4年に松山市東石井町に所在する星岡公園（通称、東山）の整備事業に伴う埋蔵文化財の確認願いが松山市公園緑地課より松山市教育委員会文化教育課（以下、文化財課）に提出された。

申請地は、松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の「東山縄文・弥生遺物包蔵地　東山古墳群」内にあり、周知の遺跡として知られている。

また、包蔵地内では東山鳶が森古墳群1次・2次調査と東山古墳群4次・5次調査の4度の調査が実施され21基の古墳が調査されている（西尾1978・田城1994）。よって文化財課では、現地踏査を実施した。その結果、申請地には古墳の存在が認められた。

現地踏査の結果を受け、文化教育課と公園緑地課ならびに（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターの3者は遺跡の取り扱いについて協議を行い申請地内の本格調査を実施することとなった。調査期間と担当者を記しておく。

東山古墳群3次調査	面積　500㎡	平成元年10月26日～	同年11月20日	松村淳
東山古墳群6次調査	面積1,100㎡	平成4年11月1日～平成5年3月31日		田城武志・髙尾和長

2 刊行組織（平成16年3月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	中矢陽三
事務局	局長	武井正浩
	企画官	遠藤宗敏
	企画官	石丸　修
文化財課	課長	八木方人
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	三宅泰生
	事務局次長	菅　嘉見
埋蔵文化財センター	所長	杉田久憲
	専門監兼学芸係長	高本昌陽
	次長兼調査係長	西尾幸則
	担当	髙尾和長
		大西朋子

3 環境

1）遺跡の立地

松山平野は、愛媛県のほぼ中央に位置する県下最大の平野であり、高縄山に源を発した河川により形成された沖積平野である。東山古墳群はこの平野の中央に位置する。調査地は、松山平野を西流する小野川がＳ字状に蛇行した左岸に位置し、低い分離独立丘陵内にある。この、小野川を挟んだ東岸に星岡丘陵、南側に天山丘陵が所在し、この三つの丘陵を古来より「伊予三山」と呼称している。周辺の主要な遺跡としては、北東部に福音小学校構内遺跡、筋違遺跡、東部に来住廃寺、久米高畑遺跡、西部に東石井遺跡、西石井遺跡がある。

2）歴史的環境

近年の発掘調査によって、当遺跡周辺には数多くの遺跡が存在していることが明らかとなった。ここでは、調査地周辺の遺跡の展開を時代順に概説していく。

旧石器時代～縄文時代

遺物は、東山鳶が森古墳群でサヌカイト製ナイフ型石器１点、天山天王が森遺跡で安産岩製ナイフ型石器１点、釜ノ口遺跡でチャート製ナイフ型石器１点と尖頭器１点が出土している。遺構は検出していない。

弥生時代

前期の遺跡は、筋違Ｆ遺跡の土坑内より土器片が出土している。石井東小学校構内遺跡からは、長方形の土壙墓と大型の壺棺墓や木葉文が施された壺型土器が出土している。

中期の遺跡は、福音小学校構内遺跡から竪穴式住居址と土坑を検出している。久米高畑遺跡23次調査地・25次調査地では弥生前期末～中期初頭の大溝が２条並列で確認されており環壕集落の可能性が指摘されている。

後期の遺跡は、釜ノ口遺跡から竪穴式住居址・土坑・溝が検出されている。とくに、釜ノ口遺跡７次調査地からは４棟の竪穴式住居址の炉内からガラス小玉が１点ずつ出土した。その中の１棟ＳＢ１は焼失住居であり祭祀的行為が行われたと推測されている。また、釜ノ口遺跡８次調査地では、溝内より破鏡が出土し集落の中心的な位置をしめていたことが明らかになっている。東山の西の地域には、東石井遺跡、西石井遺跡、西石井荒神堂遺跡があり竪穴式住居址、溝などの集落に関連する遺構を検出している。とくに、西石井遺跡で検出した溝からは、多量の土器が出土している。

古墳時代

集落では、北久米浄蓮寺遺跡から竪穴式住居址、掘立柱建物址、筋違Ａ～Ｃ・Ｅ～Ｈ・Ｋ遺跡から竪穴式住居址、福音小学校構内遺跡からは、100棟以上の竪穴式住居址と掘立柱建物址が検出されている。

古墳では、天山、東山、星岡の分離独立丘陵上に数多くの古墳が点在している。なかでも天山神社北古墳からは半円方形帯神獣鏡や鉄剣が出土し、天山天王が森遺跡からは三角縁神獣鏡が出土している。

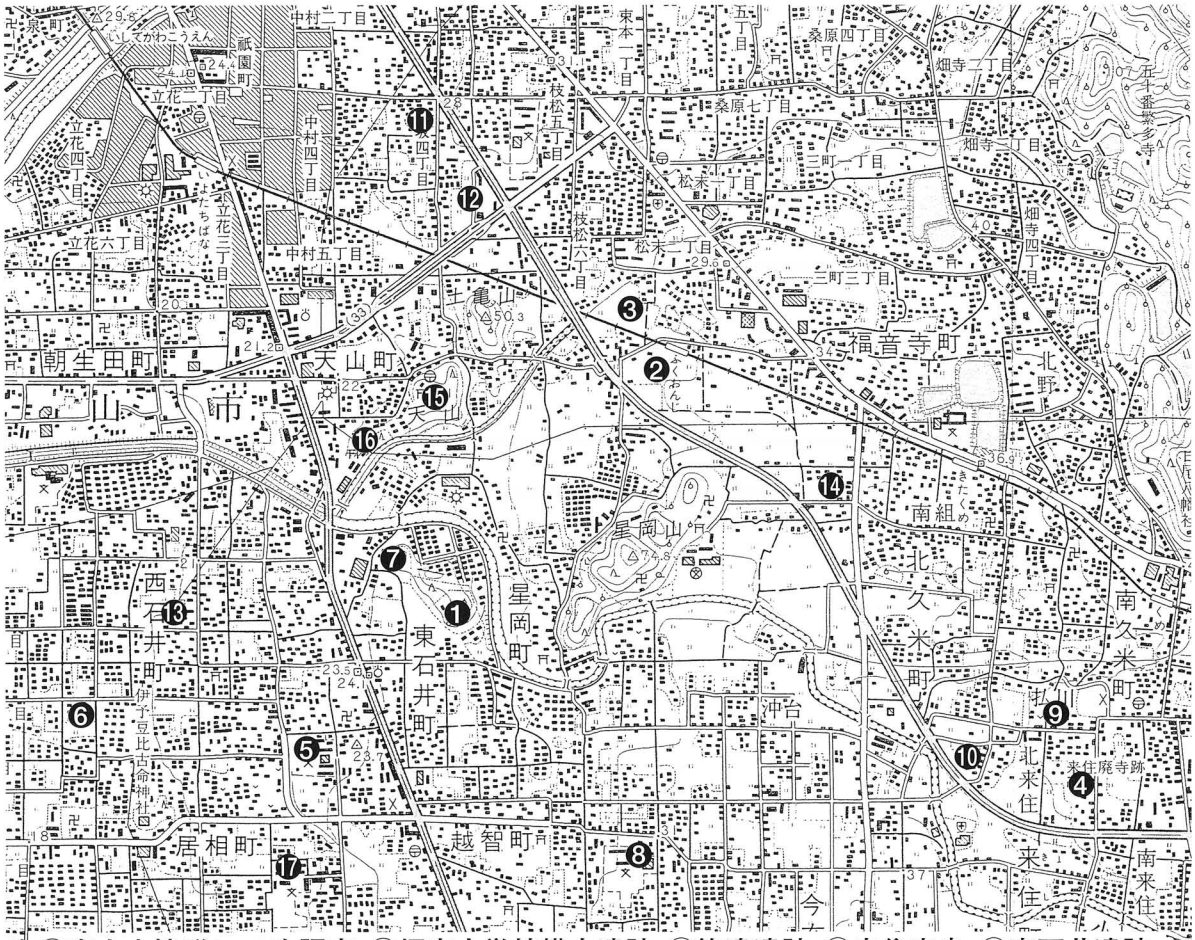
環　　境

古代

東山の東部に位置する来住台地には、全国的に注目されている久米官衙遺跡群があり７世紀における重要施設が集中する政治の中心地があった可能性が考えられる。同時に白鳳期の寺院である来住廃寺についてもその全容解明に向けて調査が行われている。

中世

中世では、文献によると南北朝時代の「星岡合戦紀」に東山において合戦があったことが記載されている。遺構では、来住廃寺21次調査地の大規模な総柱建物群と来住廃寺15次調査地の土壙墓群が検出されている。

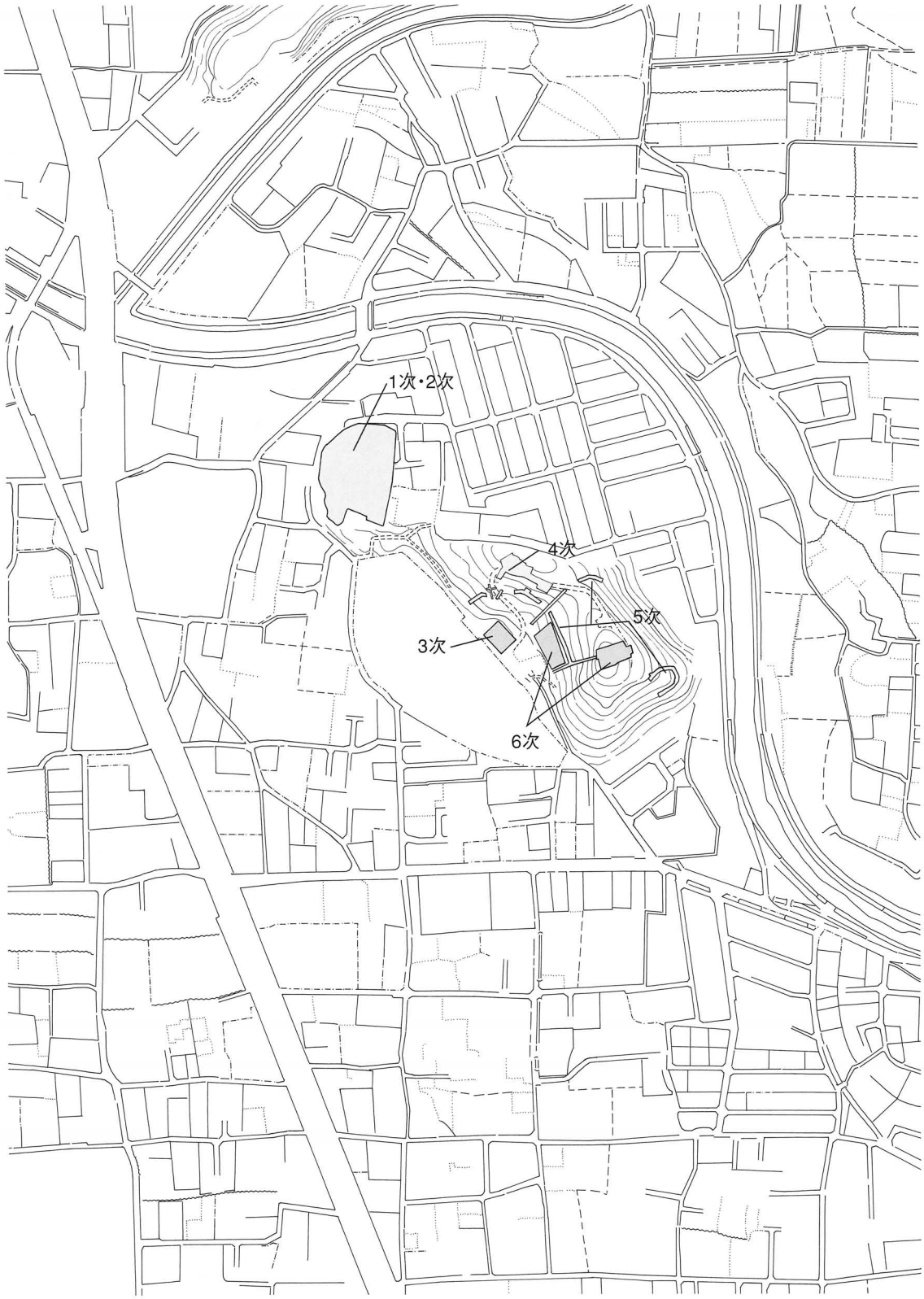


①東山古墳群3・6次調査 ②福音小学校構内遺跡 ③筋違遺跡 ④来住廃寺 ⑤東石井遺跡 ⑥西石井遺跡 ⑦東山鳶が森古墳群 ⑧石井東小学校構内遺跡 ⑨久米高畑遺跡25次調査 ⑩久米高畑遺跡23次調査 ⑪釜ノ口遺跡7次調査 ⑫釜ノ口遺跡8次調査 ⑬西石井荒神堂遺跡 ⑭北久米浄蓮寺遺跡 ⑮天山神社北古墳 ⑯天山天王ケ森遺跡 ⑰南中学校構内遺跡

第1図　遺跡分布図（S ＝1／25,000）

参考文献

西尾幸則　１９８１　松山市文化財調査報告書１５
田城武志　１９９４　松山市文化財調査報告書４１
山之内志郎ほか　２００１　松山市文化財調査報告書８４
梅木謙一ほか　１９９５　松山市文化財調査報告書５０
梅木謙一ほか　１９９６　松山市文化財調査報告書５２
河野史知ほか　１９９８　松山市文化財調査報告書６７
橋本雄一ほか　１９９４　松山市文化財調査報告書４２
水本完児ほか　２００３　松山市埋蔵文化財調査年報１５
相原秀仁ほか　２００３　松山市埋蔵文化財調査年報１５



東山古墳群の調査

遺跡名	調査期間	調査担当	報告書シリーズ番号
東山鳶が森古墳群	昭和53年9月18日～同年12月19日	西尾幸則	松山市文化財調査報告書15
東山鳶が森古墳群2次調査	昭和54年7月23日～同年8月30日	西尾幸則	松山市文化財調査報告書15
東山古墳群3次調査	平成元年10月26日～同年11月20日	松村　淳	松山市文化財調査報告書97
東山古墳群4次調査	平成2年12月23日～平成3年3月31日	田城武志	松山市文化財調査報告書41
東山古墳群5次調査	平成3年12月26日～平成4年3月31日	田城武志	松山市文化財調査報告書41
東山古墳群6次調査	平成4年11月1日～平成5年3月31日	田城武志	松山市文化財調査報告書97

第2図　東山古墳群調査地位置図（S＝1:5,000）

東山古墳群

－3次調査－

第２章　東山古墳群３次調査

１．調査の経過

調査は、公園整備に伴う事前調査である。調査地は、東山丘陵西側の裾部にあたり緩やかな斜面を呈し、中央部には農道が通る。調査区は農道を挟み北側に東よりＡＴ１～ＡＴ５、南側にＢＴ１～ＢＴ５とそれぞれ５カ所の調査区を設定し掘削を行った。掘削後調査区内の精査を行い、遺構の検出を行った。遺構の範囲確認が不十分の調査区ＡＴ４、ＡＴ５、ＢＴ３、ＢＴ４、ＢＴ５については拡張を行った。

２．調査

（１）ＡＴ１区の調査

ＡＴ１区は、調査地の南東部に位置し、幅１ｍ、長さ10.70ｍの調査区である。

１）土層

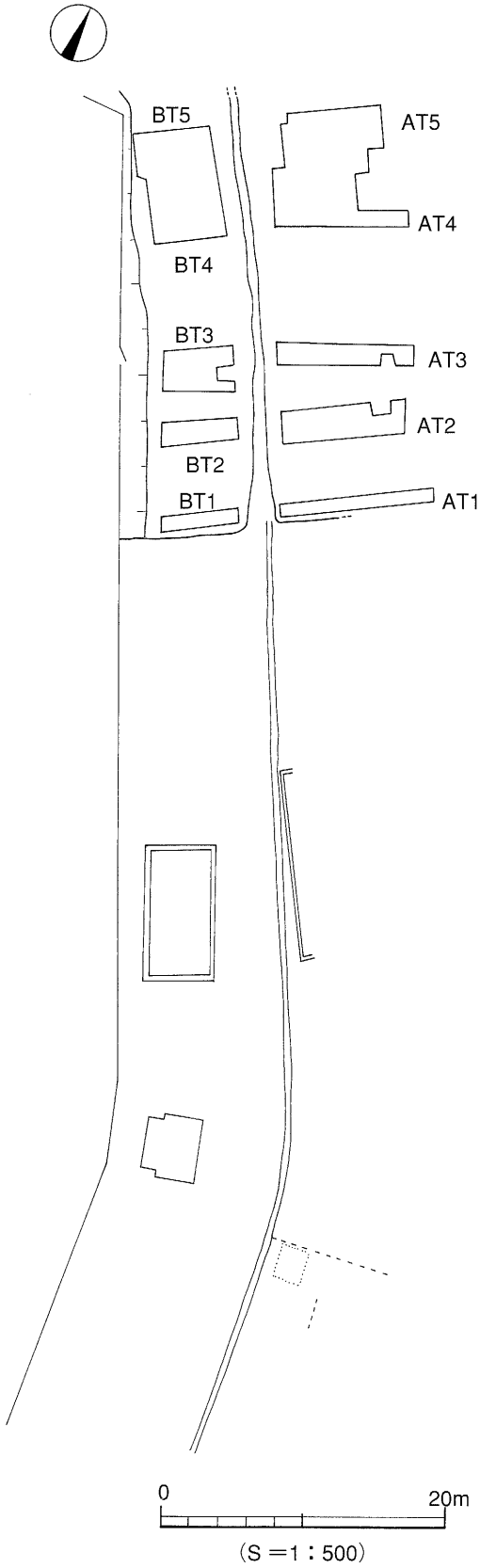
土層は、１層で褐色の耕作土（腐植土）で部分的に暗褐色土がブロック状に混じる。南側裾部は近代に掘削が行われたと思われ真砂土が覆う。検出遺構は柱穴２基、性格不明遺構１基、溝状遺構１条である。

２）遺構と遺物

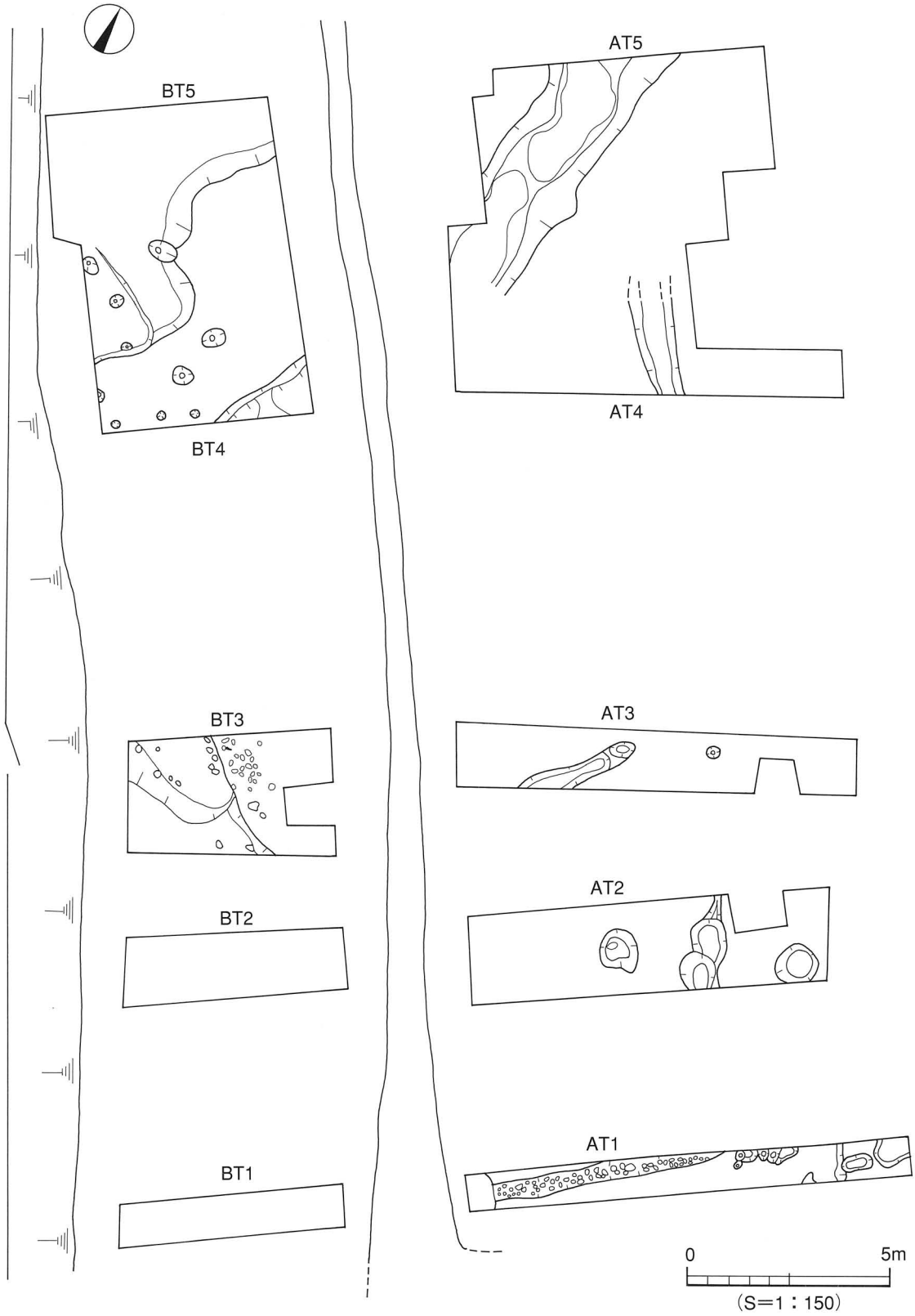
①溝（ＳＤ）

ＳＤ１は、調査区の中央西壁から南壁に検出した。規模は検出長5.8ｍ、幅50㎝、深さ40㎝を測る。断面形態は「U」字状である。埋土は暗褐色土である。出土遺物は10～20㎝の川原石が溝全体より出土した。

３次調査地現況



第3図　調査地位置図



第4図　遺構配置図

②柱穴（ＳＰ）

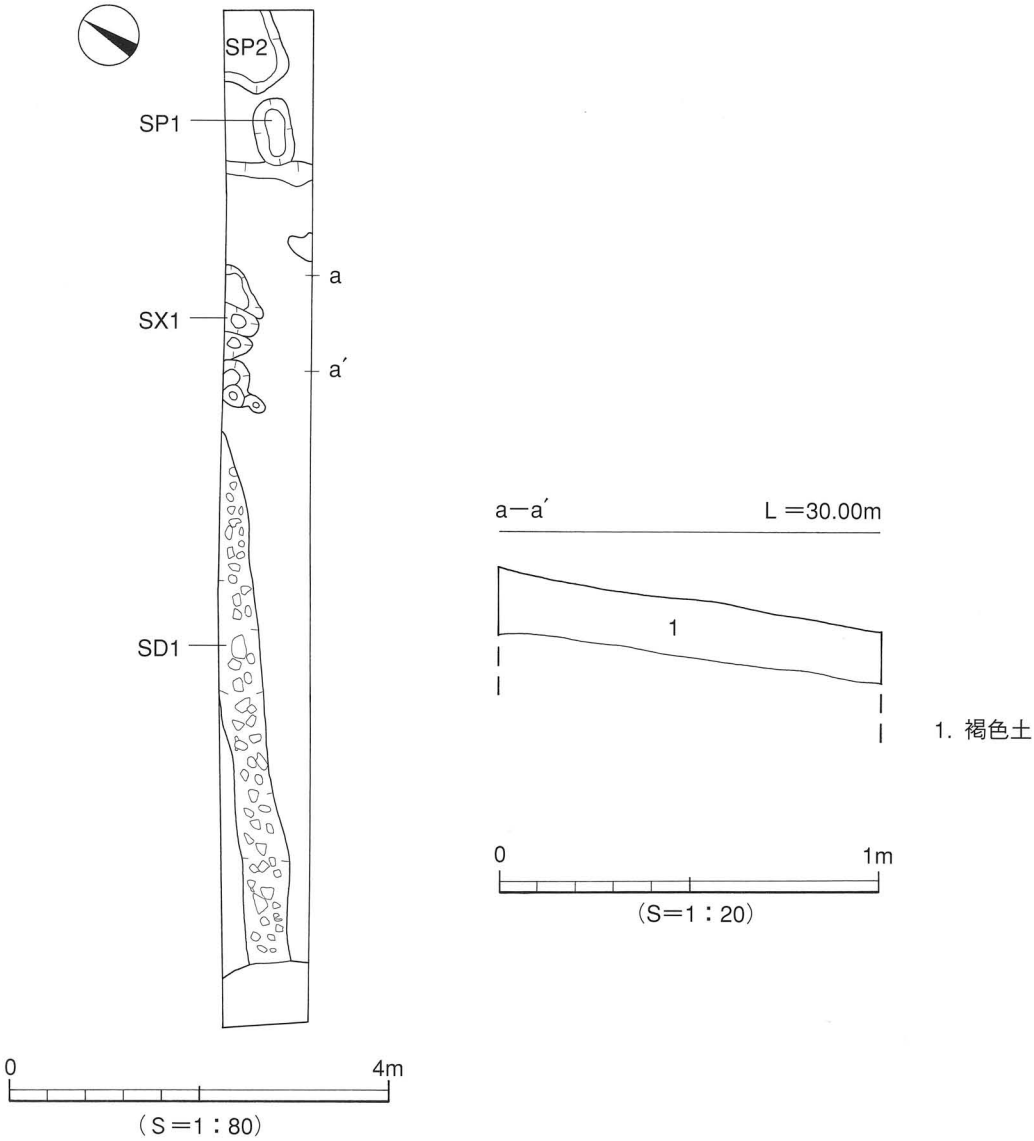
柱穴は東側より２基を検出した。

ＳＰ１の平面形態は楕円形である。規模は長軸60㎝、短軸40㎝、深さ６㎝を測る。断面形態「Ｕ」字状である。埋土は暗褐色土である。

ＳＰ２は東側が調査区外につづく。平面形態は検出部分から楕円形と思われる。規模は検出長軸60㎝、短軸50㎝、深さ13㎝を測る。断面形態は「Ｕ」字状である。出土遺物はＳＰ１、ＳＰ２共にない。

③性格不明遺構（ＳＸ）

ＳＸ１は調査区の中央東に位置し北側は調査区外につづく。平面形態は円形の柱穴が東西方向に集中する不整形な形状を呈する。規模は検出長160㎝、幅40㎝、深さ32㎝を測る。床面は凹凸している。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。



第5図　AT1区遺構配置図・土層柱状図

（２）ＡＴ２区の調査

ＡＴ２区は、調査地の東部に位置し、幅2.7ｍ、長さ8.7ｍの調査区である。

１）土層は２層に分層できる。１層褐色の耕作土（腐植土）、２層黄白色土である。検出遺構は柱穴４基である。

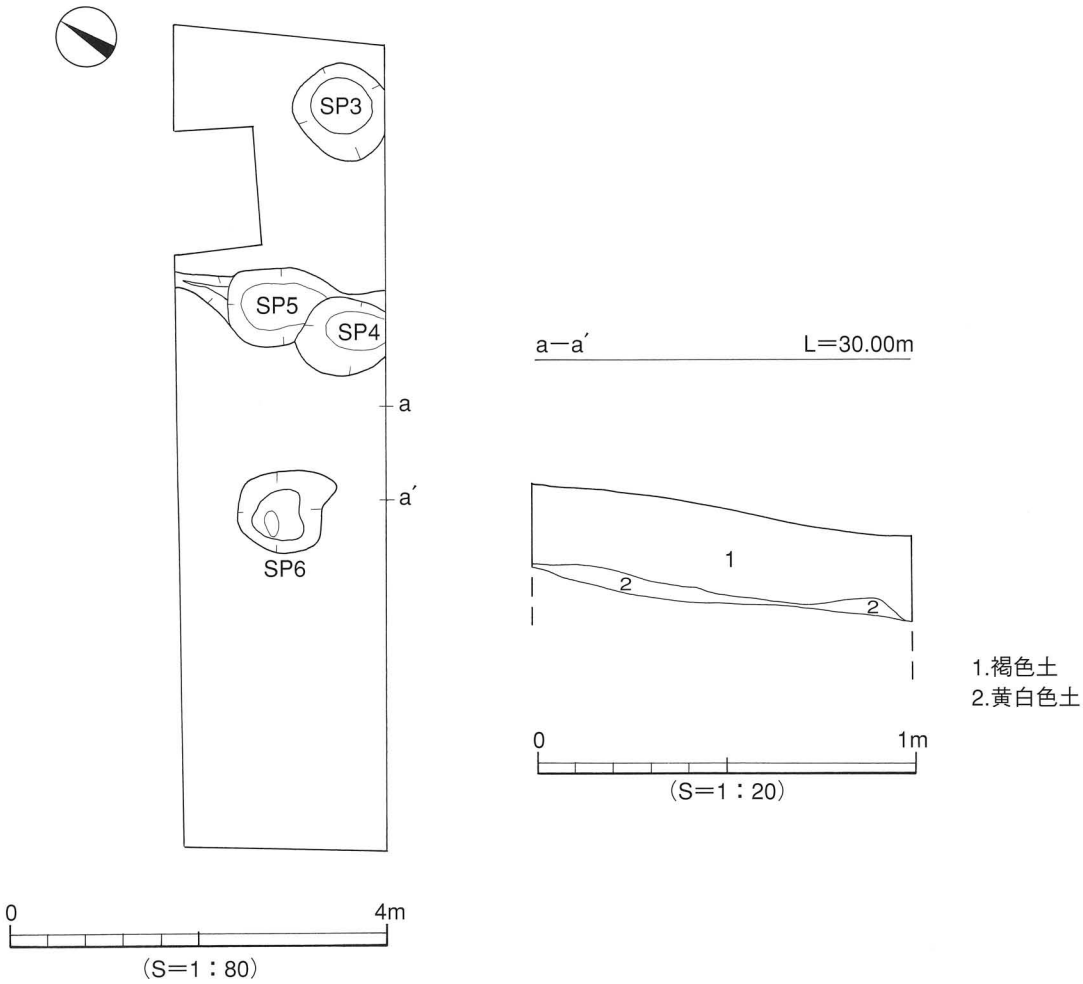
２）遺構と遺物

①柱穴（ＳＰ） ＳＰ３は調査区の東部に位置する。平面形態は円形である。規模は径100㎝、深さ24㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ４は調査区東部にありＳＰ５を切る。南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形である。規模は検出長100㎝、深さ32㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ５は調査区の東部に位置しＳＰ４に切られる。平面形態は楕円形である。規模は検出長100㎝、幅90㎝、深さ９㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ６は調査区の中央部に位置する。平面形態は一部南側が張り出す不整形な形態である。規模は長さ100㎝、幅80㎝、深さ21㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。



第6図　AT2区遺構配置図・土層柱状図

（２）ＡＴ２区の調査

ＡＴ２区は、調査地の東部に位置し、幅2.7ｍ、長さ8.7ｍの調査区である。

１）土層は２層に分層できる。１層褐色の耕作土（腐植土）、２層黄白色土である。検出遺構は柱穴４基である。

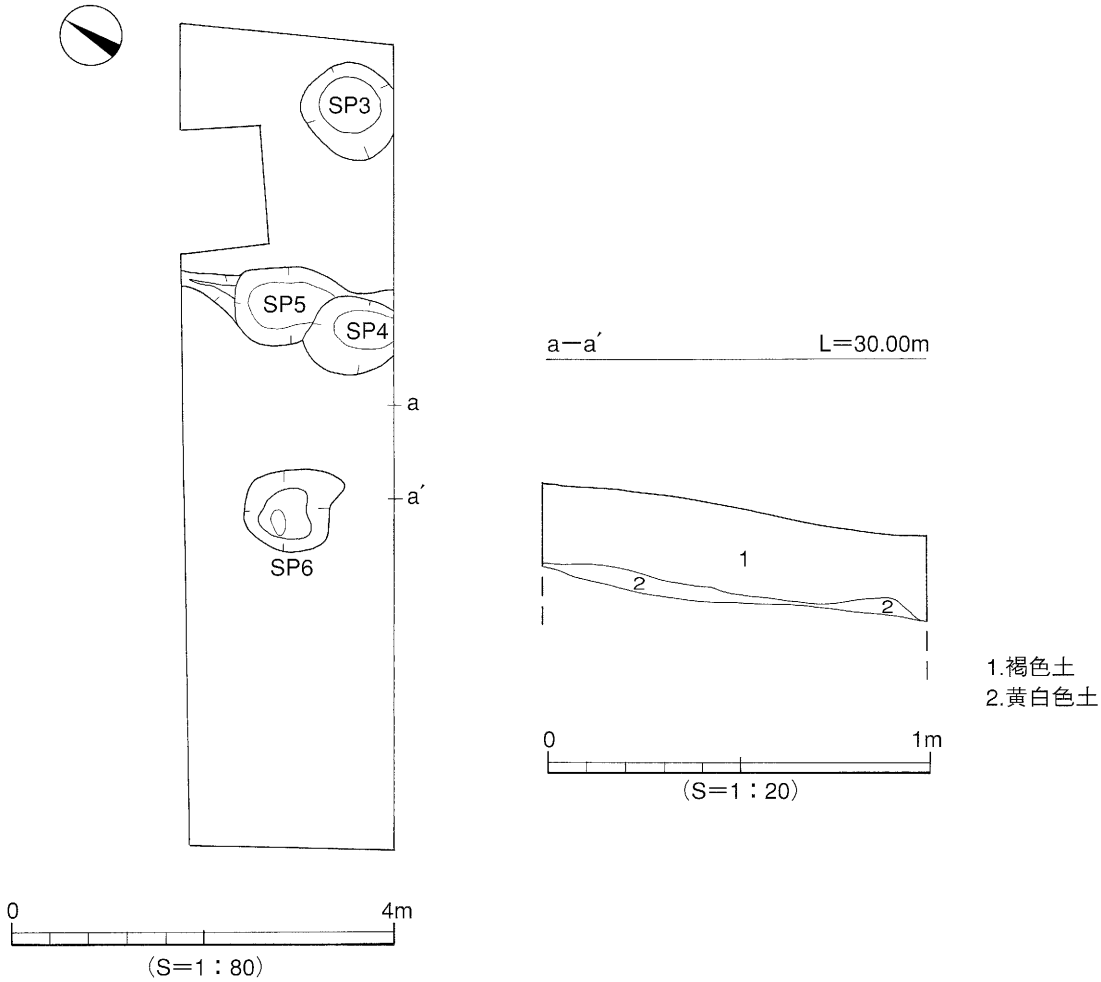
２）遺構と遺物

①柱穴（ＳＰ） ＳＰ３は調査区の東部に位置する。平面形態は円形である。規模は径100㎝、深さ24㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ４は調査区東部にありＳＰ５を切る。南側は調査区外に続く。平面形態は楕円形である。規模は検出長100㎝、深さ32㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ５は調査区の東部に位置しＳＰ４に切られる。平面形態は楕円形である。規模は検出長100㎝、幅90㎝、深さ９㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ６は調査区の中央部に位置する。平面形態は一部南側が張り出す不整形な形態である。規模は長さ100㎝、幅80㎝、深さ21㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。



第6図　AT2区遺構配置図・土層柱状図

（３）ＡＴ３区の調査

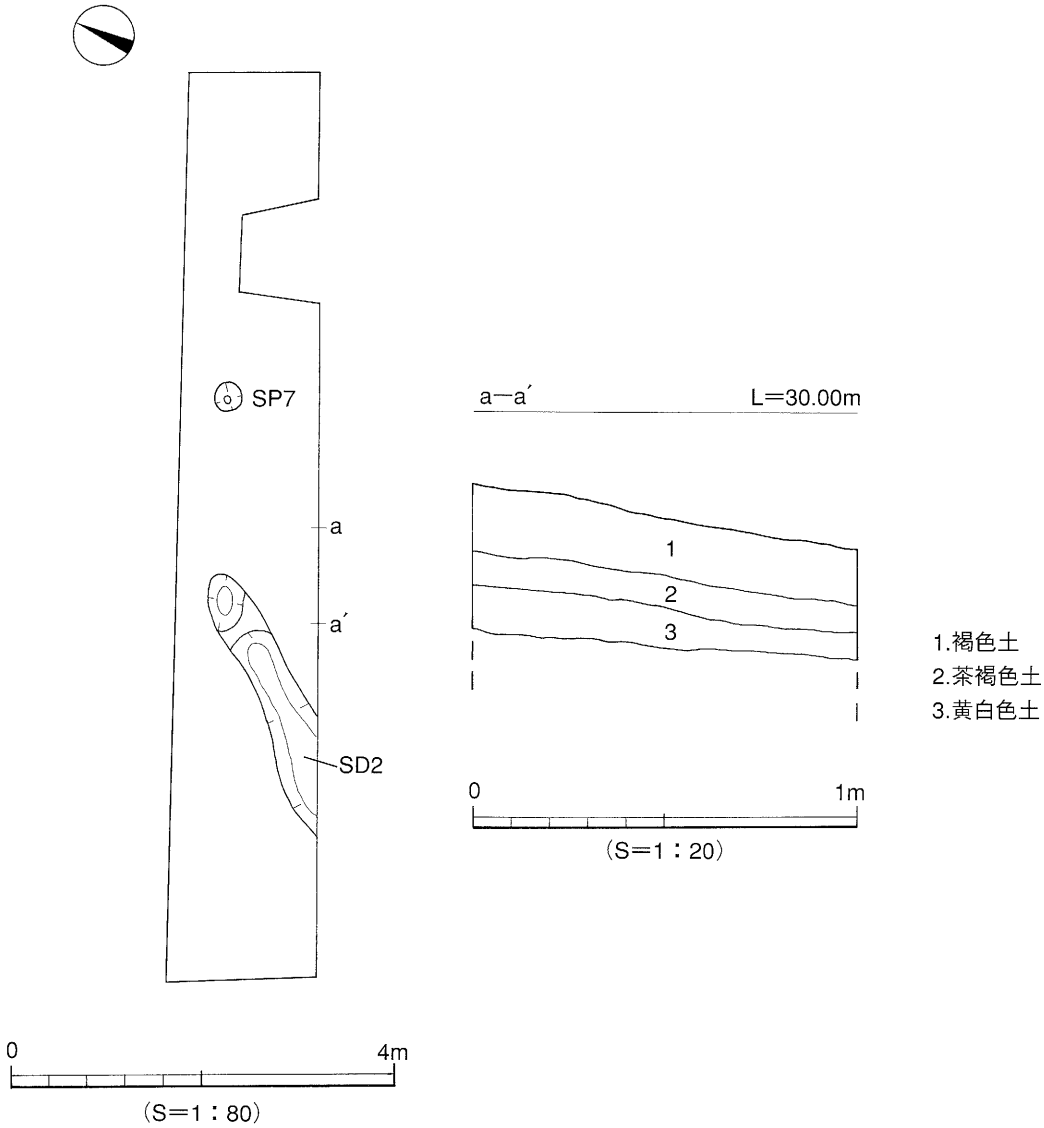
ＡＴ３区は調査地の東側に位置し幅1.6ｍ、長さ9.6ｍの調査区である。

１）土層　土層は３層に分層できる。１層褐色土（耕作土・腐葉土）、２層茶褐色土、３層黄白色土（地山）である。遺構は３層上面で溝１条、柱穴１基を検出した。

２）遺構と遺物

①溝（**ＳＤ**）ＳＤ２は調査区の西部に位置し、南側は調査区外に続く。規模は検出長3.2ｍ、幅50㎝、㎝、深さ15㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

②柱穴（**ＳＰ**）ＳＰ７は調査区の中央部に位置する。平面形態は円形である。規模は径30㎝、深さ15㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

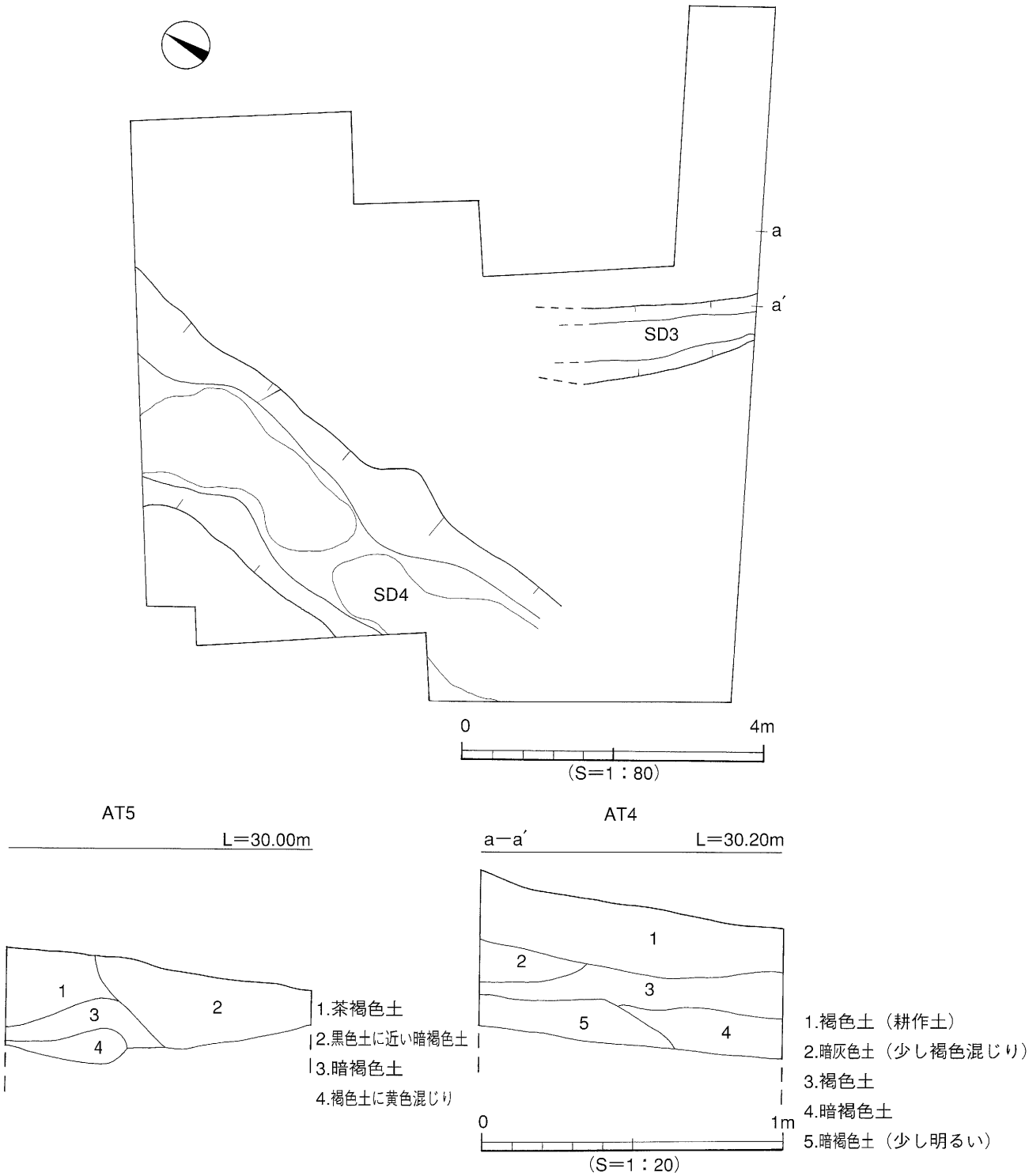


第7図　AT3区遺構配置図・土層柱状図

（4）ＡＴ４区・ＡＴ５区の調査

ＡＴ４・ＡＴ５は掘削時は別々に調査区を設定していたが、古墳の周溝が確認されたため、両区をつなぐ形で掘削を行った。調査区は調査地の北部に位置し、約８ｍ×８ｍを測る。東壁と西壁は凹凸がある不整形な調査区となった。

１）土層　土層は５層に分層できる。１層褐色土（耕作土）、２層暗灰色土（褐色混じり）、３層褐色土、４層暗褐色土、５層暗褐色土（少し明るい）である。検出遺構は溝２条である。



第8図　AT4・5区遺構配置図・土層柱状図

２）遺構と遺物

①溝（ＳＤ）　ＳＤ３は調査区の南東部に位置し、南側は調査区外に北側は削平を受けている。規模は検出長2.5ｍ、最大幅1.0ｍを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＤ４は調査区の東側に位置し、北側と南側は調査区外に続く。規模は検出長7.5ｍ、最大幅2.5ｍ深さ35㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒色土に近い暗褐色土である。出土遺物はない。

（５）ＢＴ１区の調査

ＢＴ１区は調査地の南部に位置し幅1.0ｍ、長さ5.5ｍの調査区である。

１）土層　土層は１層で造成土（真砂土）である。遺構・遺物ともに出土していない。

（６）ＢＴ２区の調査

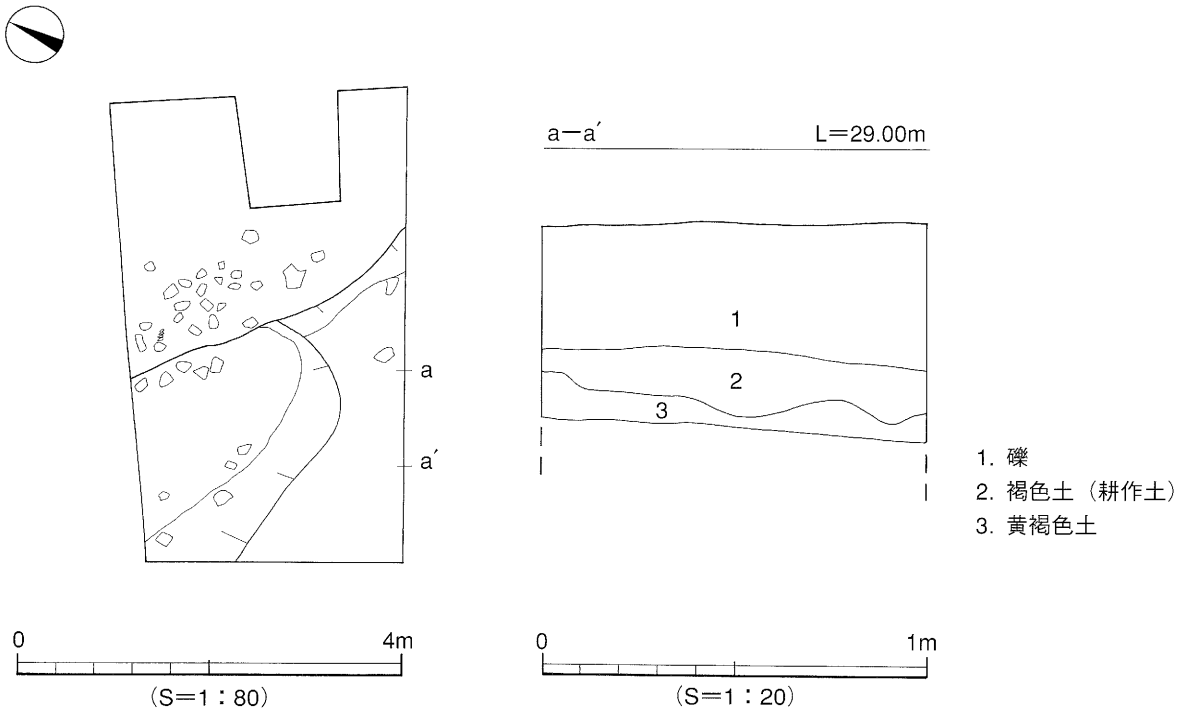
ＢＴ２区は調査地の南部に位置し幅1.5ｍ、長さ5.5ｍの調査区である。

１）土層　土層は１層で造成土（真砂土）である。遺構・遺物ともに出土していない。

（７）ＢＴ３区の調査

ＢＴ３区は調査地の西部に位置し、幅3.2ｍ、長さ5.0ｍを測る。

１）土層　土層は３層に分層でき、１層礫、２層褐色土（耕作土）、３層黄褐色土である。遺構は断落ちの地形の変換点を検出した。遺物は礫石と土師器、弥生土器片が出土した。

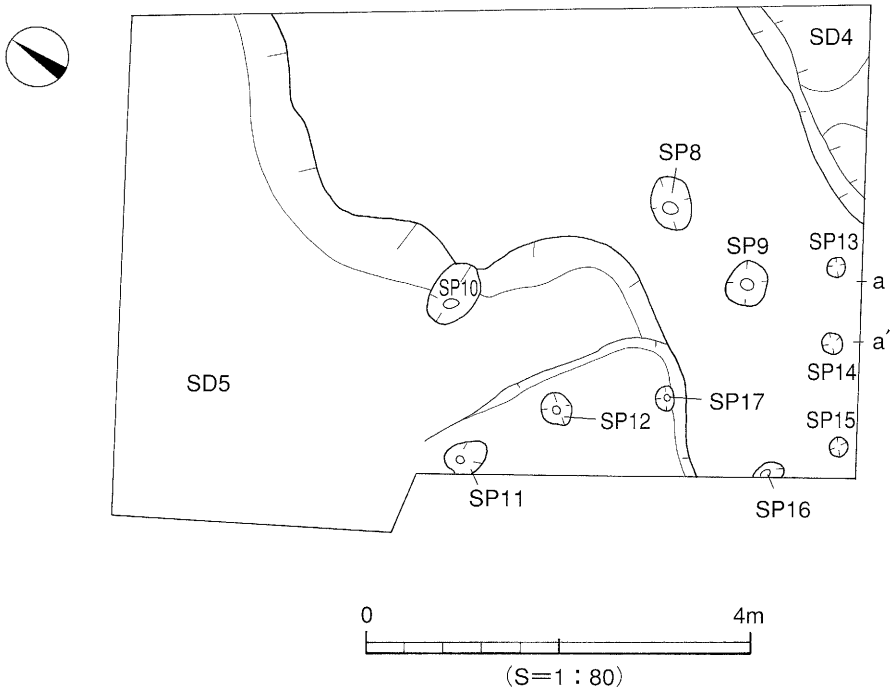


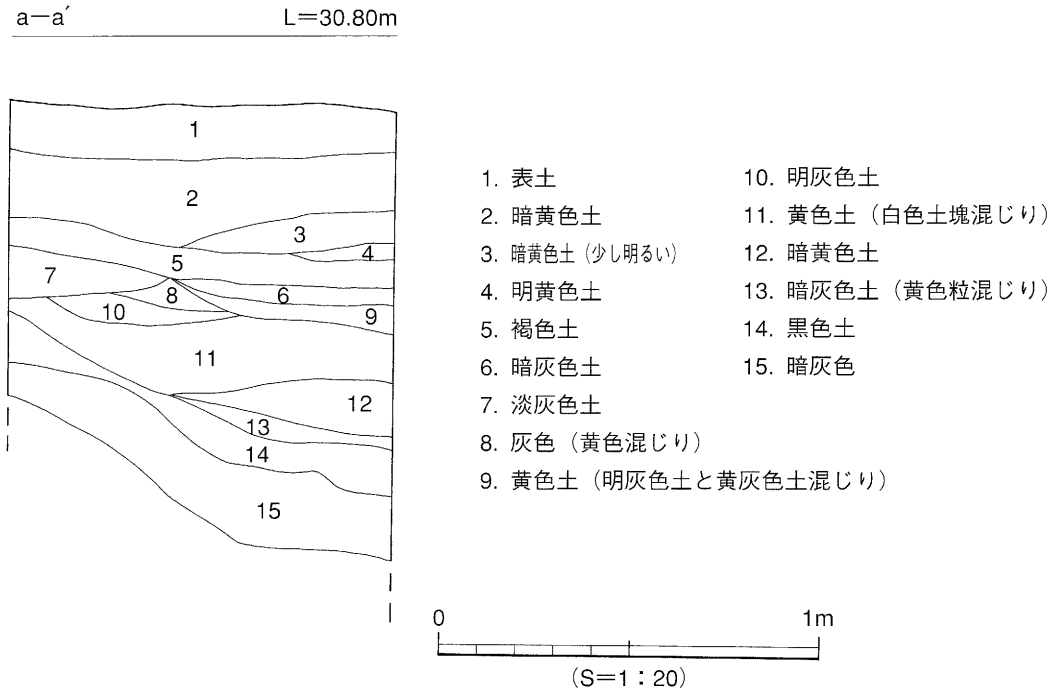
第9図　BT 3区遺構配置図・土層柱状図

（8）ＢＴ４・ＢＴ５区の調査

ＢＴ４区・ＢＴ５区は掘削時は別々に調査区を設定していたが、古墳の版築を確認したため、両区をつなぐ形で掘削を行った。調査区は調査地の北西部に位置し、5.5ｍ×8.0ｍを測る。

１）土層　土層は15層に分層でき１層表土、２層暗黄色土、３層暗黄色土（少し明るい）、４層明黄色土、５層褐色土、６層暗灰色土、７層淡灰色土、８層灰色土（黄色混じり）、９層黄色土（明灰色土と黄灰色土混じり）、10層明灰色土、11層黄色土（白色土塊混じり）、12層暗黄色土、13層暗灰色土（黄色粒混じり）、14層黒色土、15層暗灰色土である。遺構は古墳の墳丘盛土と周溝と思われる地形の落ちと柱穴10基を検出した。





第10図　BT4・5区遺構配置図・土層柱状図

２）遺構と遺物

①溝（ＳＤ） ＳＤ５は調査区の西側に位置し、南側が屈曲する。規模は長さ6.5ｍ、幅4.2ｍの周溝一部を検出した。断面形状は床面が緩やかに窪む形状である。遺物は出土していない。

ＳＤ４は調査区の東部に位置し西側の方の一部を検出した。規模は長さ2.7ｍ、幅1.2ｍを測る。ＳＤ４は検出した位置関係からＡＴ４・５区からつづく溝と思われ総検出長は15ｍを測る。

②柱穴（ＳＰ） ＳＰ８は調査区の中央部に位置する。平面形態は円形で規模は、径70㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ９は調査区の中央部に位置する。平面形態は円形である。規模は径51㎝、深さ12㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ10は調査区の中央部に位置する。平面形態は円形である。規模は径65㎝を測る。埋土は暗褐色土である。出土遺物はない。

ＳＰ11は調査区の西部に位置する。平面形態は円形である。規模は径38㎝、深さ18㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ12は調査区の西部に位置する。平面形態は円形である。規模は径32㎝、深さ14㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ13は調査区の南部に位置する。平面形態は円形である。規模は径18㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ14は調査区の南部に位置する。平面形態は円形である。規模は径26㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ15は調査区の南部に位置する。平面形態は円形である。規模は径17㎝、深さ10㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ16は調査区の南部に位置し西側は調査区外に続く。平面形態は残存部から円形と考える。規模は径36㎝、深さ16㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

ＳＰ17は調査区の南部に位置する。平面形態は円形である。規模は径31㎝、深さ13㎝を測る。埋土は暗褐色土である。遺物は出土していない。

３．小結

本調査地からは、溝５条、柱穴17基、性格不明遺構１基を検出した。

本調査地内からは古墳本体は検出されなかったが、ＢＴ５区から周溝と古墳を構築した版築状の土層を検出し、版築土層の下層より柱穴を検出した。このことから、調査地内において古墳構築以前に生活が行われていたことを示し、また、周溝と古墳の版築を検出したことにより、東山古墳群の丘陵西裾部に古墳が広がることが判明した。

東山古墳群

－6次調査－

第３章　東山古墳群６次調査

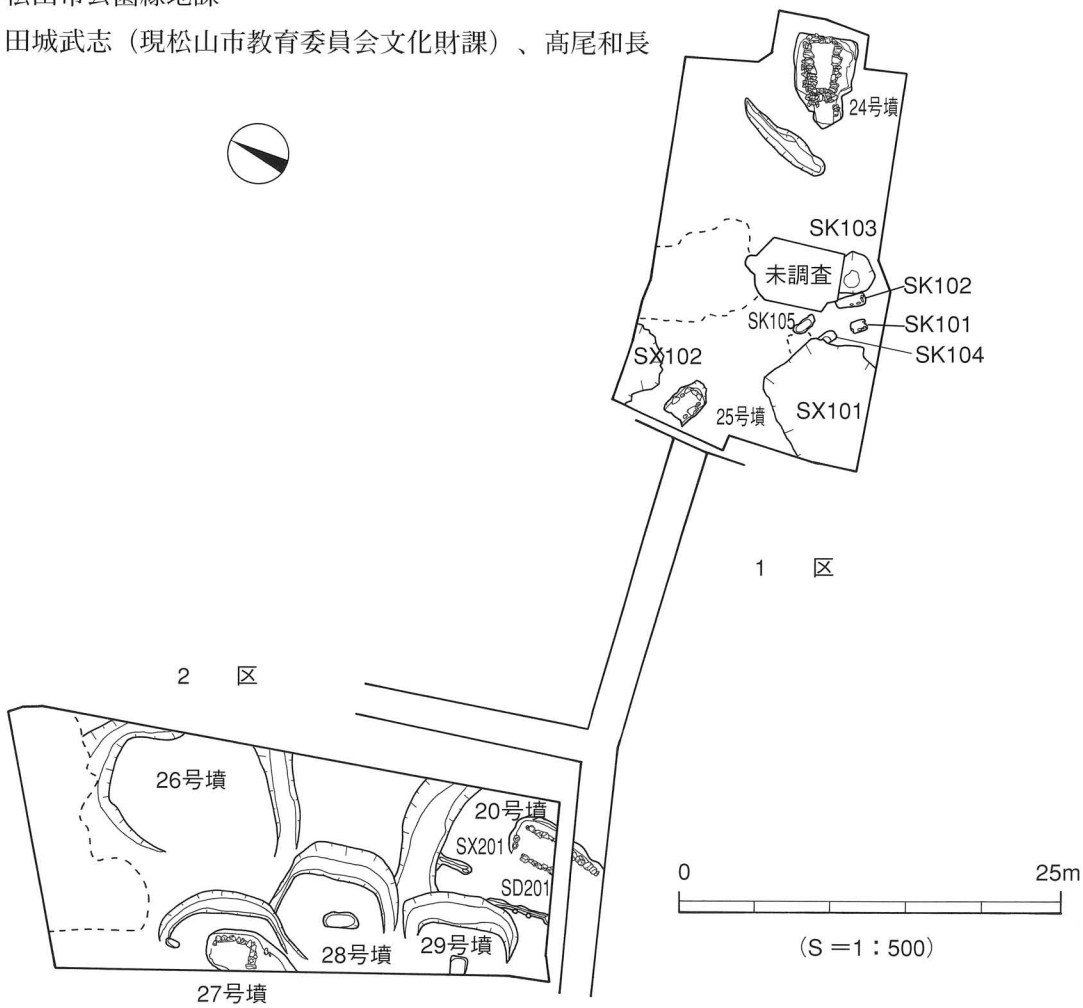
１．調査の経過

（１）調査の経緯

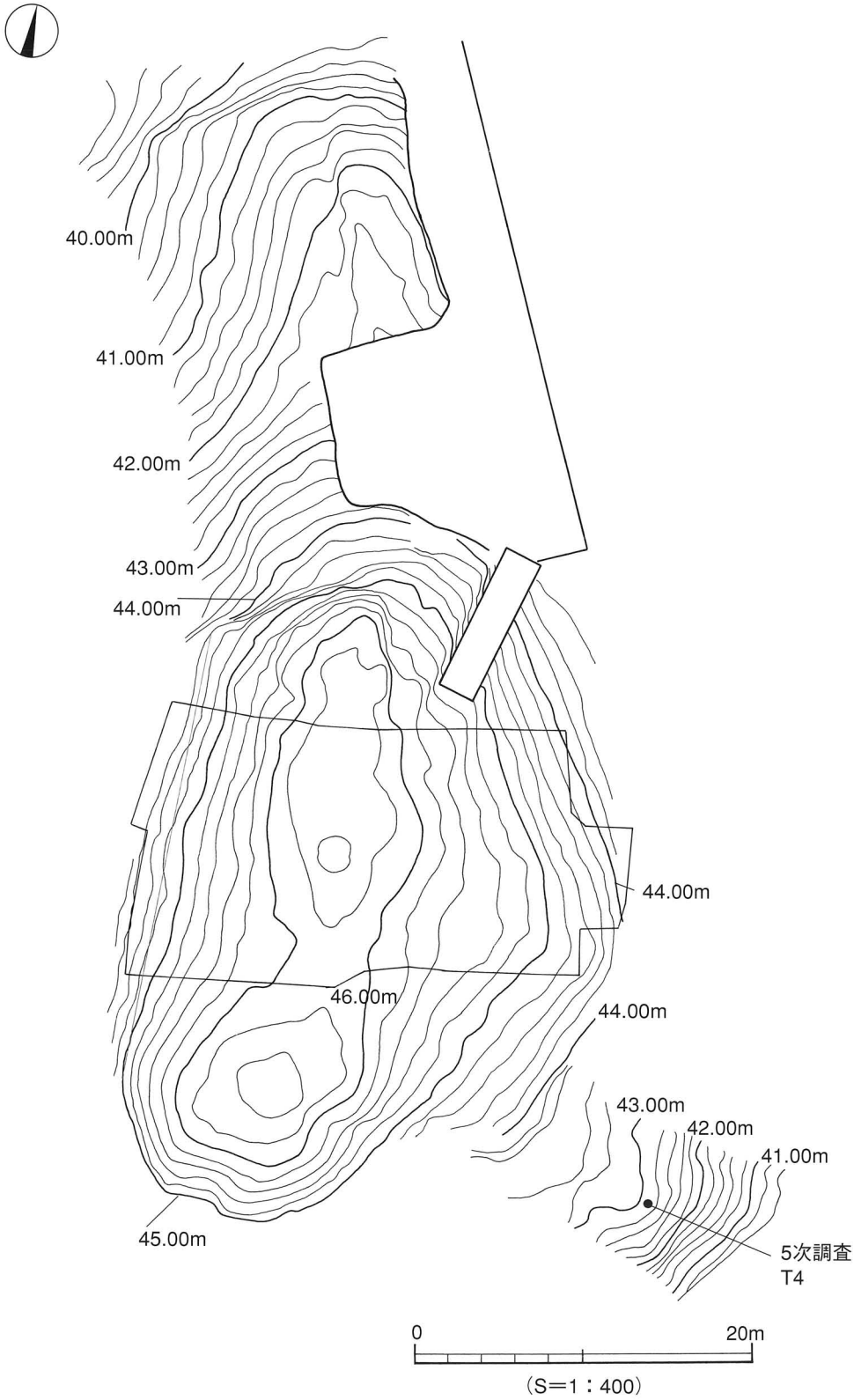
1992（平成４）年11月１日、調査区を設定し頂上部を１区、西斜面を２区として調査前の地形測量を行う。１区の排土置き場を設定し安全対策の為、杭と板で調査区内を囲う。調査は１区より重機による表土掘削を行なった。遺構検出作業の結果、１区からは古墳の石室２基、土坑５基、性格不明遺構２基を検出した。２区からは、古墳の周溝と石室２基、土坑２基、溝１条、性格不明遺構１基を検出する。１区・２区の遺構掘り下げ、遺構測量、写真撮影、遺物の取り上げ後、遺構完掘状況の写真撮影を行い調査を終了する。

（２）調査組織

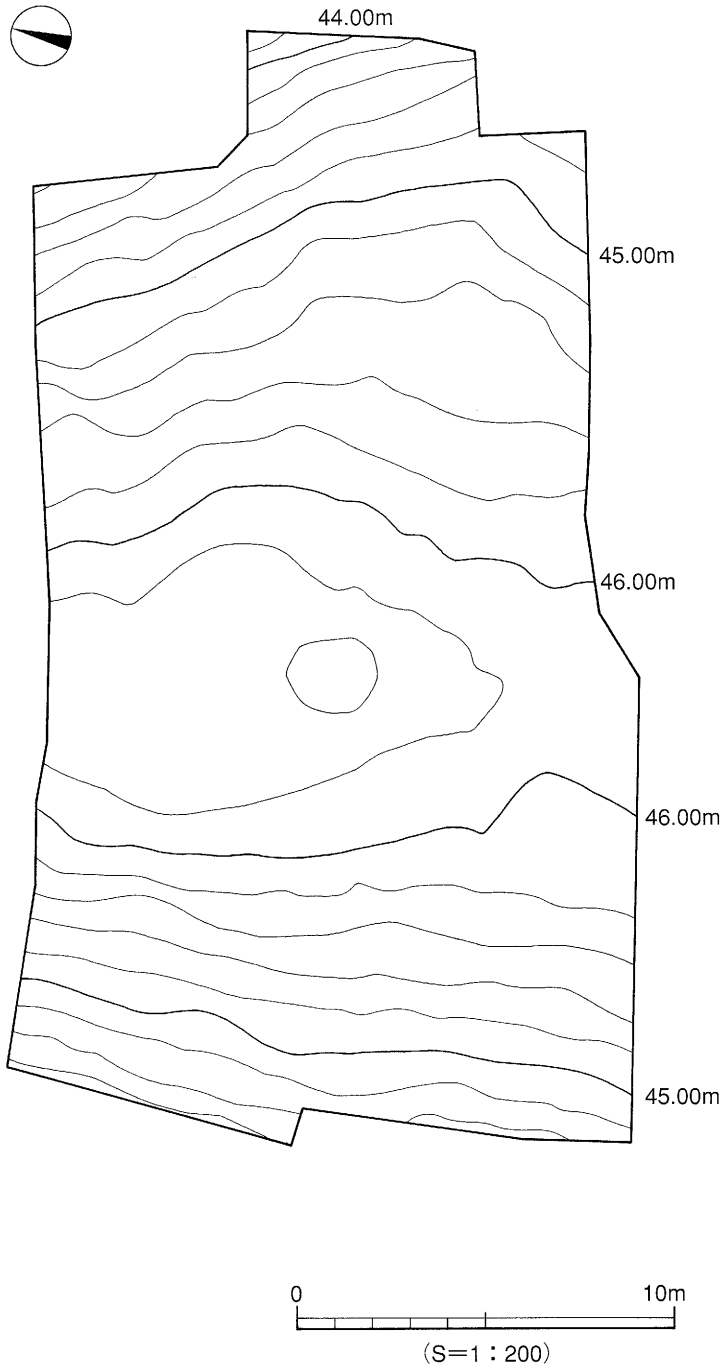
調査地　　松山市東石井乙39－２外
遺跡名　　東山古墳群６次調査
調査期間　1992（平成４）年11月１日～1993（平成５）年３月31日
調査面積　1,100㎡
調査委託　松山市公園緑地課
調査担当　田城武志（現松山市教育委員会文化財課）、高尾和長



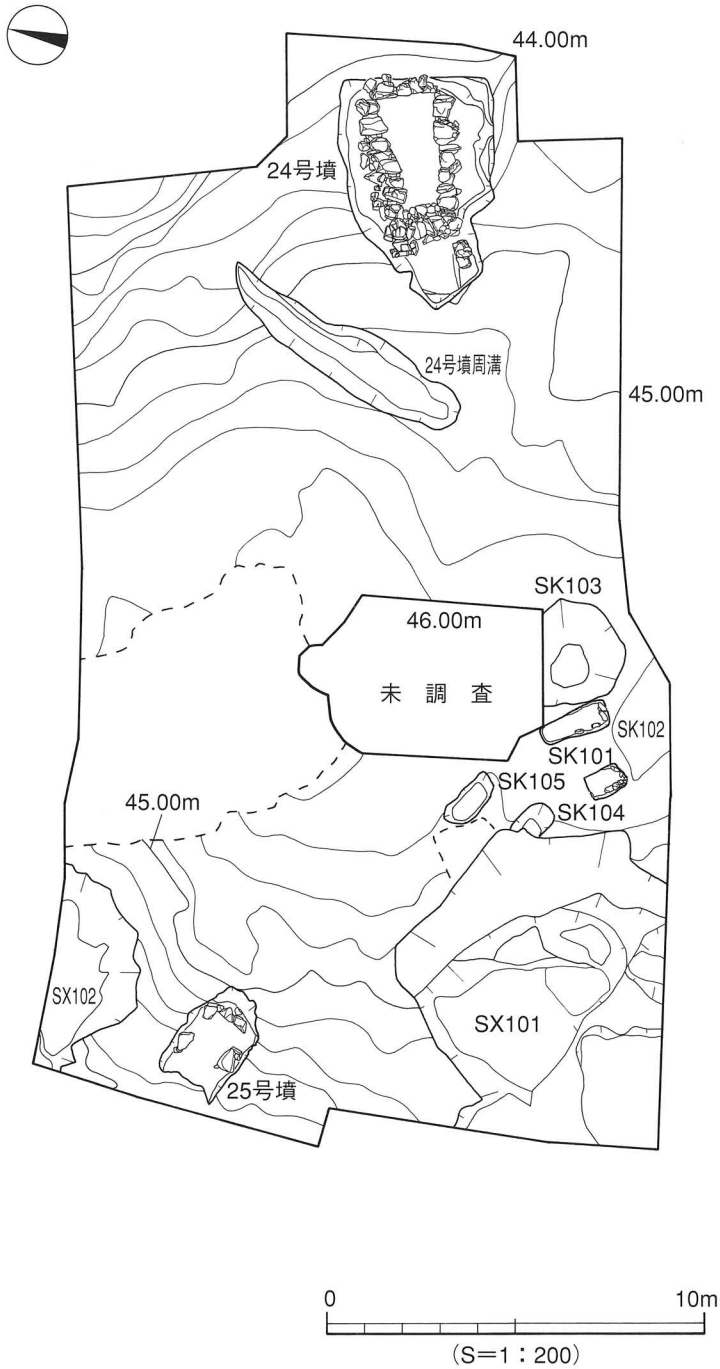
第11図　1区・2区遺構配置図



第12図　1区調査前地形測量図（1）



第13図　1区調査前地形測量図（2）



第14図　1区遺構配置図及び調査後地形測量図

2．遺構と遺物

（1） 1区の調査

1区からは、弥生時代から中世の遺構と遺物を検出した。検出した遺構は、土坑5基、古墳2基、性格不明遺構2基である。ここでは、調査地が東山古墳群内であるため古墳時代の遺構概説を初めに行うことにする。

1）古墳時代

遺構は古墳2基を検出した。

i） 24号墳（第15～18図、図版8～11）

調査は現状の地形測量と肉眼観察からは、古墳の存在は確認できなかったため重機による表土掘削を行ったところ、表土掘削時に古墳の石材を検出したため、周辺は人力での掘削作業に切り替えて遺構検出を行った。検出遺構は石室と周溝である。

24号墳は、調査区の東側に位置し、丘陵頂上より尾根に直行する東側に1.0m～2.4m下がった位置に検出した。墳形は墳丘盛り土がすべて削平されているため明確ではないが、一部検出した周溝から判断すると直径10mを測る円墳と考えられる。石室は西側に開口し地形の高い方向に開口していることになる。石室上部は削平されており奥壁と右側壁は2段、左側壁は3段が残存している。袖はなく無袖である。石室掘方の平面形態は羽子板状である。奥壁、左側壁、玄門部側は、ほぼ垂直に掘り下げる。右側壁はなだらかに段を持って掘り下げている。また、羨道部は、階段状に掘り下げを行っている。一見竪穴状の石室を思わせる。閉塞は階段状に掘窪めた所で行われている。框は3個の石材を並べている。石室規模は、玄室長3.21m、奥壁幅1.36mを測る。天井石は既になく残存高は、奥壁45cm、東壁56cm、西壁44cm以下が残存しているに過ぎない。石室使用の石材は、敷地内にある花崗岩を横積みにしている。右側壁は直立し遺存状況は良いが左側壁は玄室中央に向かってせり出し「く」の字状に大きく内傾しており遺存状況が良くない。玄室床面は、最下部にやや扁平な人頭大の角礫を敷く、中央部から右側壁部にかけて検出されない部分がある。つづいて拳大の円礫を長軸方向の中心とした部分にまばらに敷いている。玄室入り口部分が多い。周溝は、石室の西側に検出した。規模は、検出長7.0m、幅1.6mを測る。出土遺物は須恵器の坏身、高坏、壺が出土している。

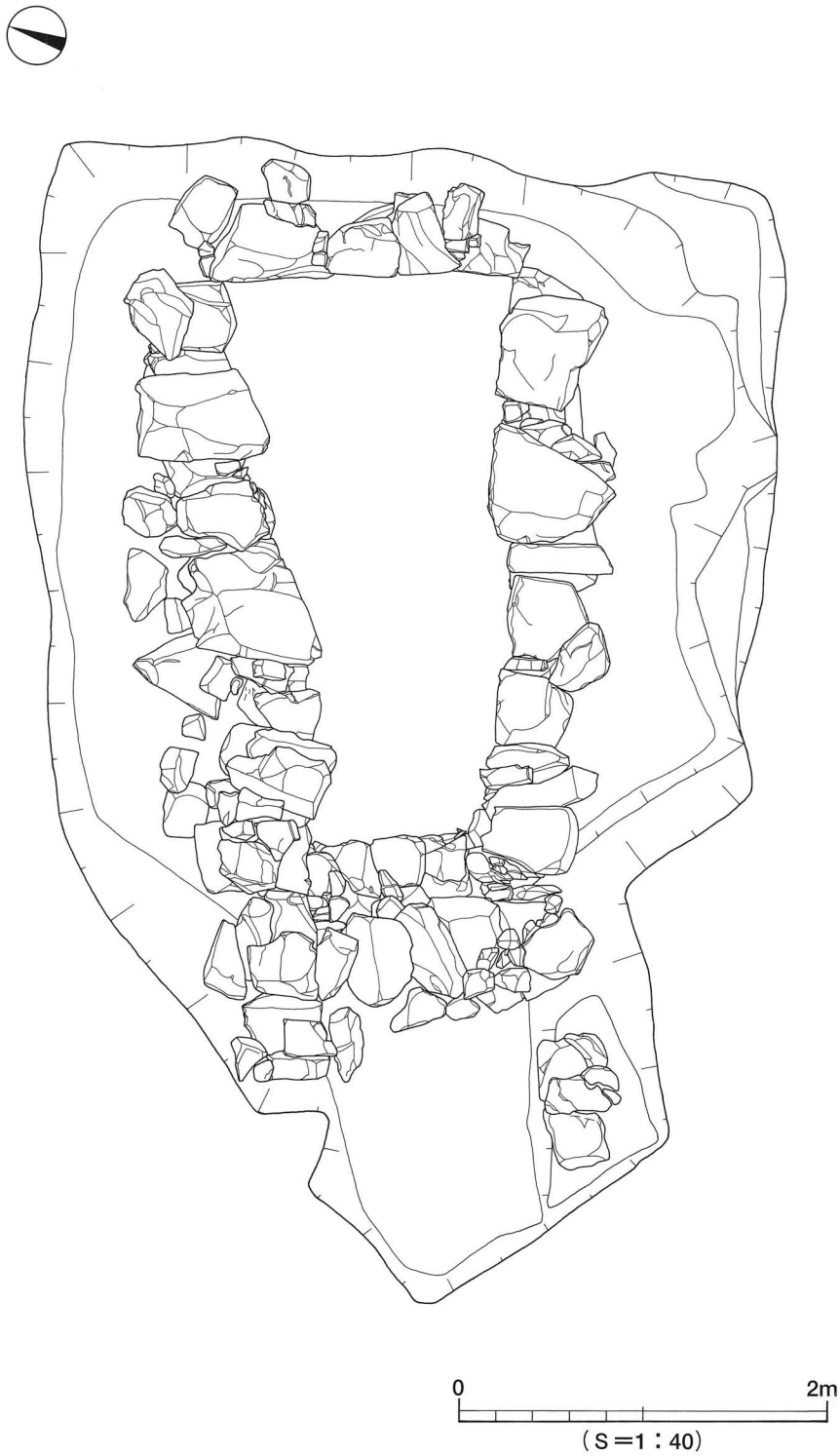
石室内遺物出土状況　遺物は、須恵器、鉄製品、ガラス小玉、管玉、勾玉が出土した。

須恵器は、坏身のほぼ完形品1点が玄門左から出土した。他の須恵器は小片が多数を占め中央部に散在した状態で出土した。鉄製品は、玄門左の坏身の横から2点、奥壁左から2点、中央部の左から1点が出土した。ガラス小玉と管玉は、右奥から出土した。勾玉は中央左から出土した。

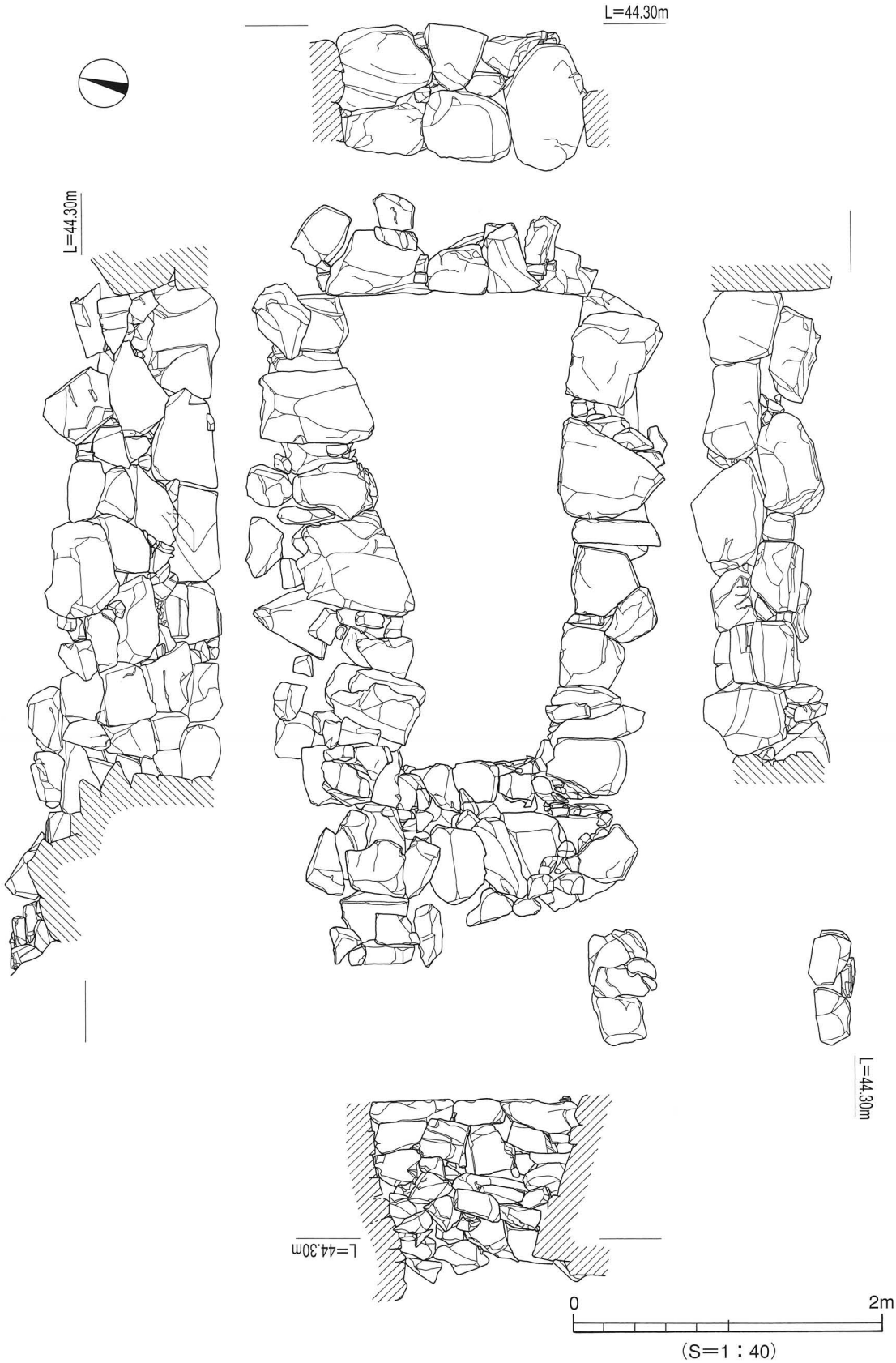
出土遺物（第19～20図、図版23）

坏蓋（1・2）1は口径12.7cmを測る。天井部に回転ヘラ削りが施される。口縁部と天井部を分ける稜は見られず、口端部は丸く仕上げられている。2は口径14.8cmを測り、口端部は尖り気味に丸く、天井部に回転ヘラ削り、その他には横ナデ調整が施されている。

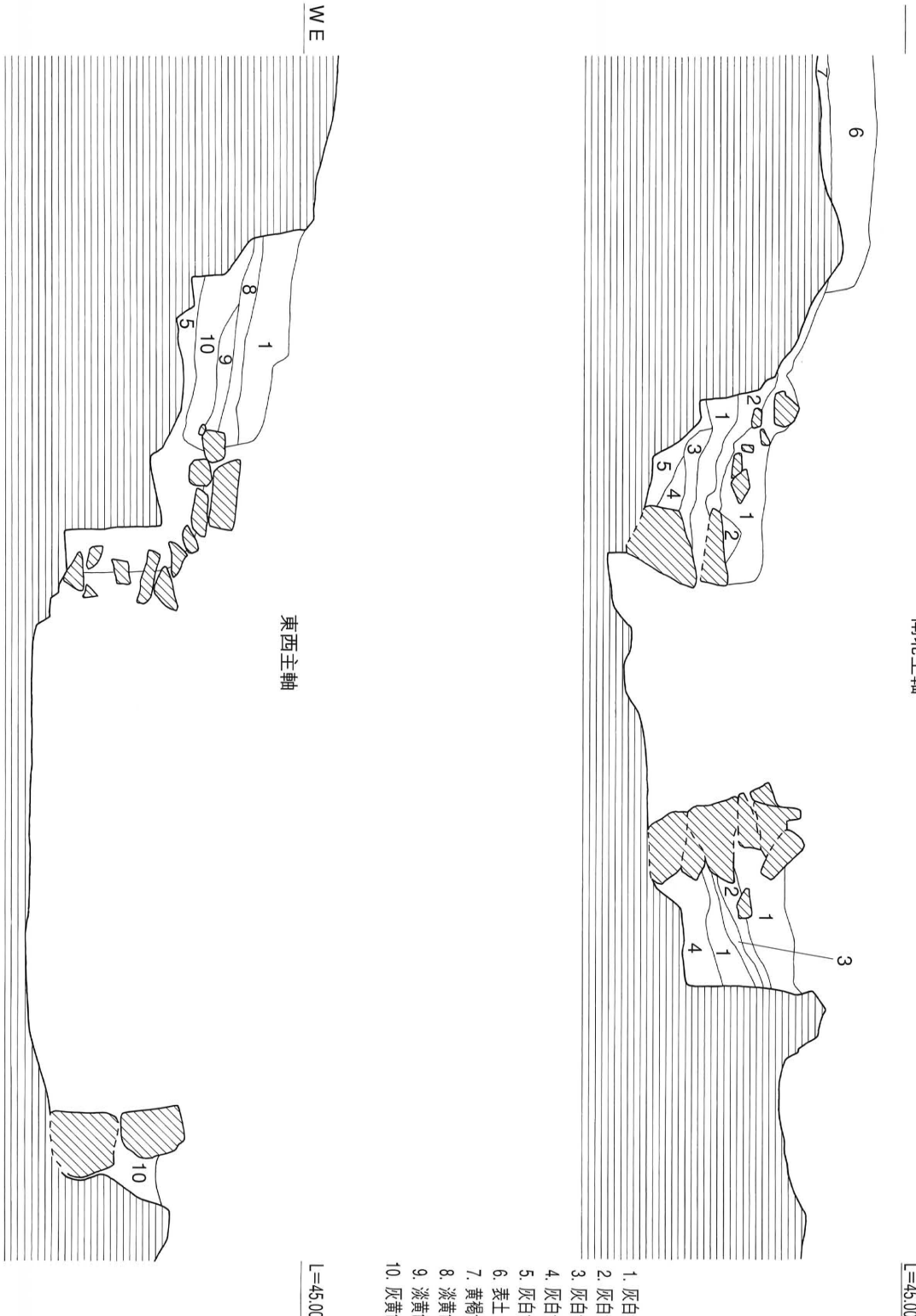
坏身（3～5）3は口径12.7cm、器高4.0cmを測る。短く伸びる受部に内傾する立ち上がりをもち、端部は丸い。調整は底部に回転ヘラ削り、その他にナデが行なわれている。4は口径12.4cm、器高4.0cmを測る。短く水平に伸びる受部に、内傾する立ち上がりの端部は丸い。5は口径12.9cm、器高4.3cmを測る。扁平な底部、水平気味に短く伸びる受部とやや内傾する立ち上がりをもつ。口縁部と受部の両端部はともに尖り気味に丸く仕上げられている。



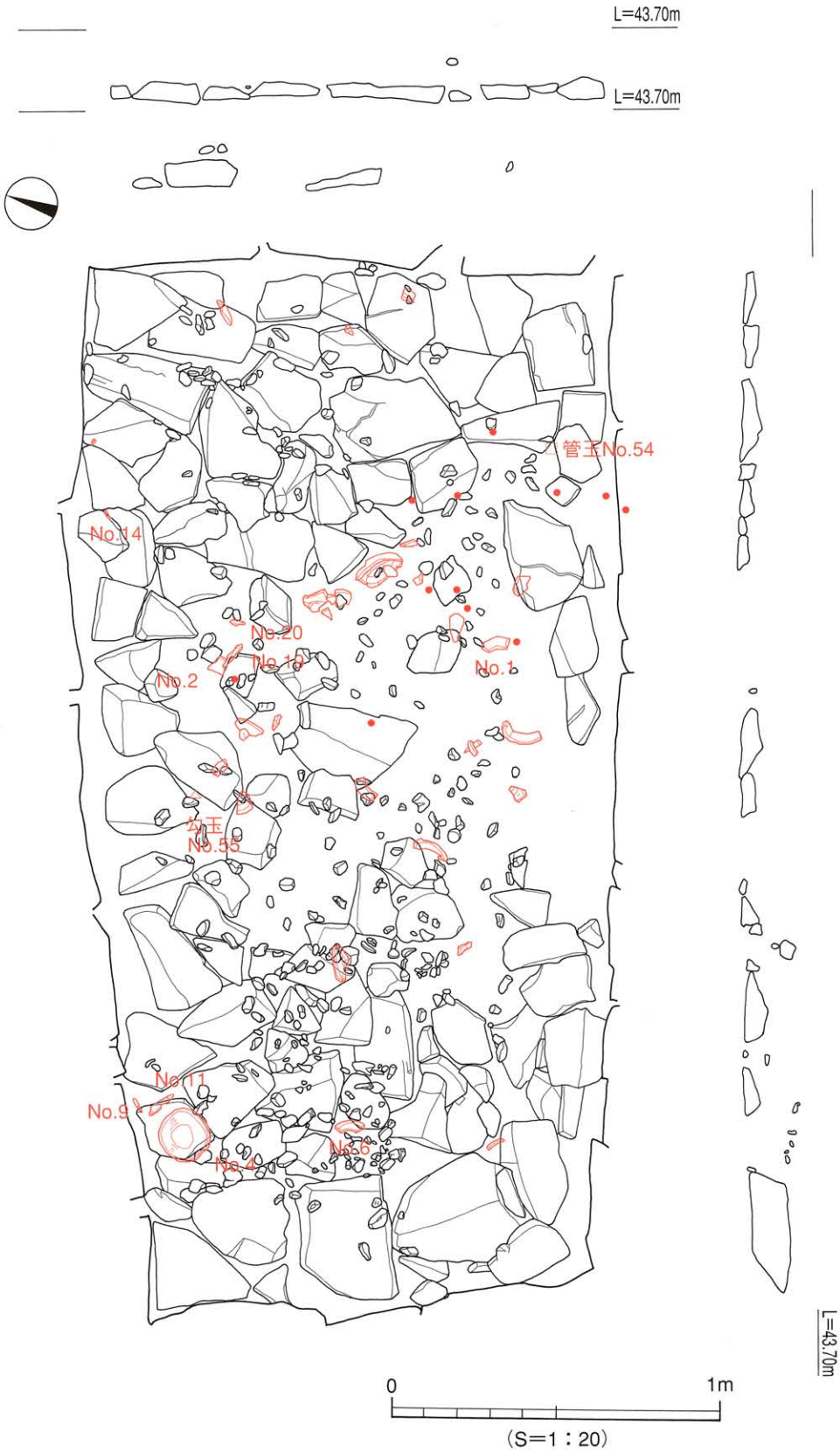
第15図　24号墳石室測量図



第16図　24号墳石室展開図



第17図　24号墳主軸断面測量図



第18図　24号墳床面・遺物測量図

高坏（６）口径13.0cmを測る無蓋高坏の坏部片である。口縁部中位に２段の段をもち口縁部は尖り気味に丸い。調整は底部に回転ヘラ削りその他には横ナデが施されている。

壺（７・８）７は長頸壺の口縁部。大きく外反する口縁部の端部は肥厚される。中位に幅広の刺突列点文を施す。色調は赤みをおびる。８は短く外反する口縁部の端部は肥厚され丸い。

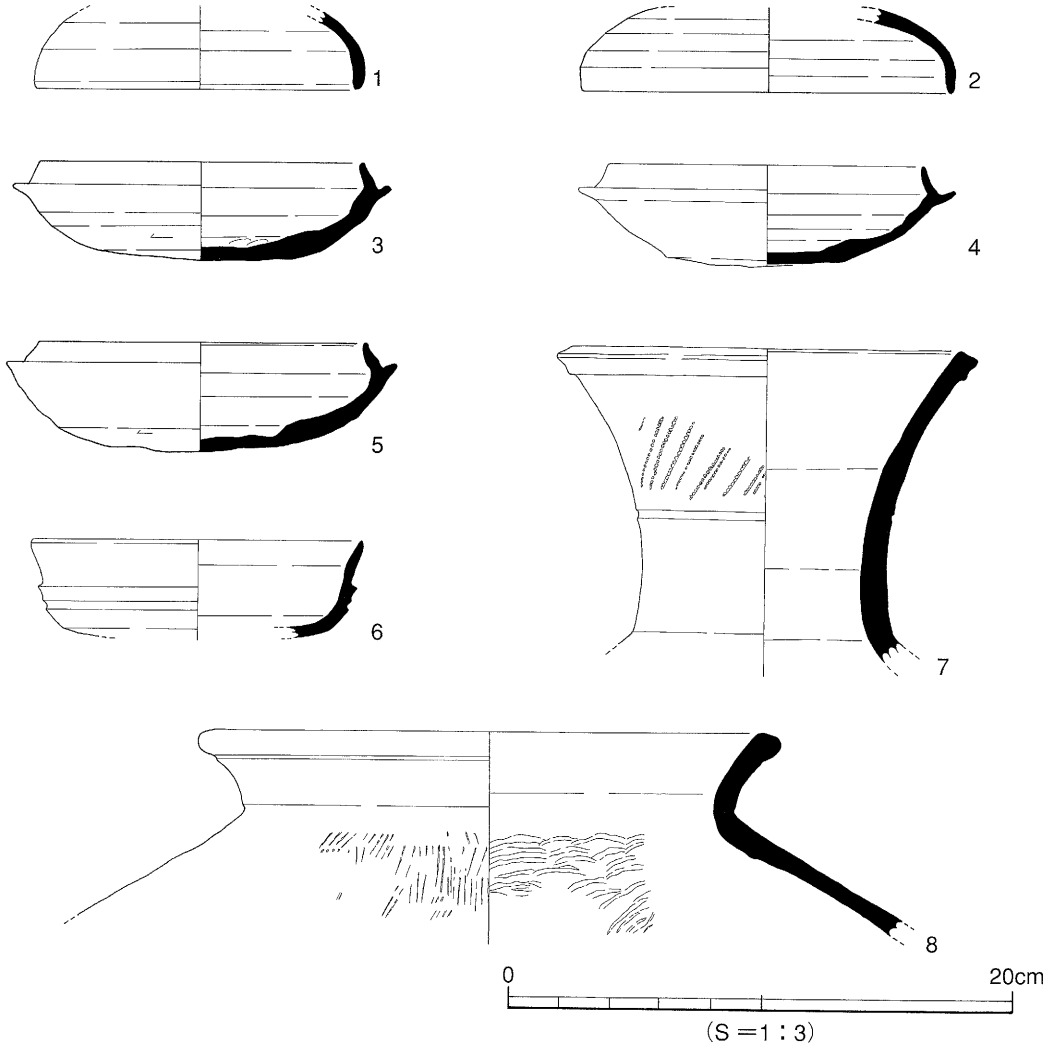
鉄製品

鉄鏃（９～17）９・10は、腸抉式鏃であり茎部に木質の残存がみられる。11は、柳葉鏃で茎部を欠失している。13は、腸抉式鏃の小型品である。14～17は茎部片である。14･15･16の茎部に木質と樹皮の残存がみられる。釘（18）端部を折り曲げている。刀子（19･20）19は切先部を欠くがほぼ完形に近いもので基部に木質が残存している。20は基部に装着していた鹿骨片で木質が残存している。

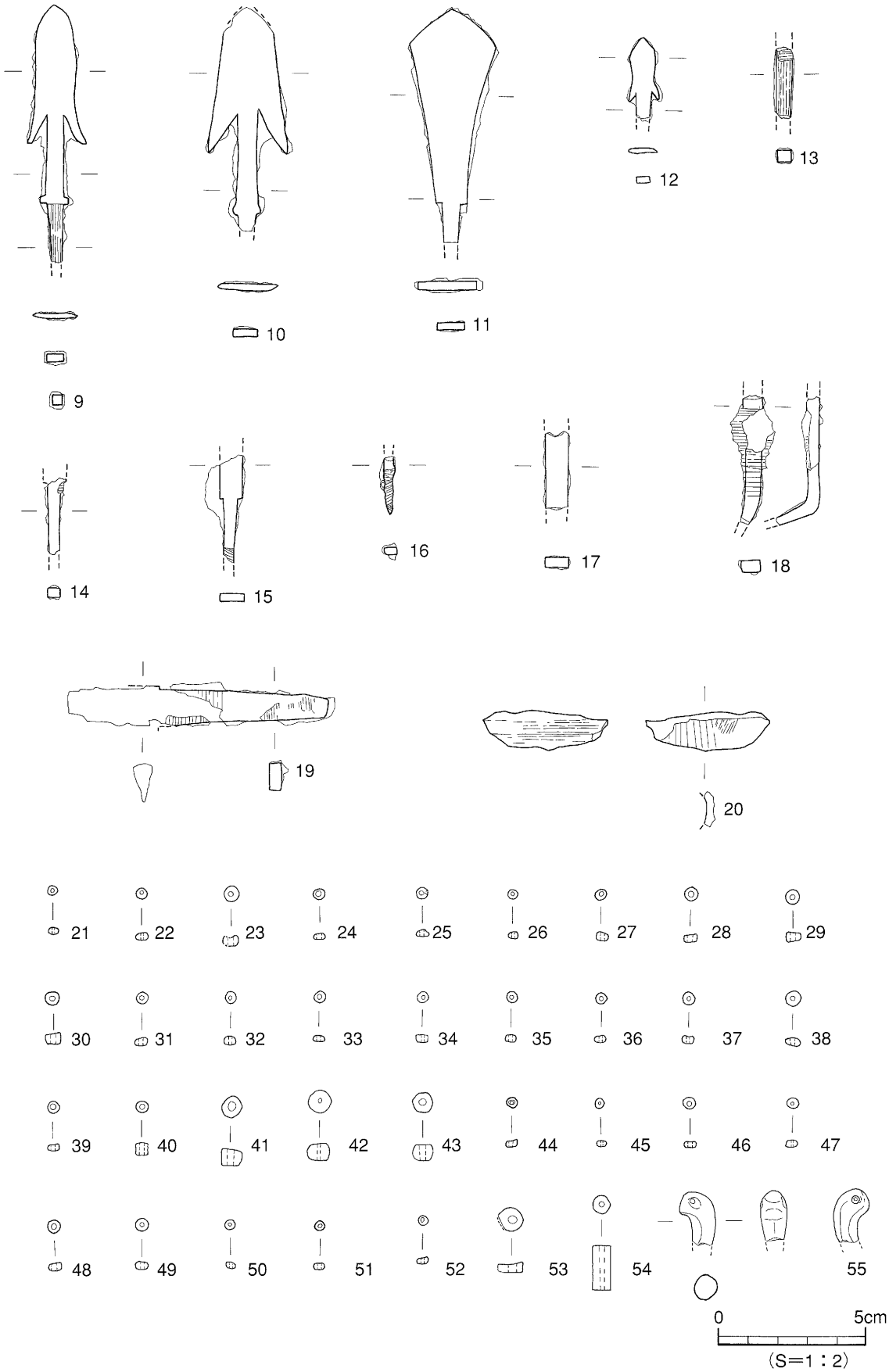
装身具

玉（21～55）

21～52がガラス製の小・丸玉、53～55は石製の臼玉、管玉、勾玉の計３５点出土している。21～26は濃紺色で27～31は紺色である。32～43は青色で41～43は青色の丸玉、44は透明な水色、45～49は緑色、50～52は黄色である。53は直径15.0mm、孔径2.5mm、厚さ3.5mmを測る緑灰色の臼玉である。54は直径6.0mm、長さ15.0mm、孔径1.0～2.0mmを測る碧玉製管玉である。55は残存長18.0mm、孔径1.0mm～3.0mmを測る透明な白色の勾玉である。



第19図　24号墳石室内出土遺物実測図（1）



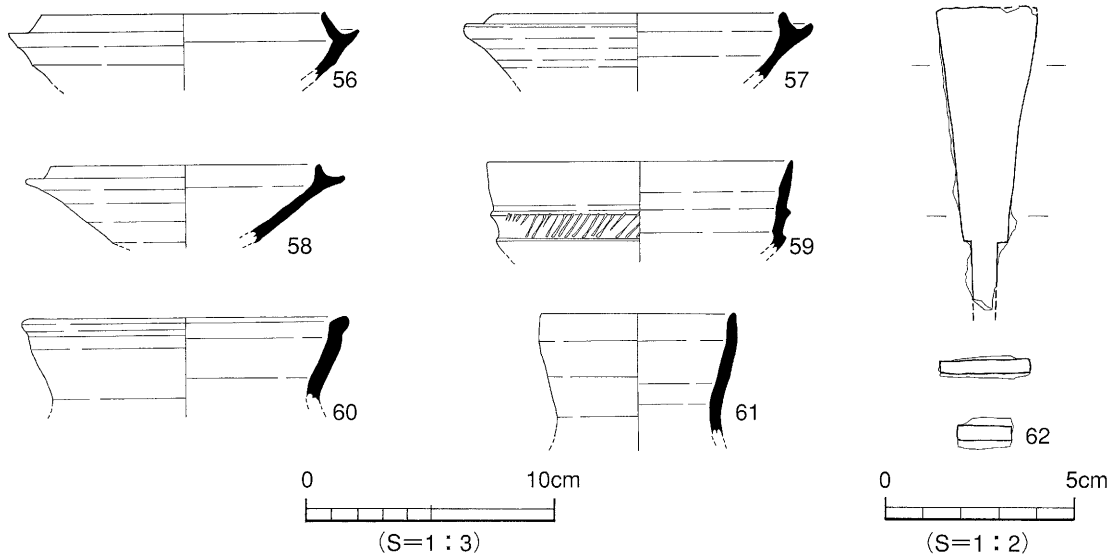
第20図　24号墳石室内出土遺物実測図（2）

周溝内出土遺物（第21図、図版23）

56～58は坏身片である。56は復元口径11.0cmを測る。水平気味に外上方に短く伸びる受部に、内傾する立ち上がりをもち端部は尖り気味に丸い。57は外上方に短く伸びる受部に、内傾気味の短い立ち上がりをもつ。58は水平気味に伸びる受部に、直立気味の短い立ち上がりをもつ。59は高坏。坏部の口端部は尖り気味である。外面に幅広の刺突列点文を施す。60･61は壺の口縁部片。60は復元口径12.6cmを測る。外傾する口縁部の端部は丸く肥厚させ、端部手前に肥厚による段が見られる。61は、外傾し口縁部手前で内湾気味に直立する、口縁部端部は尖り気味に丸く仕上げている。

鉄製品（62）62は鑿頭式の平根鏃で残存長8.1cmを測る茎部を一部欠失している。

時期：石室内より出土した須恵器の形態より古墳時代後期に時期比定する。



第21図　24号墳周溝内出土遺物実測図

ii）**２５号墳**（第22･23図、図版12･13）

調査区の頂上より西側に1.6～1.8ｍ下った所に位置する小石室である。調査前の地形測量と肉眼観察からは石室は確認できなかった。墳丘盛り土は削平されており墳形と墳丘規模は不明である。石室は東西方向に主軸をとる。掘方は「コ」の字状で西側は削平を受けている。掘方規模は、検出長軸1.9ｍ、短軸1.6ｍを測る。石室規模は、検出長1.77ｍ、幅0.93ｍを測る。床面は最下部に10～40㎝の扁平な角礫を敷き、つづいて５㎝前後の円礫を全面に敷く。

出土遺物（第23図、図版24）

遺物は、須恵器の壺形土器、高坏形土器、耳環１点が出土した。壺形土器は正置の状態で壁に接して出土した。高坏は坏部が破損した状態で出土した。

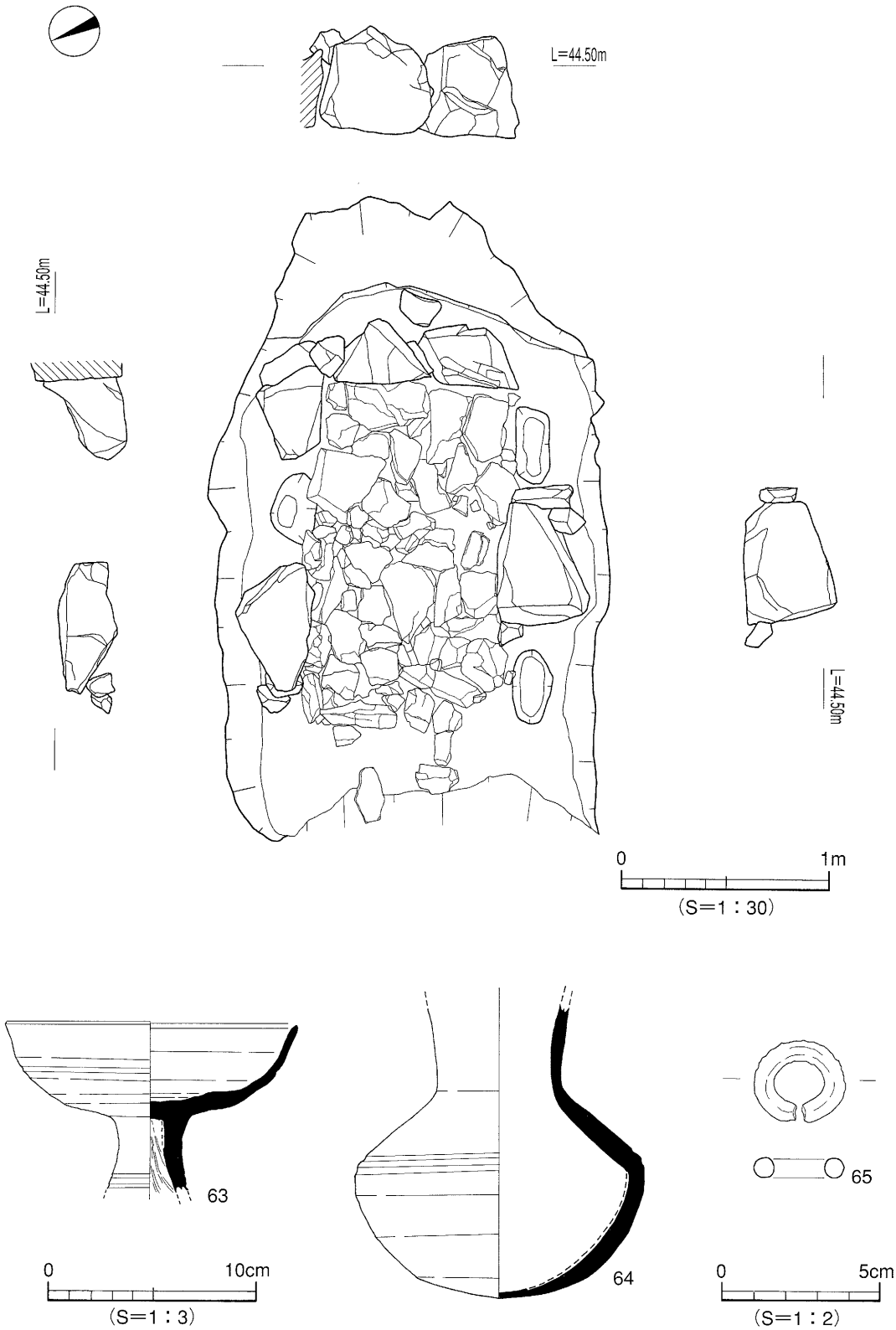
須恵器（63・64）63は口径13.7cmを測る無蓋高坏である。脚部は欠失している。坏部は内湾しながら開き口縁部の端部は尖り気味に丸い。坏部中位に一条の凹線、脚部に二条の凹線を巡らす。口縁部は焼け歪みを生じ変形している。64は長頸壺である。口縁部は欠失している。丸底の底部よりやや肩の張る胴部に、直立気味にわずかに外傾する口縁部をもつ。胴部中位に二条の凹線が巡る。

装身具

耳環（65）外径2.9cm、内径1.6cmを測る銅芯に薄い銀板を被覆している。

時期：出土した須恵器の形態より古墳時代後期に時期比定する。

第22図　25号墳床面・遺物測量図



第23図　25号墳展開図・出土遺物実測図

（2）弥生時代

土坑を５基検出した。

ｉ）土坑（ＳＫ）

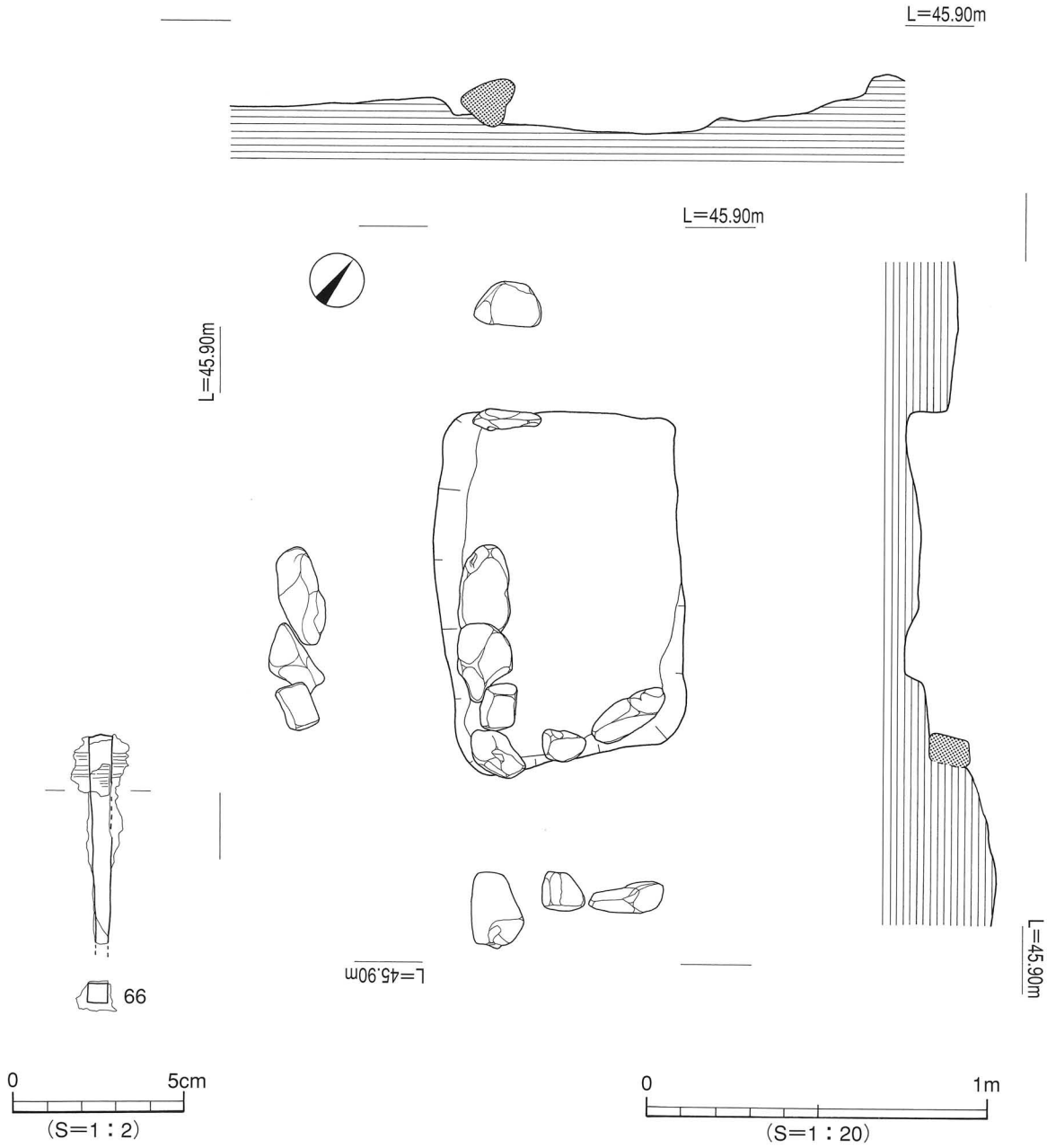
ＳＫ101（第24図、図版14）

調査区中央部に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は長さ1.04ｍ、幅0.72ｍ、深さ10～17㎝を測る。床面はわずかに窪む箇所がある。墓壙内には15㎝～30㎝大の塊石を配している。墓壙内南側に３石と西側に３石、北側に１石を配している。遺物は埋土上層から鉄製品が出土している。

出土遺物（第24図）

66は鉄釘、残存長6.2cm、幅1.6cm、厚さ0.9cmを測る。先端部は欠損している。

時期：出土状況からＳＫ102と同時期と思われ、縄文時代晩期から弥生時代前期に時期比定する。



第24図　SK101測量図・出土遺物実測図

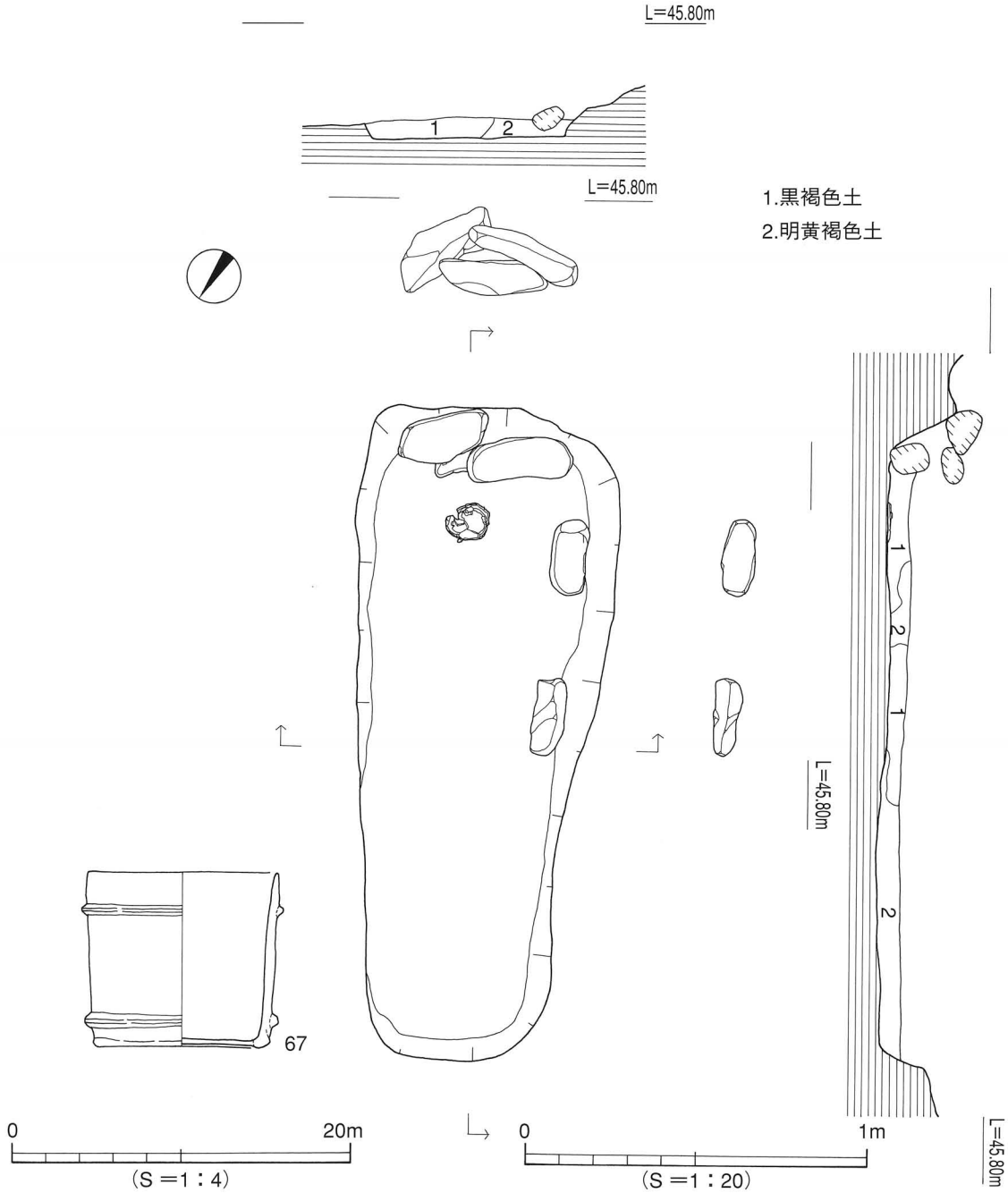
ＳＫ102（第25図、図版14･15）

調査区南部に位置する。平面形態は長方形を呈する。規模は長さ1.93ｍ、幅0.54ｍ～0.77ｍ、深さ30㎝を測る。断面形態は皿状である。墓壙の床はほぼ平坦で南側小口部の幅が広く、墓壙内の南側に３石と西側に２石の塊石を配している。埋土は黒褐色土と明黄褐色土である。遺物は南側床面より上部から押しつぶされた状態で鉢形土器が出土した。

出土遺物（第25図、図版24）

鉢形土器は口径11.1㎝、底径10.4㎝、器高10.3㎝を測る。わずかに上げ底気味の底部より直線的に立ち上がり、口端部は尖り気味に丸い。底上部と口縁下部に貼付による凸帯を巡らし明確ではないがキザミ目を施している。

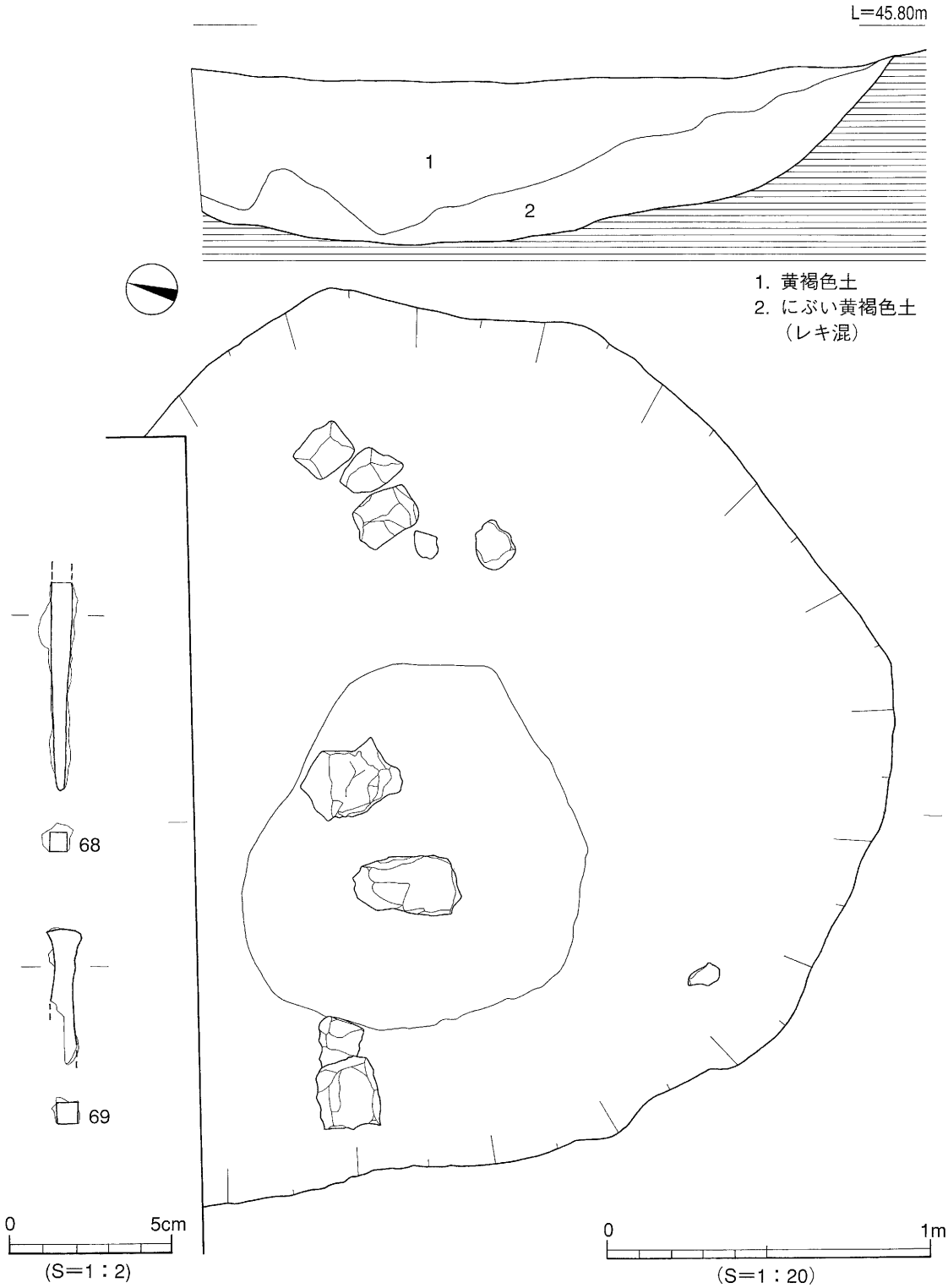
時期：出土した鉢形土器の形態から縄文時代晩期から弥生時代前期に時期比定する。



第25図　SK102測量図・出土遺物実測図

ＳＫ103（第26図）

調査区南部に位置し北側は未調査である。平面形態は不整な円形状と思われる。規模は東西2.7ｍ、南北検出長2.1ｍ、深さ0.53ｍを測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黄褐色土とにぶい黄褐色土（礫混）の２層に分層できる。遺物は床面の西側に２石、中央に２石、東側に４石の塊石が出土している。埋土上層からは、鉄製品２点が出土した。



第26図　SK103測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第26図、図版24）

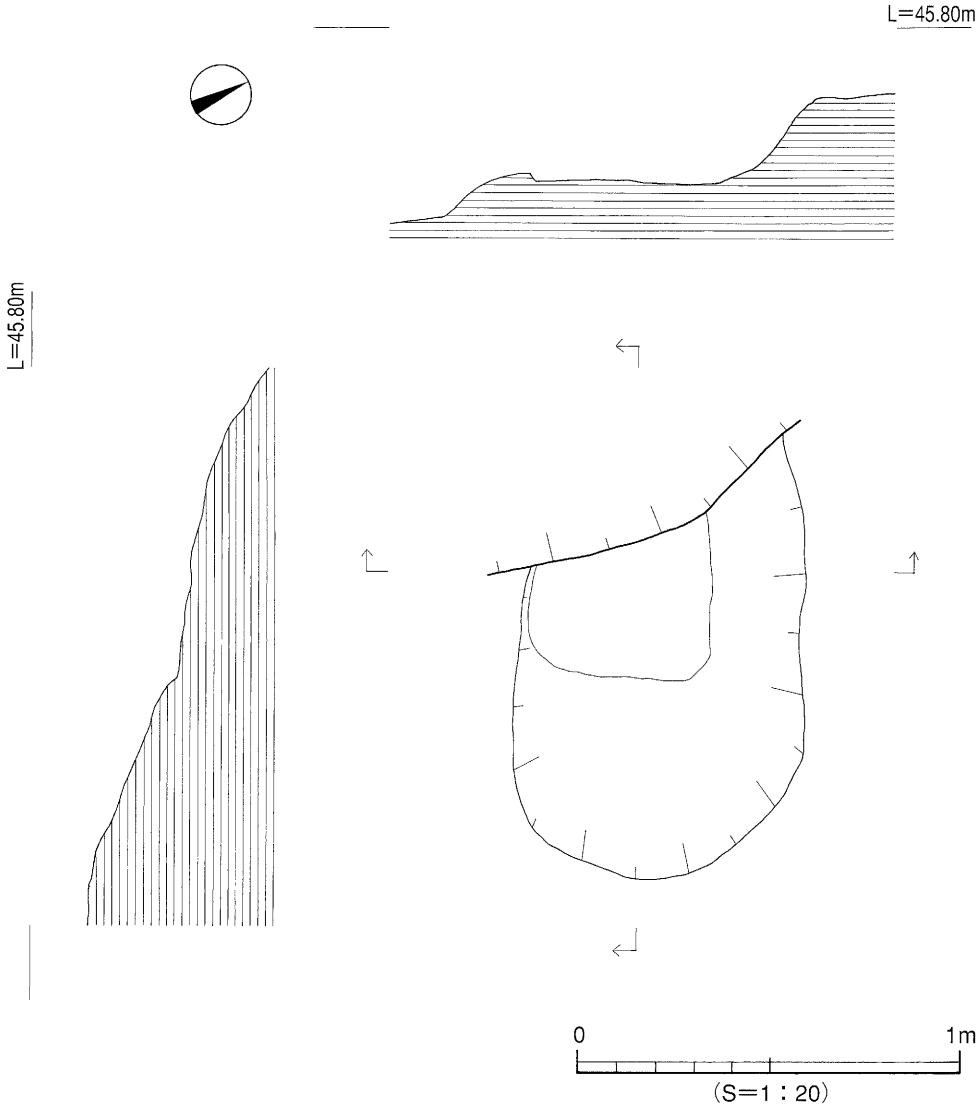
69の端部はたたかれ扁平であるため、鉄釘と思われる。

時期：出土した塊石の状況からＳＫ102と同様に縄文時代晩期から弥生時代前期に時期比定する。

ＳＫ104（第27図）

調査区南部に位置し北西部をＳＸ101に切られる。平面形態は、残存部の形態より長方形と考えられる。規模は検出長1.15ｍ、幅0.74ｍ、深さ0.23ｍを測る。断面形態は逆台形状である。出土遺物はない。

時期：検出状況からＳＫ102と同時期と思われ、縄文時代晩期から弥生時代前期に時期比定する。

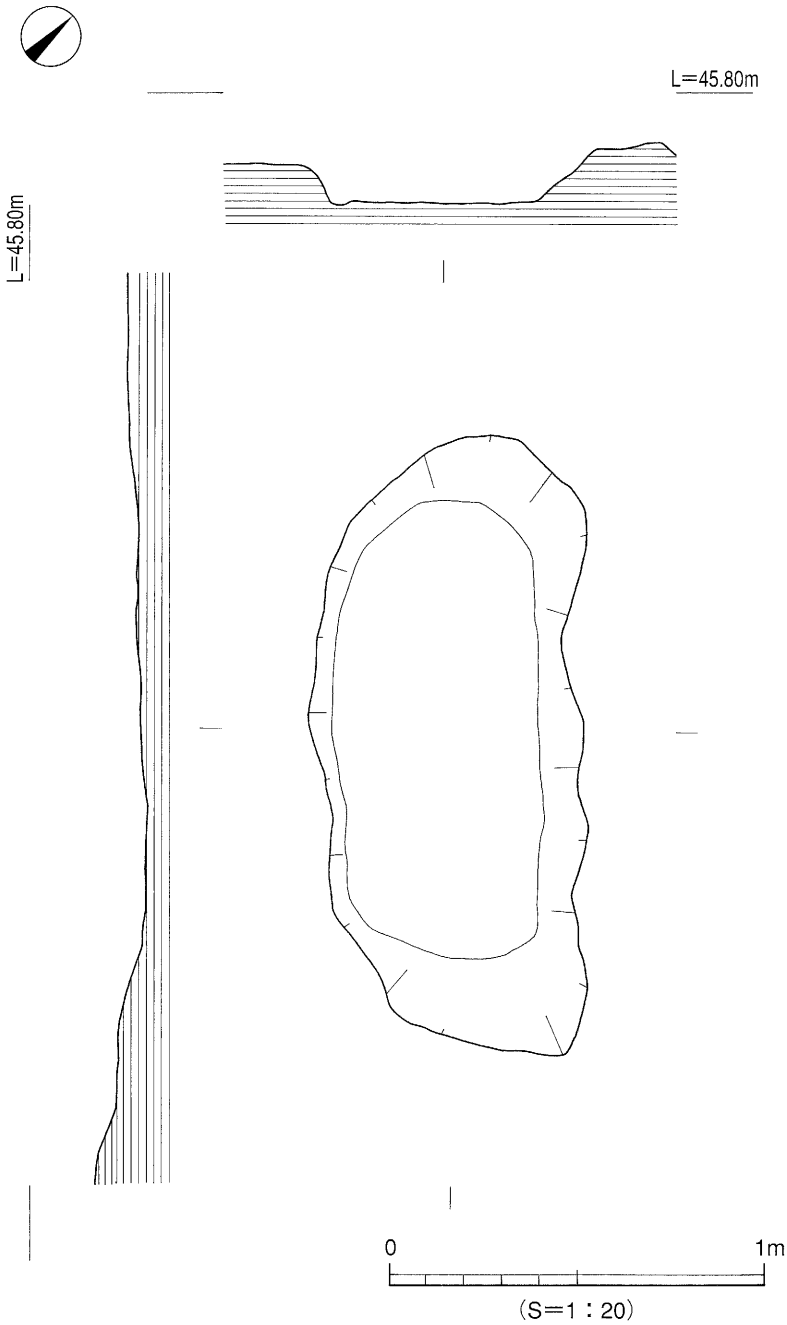


第27図　SK104測量図

ＳＫ105（第28図）

調査区南部に位置し上部は削平を受けている。平面形態は楕円形状である。規模は長さ1.64ｍ、幅0.73ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形態は皿状である。小口側の立ち上がりは不明瞭である。出土遺物はない。

時期：検出状況からＳＫ102と同時期と思われ、縄文時代晩期から弥生時代前期に時期比定する。



第28図　SK105測量図

３）中世

性格不明遺構を２基検出した。

ＳＸ101（第29図、図版16）

調査区の南西部に位置する。西側、南側は調査区外に続く。平面形態は不整形である。規模は検出長8.8ｍ、検出幅7.0ｍ、深さ2.7ｍを測る。床面は凹凸がある。埋土は褐色土を基本とし下面は礫層である。出土遺物は土師器、須恵器、弥生土器、埴輪が出土している。

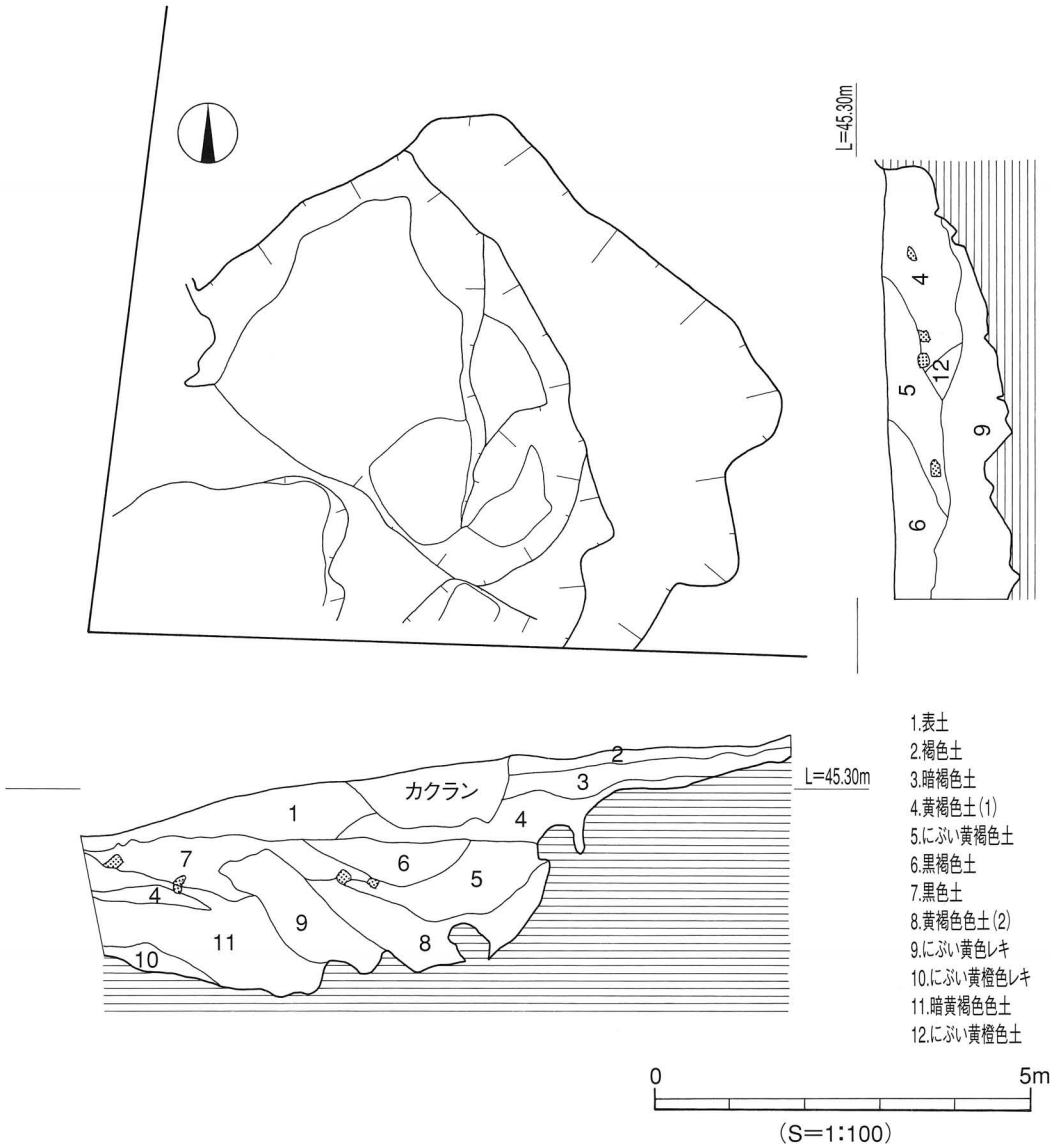
出土遺物（第30図、図版24・25）

土師器（70～100）

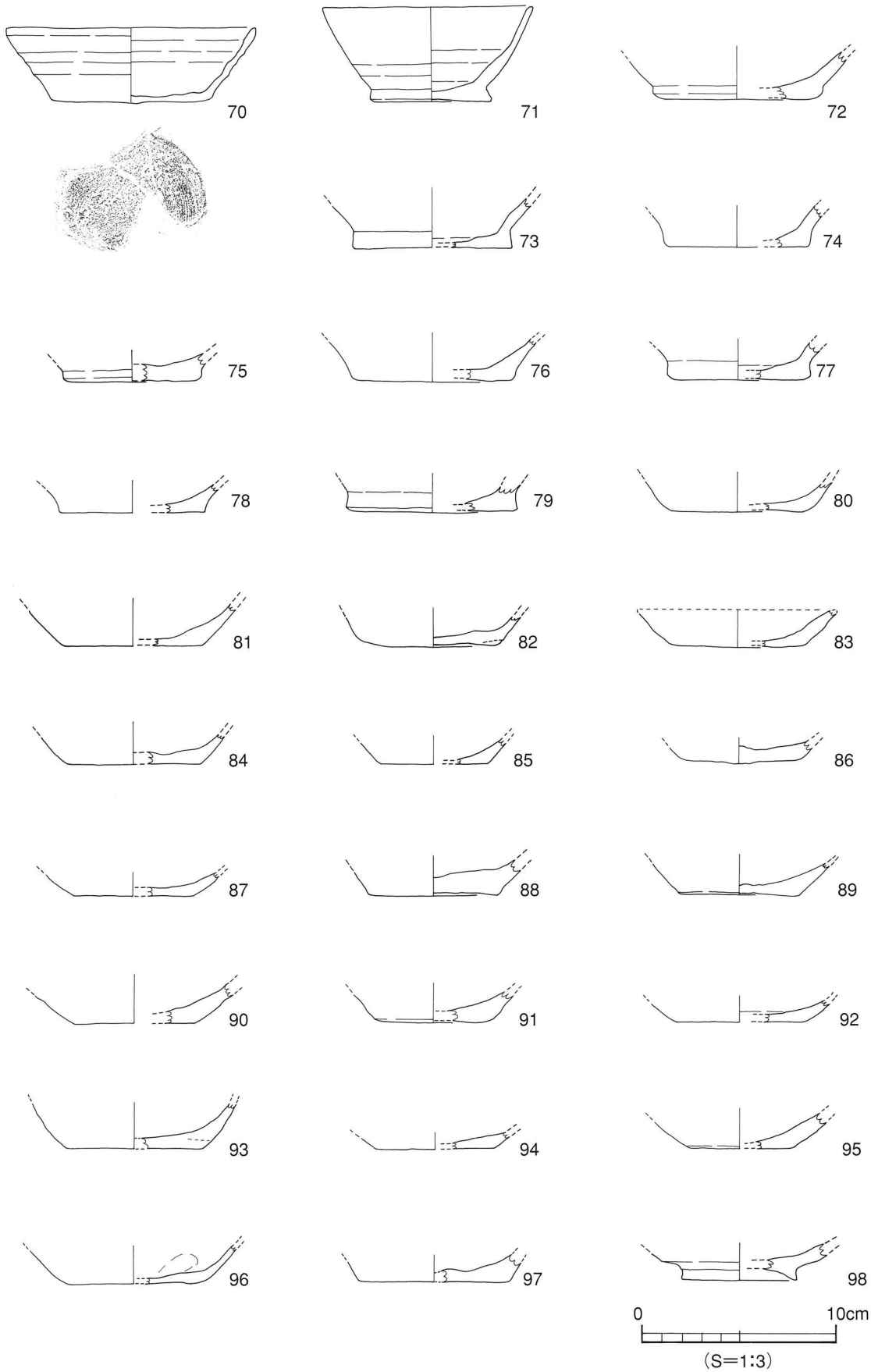
坏（70～79）70は外上方に伸びる口縁部の端部は尖り気味に丸い。71は口径10.5cm、底径5.9cm、器高4.8cmを測る高台付きの底部に回転ヘラ切り痕、内外面に横ナデが施されている。72～79は高台付の坏である。73～75・77・79は回転ヘラ切り痕が残る。

皿（80～97）83は口径10.0cm、底径6.8cm、器高1.9cmを測るやや凹む平底に、回転ヘラ切り痕が残る。80・86・92・94・96は回転糸切り痕が残る。

椀（98）98は底径5.8cmを測る椀の底部片である。断面三角形状の高台を底部に貼り付ける。



第29図　SX101測量図



第30図　SX101出土遺物実測図（1）

99は三足付土釜で口径22.2cmを測る。丸底の底部より緩やかに内湾しながら口縁部に続き、口端部に凸帯を一条巡らす。内面にハケ目調整を施す。100は壺。平底で扁平な胴部。

弥生土器

101は壺。短く内湾する口縁部。外面に２条の凹線を施す。102は口径16.2cmを測る甕の口縁部片である。口縁部は短く折り曲げる。103は口径33.2cmを測る器台の口縁部片で口端面に波状文を施す。104は壺の底部。厚い平底の内面にハケ目調整がある。105は甕の底部。底部は凹凸があり不安定である。106はジョッキ型埦。平底で内湾する胴部。

埴輪（第32図、図版25）

出土した埴輪は小破片が多数を占める。その中で復元できたものを図化している。出土した埴輪は、全て土師質で底径12.9cm～20.0cmを測る。

107は底部より17.0cmの所にタガを巡らし、内外面の調整は摩滅のために不明である。108は底部より20.0cmの所にタガを巡らし、内外面にハケ目とヘラによるナデ調整が施されている。109は摩滅のために内外面の調整は不明である。110は底径16.3cmを測る。内面裾部に指頭痕が見られる。

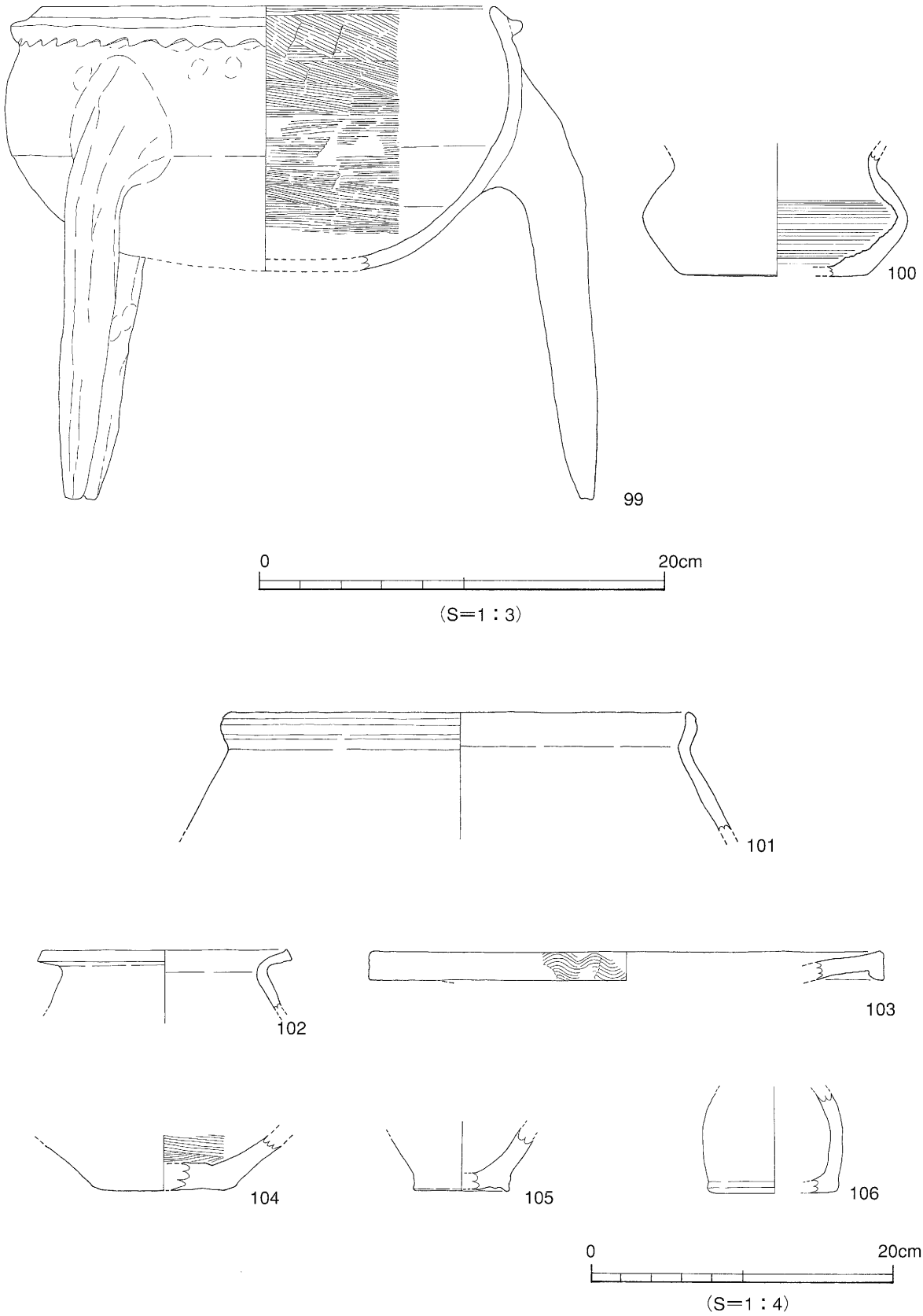
須恵器（第32･33図、図版25）

111～113は高坏。111と112は坏部と脚裾部を欠失している。脚中位に二条の沈線を巡らし上下二段のすかし窓を三方向に切り取る。113は「ハ」の字状に短く開く脚部。端部は凹む。114～116は甕の口縁部から胴部にかけての残存である。114は口径16.7cmを測る。外反する短い口縁部は端部で肥厚させ丸く、外面に平行タタキ痕が見られ全体に施釉がかかる。115は口径16.8cmを測る。短く外反する口縁部端部は尖り気味で内傾する面をもつ。内面に施釉が見られる。116は口端部を欠失している。胴部内外面にタタキ痕が見られる。117は長頸壺の口頸部片。口端部は欠失しており外傾して直線的に広がるものと思われる。外面に２本一組の沈線を３条と浅い沈線を１条巡らし沈線間に波状文を施す。118は器台。坏部から胴部の小片である。外面に二条の沈線と波状文を巡らし二段の刺突文と円孔を施す。119は甑。底部から胴部にかけての残存である。胴部最大径9.5cmを測る底部に回転ヘラ削り、胴部にカキ目調整が施されている。

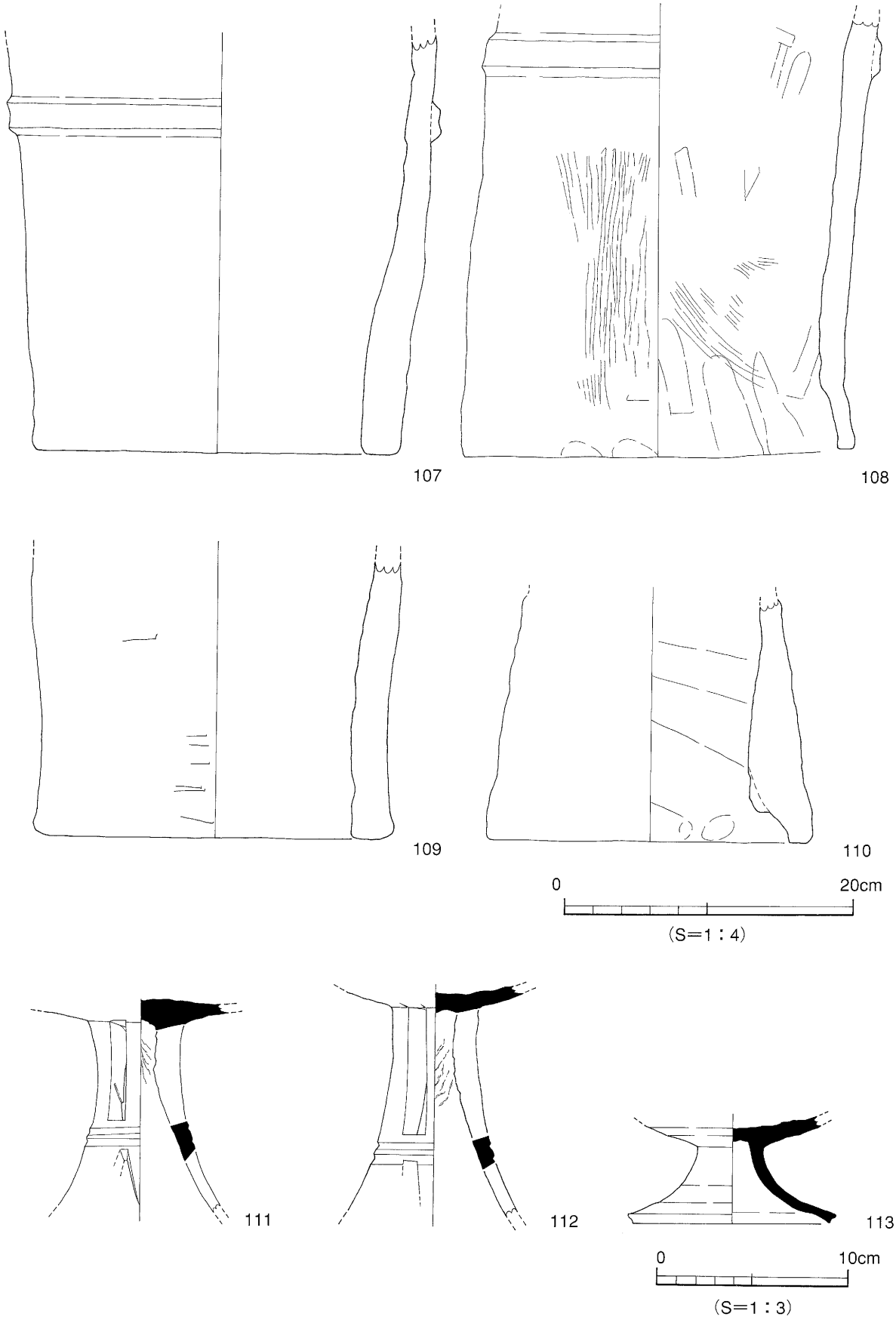
土師器（第33図、図版25）

120は把手付き埦と思われ丸底の底部より直立気味に立ち上がり、口端部は尖り気味に丸い。121は坏。口径15.4cm、底径8.0cm、器高4.0cmを測る。高台付きの底部より外上方に開く口縁部の端部は丸い。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。122は埦。口径12.6cm、底径7.0cm、器高5.0cmを測る。内湾しながら外上方に伸び口縁端部は丸く、高台付きの底部に回転ヘラ切り痕が残り、内外面の調整は横ナデである。

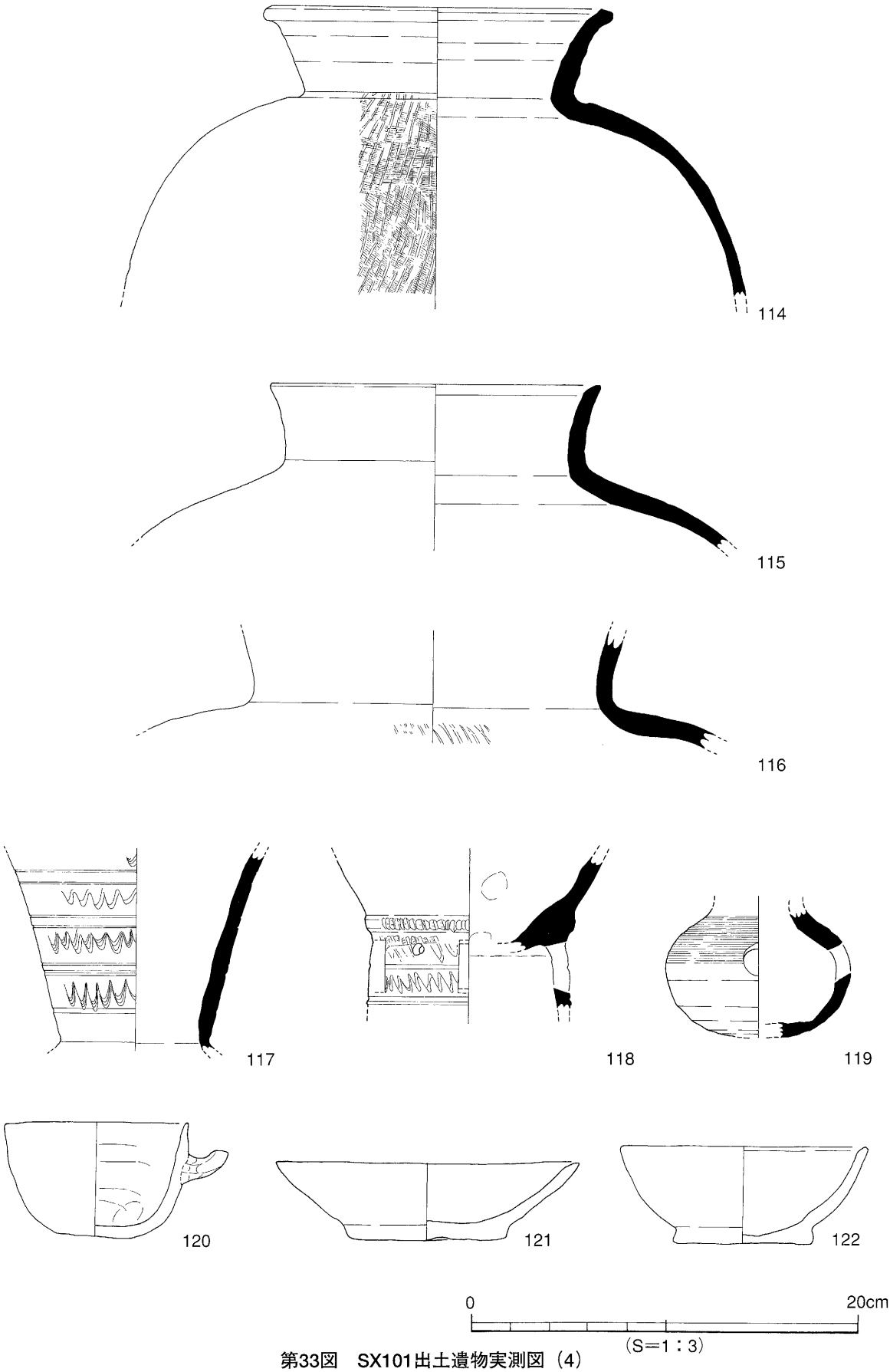
時期：出土した土師皿の形態より中世に時期比定する。



第31図　SX101出土遺物実測図（2）



第32図　SX101出土遺物実測図（3）

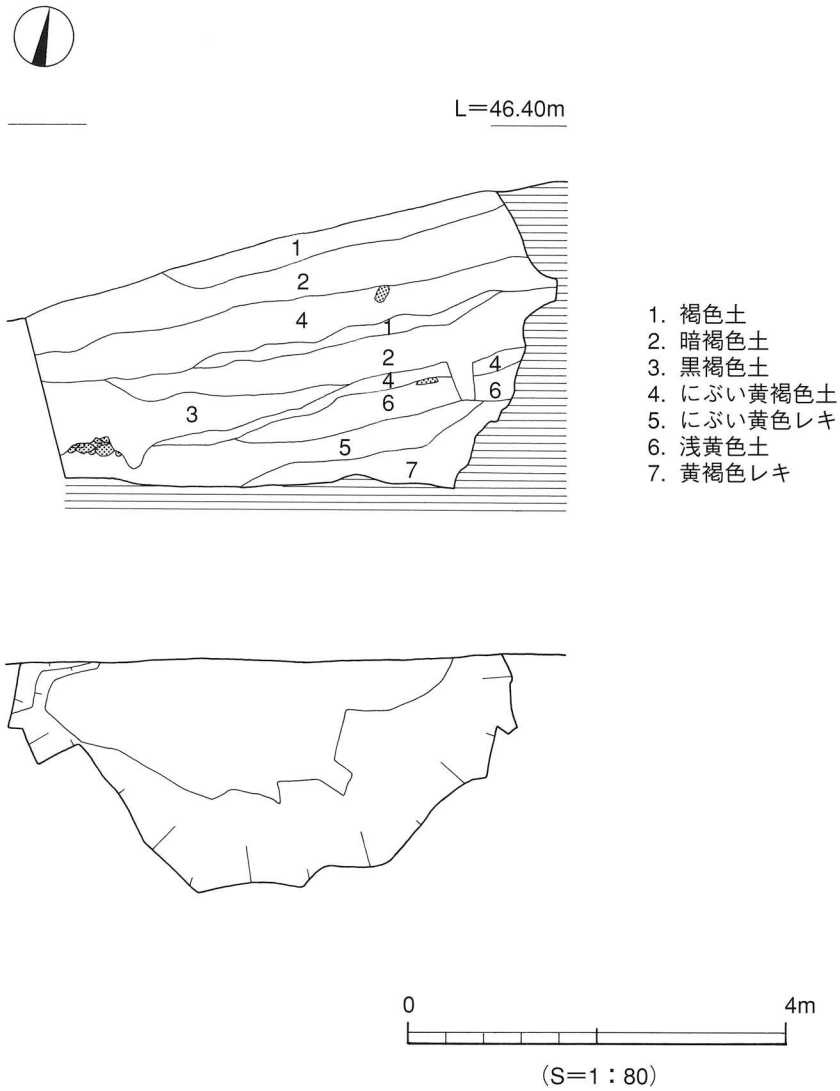


第33図　SX101出土遺物実測図（4）

ＳＸ102（第33図、図版17）

調査区の北西部に位置し北側は調査区外に続く。平面形態は検出した東側の形態より不整形な円形状と考えられる。規模は検出長5.4ｍ、検出幅2.4ｍ、深さ3.2ｍを測る。断面形態は東側はフラスコ状、西側は直線的に切り立ち、南側は台形状で床面は水平な面をもつ。埋土は褐色土が基本とし下面は礫層である。出土遺物はない。

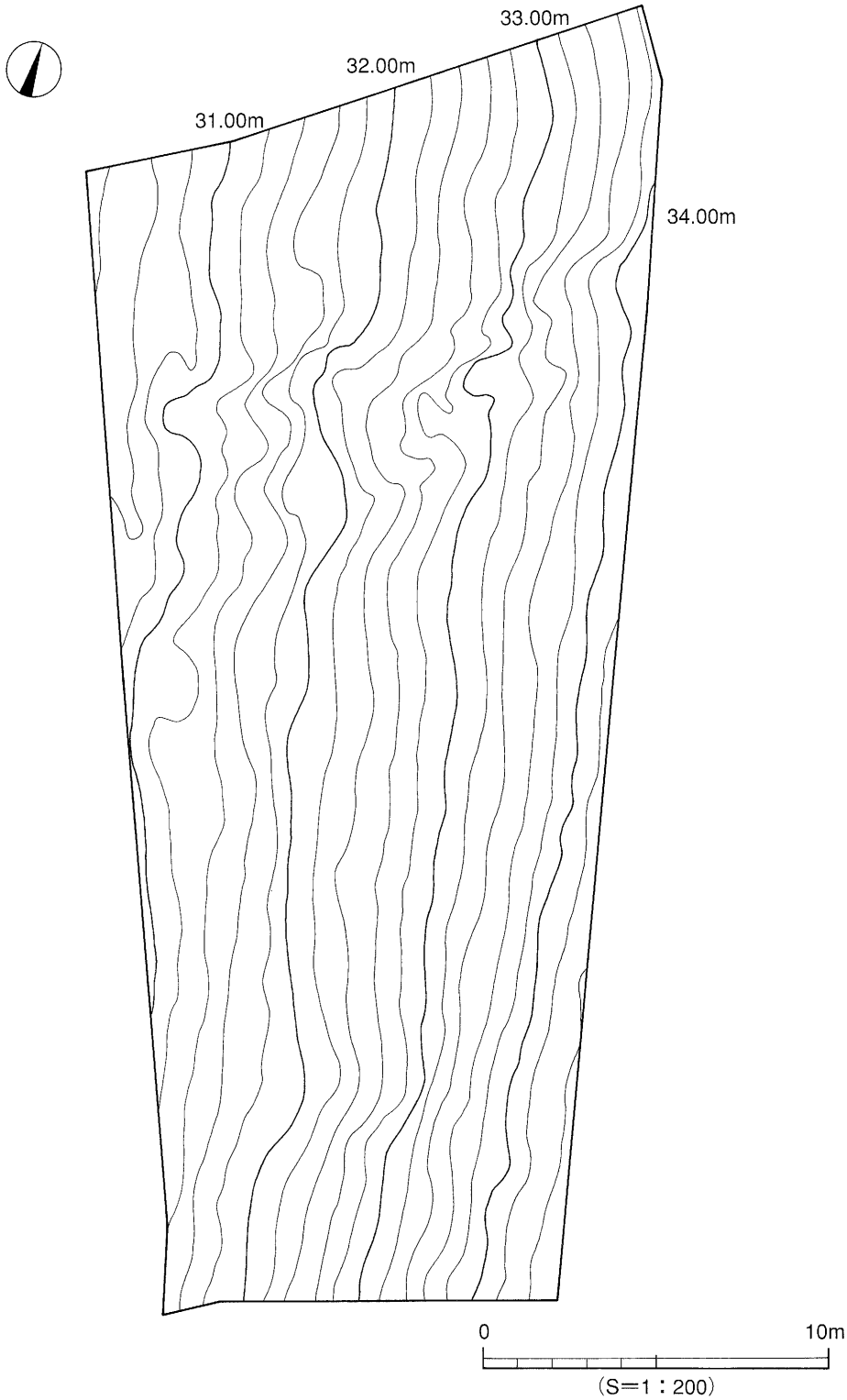
時期：遺構検出状況からＳＸ101と同時期の中世に時期比定する。



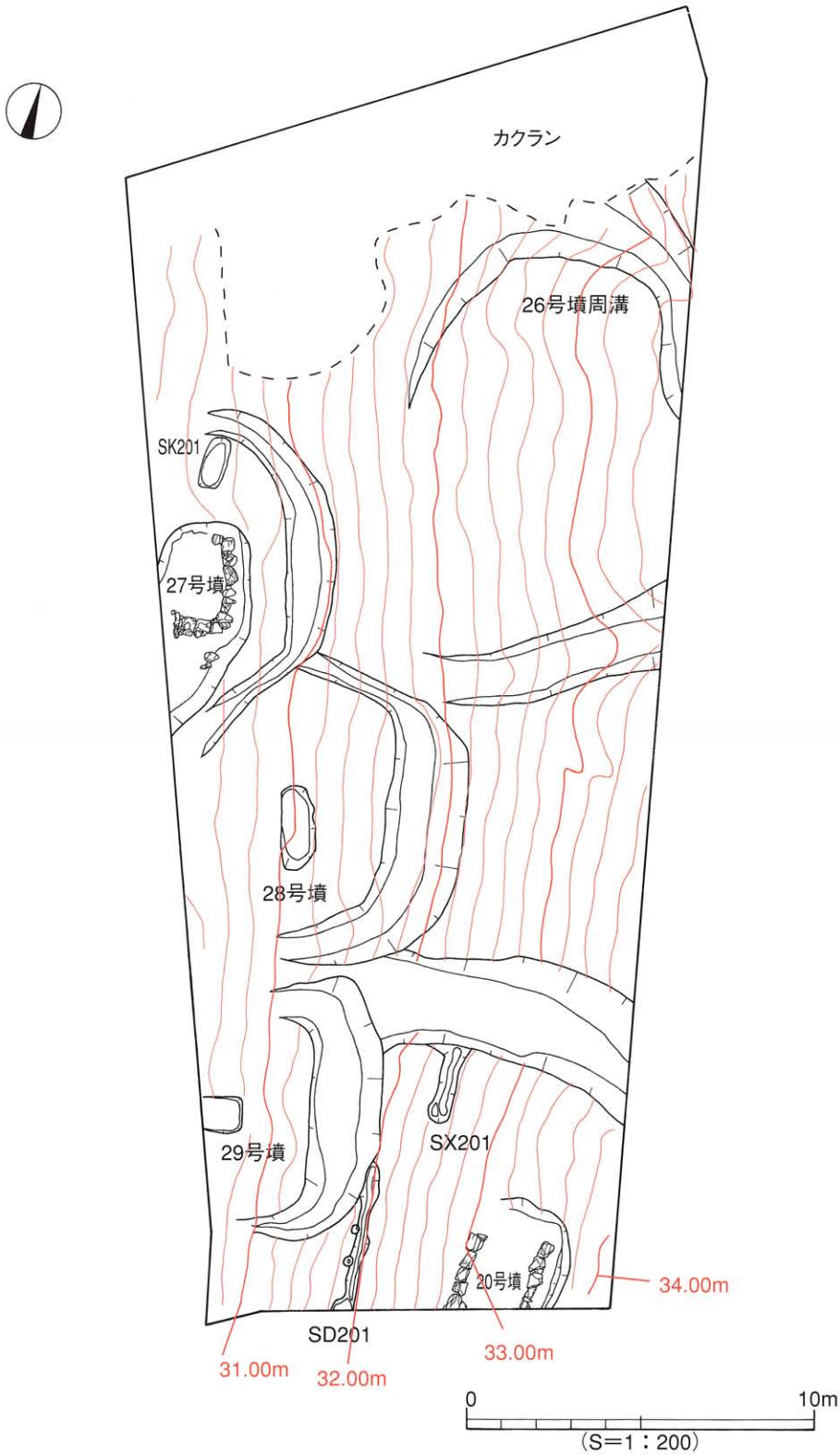
第34図　SX102測量図

3．2区の調査

2区は1区北西の12m低い標高30.40m～34.00mに位置する。調査区は縦11.7m～16.5m、横33.1m～37.5mを測る台形状で高低差3.6mを測る斜面上にある。調査以前は開墾が行われ果樹園として利用されていたため、肉眼観察と地形測量からは墳丘は確認出来なかったが、調査では、古墳5基と弥生時代の溝1条、土坑1基、性格不明遺構1基を検出した。



第35図　2区調査前地形測量図

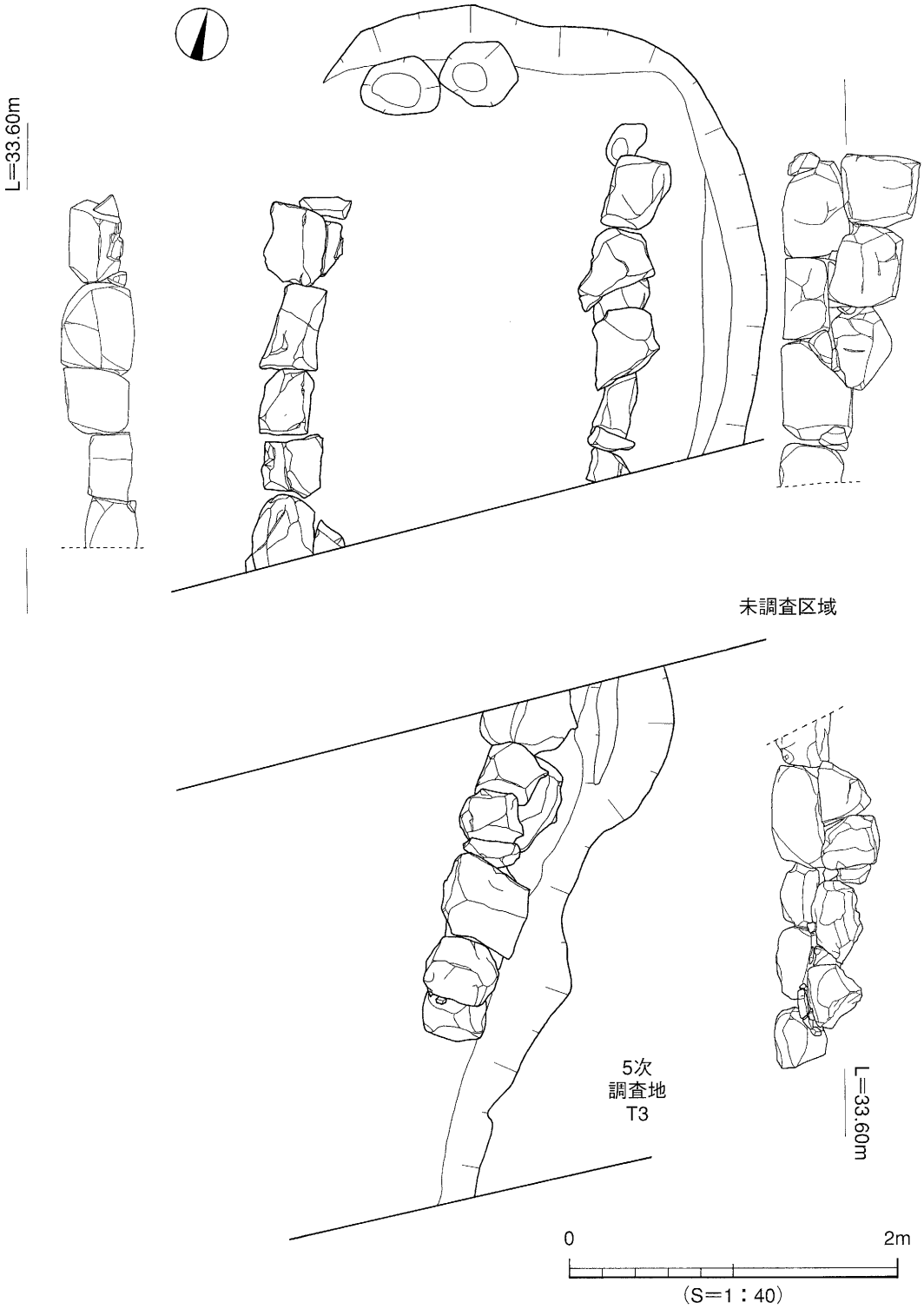


第36図　2区遺構配置図及び調査後地形測量図

（1）古墳時代

20号墳（第37図、図版19）

調査区南部に位置する。20号墳の南側には東山古墳群５次調査地Ｔ３で検出した石列と同一と考えられるため、５次調査地で古墳番号を付した20号墳として調査を行った。



第37図　20号墳石室測量図・展開図

第38図　20号墳床面・遺物測量図

遺構は石室と周溝である。墳丘盛り土は削平を受けている。墳形は周溝の形状より円墳と考えられる。規模は12ｍ前後を測る。石室掘方は北から東にかけて検出し、右側壁２段長さ2.0ｍ、左側壁１段長さ2.2ｍを検出した。奥壁は抜き跡を検出した。石室規模は検出長2.6ｍ、幅1.7ｍを検出した。敷石は下面に10～30㎝の扁平な角礫を敷き、上面に２～５㎝前後の円礫を敷く。遺物は土師器の鉢、須恵器の坏身、耳環１点が円礫上面より出土した。

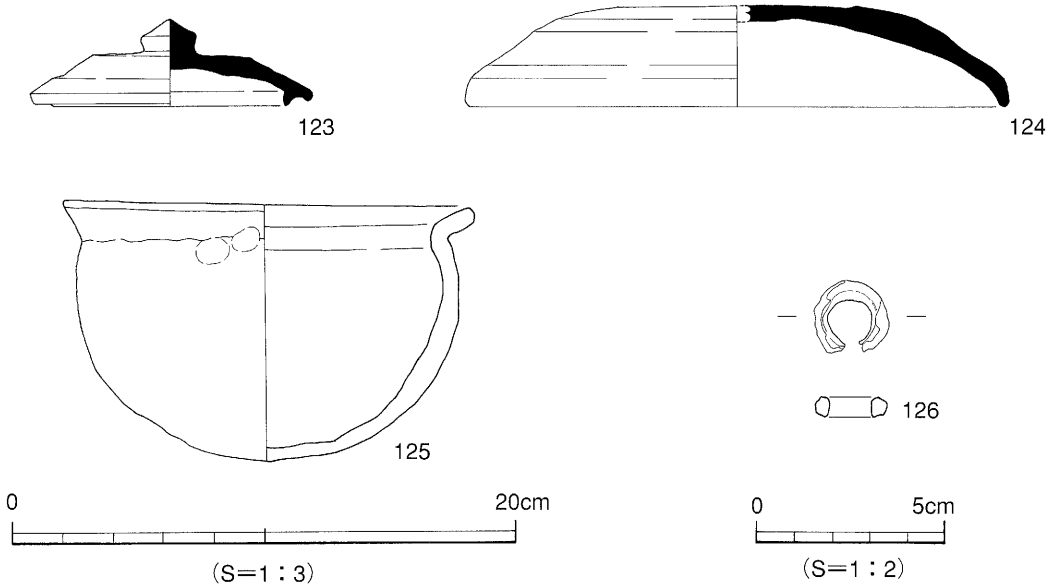
出土遺物（第39図、図版26）

坏蓋（123・124）123は口径9.2cm、器高3.4cmを測る完形品である。水平な天井部に摘みが付き、返りは口端部より下方に伸びる。天井部に回転ヘラ削りが行なわれている。124は口径21.4cm、器高4.0cmを測る大型の蓋である。扁平な天井部より緩やかな曲線を描き口端部につづき端部は丸い。天井部に回転ヘラ削り、その他に横ナデ調整が施されている。

鉢形土器（125）口径16.0cm、器高10.4cmを測る土師器の完形品である。口縁部を「く」字状に折り曲げ端部は丸くおさめられている。丸底の底部は凸凹である。内外面ともに摩滅にて調整不明である。

耳環（126）外径1.95cm、内径1.2cmを測る銅芯を薄い銀板で被覆している。遺存状況不良な為、銹化、剥離が進行している。

時期：出土遺物から古墳時代後期に時期比定する。



第39図　20号墳出土遺物実測図

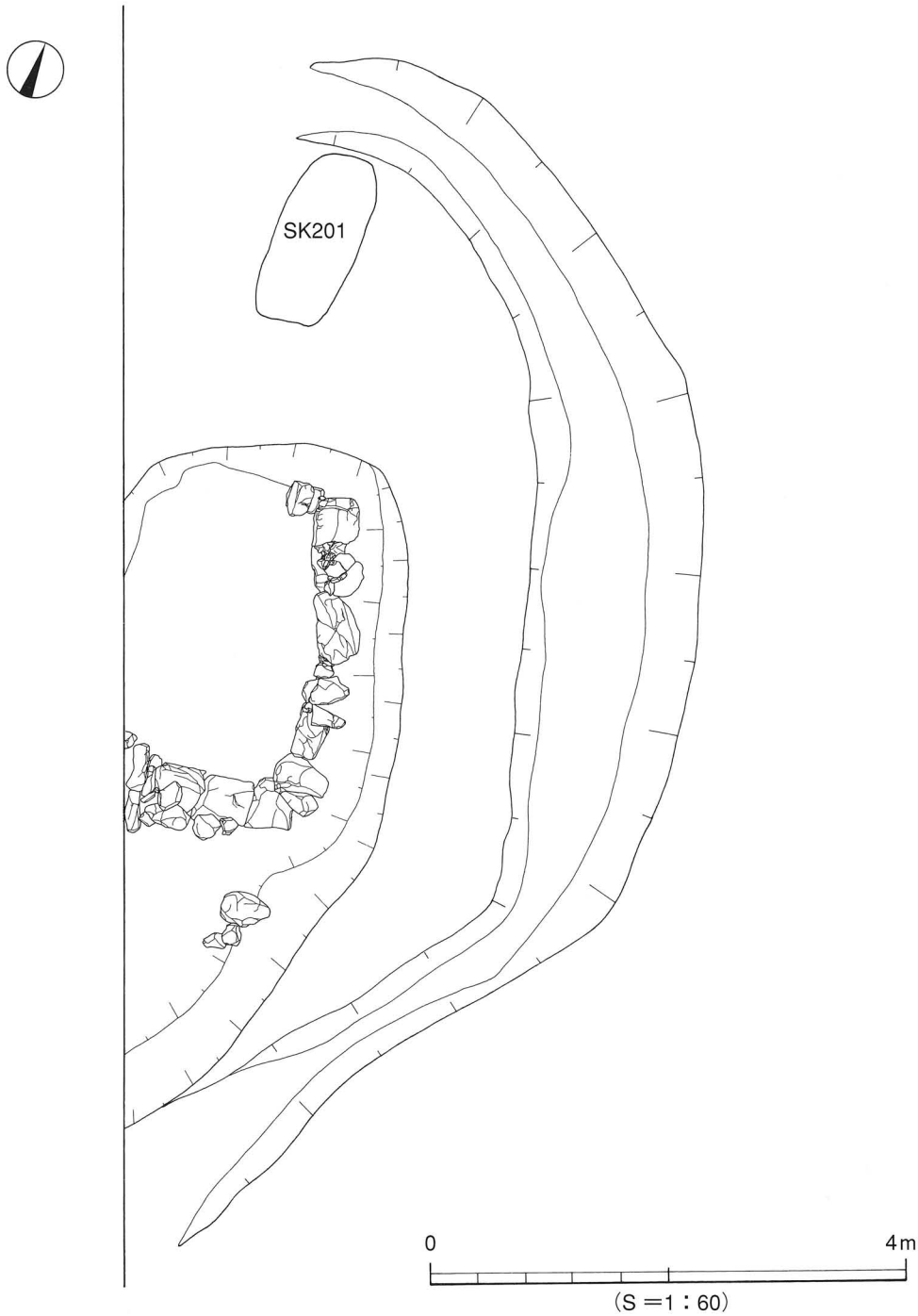
26号墳（第36図、図版20）

調査区の北西部に位置し東側は調査区外に続き、北側は近現代坑に切られる。墳丘と主体部は削平を受けている。検出遺構は周溝のみである。墳形は検出した周溝の形状から円墳と考えられる。規模は約11ｍを測る。周溝内から遺物は出土していない。

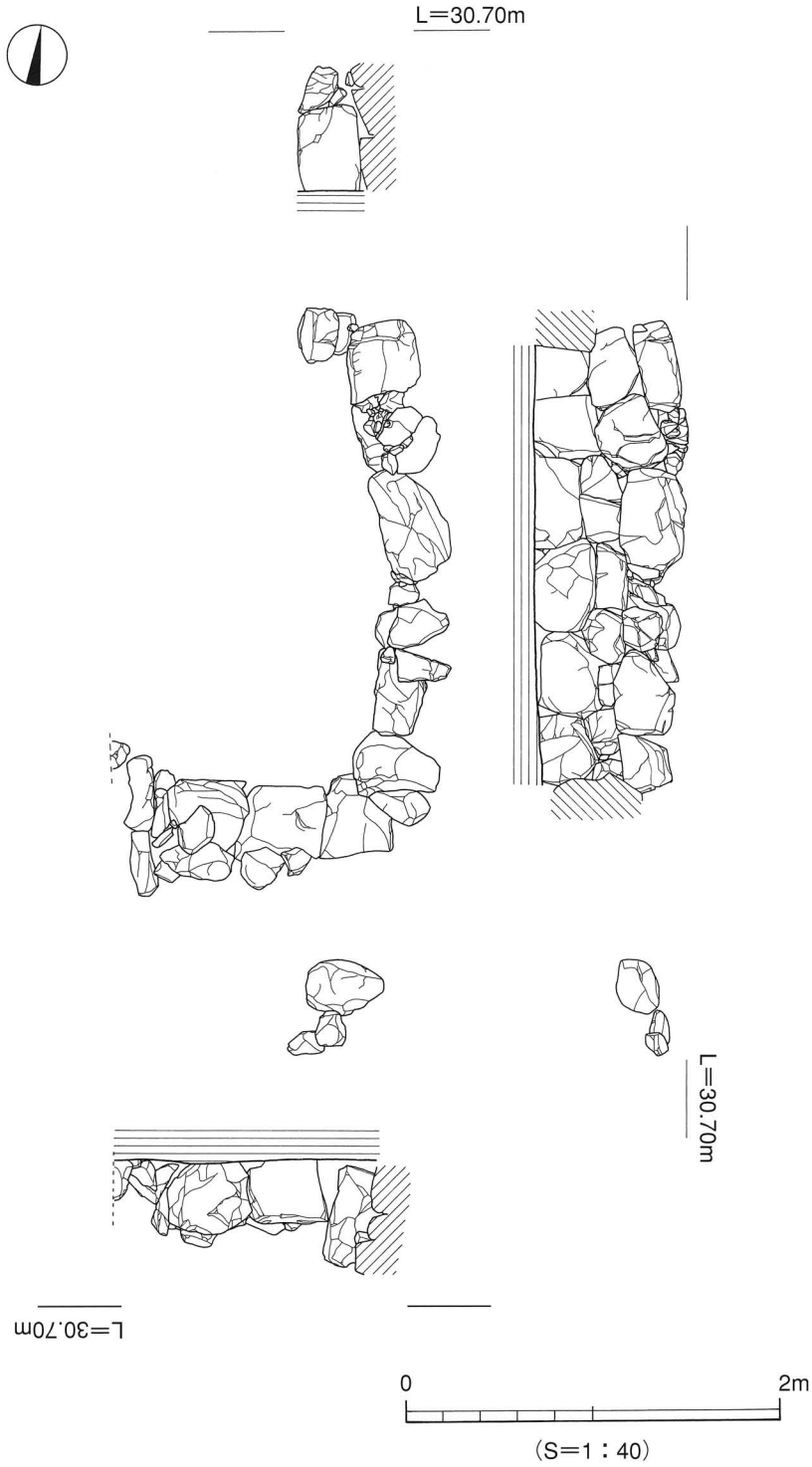
時期：遺物が出土していないため時期不明である。

27号墳（第40～42図、図版20）

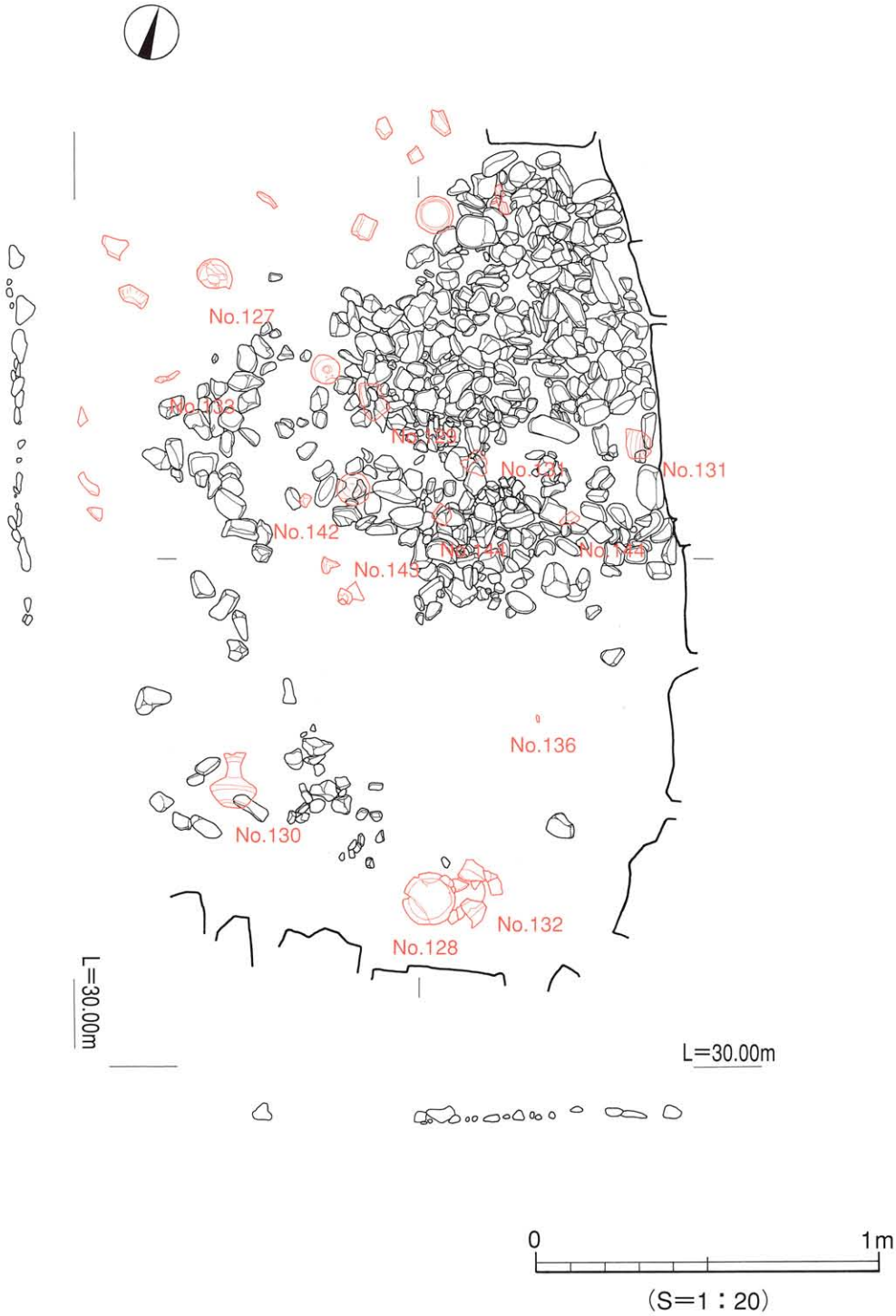
調査区の北西部に位置し墳丘盛り土は削平を受けている。検出遺構は周溝と石室である。周溝は石室の東側に位置し半円状に検出した。規模は径8.45ｍ、幅1.40ｍ、深さ0.20ｍを測る。主体部は南北方向に主軸を取り南側に開口する。西側は調査区外に続く。掘方の平面形態は長方形状である。石室は奥壁２段、右側壁３段と閉塞石が残る。規模は長さ2.35ｍ、幅（1.28）ｍを測る。奥壁幅と玄門部の幅が狭く、中央部が広い形状である。床面には5～15㎝の礫を敷く。出土遺物は石室内から須恵器の壺、耳環、羨道部から須恵器の坏蓋、周溝から須恵器の坏蓋が出土遺物している。



第40図　27号墳石室・周溝測量図



第41図　27号墳石室展開図



第42図　27号墳床面・出土遺物測量図

石室内出土遺物（第43図、図版26）

須恵器　127は坏身。口縁部の一部を欠いているがほぼ完形品である。口径10.4cm、器高3.8cmを測る。やや内湾する口縁部の端部は尖り気味に丸い。焼成不良の為に調整は不明である。128は台付き坏で口縁部を一部欠いている。断面四角形の高台が付き口縁部は外上方に伸び端部はやや尖り気味に丸い。色調は焼成不良の為に灰白色を呈している。129は壺の口縁部片で口径19.1cmを測る。外湾する口縁部の端部を上下に肥厚させ段をもつ。130は台付長頸壺、口縁端部と台部を一部欠いている。口縁部中位やや上部に２条、胴部中位に１条の凹線が巡る。131は壺の底部片。厚い底部外面にナデが施されている。

土師器　132は土師器の坏。口径17.4cm、器高5.3cmを測る完形品である。丸味をもつ底部。口縁部は外傾し端部を内側に丸く肥厚させる。

鉄製品　133～136は鉄釘と思われる。

羨道部出土遺物（第43図）

坏蓋137は口径10.5cm、器高3.5cmを測る完形品である。天井部に摘みが付き返りは口縁端部より下方に伸びる。天井部に回転ヘラ削り、その他に回転横ナデが施されている。

坏身138は口縁部が外傾し端部は尖り気味に丸い。底部には粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残る。

周溝内出土遺物（第43図、図版26）

坏蓋（139～144）139は摘み部をもつ小型品である。返りは口縁端部より下方に伸びる。140は摘み部をもつ小型の完形品で返りは口縁端部よりは下がる。141は摘みをもつ。返りは口縁部より下方に伸び接地する。142の天井部は平たく、摘み部を欠失している。口縁端部が接地する。143は丸い天井部の摘み部を欠失し口縁端部が接地する。144は返りをもたない大型品で扁平な摘み部の上部は水平である。

時期：出土した須恵器の形態から古墳時代後期に時期比定する。

28号墳（第44図、図版20）

調査区の中央部に位置する。検出遺構は周溝と主体部である。周溝は主体部の東側に「コ」の字状に検出した。規模は長さ14.0ｍ、幅2.2ｍ、深さ0.25ｍを測る。主体部は石材をもたない土坑である。平面形態は長方形で南北方向に主軸を取る。規模は長さ2.34ｍ、幅1.05ｍ、深さ0.13ｍを測る。断面形態は逆台形状である。遺物は周溝内から須恵器が１点出土している。

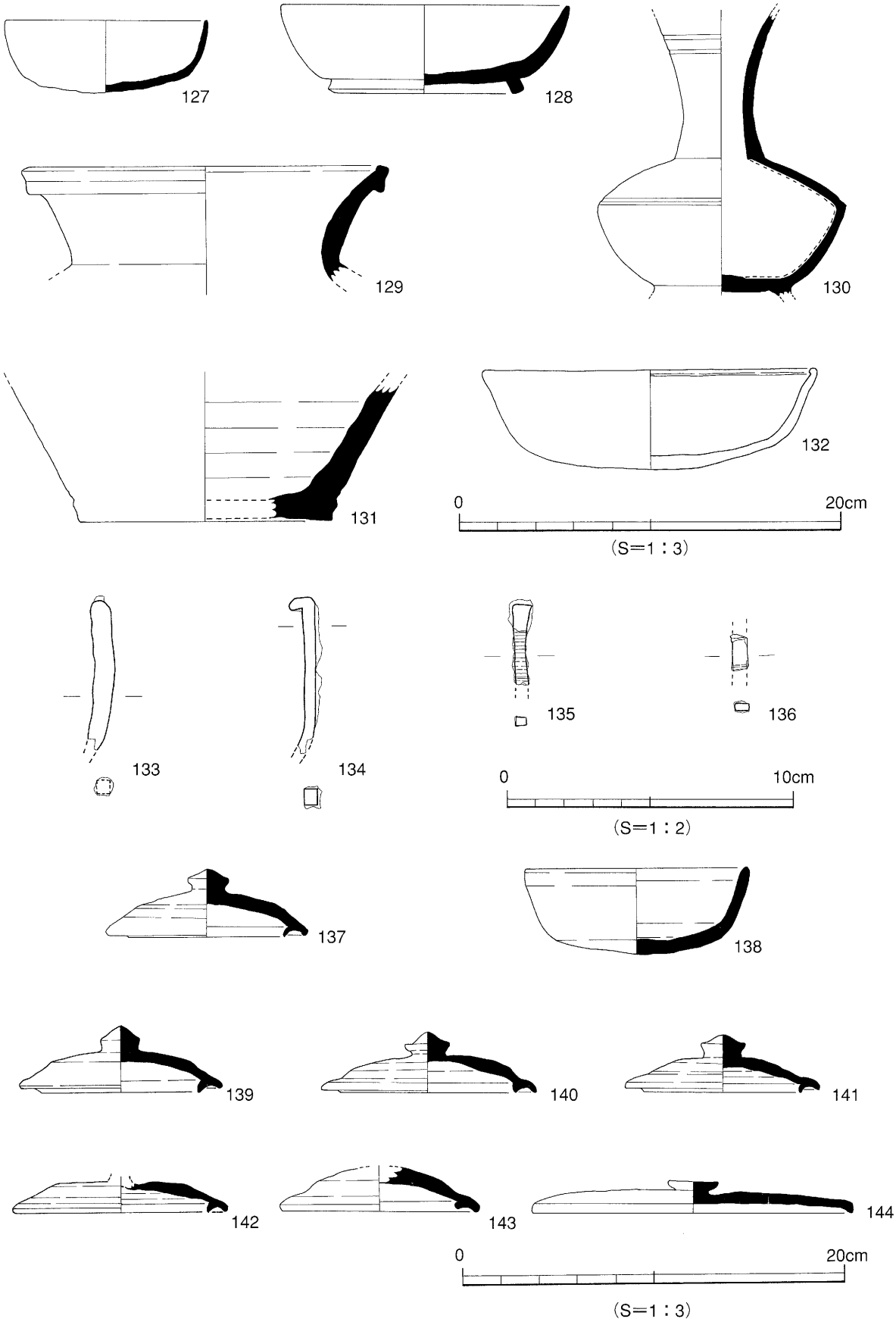
出土遺物（第44図）

145は須恵器の壺の口縁部片。外反する口縁部の端部は丸い。

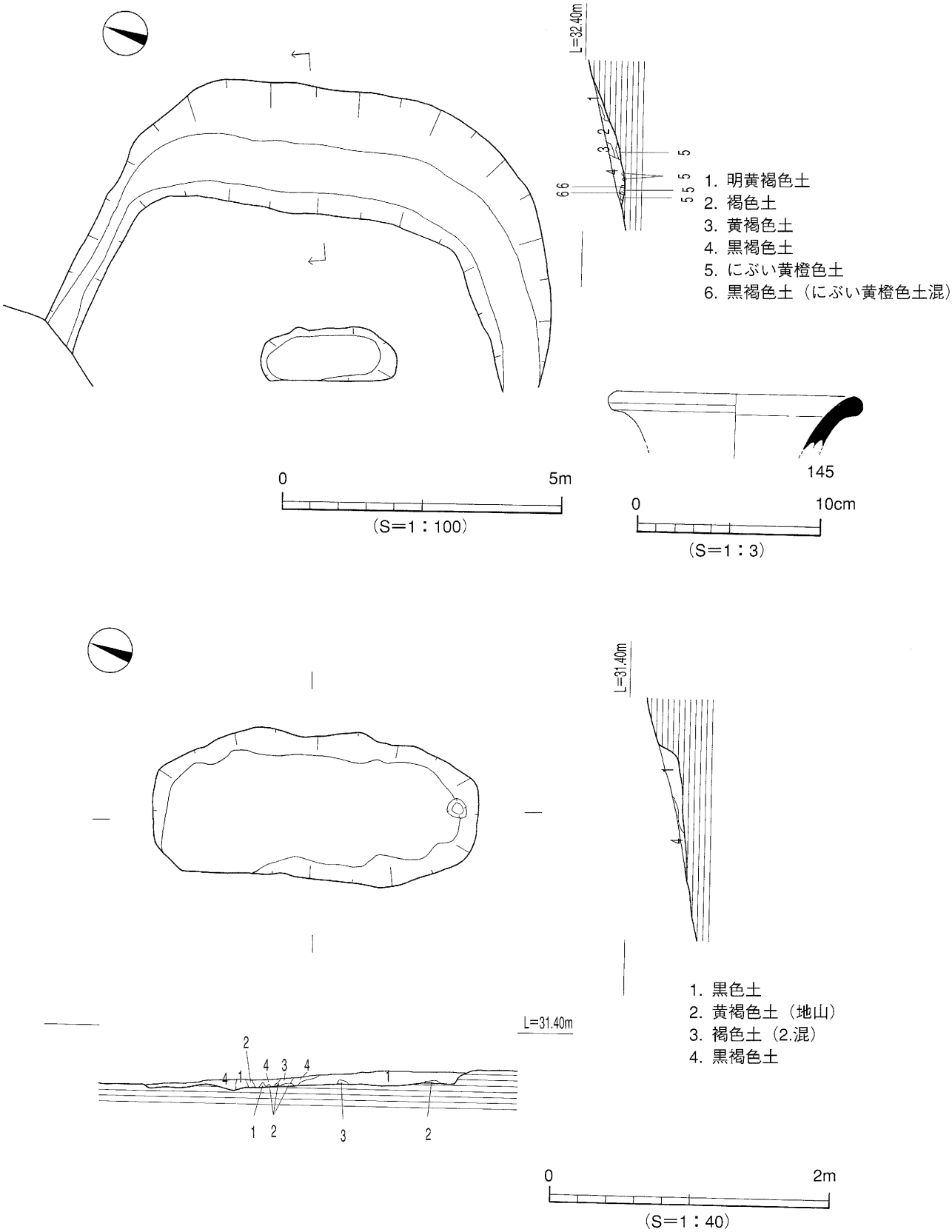
時期：周溝と主体部の形態が29号墳に類似することから、29号墳と同じ古墳時代中期以降に時期比定する。

29号墳（第45図、図版21）

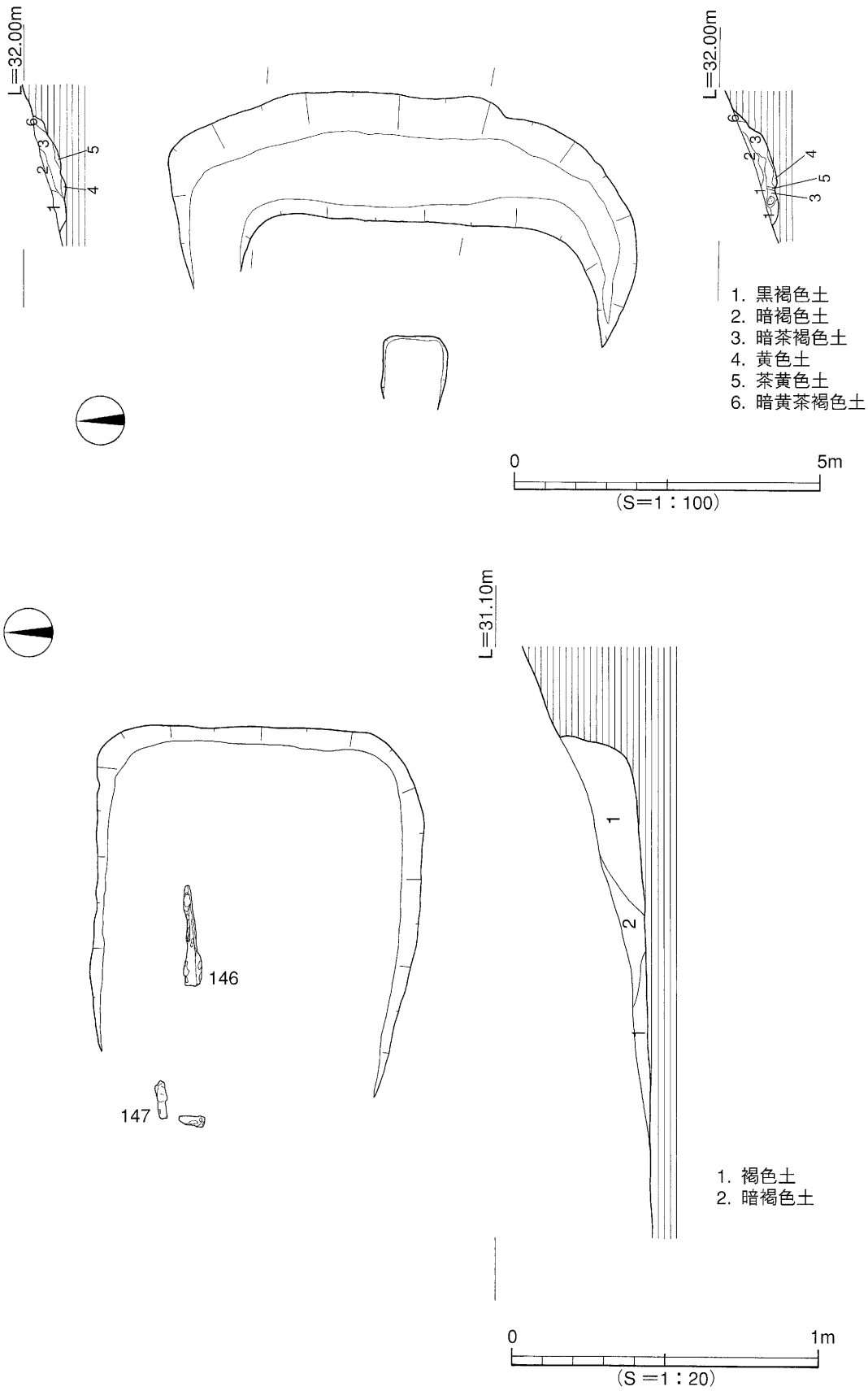
調査区南西部に位置する。検出した遺構は周溝と主体部である。周溝は主体部の東側に「コ」の字状に検出した。規模は長さ7.8ｍ、幅2.2ｍ、深さ0.32ｍを測る。主体部は石材をもたない土坑である。平面形態は長方形で東西方向に主軸を取る。規模は長さ（1.25）ｍ、幅1.06ｍ、深さ0.28ｍを測る。断面形態は逆台形状である。遺物は主体部から鉄製品の鉾と刀が出土した。



第43図　27号墳石室・羨道部・周溝出土遺物実測図



第44図　28号墳測量図・周溝内出土遺物実測図

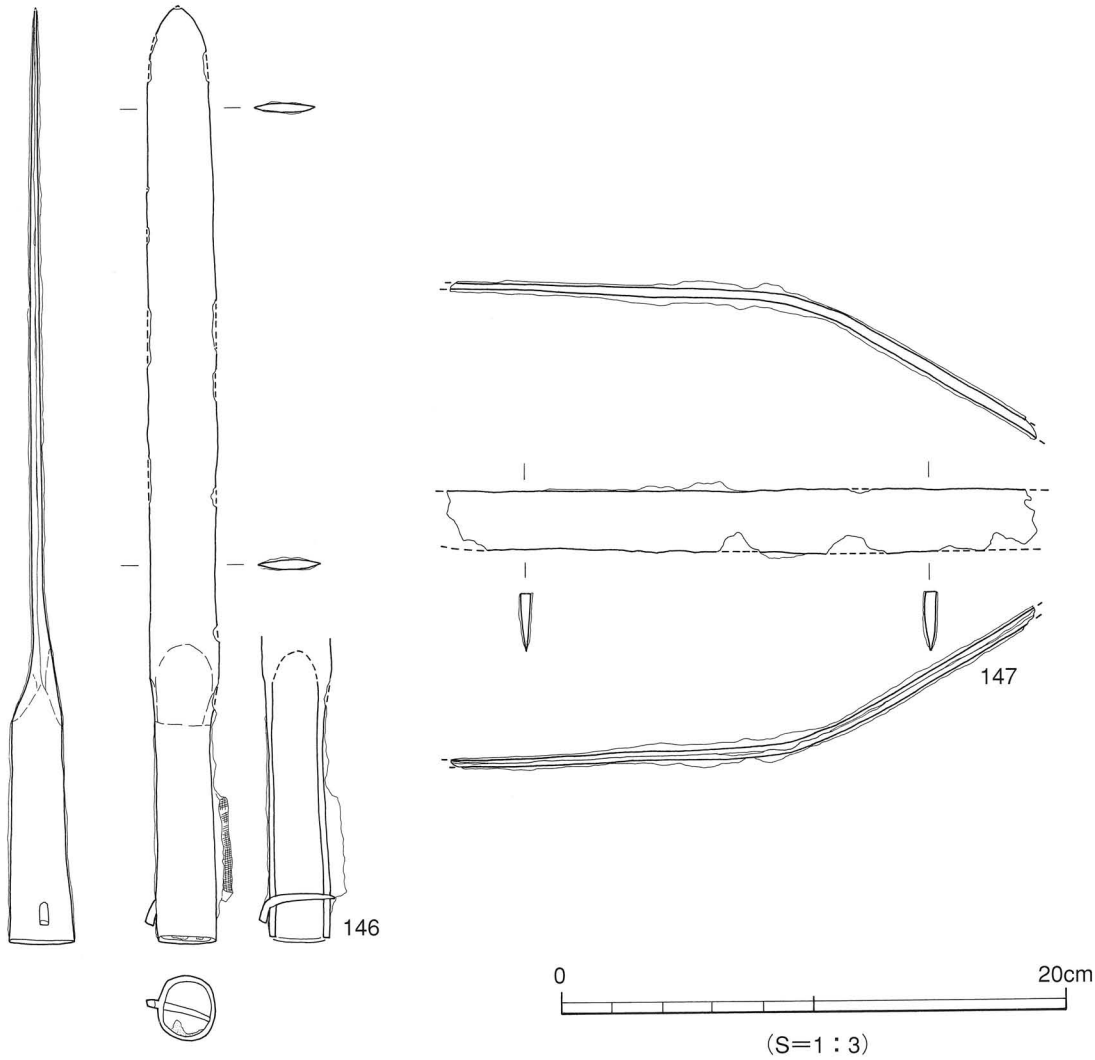


第45図　29号墳測量図・主体部出土遺物測量図

出土遺物（第45・46図、図版27・28）

146鉄鉾は完形品である。全長37.1㎝、身部全長26.5㎝、身部最大幅2.7㎝、袋部最大幅2.6㎝を測る。袋部に断面方形状の目釘が貫通し端部を下方に折り曲げている。袋部の断面は緩い角をもつ楕円形である。内面に木質、外面に布の付着が見られる。147鉄刀は「く」の字状に折れ曲がり先端部と柄の部分は欠損している。残存長は24.4㎝、身部最大幅2.4㎝、棟部最大幅0.4㎝を測る。

時期：出土した鉄鉾の形態より古墳時代中期以降に時期比定する。



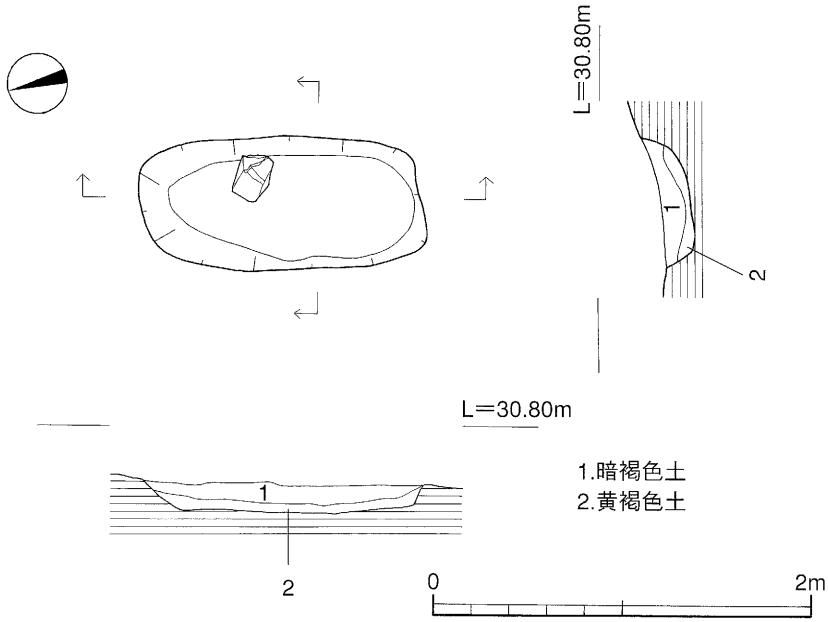
第46図　29号墳主体部出土遺物実測図

２）土坑（ＳＫ）

ＳＫ201（第47図）

調査区の北西部に位置し27号墳の周溝を切る。平面形態は長方形である。規模は長さ1.48ｍ、幅0.72ｍ、深さ0.19ｍを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色土である。遺物は18㎝×23㎝の角礫が１点出土した。

時期：古墳時代後期の27号墳を切るため古墳時代後期以降に時期比定する。



第47図　SK201測量図　（S=1：40）

（２）弥生時代

１）溝（ＳＤ）

ＳＤ201（第48図）

調査区の南部に位置し29号墳の周溝に切られる。規模は検出長4.31ｍ、深さ22㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土である。遺物は弥生土器の甕形土器、壺形土器、器台形土器が出土した。

出土遺物（第48図）

甕（148）口縁部を折り曲げ端部断面は「コ」字状、胴部内外面にハケ目調整を施す。

壺（149）平底の底部から胴部にかけての残存内外面は摩滅のため調整不明。

器台（150）基部のみの残存である円孔を８方向に穿つ。

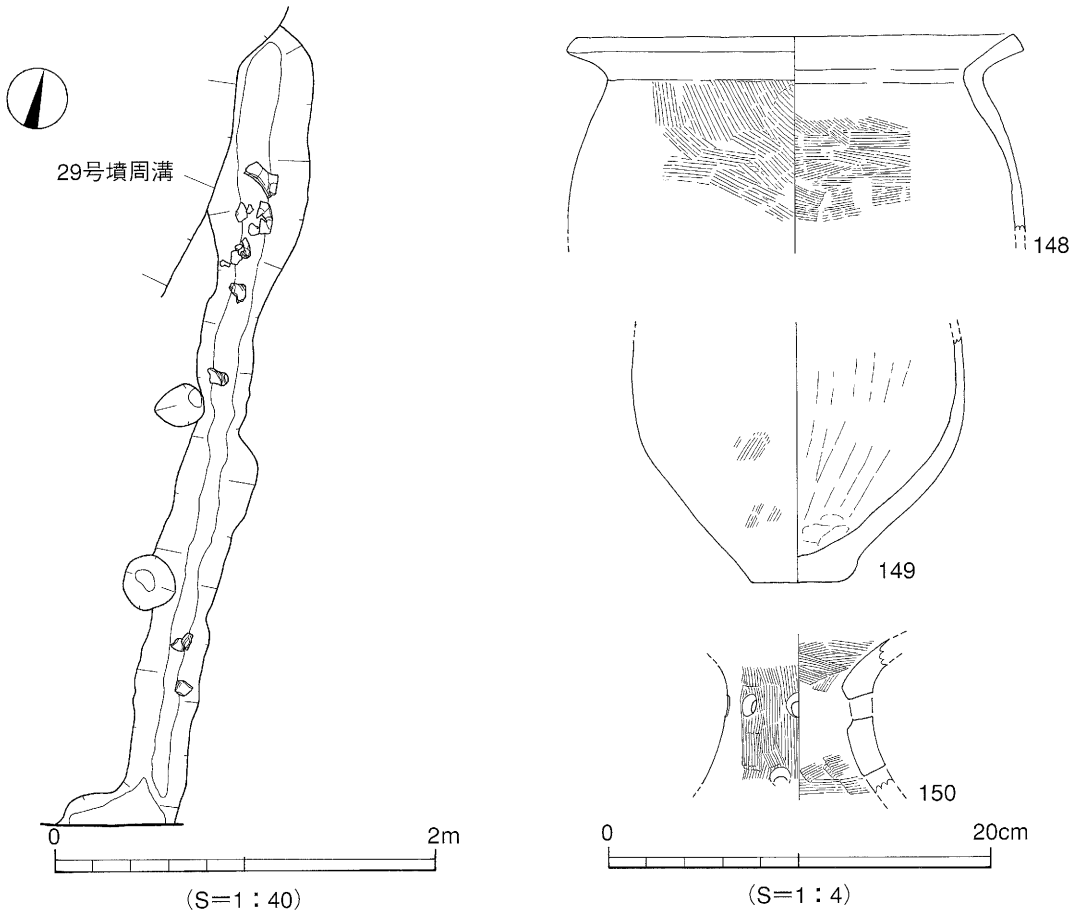
時期：出土した遺物の形態より弥生時代後期後半に時期比定する。

２）性格不明遺構（ＳＸ）

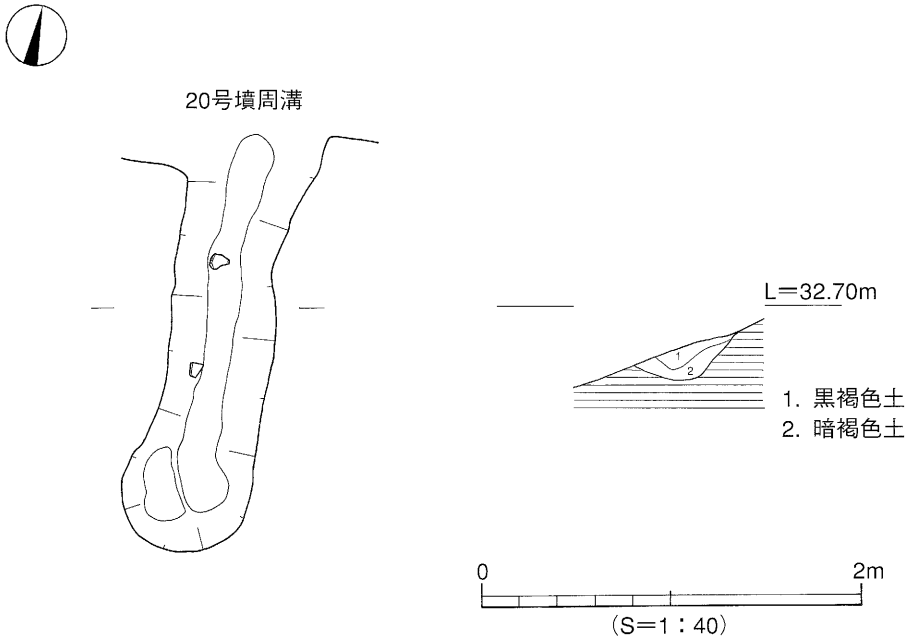
ＳＸ201（第49図）

調査区の南部に位置し20号墳の周溝に切られる。規模は検出長2.29ｍ、幅0.59ｍ、深さ19㎝を測る。断面形態はレンズ状である。埋土は黒褐色土と暗褐色土である。遺物は弥生土器の小片が出土した。

時期：出土した遺物と、20号墳の周溝に切られるため弥生時代に時期比定する。



第48図　SD201測量図・出土遺物実測図



第49図　SX201測量図

（３）中世

１）土坑（ＳＫ）

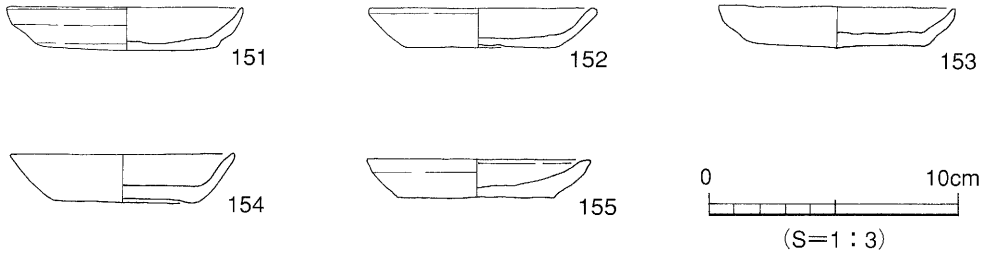
ＳＫ202（図版20）

27号墳の調査中に石室内北側中央に、径50㎝の柔らかい埋土があり、木の根によるものとして掘り下げを行った。しかし、石室床面の敷石がなく土師器の皿が重なり合って出土したため、木の根のカクランではなく遺構が存在していたものであり、出土した土師皿は土坑出土遺物として掲載する。遺構図は作成できず。

土師器（第50図）

皿（151～155）　151は平底の底部に回転糸切り痕が見られ、口縁部は尖り気味に丸く底部内面に凹凸がある。152は凹凸のある平底にやや厚く丸い口縁部をもち、底部は回転糸切り痕である。153の底部は回転糸切り痕、内面に凹凸が見られる。154はやや凹む平底に回転糸切り痕と板状工具痕が見られる。155は口縁外面にナデによるわずかな段が見られる。平底の底部には回転ヘラ切り痕がある。

時期：出土した遺物より中世に時期比定する。



第50図　SK202出土遺物実測図

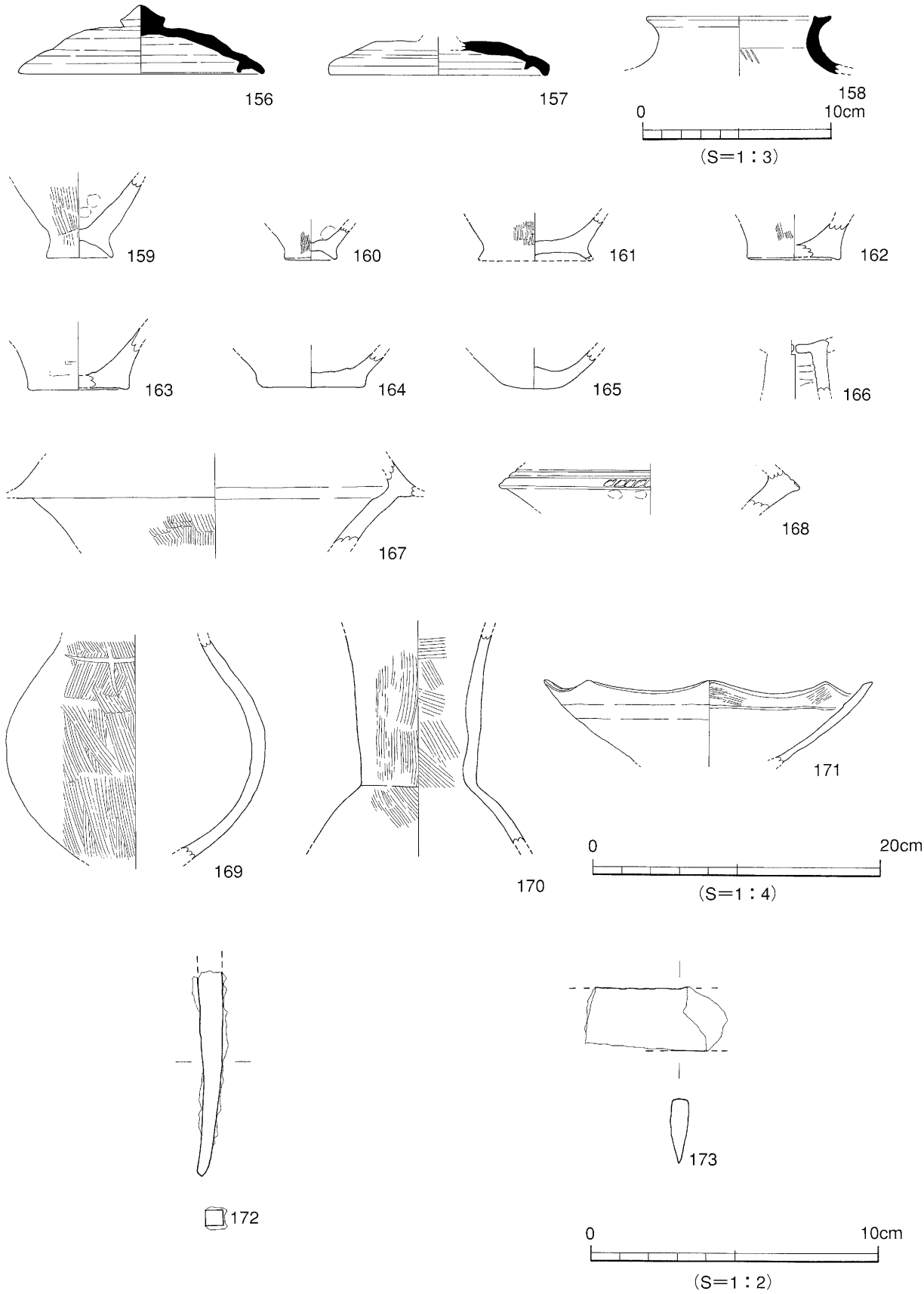
（４）その他出土地点不明出土遺物（第51図、図版28）

須恵器（156～158）156・157は坏蓋。156は口径12.6cmを測る。返りをもつ完形品である。天井部に摘み部をもち返りは口縁端部と同じ高さである。157は扁平な天井部と返りをもち、天井部の摘みは欠失している。返りは口縁端部よりは下がらない。158は壺の口縁部片。短く外反する口縁部の端面は水平で凹む。

弥生土器（159～170）甕159～163は底部片。159はくびれの上げ底で器壁は厚い。160はわずかにくびれる上げ底で器壁は薄い。161は上げ底。端部を欠失している外面にハケ目調整を施す。162はわずかに上げ底。外面にハケ目調整を施す。163は内外面にナデ調整を施す。164･165は壺底部。164は平底。165は丸底の底部片。166は高坏の脚部片。167・168は複合口縁壺の口縁部片で口端部を欠失している。168は拡張部に２条の凹線を巡らす。169は壺。口頸部と底部を欠失している胴部片である。外面にハケ、内面にナデ調整、外面頸部下にヘラによる「＋」の記号を施す。170は長頸壺の口頸部から胴部にかけての残存である。内外面にハケによる調整を施している。

縄文土器（171）鉢形土器。口縁内面下部に１条の凹線を巡らす。

鉄製品（172･173）172は鉄釘。173は鉄刀の小片か。



第51図　その他出土地点不明出土遺物実測図

４．小結

本調査からは、縄文時代晩期から中世の遺構と遺物を検出した。遺構では、土坑５基、溝１条、性格不明遺構２基、古墳７基を検出し、遺物では縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、鉄製品が出土した。

縄文時代：遺構は検出されなかったが、２区から縄文時代晩期の浅鉢が１点出土した。資料は１点と少ないものではあるが、縄文時代晩期に調査地の東山古墳群の丘陵部において、生活が行われていたこと示す資料である。

弥生時代：前期の土坑を５基と溝１条を検出した。このうち２基の土坑には注目するものがある。ＳＫ101は、1.24×0.72ｍを測る長方形土坑である。長軸と短軸の３方向に石組みを配し、出土遺物には鉄製品がある。ＳＫ102は、1.93×0.54ｍを測る長方形土坑である。長軸と短軸の２方向に石組みを配し、出土遺物に完形の鉢形土器がある。このように、長方形の土坑に石組みを配する土坑の検出例は、東山古墳群４地調査地からＳＫ４・ＳＫ５・ＳＫ13の３基の報告がある。ＳＫ４は1.62×0.77ｍを測る長方形の土坑に、長軸２方向に石組みを配し、出土遺物には弥生土器の小片がある。ＳＫ５は1.43×0.64ｍを測る長方形土坑に、長軸と短軸４方向に石組みを配し、出土遺物には弥生土器の小片がある。ＳＫ13は一部調査区外に続くが検出長1.30×0.75ｍを測る長方形土坑には、検出した

さて、土坑のうちＳＫ101からは鉄製釘１点、ＳＫ103からは鉄製釘２点が出土しているが、これらは出土状況が表土直下の埋土上部（上層）で、形式的に見ても古代以降の形状を呈し、近隣には中世遺構も存在しているために、土坑の築造期に伴うものではないと判断される。

としていたことを示す興味深い資料である。

古墳時代：古墳７基を検出した。７基のうち主体部構造は４基（20号･24号･25号･27号）が石室、２基（28号･29号）が土壙墓、１基（26号）は削平され周溝のみである。この中で24号墳の石室構造と29号墳出土品に興味深いものがある。

石室構造では、古墳時代後期の24号墳は標高44.80ｍに位置し、東山古墳群内では一番高い位置で検出された古墳である。石室構造は主軸方向が尾根筋に直行する形で岩盤を成形して墓壙を作り出す。松山平野でよく見られる石室構造は、奥壁は標高が高い方向に構築するが、24号墳では逆に羨道部が奥壁部より標高の高い位置に作られている。石室にはいるときには1.0ｍの段を降りて入室する状況になる。このように羨道部が標高の高い位置に作られ大きく段を降り入室する構造は、古墳時代後期の横穴石室の構造を研究する上で貴重な資料となりうるものである。

出土遺物では、29号墳出土遺物に鉄鉾と鉄刀がある。鉄鉾は東西方向に主軸をもつ長方形の土壙墓から出土した。出土状況は、切先を東に向け、刃部を床面に垂直に立てた状態で出土した。鉄刀は土壙墓の西側から出土した。鉄刀は先端部と柄の部分を欠失し「く」の字状に折り曲げている。

鉄鉾と折り曲げられた鉄刀出土は、松山平野では報告例のない大変貴重なものであり、松山平野における鉄製品の武具を研究していく上での基礎資料となるものである。

中世：１区ＳＸ101･102は岩盤を大きく削り取った様相を示す。今後、周辺遺跡から出土する石材に注目し出土資料の増加によりSX101・102の性格が明らかになると考える。

凡例

遺物観察表

（1）各記載について

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記。例）口→口縁部、頸→頸部、肩→肩部、胴→胴部、底→底部、坏→坏部、脚→脚部、天→天井部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記。

例）石→石英、長→長石、密→精製度　（　）中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～3）→「1～3㎜大の石英、長石を含む」

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表1　溝一覧

溝 (SD)	地　区	断面形	規　模　(m) 長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
201	2	レンズ状	4.22×0.42×0.22		黒褐色土	弥生土器		

表2　土坑一覧

土坑 (SK)	地　区	平面形	断面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
101	1	長方	皿状	1.04×0.72×0.10/0.17				縄文晩期～弥生前半	
102	1	長方	皿状	1.93×0.54/0.77×0.30		黒褐色土 明黄褐色土	鉢形土器	縄文晩期～弥生前半	
103	1	円	レンズ状	2.70×2.10×0.53		黄褐色土		縄文晩期～弥生前半	
104	1	長方	逆台形状	1.15×0.74×0.23				縄文晩期～弥生前期	SX101に切られる
105	1	楕円	皿状	1.64×0.73×0.13				縄文晩期～弥生前半	
201	2	長方	皿状	1.50×0.72×0.18			角礫	古墳時代後期以降	27号墳の周溝を切る

表3　性格不明遺構一覧

性格不明遺構 (SX)	地　区	平面形	断面形	規　模　(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積 (㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
101	1	不整	不明	8.8×7.0×2.7		褐色土	土師器 須恵器 弥生土器	中世	埴輪
102	1	円形状	不明	5.4×2.4×3.2		褐色土		中世	
201	2	楕円	レンズ	2.29×0.59×0.19		黒褐色土 暗褐色土	弥生土器	弥生時代	

表4　24号墳　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態　・　施　文	調　整 外　面	調　整 内　面	色調 (外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
1	坏蓋	口径(12.7) 残高　3.1	口端部は丸い。	回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
2	坏蓋	口径(14.8) 残高　3.4	口端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	密 ○		
3	坏身	口径　12.7 器高　4.0	短く伸びる受部。内傾する立ち上がりの端部は丸い。	㊀ナデ ㊁回転ヘラケズリ 2/3	回転ナデ	灰色	密 ○		23
4	坏身	口径　12.4 器高　4.0	扁平な底部に短い受部。内傾する立ち上がりの端部は尖り気味に丸い。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラケズリ 1/3	回転ナデ	灰白色	密 ○		23

24号墳　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
5	坏身	口径 12.9 器高 4.3	内傾する立ち上がりに短い受部の器壁は厚い。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	密 ○		23
6	高坏	口径(13.0) 残高 3.9	やや外傾する口縁部、端部は尖り気味に丸い。	㊦回転ナデ ㊨回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	
7	長頸壺	口径(15.3) 残高 12.3	大きく外反する口縁部の端部は肥厚され角い。中位に凹線1条と幅広の刺突文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色	長(1～3.5) ○		
8	壺	口径(23.0) 残高 8.0	短く外反する口縁部の端部は肥厚され丸い。	㊤ナデ ㊨タタキ	㊦ナデ ㊨同心円文	灰色	石･長･砂(少) ○		

表5　24号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
9	鏃	茎部欠損	鉄製	8.8	1.5	0.4	7.60	木質付着	23
10	鏃	茎部欠損	鉄製	7.5	2.5	0.3	10.84	棘状の箆被	23
11	鏃	茎部欠損	鉄製	8.0	3.1	0.5	13.01		23
12	鏃	茎部欠損	鉄製	2.7	1.0	0.2	1.36		23
13	鏃	茎部	鉄製	2.4	0.5	0.4	1.53	木質付着	23
14	鏃	鏃身部欠損	鉄製	2.6	0.5	0.3	1.36	根巻(木質付着)	23
15	鏃	鏃身部欠損	鉄製	3.6	0.7	0.4	3.96	繊維質	23
16	鏃	茎部先端	鉄製	2.0	0.4	0.2	0.78	植物質残る	23
17	鏃	茎部	鉄製	2.6	0.8	0.4	2.46		23
18	釘	頭部欠損	鉄製	4.4	0.6	0.5	3.79	木質付着	23
19	刀子	先端部欠損	鉄製	8.8	1.2	0.6	12.40	木質、鹿角が残る	23
20	刀子柄	柄	骨	4.1	1.3	0.3	0.88	鹿角柄	23

表6　24号墳　出土遺物観察表　装身具　(1)

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 孔径(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
21	小玉	完形	ガラス	0.21	0.35	0.12	0.03		
22	小玉	完形	ガラス	0.27	0.38	0.10	0.06		
23	小玉	ほぼ完形	ガラス	0.38	0.50	0.16	0.10		
24	小玉	完形	ガラス	0.20	0.40	0.18	0.04		
25	小玉	一部欠損	ガラス	0.25	0.42	0.12	0.05		

24号墳　出土遺物観察表　装身具　(2)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
26	小玉	完形	ガラス	0.21	0.35	0.10	0.03		
27	小玉	ほぼ完形	ガラス	0.30	0.40	0.10	0.07		
28	小玉	完形	ガラス	0.25	0.48	0.20	0.07		
29	小玉	完形	ガラス	0.30	0.50	0.18	0.10		
30	小玉	完形	ガラス	0.39	0.50	0.15	0.13		
31	小玉	完形	ガラス	0.30	0.40	0.12	0.06		
32	小玉	完形	ガラス	0.30	0.40	0.10	0.07		
33	小玉	完形	ガラス	0.20	0.40	0.20	0.04		
34	小玉	完形	ガラス	0.28	0.40	0.13	0.06		
35	小玉	完形	ガラス	0.28	0.39	0.10	0.05		
36	小玉	完形	ガラス	0.25	0.39	0.10	0.05		
37	小玉	完形	ガラス	0.28	0.42	0.10	0.07		
38	小玉	完形	ガラス	0.30	0.50	0.13	0.08		
39	小玉	完形	ガラス	0.24	0.41	0.20	0.05		
40	小玉	完形	ガラス	0.40	0.40	0.20	0.09		
41	丸玉	ほぼ完形	ガラス	0.58	0.75	0.28	0.35		
42	丸玉	完形	ガラス	0.57	0.78	0.15	0.50		
43	丸玉	完形	ガラス	0.54	0.69	0.20	0.37		
44	小玉	完形	ガラス	0.25	0.25	0.10	0.05		
45	小玉	完形	ガラス	0.20	0.35	0.10	0.03		
46	小玉	完形	ガラス	0.20	0.40	0.18	0.05		
47	小玉	完形	ガラス	0.28	0.40	0.13	0.06		
48	小玉	完形	ガラス	0.30	0.44	0.20	0.06		
49	小玉	完形	ガラス	0.25	0.42	0.10	0.07		
50	小玉	完形	ガラス	0.21	0.34	0.10	0.04		
51	小玉	完形	ガラス	0.20	0.36	0.10	0.03		
52	小玉	完形	ガラス	0.21	0.38	0.15	0.04		

24号墳　出土遺物観察表　装身具　(3)

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
53	臼玉	ほぼ完形	石	0.38	0.82	0.20	0.36		
54	管玉	完形	碧玉	1.50	0.60	0.19	1.12		
55	勾玉	約１／２	水晶	1.80	0.80	0.18			

表7　24号墳周溝内　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
56	坏身	口径(11.0) 残高 2.7	内傾する立ち上がりの端部は尖り気味に丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
57	坏身	口径(11.4) 残高 2.6	外上方に短く伸びる受部。内傾気味に短い立ち上がり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
58	坏身	口径(10.6) 残高 3.2	水平に伸びる受部。直立気味に短く伸びる立ち上がり。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
59	高坏	口径(12.0) 残高 3.6	直立気味に伸びる口縁部の端部は尖り気味である。外面に幅広の刺突文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
60	壺	口径(12.6) 残高 3.5	外傾する口縁部、端部は肥厚される。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色	密 ○		
61	壺	口径(7.7) 残高 4.9	口縁部は外傾して端部手前で内傾気味に直立する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		

表8　24号墳周溝内　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
62	鏃	茎部欠損	鉄製	8.1	2.7	0.8	20.28		23

表9　25号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
63	高坏	口径(13.7) 残高 8.2	坏部中位に1条の凹線、脚部に2条の凹線。	㋺回転ナデ ㋭㋻回転ヘラケズリ ㋼回転ナデ	㋹回転ナデ ㋿しぼり痕	暗青灰色	密 ○		24
64	長頸壺	残高 13.9	胴部中位に2条の凹線。	㋺-㋼回転ナデ ㋻回転ヘラケズリ	㋺回転ナデ ㋾ナデ	灰色	密 ○	釉付着	24

表10　25号墳　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)		
65	耳環	完形	銅製	2.6	2.9	0.6	16.13		24

表11　SK101　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	依存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
66	釘	先端部欠損	鉄製	6.3	0.7	0.6	12.22	木質付着	

表12　SK102　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
67	鉢	口径(11.1) 底径 10.4 器高 10.3	わずかに上げ底風の底部。直立する口縁部の端部は尖り気味。上部と下部に凸帯を施す。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	乳橙色	長(1) ◎		24

表13　SK103　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重量(g)	備考	図版
68	釘	頭部欠損	鉄製	6.50	0.50	0.60	6.49		24
69	釘	先端部欠損	鉄製	4.20	0.80	0.60	5.12		24

表14　SK101　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
70	坏	口径(12.6) 底径 8.0 器高 3.9	外上方に伸びる口縁部の端部は尖り気味に丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転糸切り	回転ナデ ㊡ナデ	淡黄色	密 ◎	黒斑	24
71	坏	口径 10.5 底径 5.9 器高 4.8	高台付の底部に外傾する口縁部。端部は丸い。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラ切り	回転ナデ	黄橙色	密 ◎		24
72	坏	底径(7.4) 残高 2.4	高台付。	㊐回転ナデ ㊡ナデ	回転ナデ	黄橙色	石・長(1~2) ○		
73	坏	底径 7.8 残高 2.5	直立に立ち上がる高台。	㊐ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色	密 ◎		
74	坏	底径(7.0) 残高 2.1	高台付。	㊐ヨコナデ ㊡磨滅のため不明	ヨコナデ	黄橙色	石・長(1~2) ○		
75	坏	底径(6.6) 残高 1.4	高台付。	㊐ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄色	密 ◎		
76	坏	底径(8.0) 残高 2.2	やや凹む平底。	㊐ヨコナデ ㊡ナデ	ナデ	橙色	石・長(1~2) ○		
77	坏	底径(6.6) 残高 1.9	高台付。	㊐ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色	石・長(1~5) ○		
78	坏	底径(7.4) 残高 1.4	平底。	ヨコナデ	ナデ	黄橙色	長(1) ○		
79	坏	底径(8.2) 残高 1.4	高台付。	ヨコナデ	ヨコナデ	黄橙色	長(1) ○	黒斑	
80	Ⅲ	底径(6.6) 残高 1.5	やや凹み気味の平底。	㊐ヨコナデ ㊡回転糸切り	ヨコナデ	淡黄色	密 ◎		
81	Ⅲ	底径(7.0) 残高 2.1	平底。	㊐ヨコナデ ㊡ナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	密 ◎		
82	Ⅲ	底径 7.0 残高 1.5	やや凹む平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色 暗褐色	密 ◎		
83	Ⅲ	口径 10.0 底径(6.8) 器高 1.9	やや凹む平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊡回転ヘラ切り	ヨコナデ ㊡ナデ	黄橙色	密 ◎		
84	Ⅲ	底径(6.8) 残高 1.5	平底。	㊐ヨコナデ ㊡ナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	長(1) ◎		

SX101　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
85	皿	底径(5.6) 残高 1.3	平底。ヘラ切り痕あり。	㊐磨滅のため不明 ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄橙色	長(1) ◎		
86	皿	底径 6.0 残高 1.2	底部内外面は凹凸状。糸切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転糸切り	ヨコナデ	淡黄橙色	長(1) ◎		
87	皿	底径(6.0) 残高 1.2	平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色	長(1) ◎		
88	皿	底径(6.6) 残高 1.8	やや凹む平底。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄橙色 黄橙色	長(1) ◎		
89	皿	底径 6.0 残高 1.7	凸凹のある平底。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄色	石(2) ◎		
90	皿	底径(6.0) 残高 2.0	平底。	㊐ヨコナデ→ナデ ㊞ナデ	㊐ヨコナデ ㊞ナデ	淡黄橙色	石・長(1) ○		
91	皿	底径(6.0) 残高 1.6	やや凹み気味な平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	褐橙色	石・長(1) ○		
92	皿	底径(6.5) 残高 1.1	平底。糸切り痕あり。	㊐磨滅のため不明 ㊞回転糸切り	磨滅のため不明	黄橙色	石・長(1) ◎		
93	皿	底径(6.8) 残高 2.3	平底。	㊐ヨコナデ ㊞ナデ	ヨコナデ	淡黄色	砂粒 ◎		
94	皿	底径(6.1) 残高 0.8	平底。糸切り痕あり。	㊐磨滅のため不明 ㊞回転糸切り	ナデ	褐橙色	長(1) ◎		
95	皿	底径(5.6) 残高 1.9	平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	淡黄橙色	石・長(1~5) ○		
96	皿	底径(6.8) 残高 1.9	やや凹む平底。糸切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転糸切り	ヨコナデ	褐橙色	石・長(1) ◎		
97	皿	底径(7.6) 残高 1.4	平底。ヘラ切り痕あり。	㊐ヨコナデ ㊞回転ヘラ切り	ヨコナデ	黄橙色	密 ◎		
98	埦	底径(5.8) 残高 1.8	断面三角形状の高台を張り付ける。	㊐ヨコナデ ㊞磨滅のため不明	ヨコナデ	黄橙色	長(1) ○		
99	三足付土釜	口径 22.2 器高 24.6	口縁下部に凸帯を1条施す。	ナデ (指頭痕)	㊐㊟ハケ(8本/cm) ㊞磨滅のため不明	茶褐色	石・長(1~3) ○	釉付着	24
100	壺	底径 9.0 残高 6.2	平底で扁平な胴部。	㊟回転ナデ ㊞ナデ	㊟回転ナデ ㊟回転ヘラケズリ	黄橙色	密 ◎		
101	壺	口径(30.0) 残高 8.0	短く内湾する口縁部。外面に2条の凹線を施す。	ヨコナデ	㊐ヨコナデ ㊟磨滅のため不明	淡黄褐色	石・長(1~3) ◎		
102	甕	口径 16.2 残高 4.1	短く外反する口縁部。	㊐ヨコナデ ㊟磨滅のため不明	㊐ヨコナデ ㊟磨滅のため不明	茶褐色	石・長(1~4) ○		
103	器台	口径(33.2) 残高 1.9	口縁端部に波状文を施す。	ナデ	ナデ	淡黄褐色	石・長(1~6) ○		
104	壺	底径(8.0) 残高 3.6	厚い底部。	磨滅のため不明	ハケ(8本/cm)	淡黄褐色	石・長(1~2) ○		
105	甕	底径(6.0) 残高 4.2	底部は凹凸があり不安定。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	茶褐色 暗褐色	石・長(1~4) ○		

SX101　出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
106	ジョッキ型 埦	底径(8.2) 残高 6.7	平底で内湾する胴部。	㊀回転ナデ ㊁ナデ	ヨコナデ	淡黄色	密 ◎	黒斑	
107	埴輪	底径 18.0 残高 22.1	外傾しながら直線的に伸びる体部にタガを1条施す。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	淡黄色	密 ○		25
108	埴輪	底径 20.0 残高 23.1	やや開く底部より直立する体部にタガを1条施す。	ハケ(5本/cm) ナデ(指頭痕)	ハケ(5本/cm) 指押え	黄橙色	長(1) ○		25
109	埴輪	底径(17.4) 残高 14.5	直立気味に伸びる体部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄橙色	長(1) ○		
110	埴輪	底径(16.3) 残高 12.9	内傾する立ち上がり。	磨滅のため不明	磨滅のため不明 (指頭痕)	淡黄橙色	長(1) ○		
111	高坏	残高 11.1	脚中位に2条の沈線。3方向に2段の透かし。	回転ナデ	㊁上ナデ ㊁下回転ナデ	灰色	密 ◎	釉付着	
112	高坏	残高 12.1	脚中位に2条の沈線。3方向に2段の透かし。	回転ナデ	㊁上ナデ、絞り痕 ㊁下回転ナデ	青灰色 灰褐色	密 ◎		
113	高坏	底径 10.2 残高 5.6	「ハ」の字状に短く伸びる脚部。端部は凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		
114	甕	口径 16.7 残高 14.8	外反する短い口縁部は端部で肥厚され丸い。	㊀回転ナデ ㊁平行タタキ	㊀回転ナデ ㊁ナデ	灰色	石・長(1~2) ◎	釉付着	25
115	甕	口径(16.8) 残高 8.4	短く外反する口縁部。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	
116	甕	残高 5.9	外上方に伸びる口縁部。口縁部内面に自然釉がかかる。	㊀回転ナデ ㊁平行タタキ	㊀回転ナデ ㊁タタキ	灰色	長(1~2) ○	釉付着	
117	壺	残高 10.2	2本1組の沈線3条。沈線間に波状文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	長(1~3) ◎		25
118	器台	残高 7.8	長方形と円形の透かしと波状文を2条施す。	回転ナデ	ナデ	灰色	密 ◎		25
119	甑	残高 6.6	やや胴の張った体部。	㊀上カキ目(8本/cm) ㊀下回転ヘラケズリ	㊀回転ナデ ㊁ナデ	青灰色	石・長(1~2) ○		
120	埦	口径 9.4 器高 6.0	丸底。口端部は尖り気味に丸い。把手が付く。	ヨコナデ	ヨコナデ (指頭痕)	橙色	密 ○		25
121	坏	口径(15.4) 底径(8.0) 器高 4.0	大きく外方向に開く口縁部。端部は尖り気味に丸い。高台付。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	黄橙色	密 ◎		25
122	埦	口径(12.6) 底径(7.0) 器高 5.0	内湾しながら、外上方に伸びる口縁部。端部は丸い。高台付。	㊀回転ナデ ㊁回転ヘラ切リ	回転ナデ	淡黄色	密 ◎		25

表15　20号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
123	坏蓋	口径 9.2 器高 3.4	返りは口縁端部より下方に伸びる。摘みが付く。	㊀回転ヘラケズリ ㊁回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		26
124	坏蓋	口径(21.4) 器高 4.0	扁平な天井部。口縁部は丸い。	㊀回転ヘラケズリ ㊁回転ナデ	㊀ナデ ㊁回転ナデ	灰色	密 ○		
125	鉢	口径 16.0 器高 10.4	口縁部を外上方に短く折り曲げる。端部は丸い。丸底。	磨滅のため不明 (指頭痕)	磨滅のため不明 (ナデ)	褐色	石・長(1~5) ○		26

表16　20号墳　出土遺物観察表　装身具

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
126	耳環	ほぼ完形	銅製	2.0	2.0	0.6	4.56		26

表17　27号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
127	坏身	口径 10.4 器高 3.8	内湾気味に立ち上がる口縁端部は尖り気味に丸い。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色	密 △		
128	台付坏	口径 15.1 底径 10.2 器高 4.7	断面四角形の高台が付く。 口縁部はやや尖り気味に丸い。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	灰白色	密 △		26
129	壺	口径(19.1) 残高 6.1	外湾する口縁部の端部は上下に肥厚させ段をなす。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	
130	台付長頸壺	基部径4.7 残高 14.8	口縁部中位に2条胴部中位に1条の凹線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		26
131	壺	底部(13.2) 残高 7.1	厚い平底の底部。外傾する胴部。	㊙回転ナデ ㊗ナデ	回転ナデ	灰色 灰白色	密 ○		
132	坏	口径 17.4 器高 5.3	外傾する口縁部。端部を内側に丸く肥厚させる。	ナデ (ケズリ)	ナデ	黄橙色 淡黄橙色	密 ○		26

表18　27号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
133	釘	先端部欠損	鉄製	5.5	0.7	0.5	5.46		26
134	釘	先端部欠損	鉄製	5.5	0.5	0.6	4.40	木質付着	26
135	釘	先端部欠損	鉄製	2.8	0.5	0.3	2.27	木質付着	26
136	釘	頭部及び先端部欠損	鉄製	1.2	0.5	0.2	0.55	木質付着	26

表19　27号墳羨道部　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
137	坏蓋	口径 10.5 器高 3.5	内傾する返り部は口縁端部より下方に伸びる。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ◎		26
138	坏身	口径 11.5 器高 4.5	底部に粘土紐の巻き上げ痕が顕著に残る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
139	坏蓋	口径(10.2) 器高 3.5	返りは口縁部より下方に伸びる。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		26
140	坏蓋	口径 11.1 器高 3.2	返りは口縁部より下方に伸びる。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	26
141	坏蓋	口径 10.2 器高 3.0	返りは口縁部より下方に伸びる。大きめの摘みが付く。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	26
142	坏蓋	口径(11.2) 器高 1.6	平坦な天井部。摘み部欠損。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	

表20　27号墳周溝内　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
143	坏蓋	口径 10.5 残高 2.5	短く内傾する返り部は接地しない。	㊇回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	
144	坏蓋	口径 16.8 器高 1.7	口縁端部はわずかに屈曲し接地する。摘み部上部は水平。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○	釉付着	26

表21　28号墳　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
145	壺	口径(12.9) 残高 2.9	口縁端部は肥厚され丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		

表22　29号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
146	鉄鉾	完形	鉄製	37.1	2.7	0.4	173.8		27
147	鉄刀	身部	鉄製	24.4	2.4	0.4	83.1		28

表23　SD201　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
148	甕	口径(22.8) 残高 10.5	口縁部は折り曲げ端部の断面は「コ」字状。	㊐ヨコナデ ㊁ハケ(5本/cm)	㊐ヨコナデ ㊁ハケ(2本/cm)	黄橙色 淡黄橙色	長(2~3) ○		
149	壺	底部 5.0 残高 12.9	平底。外傾しながら内湾して立ち上がる胴部。	磨滅 一部ハケ(7本/cm)	㊁ナデ上げ ㊀指頭痕	明褐色	長(2~3) ○		
150	器台	残高 8.1	2段の円孔を8方向に施す。	ハケ(7本/cm)	ハケ(7本/cm)	黄橙色	石・長(0.5~3.5)		

表24　SK202　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
151	皿	口径 9.0 底径 6.5 器高 1.7	平底。口縁端部は尖り気味に丸い。	㊐ヨコナデ ㊀回転糸切り痕	ヨコナデ	黄橙色	密 ○		
152	皿	口径 8.7 底径 5.8 器高 1.5	平底。口端部は丸い。	㊐ヨコナデ ㊀回転糸切り痕	ヨコナデ	淡黄橙色	密 ○		
153	皿	口径 9.3 底径 7.0 器高 1.6	平底。底部内外面に凹凸あり。	㊐ヨコナデ ㊀回転糸切り痕	ヨコナデ	黄橙色	密 ○		
154	皿	口径 8.7 底径 5.5 器高 2.0	やや凹む平底。口端部は丸い。	㊐磨滅のため不明 ㊀回転糸切り痕	㊐ヨコナデ ㊁ナデ	淡黄色 淡黄橙色	石・長(1~2) ○		
155	皿	口径 8.6 底径 6.0 器高 1.5	平底。口縁手前にナデによる段が見られる。端部は丸い。	㊐ヨコナデ ㊀回転ヘラ切り痕	ヨコナデ	淡灰黄色	密 ○		

表25　その他出土地点不明　出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
156	坏蓋	口径 12.6 器高 3.7	返りのつく杯蓋。返りは口縁部と同じ高さ。	㊇回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		

その他出土地点不明　出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
157	坏蓋	口径 11.0 残高 1.8	返りは短く内傾する。摘み部を欠損。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
158	壺	口径 9.6 残高 3.0	短く外反する口縁部。端部は水平で凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	密 ○		
159	甕	底径 4.5 残高 5.5	くびれの上げ底。	胴ハケ 底ナデ	ナデ (押圧痕)	明褐色	石・長(1~4) ○		
160	甕	底径 (3.6) 残高 2.3	わずかにくびれる上げ底。	胴ハケ 底ナデ	ナデ	明褐色 明褐灰色	石・長(1~3) ○		
161	甕	残高 2.8	上げ底。底部端部欠損。	ハケ ナデ	ナデ	明褐色 暗灰色	石・長(1~3) ○		
162	甕	底径 (6.4) 残高 2.6	わずかに上げ底。	胴ハケ(8~9本/cm) 底ナデ	ナデ	淡黄橙色 淡灰黄色	石・長(1~3) ○		
163	甕	底径 (7.0) 残高 4.3	わずかに上げ底。	ヨコナデ ナデ	ナデ	淡黄橙色 暗灰色	長(1~2) ○		
164	壺	底径 6.5 残高 2.4	平底。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	明褐色	石・長(1~4) ○		
165	壺	底径 (4.2) 残高 1.8	丸底。	ナデ	ナデ	明褐色 淡褐灰色	石・長(1~3) ○		
166	高坏	残高 3.5	柱部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	明黄橙色 黄褐色	石・長(1~4) ○		
167	壺	残高 5.9	複合口縁。	ヨコナデ ハケ(5本/cm)→ヨコナデ	ヨコナデ	明褐色	石・長(1~3)		
168	壺	残高 2.7	口縁拡張部に2条の凹線と刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄橙色	石・長(1~4) ○		
169	壺	残高 15.4	胴上部にヘラ記号『十』あり。	ハケ(7本/cm)	ヨコナデ	明褐色 褐灰色	石・長(1~4) ○	黒斑	28
170	長頸壺	基部径(8.0) 残高 14.7	直立気味に伸びる口縁部。	ハケ(6本/cm)	ハケ(4本/cm)→ナデ	明褐色	石・長(1~6) ○		28
171	浅鉢	口径 (22.8) 残高 5.8	口縁内面に凹線1条。	磨滅のため不明	ナデ	褐色 灰褐色	長(1) ○	縄文	28

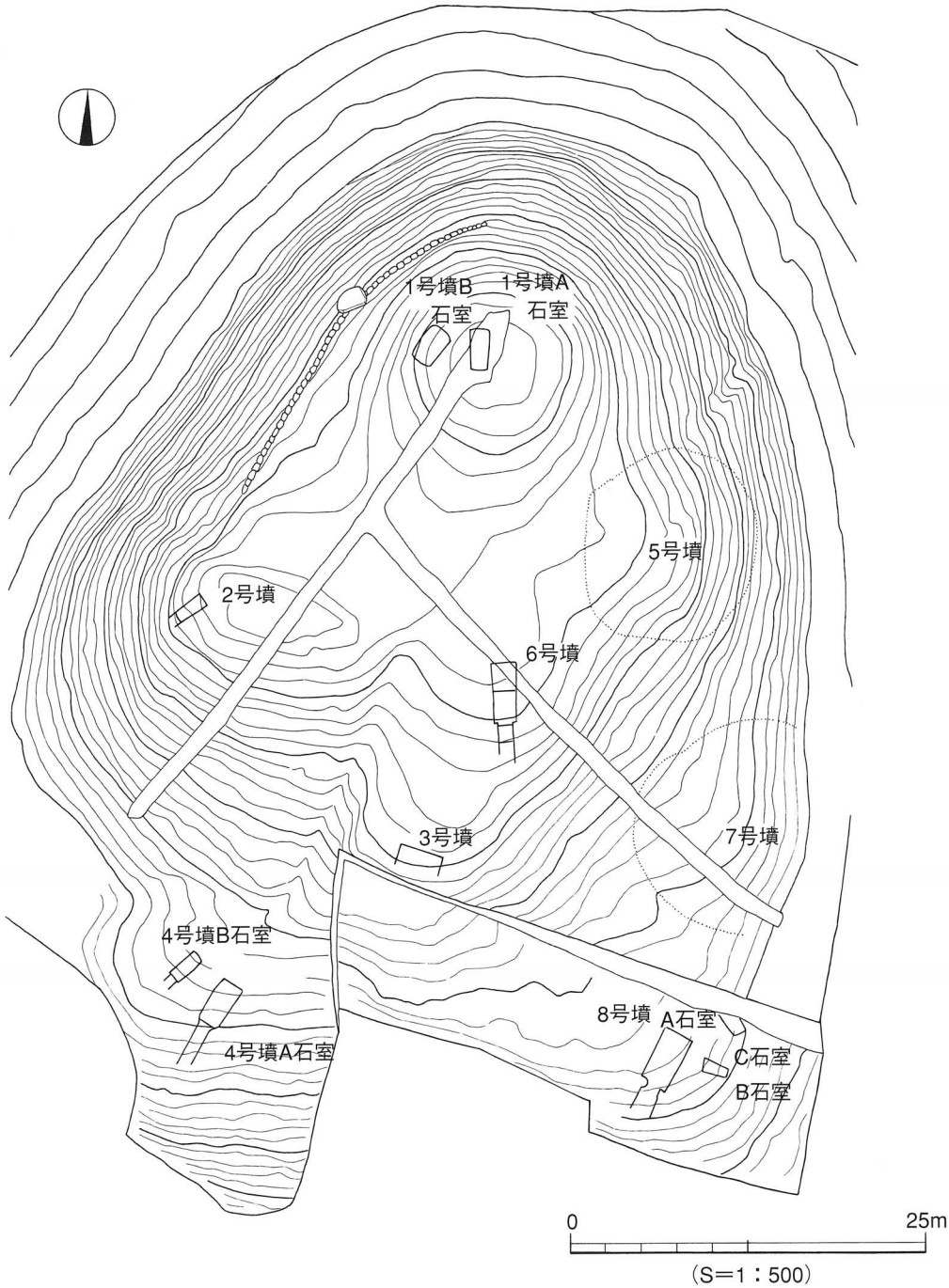
表26　その他出土地点不明　出土遺物観察表　鉄製品　(1)

番号	器種	残存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
172	釘	頭部欠損	鉄製	7.2	0.8	0.6	9.47		28
173	刀	身部	鉄製	4.7	2.3	0.6	11.95		28

第4章　東山鳶が森古墳群1次調査・2次調査、寄贈鉄製品

ここでは、昭和53年·54年に調査を行った東山鳶が森１次・２次調査地から出土した鉄製品の内、保存処理の関係から報告書に掲載されなかった34点と、平成元年に調査を行った東山古墳群３次調査の時に、地元住民の方から、東山古墳群内出土遺物として調査地に近接する倉庫に、保管されていた鉄製品26点を寄贈していただいた。

これら60点の鉄製品について整理を行い、遺物実測図と保存処理後の写真図版とＸ線写真を掲載する。



第52図　東山鳶が森古墳群1次・2次調査地遺構配置図

1.東山鳶が森古墳群1次・2次調査地出土品

1次・2次調査地からは、1号墳1点、3号墳7点、4号墳10点、6号墳4点、8号墳10点の計32点の鉄製品がある。

(1)1号墳

主体部はA・Bの2つの主体部をもつ。主体部は、壊滅状態であり基底石数個と床面に玉石を一部分残す。出土遺物は須恵器の無蓋高坏1点と短頸壺2点の報告がある。

1号墳からは鉄鏃1点である。1001は鉄鏃基部は欠失している。

(2)3号墳

墳丘規模は、最大径12mを測る円墳である。主体部はほとんど壊滅状態であり、基底石数個と床面に玉石を残す状態である。出土遺物は人骨、土師埦、鋤先、鉄鏃7点、刀子5点、鎌1(不明2)点の報告がある。

3号墳からは鉄鏃4点、鉄刀1点、鎌1点、鋤先1点の計7点である。1002～1005は鉄鏃、両端部を欠失している。断面は長方形である。1006は鉄刀の小片。1007は鉄鎌の小片。1008は鋤先、断面は「V」字状になる。

(3)4号墳

墳丘規模は、最大径13.7mを測る円墳である。主体部はA・Bの2つの石室をもつ1墳丘2石室の横穴式石室である。A石室は玄室長3.2m、奥壁幅1.8mを測り羨道部をもつ。出土遺物は須恵器、耳環、切子玉、丸玉、管玉、小玉、鉈、刀子、鉄鏃、鎌、鉄斧、馬具など多数ある。B石室は玄室長2.3m、床幅1.0mを測る。出土遺物は耳環、管玉、丸玉、小玉、刀子、鉄鏃など多数の報告がある。

4号墳からは、鉄鏃6点、刀子2点、鉄刀3点の計11点である。1009～1013は鉄鏃。1009は錆により2本が付着している。1010～1012は断面長方形である。1013は基部木質が付着している。

(4)6号墳

墳丘は、最大径19mが推定される円墳である。主体部は基底石を1段残し割石と川原石を敷いている。出土遺物は須恵器、銅鏡片、耳環、棗玉、切子玉、丸玉、小玉、刀子、鉄鏃、鎌、鋲がある。

6号墳からは、鉄鏃1点、鉄刀4点の計5点である。

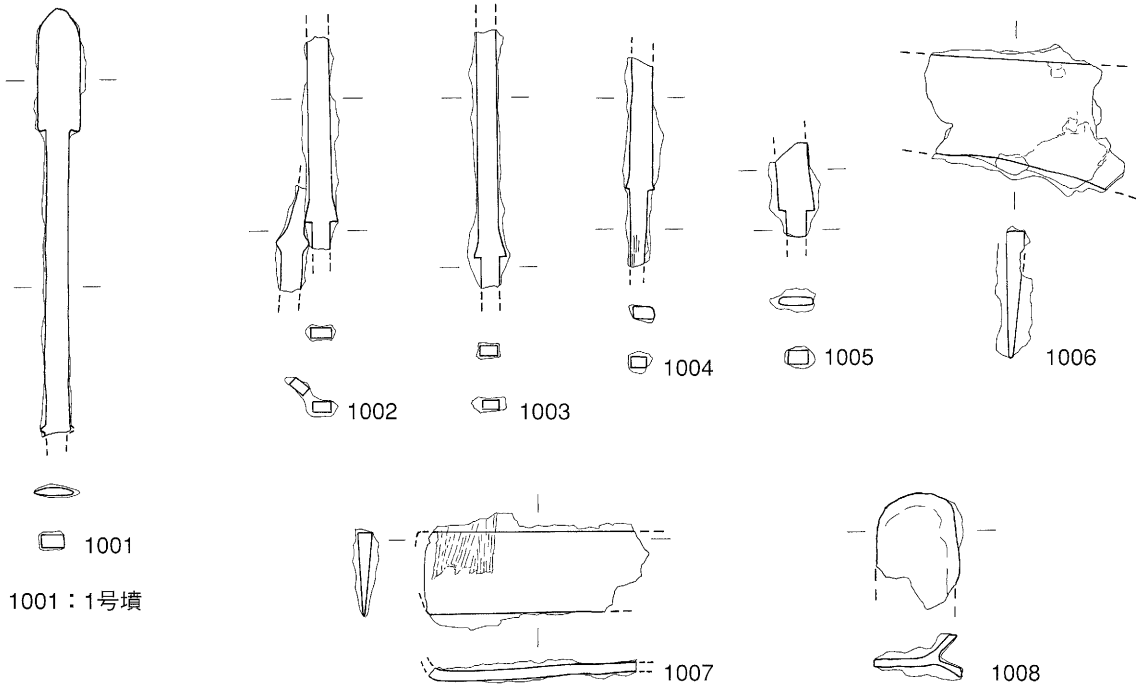
(5)8号墳

墳丘規模は、最大径14mを測る円墳である。主体部はA・B2つの石室をもつ。A石室は玄室長4.1m、玄室幅2.2mを測る。床面には角礫と玉石を敷く。出土遺物は須恵器、耳環、トンボ玉、棗玉、丸玉、鉈、刀子、直刀、鉄鏃、鉄斧、鎌など多数ある。B石室は、A石室に直行する形で検出した。規模は、全長2.8m、幅1.3mを測る。床面に玉石を敷く。出土遺物は須恵器、耳環、小玉、刀子、鉄片がある。

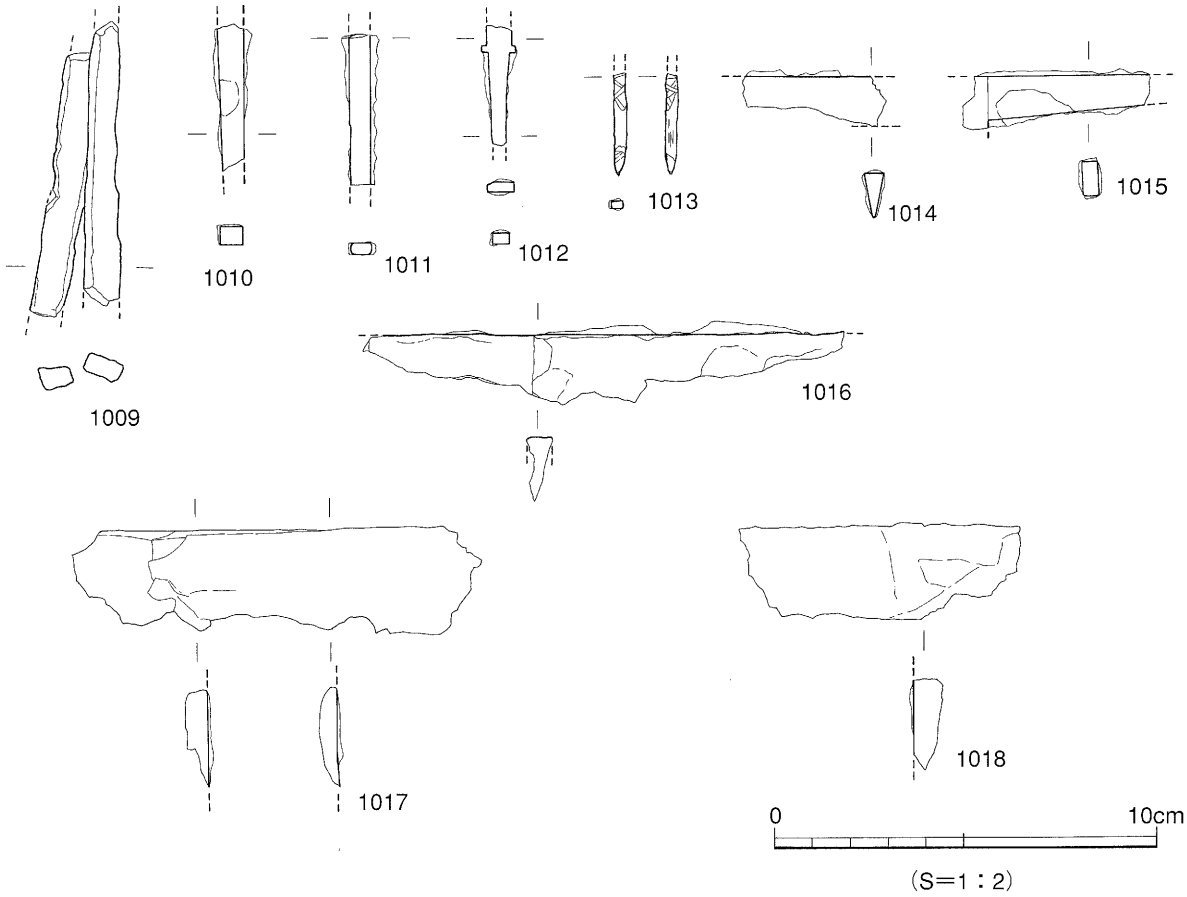
8号墳からは、鉄鏃4点、釘1点、刀子4点、鞘じり1点の計10点である。

(6)寄贈品(平成元年東山古墳群3次調査)

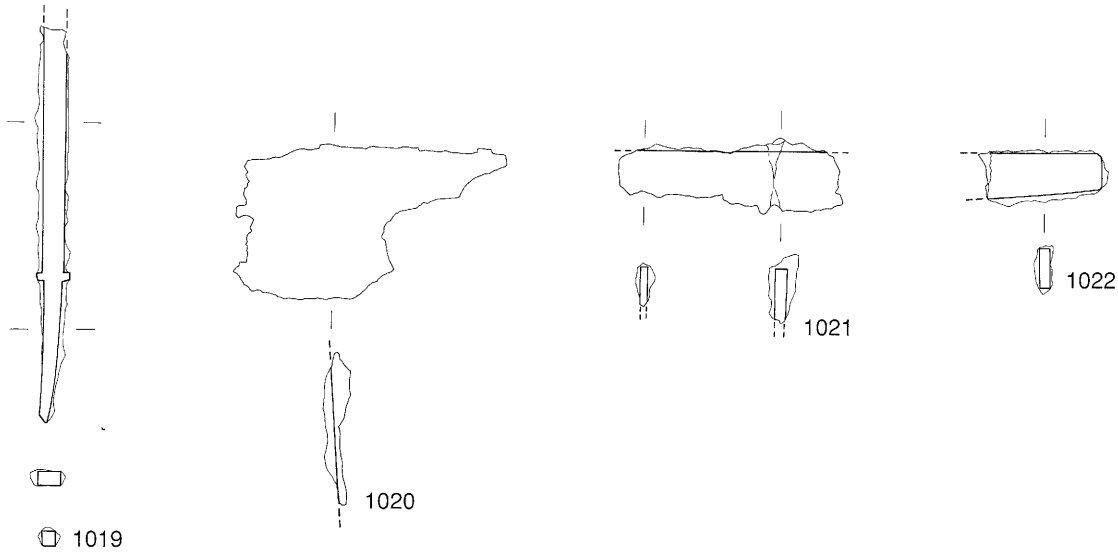
鉄鏃・刀子・鋲・馬具の23点である。



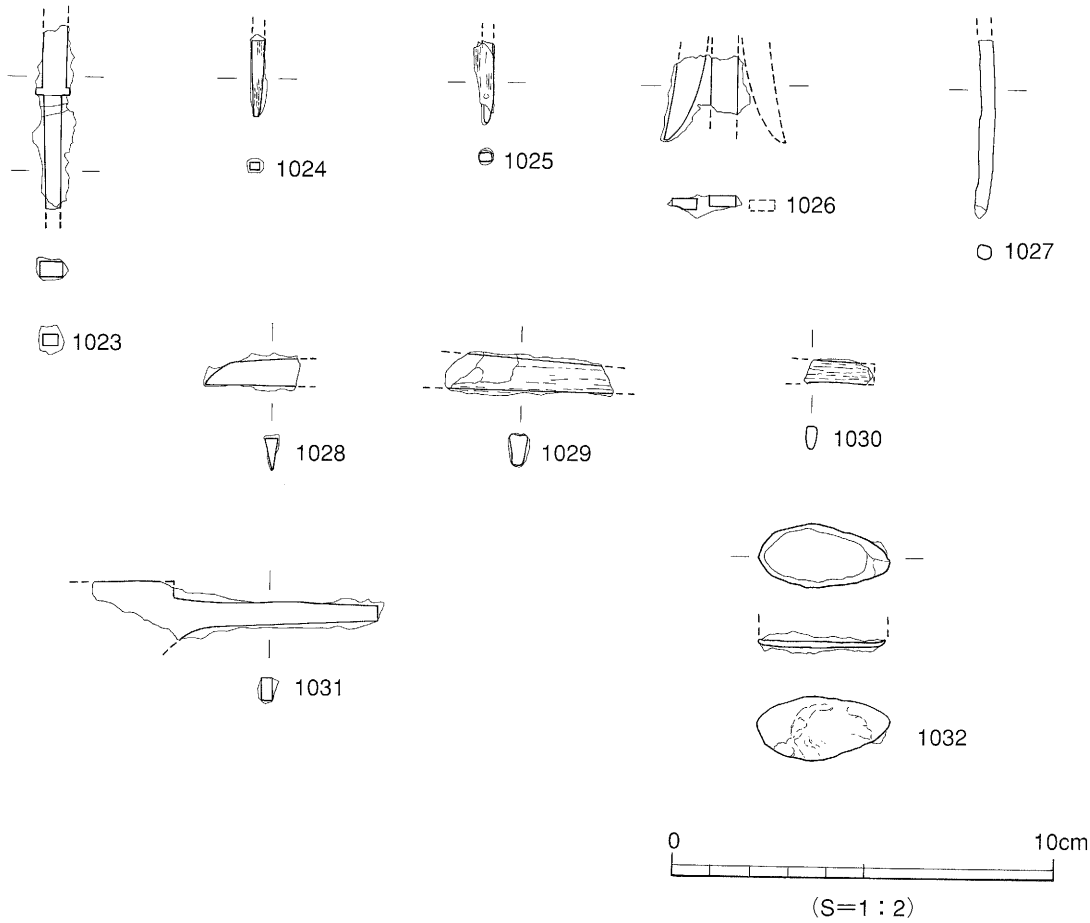
第53図　東山鳶が森古墳群1次調査地1号墳・3号墳出土鉄製品実測図



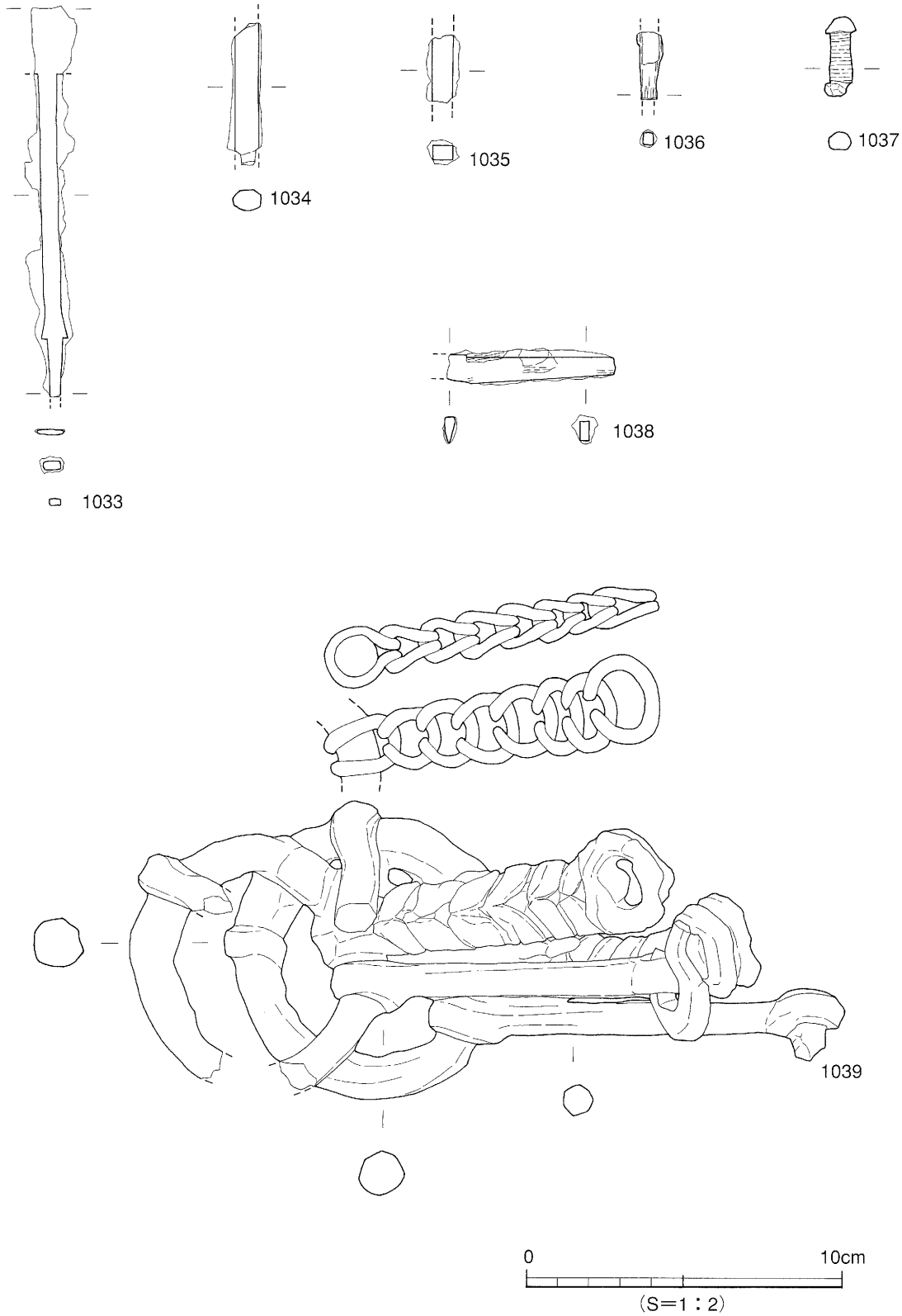
第54図　東山鳶が森古墳群1次調査地4号墳出土鉄製品実測図



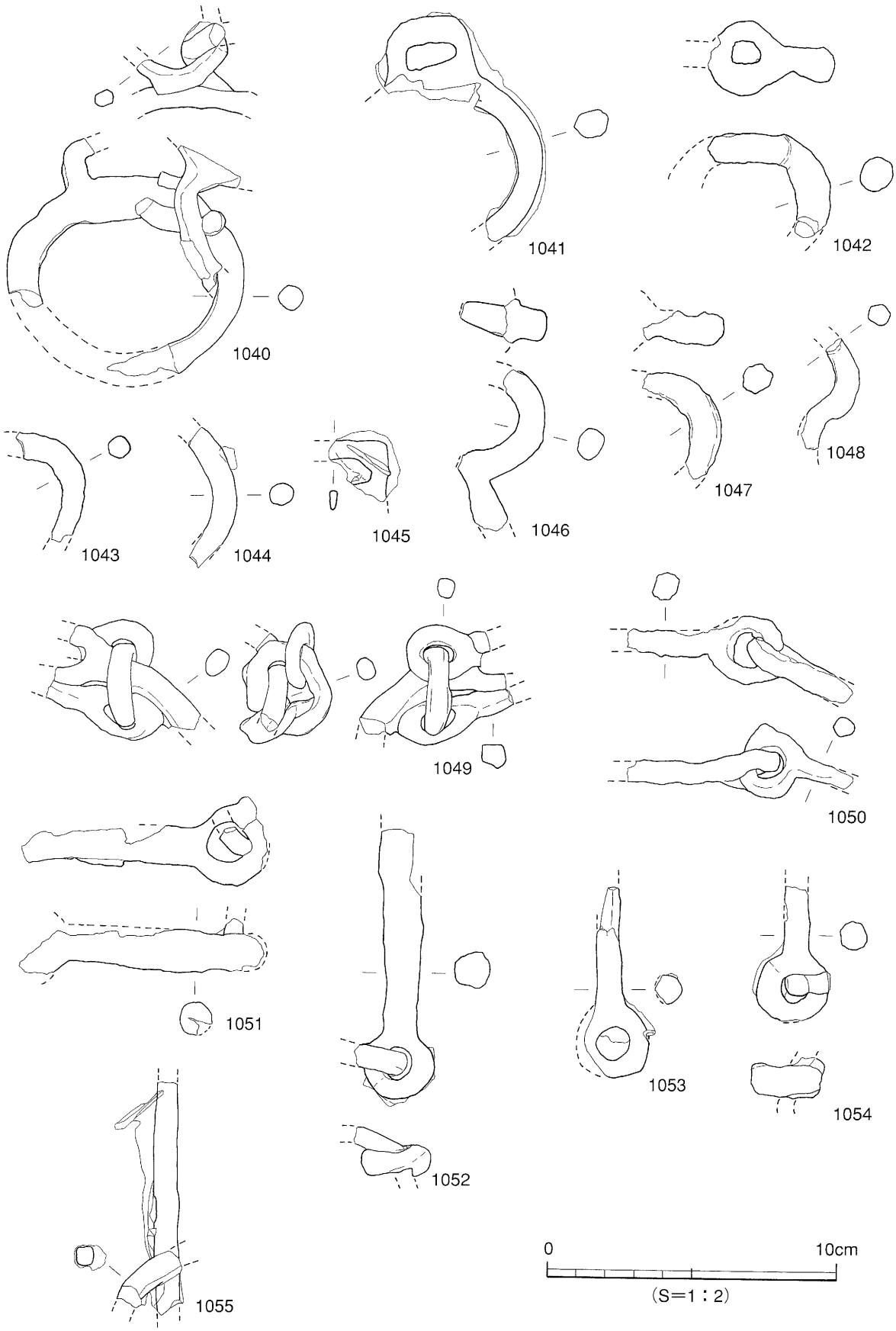
第55図　東山鳶が森古墳群1次調査地6号墳出土鉄製品実測図



第56図　東山鳶が森古墳群2次調査地8号墳出土鉄製品実測図



第57図　寄贈鉄製品実測図（1）



第58図　寄贈鉄製品実測図（2）

表27　東山鳶が森古墳群1次調査地1号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1001	鏃	茎部欠損	鉄製	11.3	1.1	0.4	10.21		29

表28　東山鳶が森古墳群1次調査地3号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1002	鏃	篦被部	鉄製	5.6	0.9	0.3	8.58	2個体	29
1003	鏃	篦被部	鉄製	6.9	0.9	0.3	6.39		29
1004	鏃	篦被部	鉄製	5.4	0.9	0.7	5.46	木質付着	29
1005	鏃	篦被部	鉄製	2.5	1.1	0.6	2.06		29
1006	刀		鉄製	4.7	4.0	1.0	25.84		29
1007	鎌		鉄製	5.9	2.2	0.3	13.25	木質付着	29
1008	鋤先		鉄製	3.1	2.3	0.7	7.95		29

表29　東山鳶が森古墳群1次調査地4号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1009	鏃		鉄製	7.6	1.5	0.6	17.59	2個体	29
1010	鏃		鉄製	3.9	0.7	0.5	3.81		29
1011	鏃	篦被部片	鉄製	4.0	0.9	0.4	3.30		29
1012	鏃		鉄製	3.1	0.9	0.6	2.40		29
1013	鏃	茎先端	鉄製	2.6	0.4	0.4	0.45	木質付着	29
1014	刀子		鉄製	3.7	1.4	0.4	8.39		29
1015	刀子	茎部	鉄製	4.9	1.4	0.4	4.05	木質付着	29
1016	刀		鉄製	12.5	2.2	1.3	36.06		29
1017	刀		鉄製	10.7	2.8	0.6	31.43		29
1018	刀		鉄製	7.4	2.4	0.9	25.74		29

表30　東山鳶が森古墳群1次調査地6号墳　出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1019	鏃	鏃身部欠損	鉄製	10.6	0.6	0.4	8.48	長茎	30
1020	刀		鉄製	7.1	4.1	0.8	21.59		30
1021	刀子		鉄製	5.6	1.9	0.7	8.77		30
1022	刀子	茎部	鉄製	3.3	1.4	0.4	3.61		30

表31　東山鳶が森古墳群2次調査地8号墳　出土遺物観察表　鉄製品　(1)

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1023	鏃		鉄製	4.9	0.7	0.4	5.20	根巻痕	30
1024	鏃	茎部	鉄製	1.2	0.3	0.2	0.61	木質付着	30
1025	鏃	茎部	鉄製	2.2	0.5	0.4	0.47	木質付着	30

表31　東山鳶が森古墳群2次調査地8号墳　出土遺物観察表　鉄製品　(2)

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1026	鏃	篦被部	鉄製	2.3	0.7	0.3	2.46		30
1027	釘		鉄製	4.8	0.4	0.4	1.62		30
1028	刀子		鉄製	2.5	1.1	0.4	1.23		30
1029	刀子	茎部	鉄製	4.4	1.2	0.5	5.07	木質付着	30
1030	刀子		鉄製	1.8	0.6	0.3	0.88	木質付着	30
1031	刀子		鉄製	7.4	1.5	0.3	7.43		30
1032	サヤジリ		鉄製	3.5	1.7	0.6	4.98		30

表32　寄贈品遺物観察表　鉄製品

番号	器種	残存状態	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
1033	鏃	先端欠損	鉄製	13.6	1.4	0.6	20.85	木質付着	32
1034	鏃		鉄製	4.6	0.8	0.8	6.57		32
1035	鏃		鉄製	2.2	0.7	0.5	3.01		32
1036	鏃	茎部	鉄製	2.2	0.8	0.4	1.69	木質付着	32
1037	鋲	完形	鉄製	2.6	1.0	0.6	2.33		32
1038	刀子		鉄製	5.2	1.1	0.8	6.95	木質付着	32
1039	轡		鉄製	22.6	9.6	1.6	553		31
1040	轡		鉄製	7.9	1.6	1.1	62.05		31
1041	轡	立聞付鏡板片	鉄製	7.9	4.3	1.0	20.81		31
1042	轡		鉄製	4.3	3.2	1.2	18.48		32
1043	轡		鉄製	3.8	1.8	0.8	6.48		32
1044	轡		鉄製	4.9	1.4	1.1	8.76		31
1045	轡		鉄製	2.3	2.1	0.7	6.73		31
1046	轡		鉄製	5.7	2.3	1.1	16.01		32
1047	轡		鉄製	3.8	1.2	1.0	11.71		32
1048	轡		鉄製	4.0	1.1	0.8	6.07		32
1049	轡		鉄製	4.3	4.9	0.9	40.28		32
1050	轡		鉄製	8.0	2.5	0.8	22.51		32
1051	轡		鉄製	8.4	3.1	1.1	30.13		32
1052	轡		鉄製	9.6	2.7	1.3	35.18		32
1053	轡		鉄製	6.5	2.5	0.9	16.88		32
1054	轡		鉄製	4.7	2.6	1.0	18.57		32
1055	轡		鉄製	8.1	2.2	0.9	25.14		32

第5章　考察　　愛媛県内出土の渡来系遺物
～出作・市場南組窯型須恵器の型式分類と分布～

1．はじめに

日本各地では、近年の発掘調査によって渡来系遺物、特に陶質土器や朝鮮系軟質土器などが数多く出土し、それによって日本列島と中国大陸や朝鮮半島との交流が盛んに行われていたことが徐々に明らかになりつつある。そのため、近年は渡来系遺物が特別展や研究会・シンポジウムなどのテーマとして取り上げられることが多く(註1)、その背景には大陸や半島内における発掘調査の進展や、それに伴ってお互いの地域間交流の研究の活発化が主な要因として挙げられる。

愛媛県内においても例外ではなく、こうした渡来系遺物はむしろ瀬戸内地方でも屈指の出土点数を誇っていることが最近の研究の結果で明らかとなっている。これまでに県内出土の陶質土器については定森秀夫氏(註2)・三吉秀充氏(註3)らによって、また非陶邑系須恵器については定森氏(註4)・梅木謙一氏(註5)・三吉氏(註6)らによって研究が行われている。

本稿では、愛媛県内出土の渡来系遺物、特に４～６世紀の朝鮮半島系の土器と土製品について整理を行い、若干の考察を行うものである。具体的には、伊予市市場に所在する市場南組(いちばみなみぐみ)1号窯跡（第59図29）から出土した須恵器に関連した須恵器を「市場南組1号窯跡関連資料」(略称「市場関連資料」)として取り上げ、比較検討する。そのほか陶質土器・朝鮮系軟質土器・算盤玉形紡錘車については章末の一覧表にて集成する。

なお「渡来系遺物」の範疇には、中国大陸や朝鮮半島で生産されて日本列島へ搬入された遺物のほかに、それらを模倣して、あるいは製作技術の伝播などの結果として列島内で製作されたものも含んでいる。

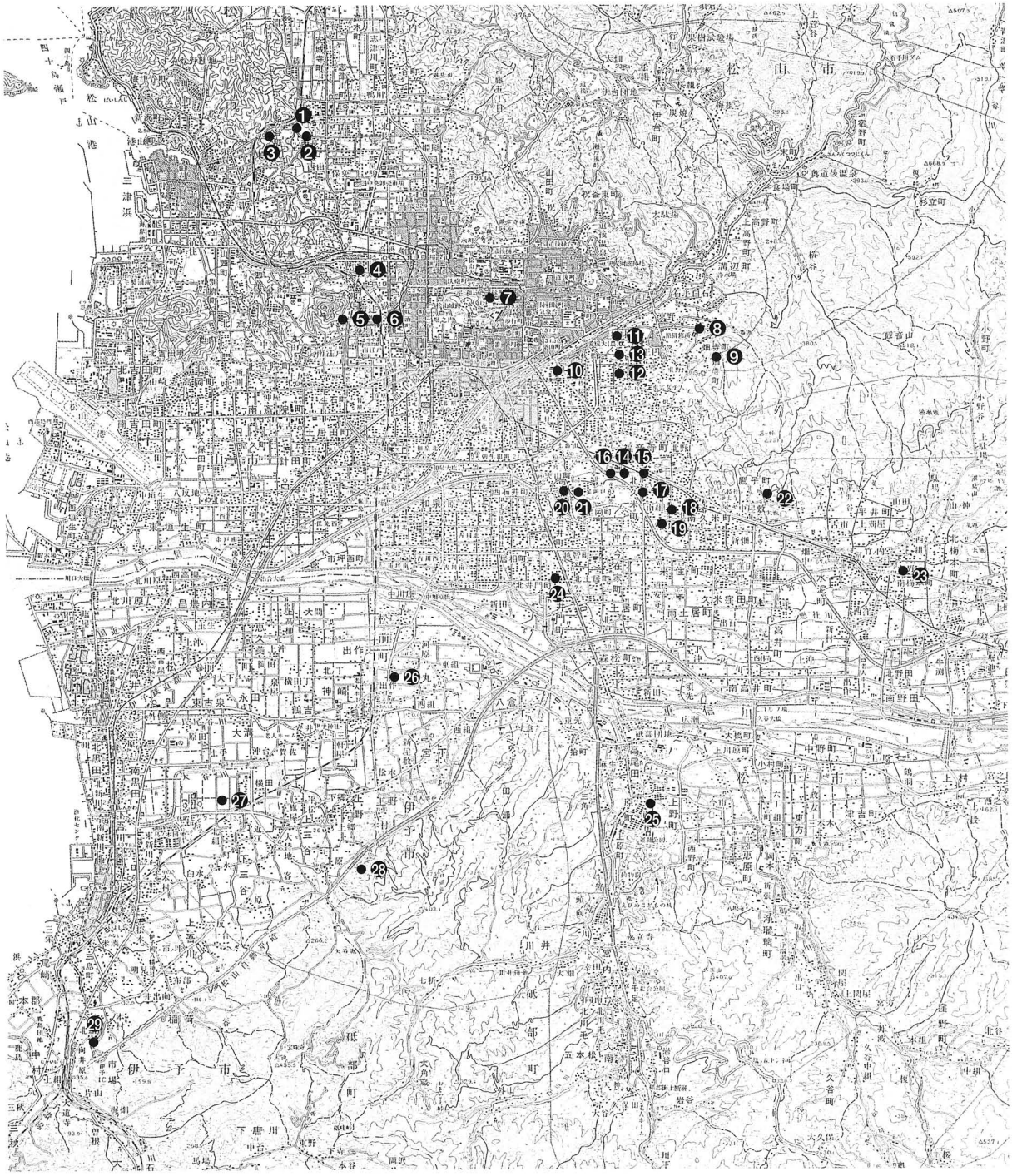
2．伊予市市場南組1号窯跡

まず、市場南組1号窯跡について下記に簡単に紹介する。

本窯跡は松山平野南西部の標高約63mの丘陵突端に位置し、伊予灘までの直線距離は北西方向へ約２㎞である。北西方向には森川によって形成された沖積平野が広がり、遠く北方向には松山平野全体を眼下に望むことができる。窯跡発見の経緯としては、1991年に土地所有者の向井孝光氏によって整地作業中に偶然発見され遺物が採集された。その後長井数秋氏によって窯本体の確認が行われ(註7)、さらにその東約50mの地点で同時期と推定される窯跡を確認したことから、それぞれ１号窯、２号窯と命名されている。なお、ここで採集された遺物は1号窯の灰原または物原から出土したものと考えられている。

本窯跡の本格的な発掘調査は行われていないが、１・２号窯跡の中間地点を1995年に四国縦貫自動車道建設工事に伴い財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行われた(註8)が、窯跡及び窯跡に伴うと考えられる遺構は検出されなかった。その際に表土及び盛土内から須恵器片を採集し、報告書中では器台受部１点が掲載されている。これは長井氏が報告された遺物と同形態、同時期のものと推定される。

以上のように、現在のところ市場南組窯跡関連資料としては、1号窯跡の灰原または物原出土の向井氏所蔵資料及び長井氏所蔵資料、前述の県埋文センターが発掘調査し、現在愛媛県教育委員会が



第59図　遺跡位置図　S＝1：100,000

①船ヶ谷遺跡2次調査地②船ヶ谷遺跡4次調査地 ③船ヶ谷向山古墳④美沢遺跡⑤松環古照遺跡
⑥辻町遺跡2次調査地⑦東雲神社遺跡⑧東野お茶屋台古墳群⑨畑寺竹ヶ谷古墳群⑩素鷲小学校構内遺跡
⑪樽味高木遺跡3次調査地⑫樽味四反地遺跡5次調査地⑬樽味四反地遺跡7次調査地⑭筋違F遺跡
⑮筋違H遺跡⑯筋違L遺跡⑰福音小学校構内遺跡⑱北久米浄蓮寺遺跡3次調査地⑲旗立C遺跡
⑳東山古墳群4次調査地㉑東山古墳群5次調査地㉒五郎兵衛谷古墳㉓小野周辺㉔北井門遺跡
㉕土壇原古墳群㉖出作遺跡㉗片山・太郎丸遺跡㉘猿ヶ谷2号墳封土内㉙市場南組1号窯跡

所蔵する資料がある。総じて器種としては、高坏・器台・壺・甑・甑または把手付鍋・甕・土錘がある。土錘以外はすべて破片である。

3．出作・市場南組窯型須恵器

筆者はかつて市場南組1号窯跡出土須恵器すべてが非陶邑系須恵器ではなく陶邑系須恵器も含んでいる点に注目し、同窯跡で生産された須恵器の諸特徴を器種ごとに抽出し、他の2遺跡出土資料を援用することで陶邑系須恵器との区別を明確にした(註9)。その2遺跡とは、伊予郡松前町出作遺跡(註10)と伊予市片山・太郎丸遺跡(註11)であるが、同窯跡出土資料が本格的な発掘調査により得られた資料ではないため、本来の器種構成から欠落していると考えられる器種について2遺跡出土資料で補完することとした。

その結果、3遺跡出土資料のなかの非陶邑系須恵器をさらにⅠ類(市場南組1号窯跡で生産されたと推定される須恵器)とⅡ類(未確認の同系統窯の生産品と推定される須恵器)に2分した。そして陶邑系須恵器はⅢ類と命名した。特にⅠ類は、これまでの研究史を踏まえ(註12)、「出作・市場南組窯型須恵器」(略称「出作・市場型須恵器」)と呼称することとした。

またこれらの非陶邑系須恵器の分布は、三吉氏らの研究により愛媛県内にとどまらず近畿・中国・九州地方にまで広がっていることが明らかとなっている。本稿では、筆者が未だ実見していない岡山県以西の資料については省き、以下に市場関連資料の各器種について特徴を記す。

4．各器種の特徴

(1)高坏(第60～62図)

高坏は、松山平野で31点、今治平野で3点、兵庫県で6点出土している。

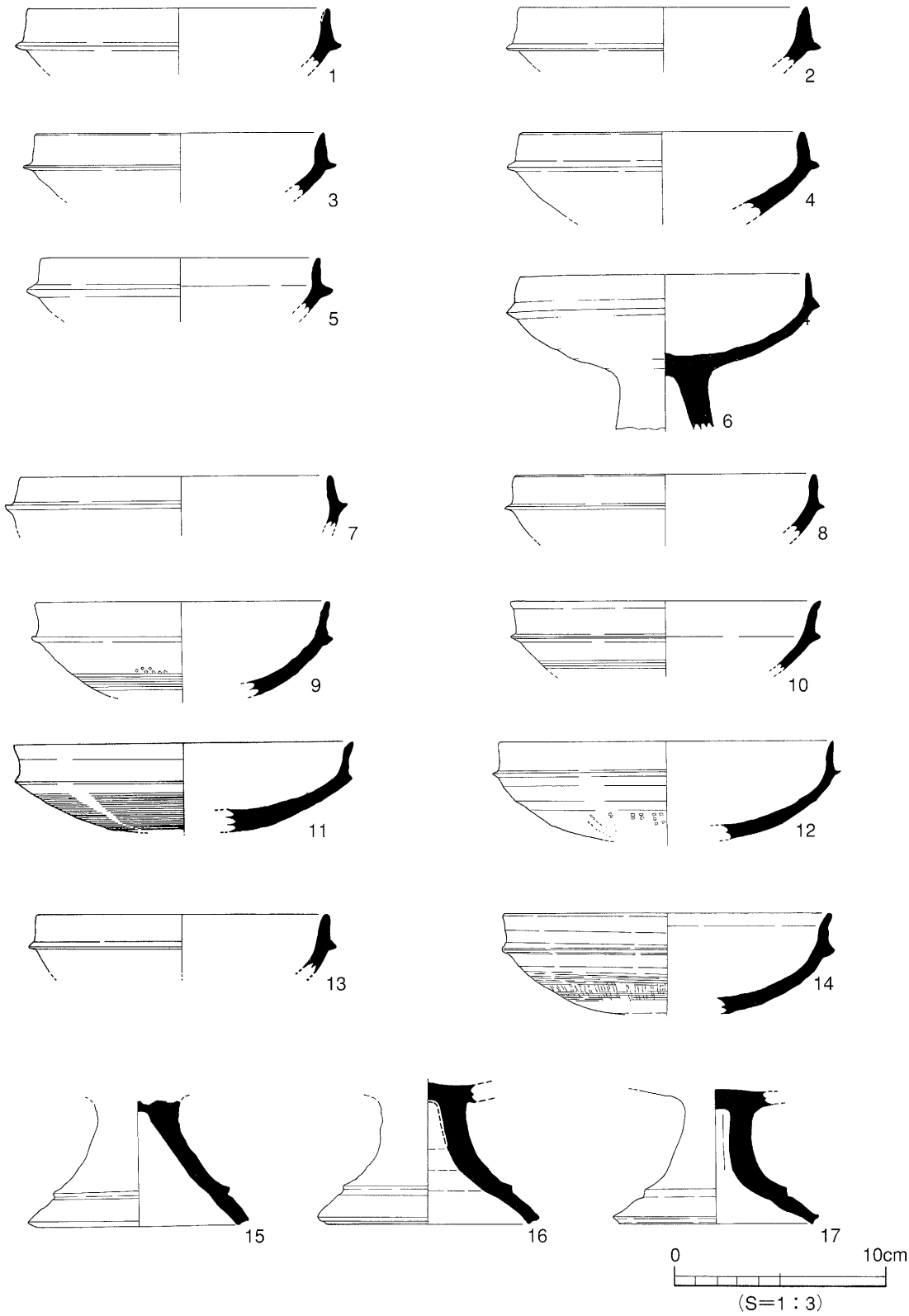
坏部は口縁端部の形態でA・B類の2種に分類できる。まず坏部Aは口縁端部が内傾または直立するもので、それに対し坏部Bは口縁端部が外傾する。端部は、前者は比較的丸くおさめるのに対して後者は尖り気味である。いずれも体部と口縁部が突帯によって界されており、一見有蓋に見えるが無蓋か有蓋かは不明である。調整は、いずれも坏部外面に格子タタキを施し、カキ目またはナデ消している。

坏部片は14点あり、そのうち坏部Aが8点（1～8）と坏部Bが6点（9～14）に分類できる。このうち船ヶ谷遺跡4次調査地出土の1～4は他の出土品に比べて厚手で、Ⅱ類の可能性がある。さらに9～12は坏部Bとしたが、口縁端部が直立したのち屈曲して外傾するもので、今後の出土例の増加によりさらに細分化できる可能性がある。

脚部は脚裾部の形態でa・b類の2種に分類できる。まず脚部aは基部からゆるやかに開き、裾部近くで大きく内湾し、端部は断面「コ」の字形におさめる。また基部から「ハ」の字形に直線的に開くものもある。一方、脚部bは基部からゆるやかに開き、端部を尖り気味に丸くおさめる。

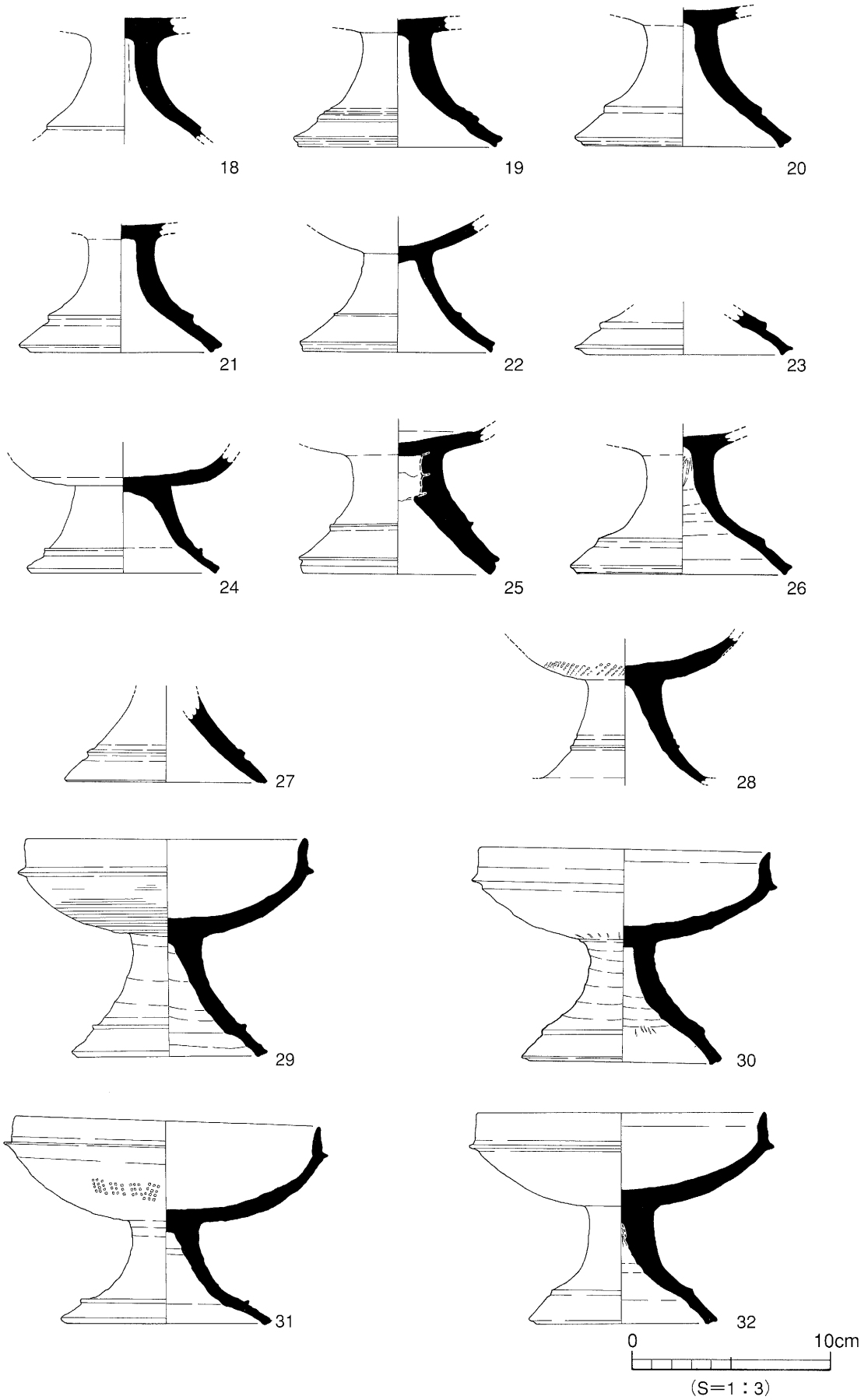
脚部片は14点あり、脚端部の形態が不明な2点（18・28）を除き、脚部aが11点（15～17・19～26）、脚部bが1点（27）ある。坏部と同様に船ヶ谷遺跡4次調査地出土の2点（24・25）は、他の出土品に比べて基部が太く異質な印象を受けるので、Ⅱ類の可能性がある。

高坏の完形品は12点（29～40）あり、Aa類が8点（29～36）、Ba類が3点（37～39）、Bb類が1点（40）ある。このうちBa類の2点（38・39）は脚端部の付近に一条の突帯を巡らせて端部



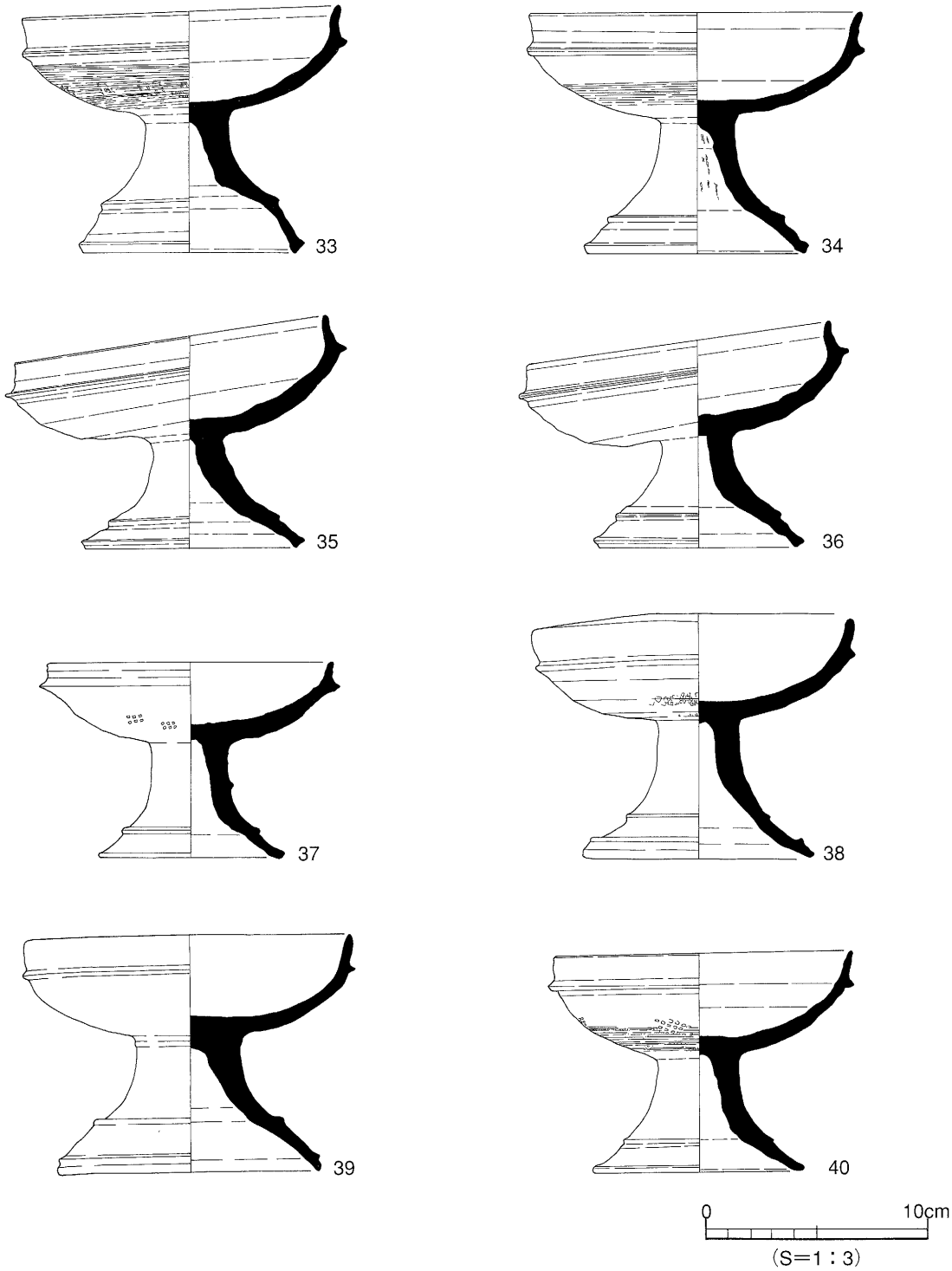
1～4　船ケ谷遺跡4次調査地　5　東山古墳群5次調査地　6　五郎兵衛谷古墳
7　土壇原古墳群Ⅴ遺跡7号墳　8　土壇原古墳群Ⅴ遺跡8号墳
9　出作遺跡　10・15・16　片山・太郎丸遺跡　11　辻町遺跡2次調査地
12　土壇原古墳群16号墳　13　高橋湯ノ窪遺跡3次調査地　14　西岡本遺跡3次調査地
17　松環古照遺跡

第60図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（1）　高坏（1）



18・27　松環古照遺跡　19　土壇原古墳群11号墳　20・21　土壇原古墳群11号墳
22　土壇原古墳群1号シスト　23　土壇原古墳群Ⅴ遺跡7号墳　24・25　船ケ谷遺跡4次調査地
26　高橋湯ノ窪遺跡3次調査地　28　北井門遺跡　29～31　出作遺跡　32　東山古墳群9号墳

第61図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（2）　高坏（2）



33～36・40　西岡本遺跡3次調査地　37　出作遺跡　38　伊予市図書館蔵
39　高橋湯ノ窪遺跡3次調査地

第62図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（3）　高坏（3）

は丸くおさめており、断面「コ」の字状の脚部分類ａとは若干異なる様相を見せており、今後の細分化の可能性を残しておきたい。

(2)器台(第63～67図)

器台は大型品（１類）が松山平野で8点、西条平野で２点、岡山県で３点、中型品（２類）が松山平野で１点、小型品（３類）が今治平野で１点出土している。

器台は、すべて高坏形器台と推定され、大型品（１類）と中型品（２類）・小型品（３類）がある。まず１類は口縁端部の形態でA・B類の2種に分類できる。坏部片は５点（41～45）あり、そのうち坏部Ａが４点（41～44）と坏部Ｂが１点（45）ある。また脚部片は４点（46～49）あり、基部から緩やかに開き脚端部付近で大きく屈曲して開く脚部ａ（46～48）と、基部から端部に至るまで直線的に「ハ」の字状に開く脚部ｂ（49）に２分類できる。文様帯は基部から端部にかけて櫛描き波状文→二条突帯→櫛描き波状文→二条突帯→櫛描き波状文→二条突帯→無文帯→一条突帯、のパターンで構成され、端部はやや尖り気味か、丸くおさめる。波状文はほとんどの場合一区画に一条であるが、二条の場合もある（49）。透かしは長方形透かしを交互に配置する。1類の完形品は４点（50～53）あり、Ａａ類が２点（50・51）、Ａｂ類が２点（52・53）ある。

次に２類は松山平野に完形品が１点ある（54）。坏部は底部からやや湾曲気味に立ち上がり、端部を折り曲げ尖らせて開くａ類となる。坏部外面には格子タタキ痕がみられる。脚部は基部から直線的に伸びたのち裾部近くで大きく外反し端部は丸くおさめる。1類と異なり、透かしを有せず坏部と脚部の接合部に断面三角形の突帯を巡らしているのが特徴である。

３類は今治平野に完形品が１点（55）のみで、坏部はゆるやかな椀状をなし、口縁端部を外方に折り曲げ尖らせて開くＡ類となる。坏部外面には格子タタキ痕がみられる。脚部は基部から外反気味に開き、脚端部近くで大きく外反し端部は丸くおさめるａ類となる。坏部と脚部の境に断面三角形の突帯を有しない点と、方形透かしを有する点で２類とは異なる。

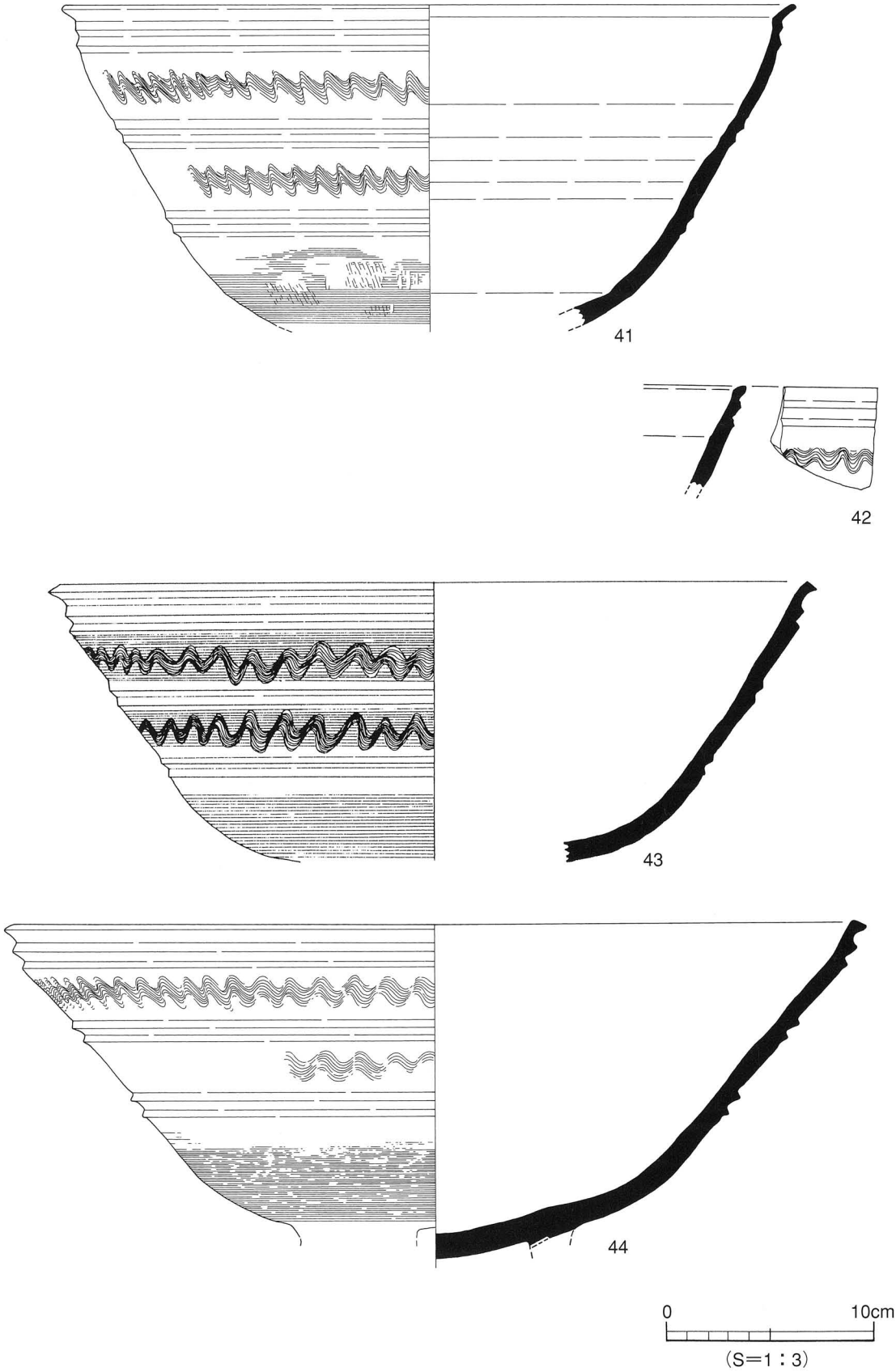
(3)壺(第68～79図)

松山平野で50点（56～78、80～106）、大阪府で２点（79、大阪市瓜破遺跡出土資料）ある。大阪市瓜破遺跡出土資料は、北井門遺跡出土資料(60)と類似しているが、未報告資料のため図示していない。

全体形状や口縁端部の形態から５分類できるため、Ａ～Ｅを付して分類を行った。壺Ａは、松山平野に口縁部及び全体形状がわかる資料に7点（56～62）がある。56は頸部から直立気味に立ち上がり、外面に取り付く突帯付近で外反し、端部は尖り気味に丸くおさめる。頸部と肩部の境には、突帯が巡る。57・58はほぼ同形態で体部は球形に近い形態をなし、底部は丸底である。体部外面には格子タタキの痕跡を残し、内面は同心円の当て具痕を丁寧にナデ消す。62は頸部に波状文を一条施すものである。61は口縁端部が外反せず直立気味に短くおさめるものである。

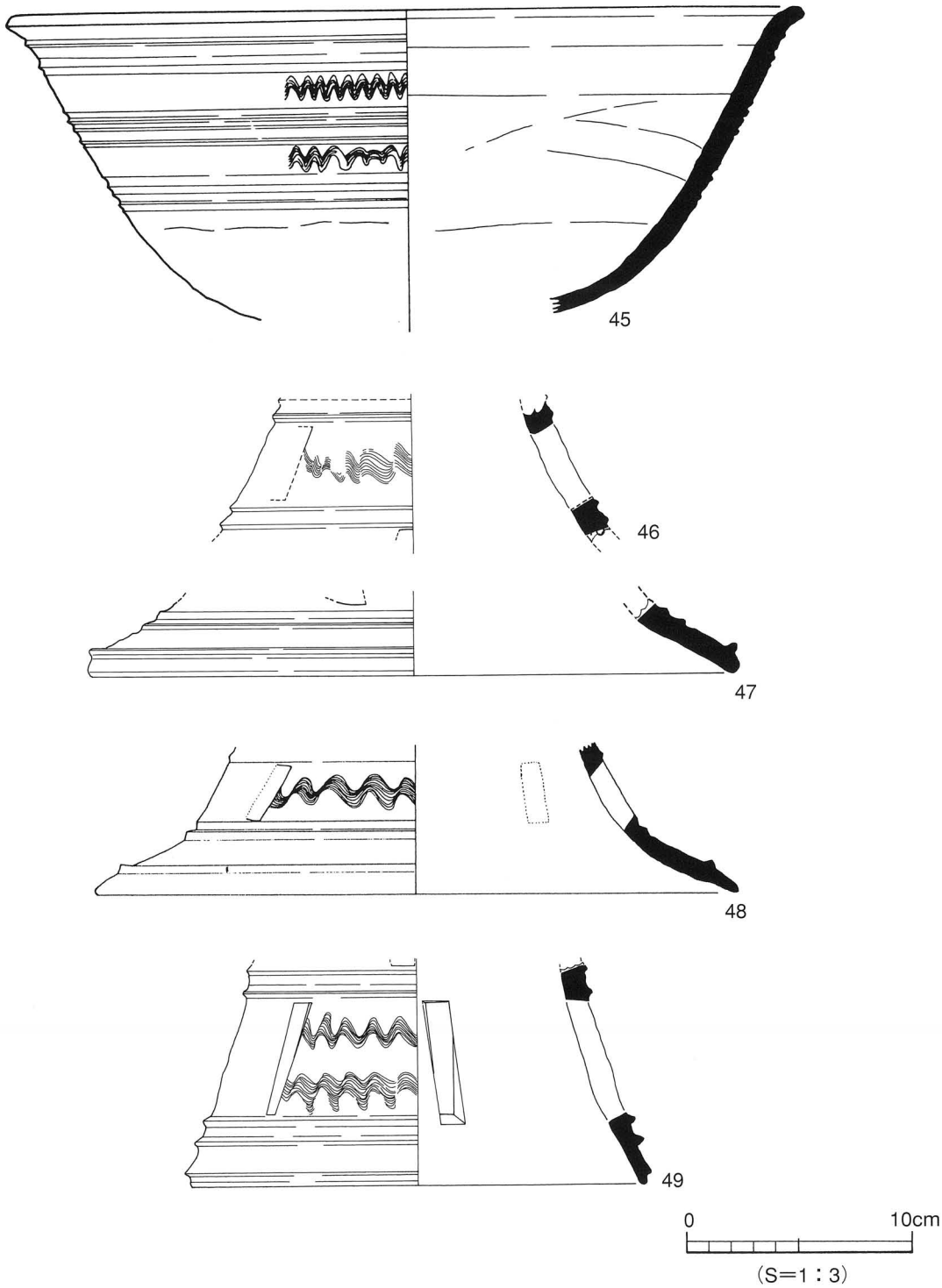
壺Ｂは（63～76）がある。口縁部は外反気味に立ち上がり、外面に取り付く突帯付近でやや内湾し、端部は断面「コ」の字形におさめる。明確な突帯ではないが、頸部と肩部の境には弱い段が巡る。

壺Ｃは松山平野に口縁部及び全体形状がわかる資料に12点(77・78・80～89)があるほか、大阪府八尾市の八尾南遺跡資料1点（79）がある。全体形状はやや肩の張る扁球形を呈し、底部は平底状で、



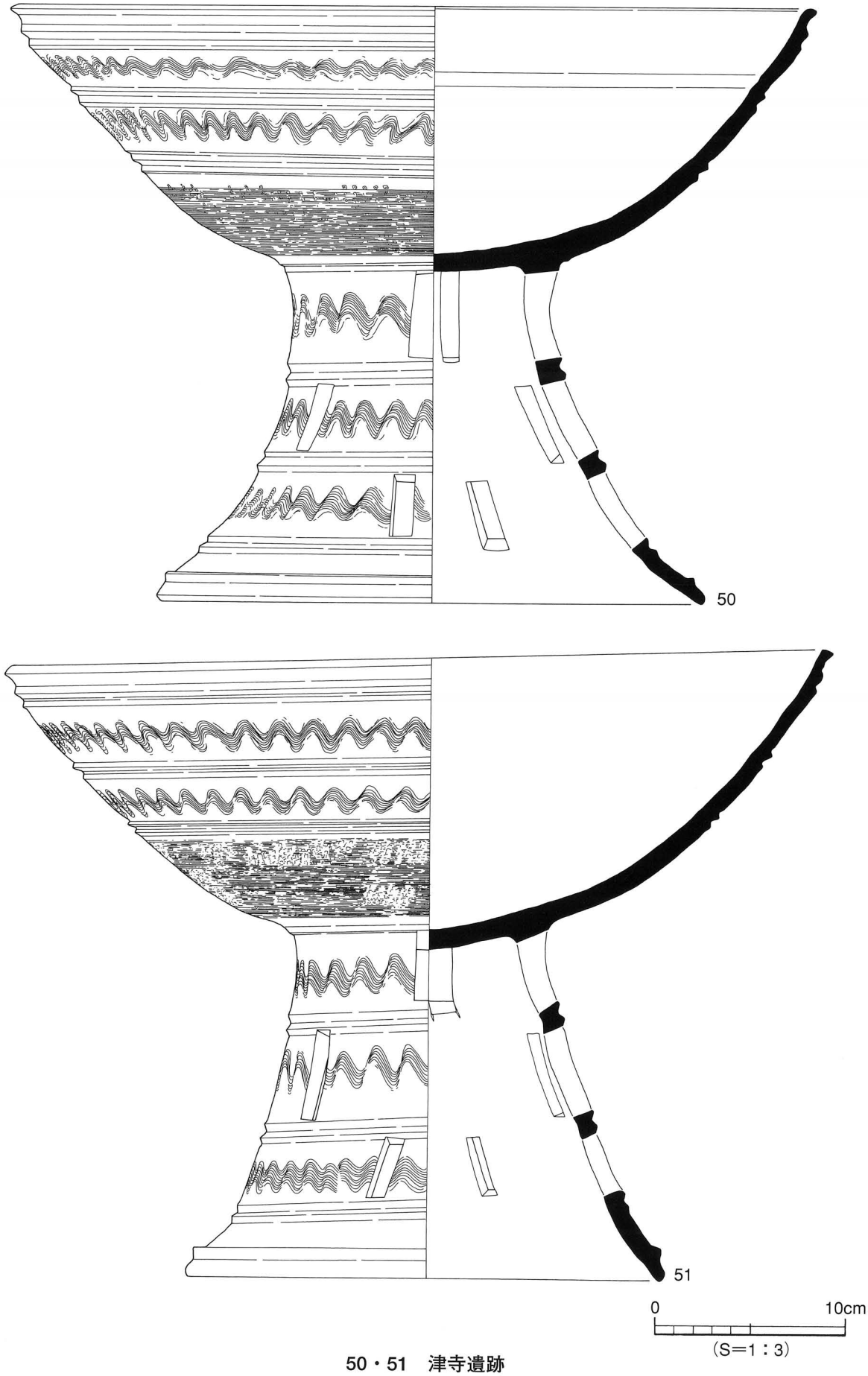
41　土壇原古墳群16号墳　42　船ケ谷遺跡2次調査地
43　祭ケ岡古墳　　44　津寺遺跡

第63図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（4）　器台（1）



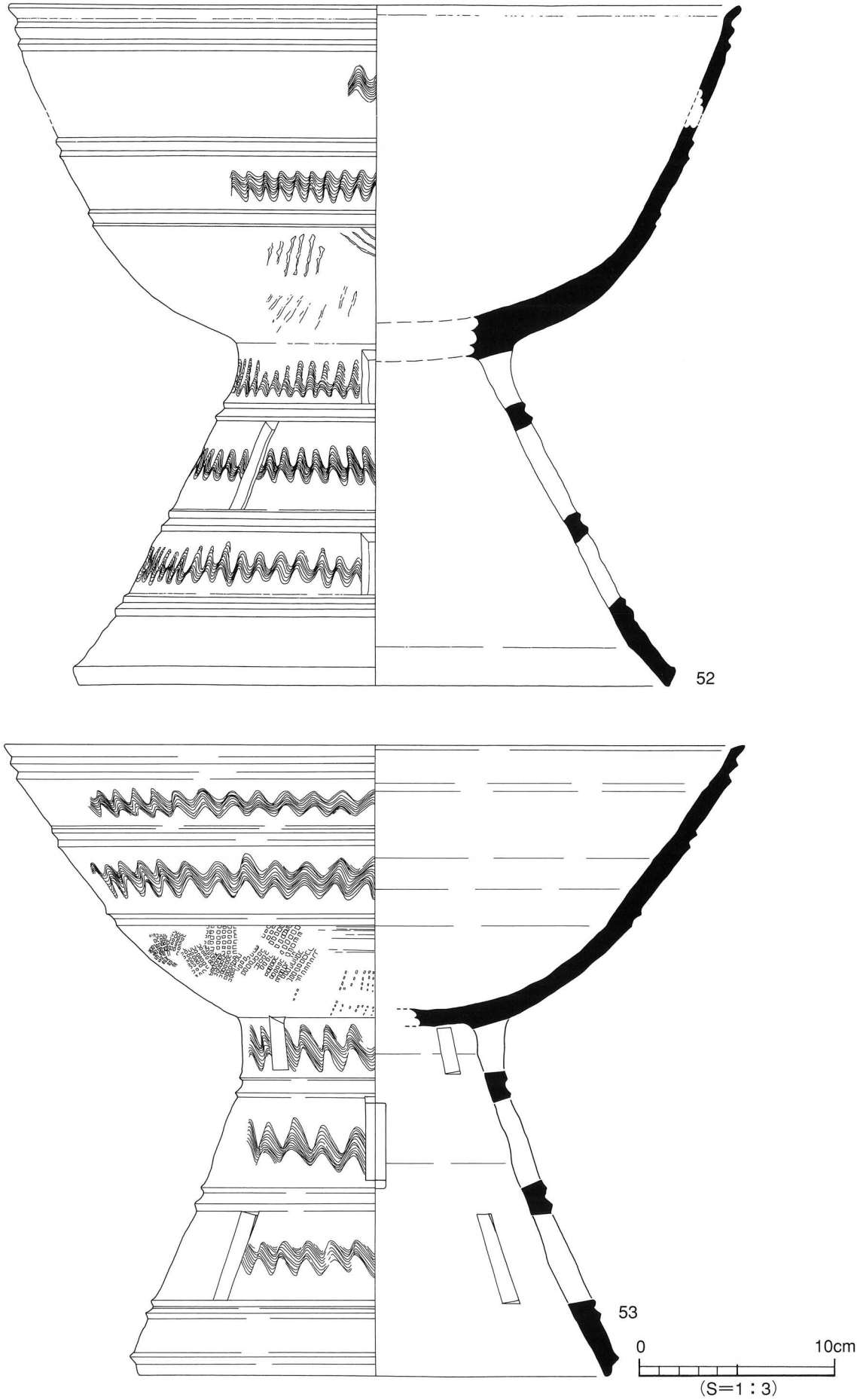
45　出作遺跡　46・47　土壇原古墳群17号墳　48　祭ケ岡古墳
49　船ケ谷遺跡4次調査地

第64図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（5）　器台（2）

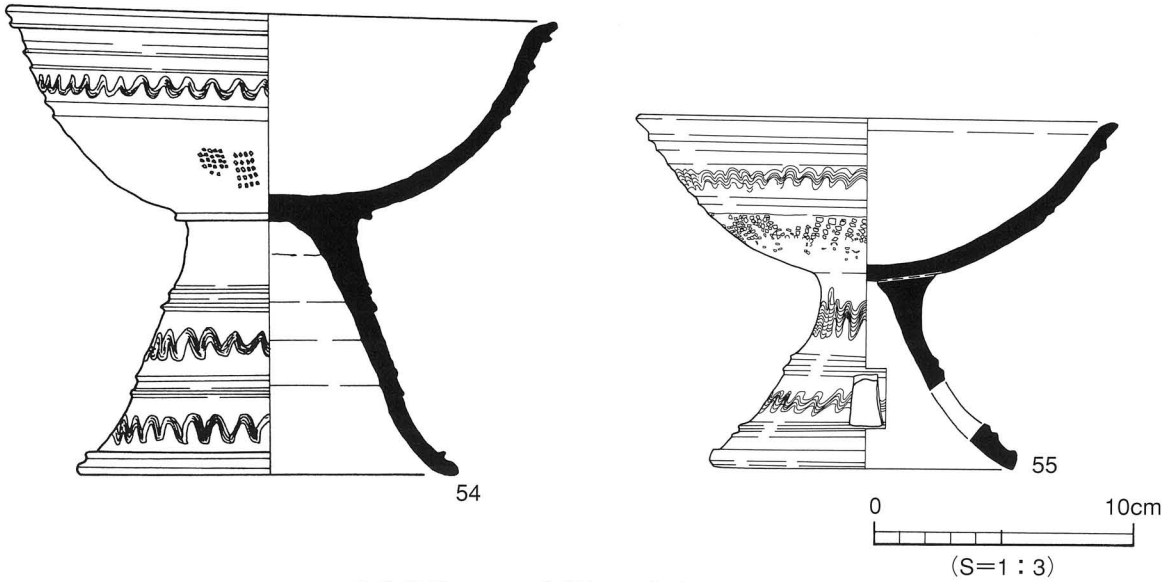


50・51　津寺遺跡

第65図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（6）　器台（3）



52　東野お茶屋台9号墳　53　土壇原古墳群Ⅴ遺跡6号墳
第66図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（7）　器台（4）



54　出作遺跡　55　高橋湯ノ窪遺跡3次調査地
第67図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（8）　器台（5）

全体に厚手のつくりである。頸部は「く」の字状に直線的に立ち上がり、端部は断面「コ」の字形におさめる。端部直下に一条の突帯が巡り、頸部との間に波状文を施す。頸部と肩部の境に突帯を有する。底部付近には格子タタキの痕跡が残り、胴部付近はカキ目調整により消している。肩部の二条の波状文はカキ目調整後に施文され、沈線で区画する。内面は同心円の当て具痕をナデ消す。80～82の3点は梅木氏により、調整段階において若干の差異が認められるものの同一工人の手によるものと推定されている(註13)。

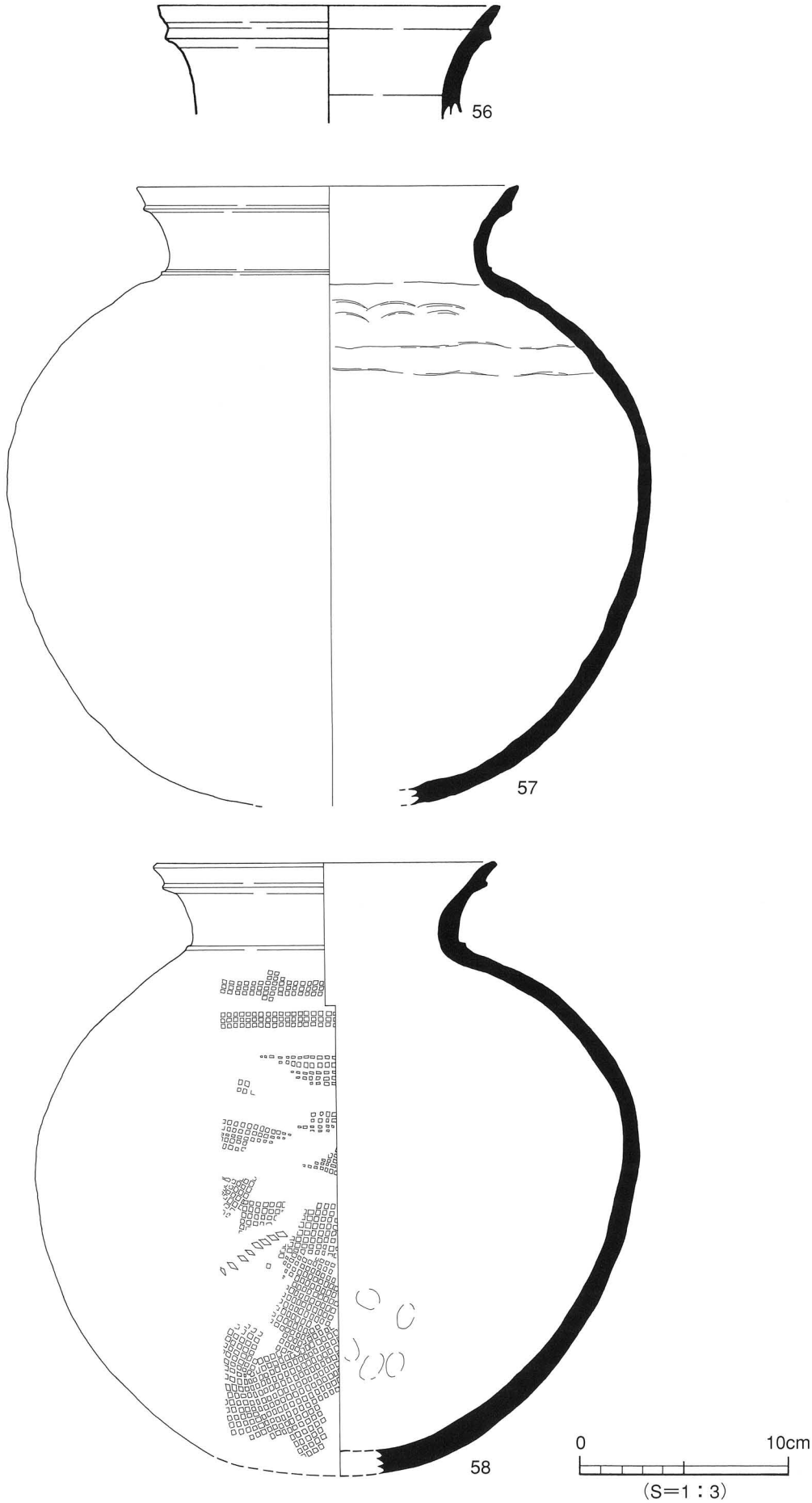
壺Dは出作遺跡で１点出土している（90）ほか、松山平野内で15点(91～104)出土している。肩の張る肩部から頸部が内傾したのち大きく外反し、口縁部は短くほぼ直立し鍔状に突帯を張り出した二重口縁状をなす。端部は断面「コ」の字形におさめる。体部は格子タタキ整形後、カキ目調整を施す。肩部の張り具合から全体形状は甕ともいえるものであるが、ここでは壺として分類した。

壺Eはいわゆる短頸壺と呼べるもので、出作資料に１点（105）、太郎丸資料に１点（106）ある。いずれも短い頸部をもち、端部は丸くおさめる。

(4)瓻(第80図)

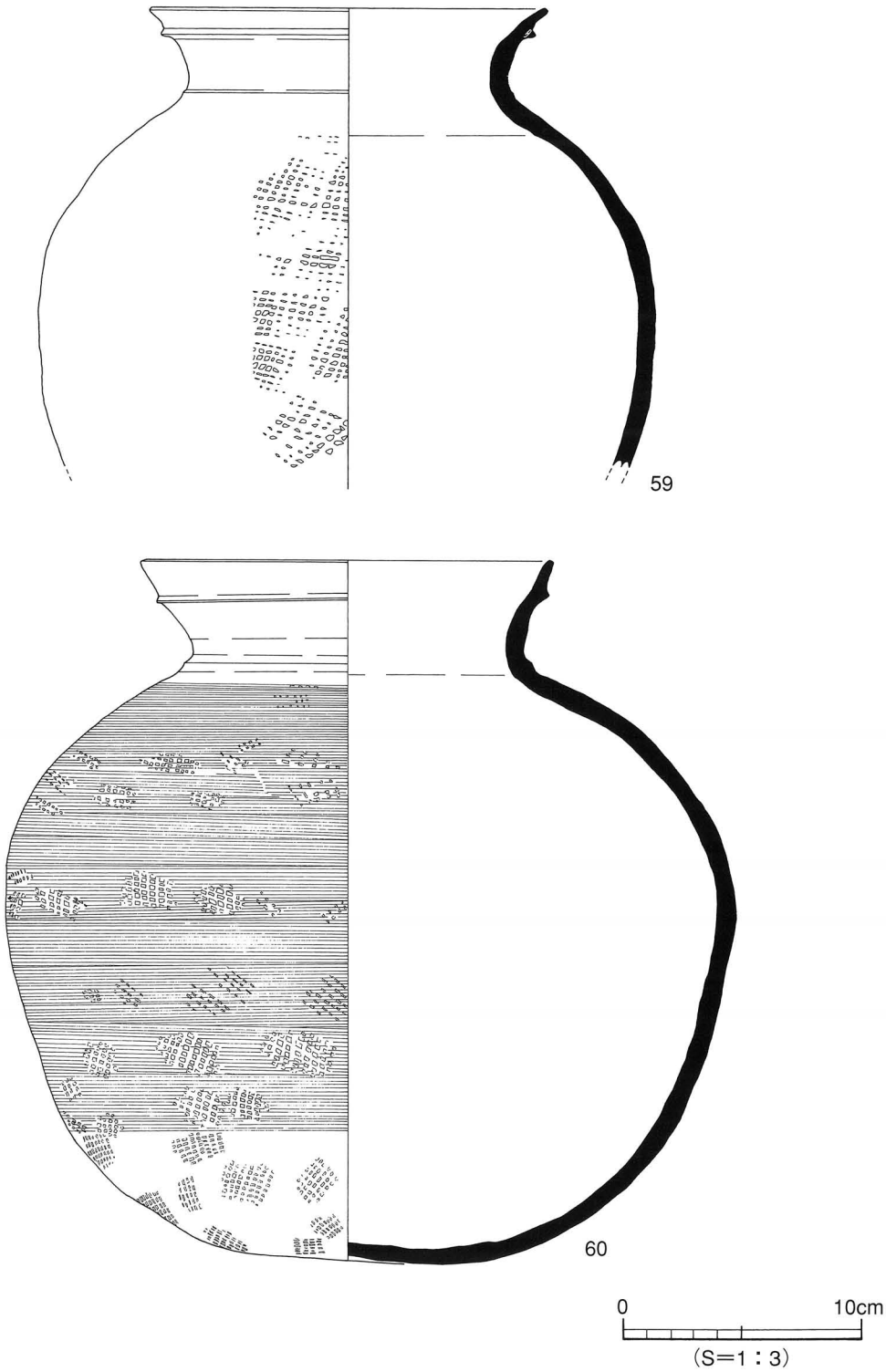
瓻は、完形品・破片を含め松山平野で7点（107～112・114）、兵庫県で１点（113）出土しており、いずれもやや肩の張る扁球形の体部を有する。口縁部はやや外反気味に立ち上がったのち外面の一条突帯からは屈曲して内湾気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。口縁部突帯以下に一条の波状文を施す。107～113の文様構成などは前述の壺Cとほぼ同一である。109は焼け歪んでいるため全体形状が把握しにくいが、口縁部を沈線と突帯で区画し二条の波状文を有する。肩部には一条または二条の波状文を施し、沈線で区画する。底部調整は110のみヘラケズリを施す他は、平行タタキ（107・108）のものと格子タタキ（109・111～114）のものとがある。

ただし114のみ体部が球形に近く、口縁部が直線的に立ち上がる点、円孔周辺にも波状文を有する点など不一致の部分がみられるため、Ⅱ類の可能性がある。



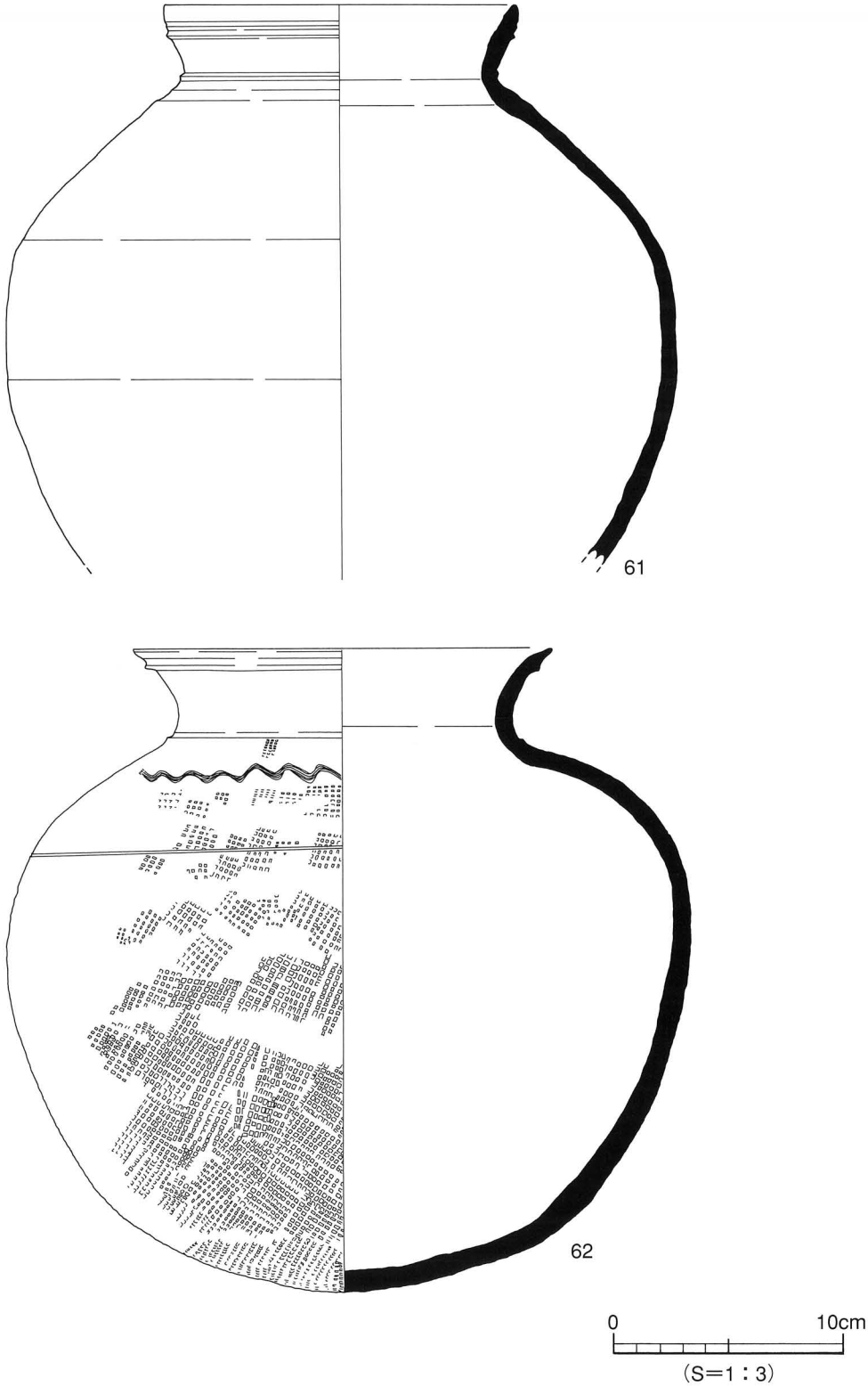
56～58　出作遺跡

第68図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（9）　壺（1）



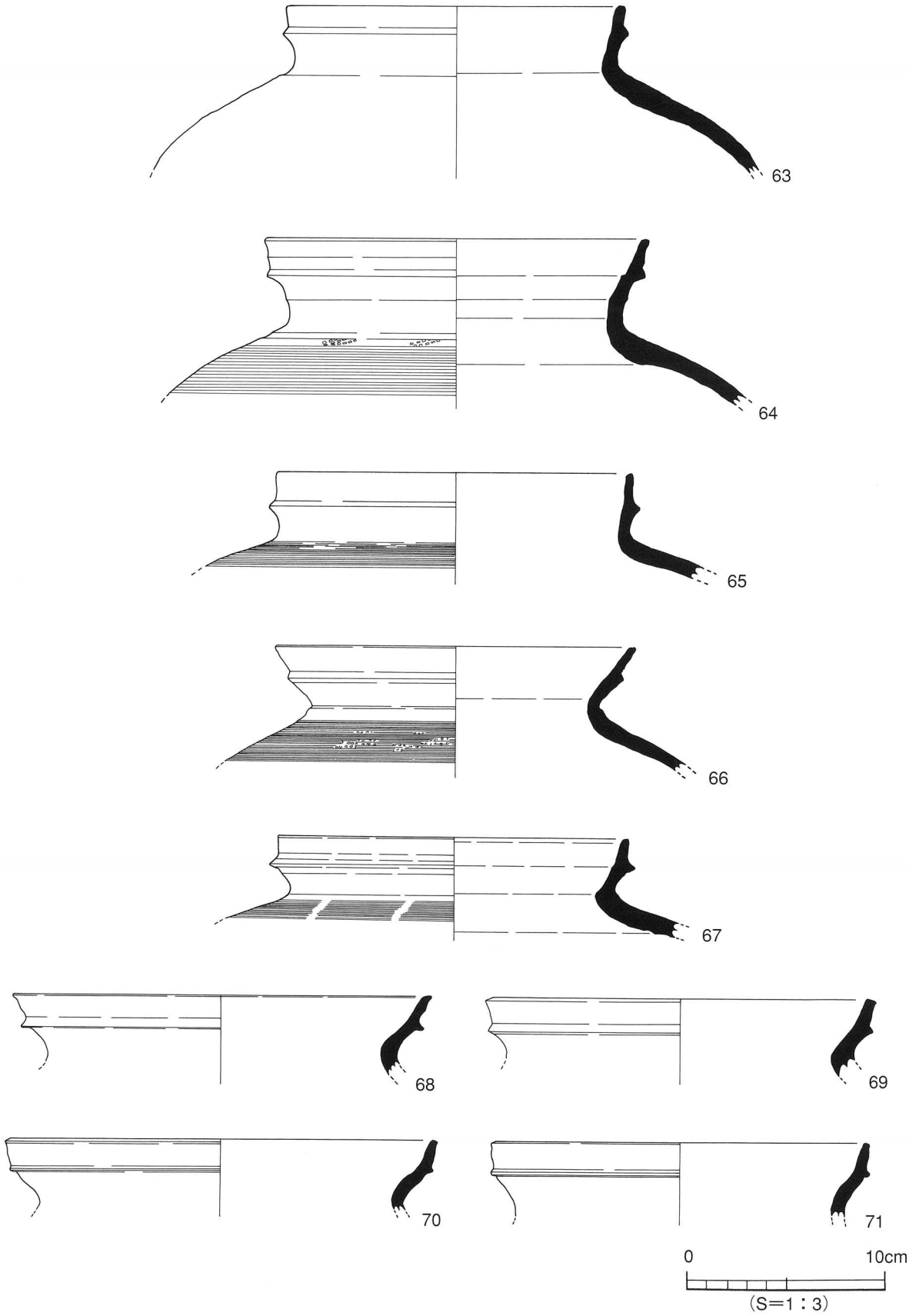
59　筋違H遺跡　60　北井門遺跡

第69図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（10）　壺（2）



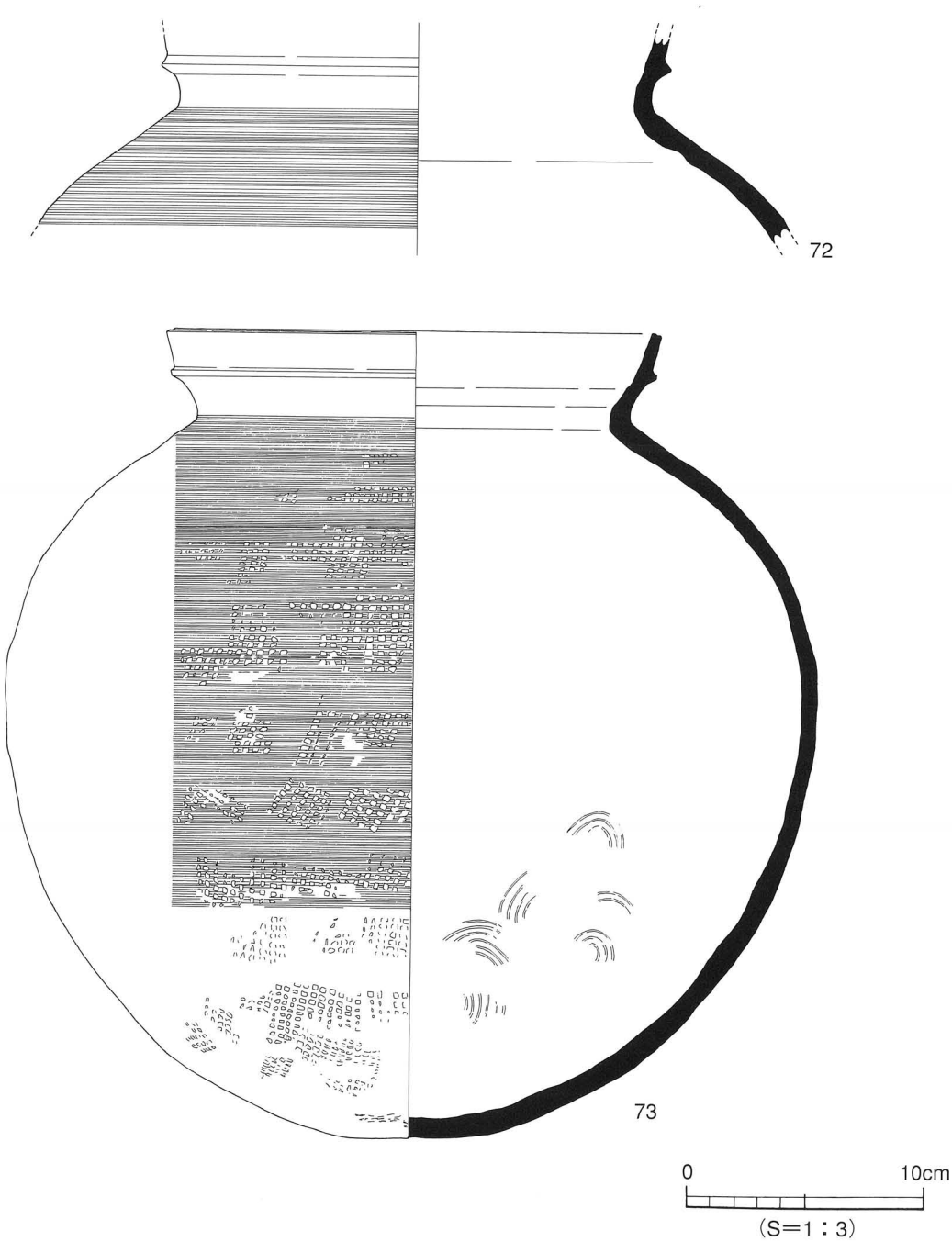
61　出作遺跡　62　船ケ谷遺跡4次調査地

第70図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（11）　壺（3）



63・64　出作遺跡　65・66　船ケ谷遺跡4次調査地
67　北久米浄連寺遺跡3次調査地　68　旗立C遺跡　69　片山・太郎丸遺跡
70・71　土壇原古墳群17号墳

第71図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（12）　壺（4）

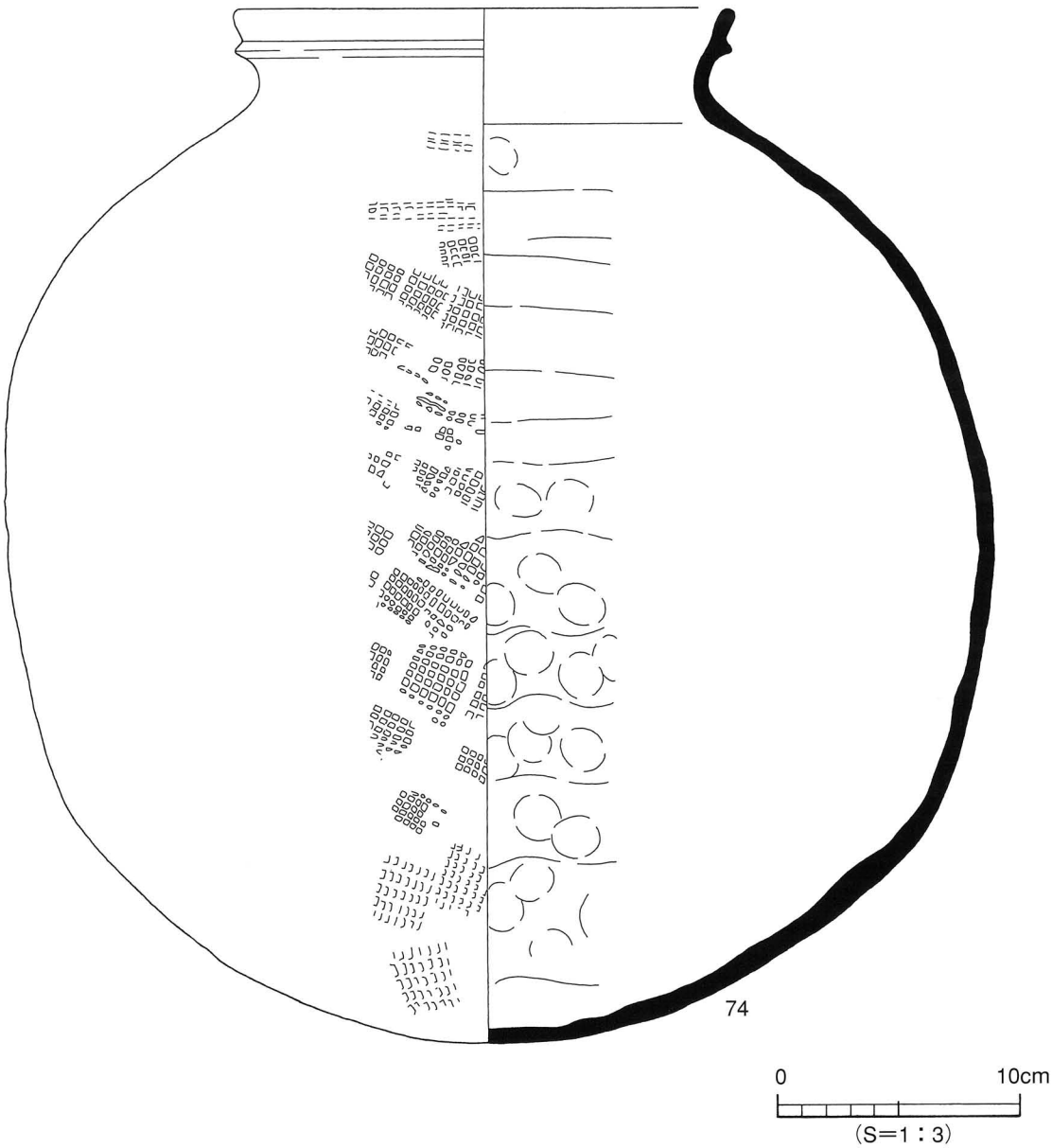


72　片山・太郎丸遺跡　73　船ケ谷遺跡4次調査地

第72図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（13）　壺（5）

(5)甑または把手付鍋(第81・82図)

松山平野で口縁部～胴部片が4点（115～118）、把手部片が２点（119・120）出土しているほか、完形品が２点（121・122）出土している。いずれも体部外面には格子タタキ整形後に横方向のカキ目を施し、胴部中位付近の把手が取り付く位置に沈線が一条巡る。把手部は牛角状をなし、いずれも上面から切り込まれ下面まで貫通している。口径は20cm以上を測り、口縁部は折り曲げ外方に開き、端部に一条の沈線を施す。体部は横方向のカキ目を施し、内面はナデ調整されている。底部は平底である。以上から、把手付鍋という形態のものである。ただし、121・122ともに内外面に二次焼成の



74　福音小学校構内遺跡

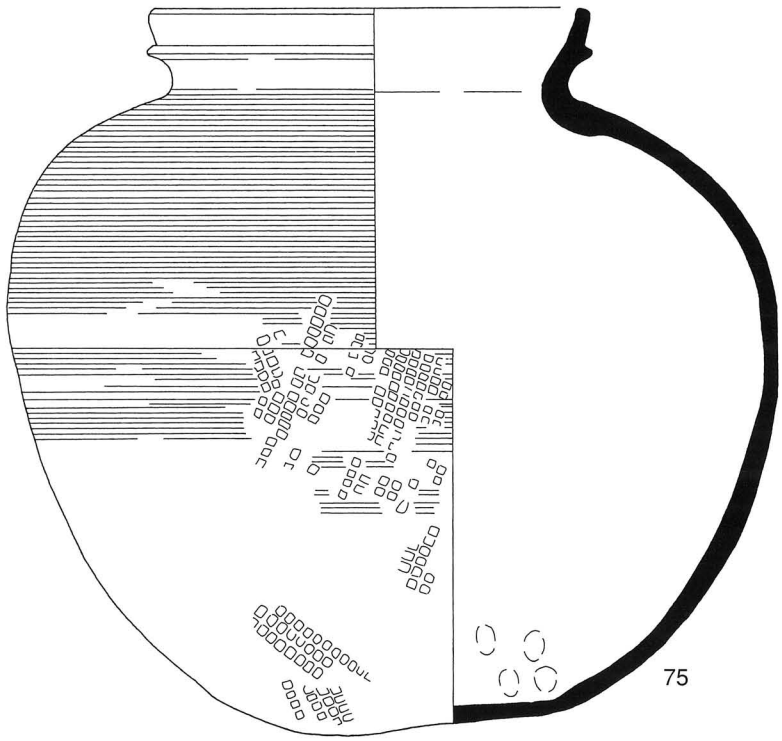
第73図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（14）　壺（6）

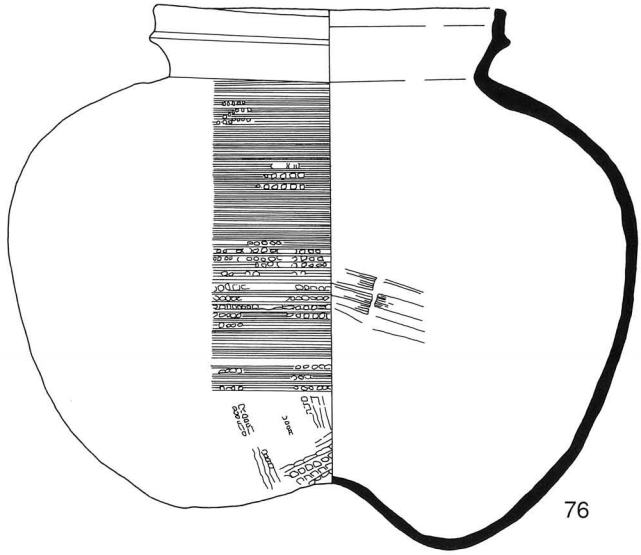
痕跡がみられないため、未使用か、鍋とは別の用途に使用されたものと推定される。

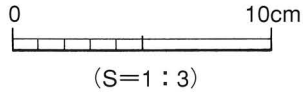
甑は全体形状をうかがえる資料がないため確証はないが、市場南組1号窯跡出土資料から推定して、逆「ハ」の字状の直線的な体部に棒状の把手部をもつものと推定される。

(6)把手付椀(第83図)

松山平野で8点（123～127・129～131）、今治平野で１点（128）出土している。そのうち123～128が口径10cm以上の大型品（１類）で、129～131が10cm未満の小型品（２類）である。いずれも平底の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部付近でやや内湾し端部は尖り気味におさめる。突帯に挟まれた文様帯に波状文を一条施す。底部付近はケズリ痕跡を残す。把手の断面形態は１類が円形または楕円形（ａ）と扁平（ｂ）があり、２類は円形または楕円形（ａ）のみである。

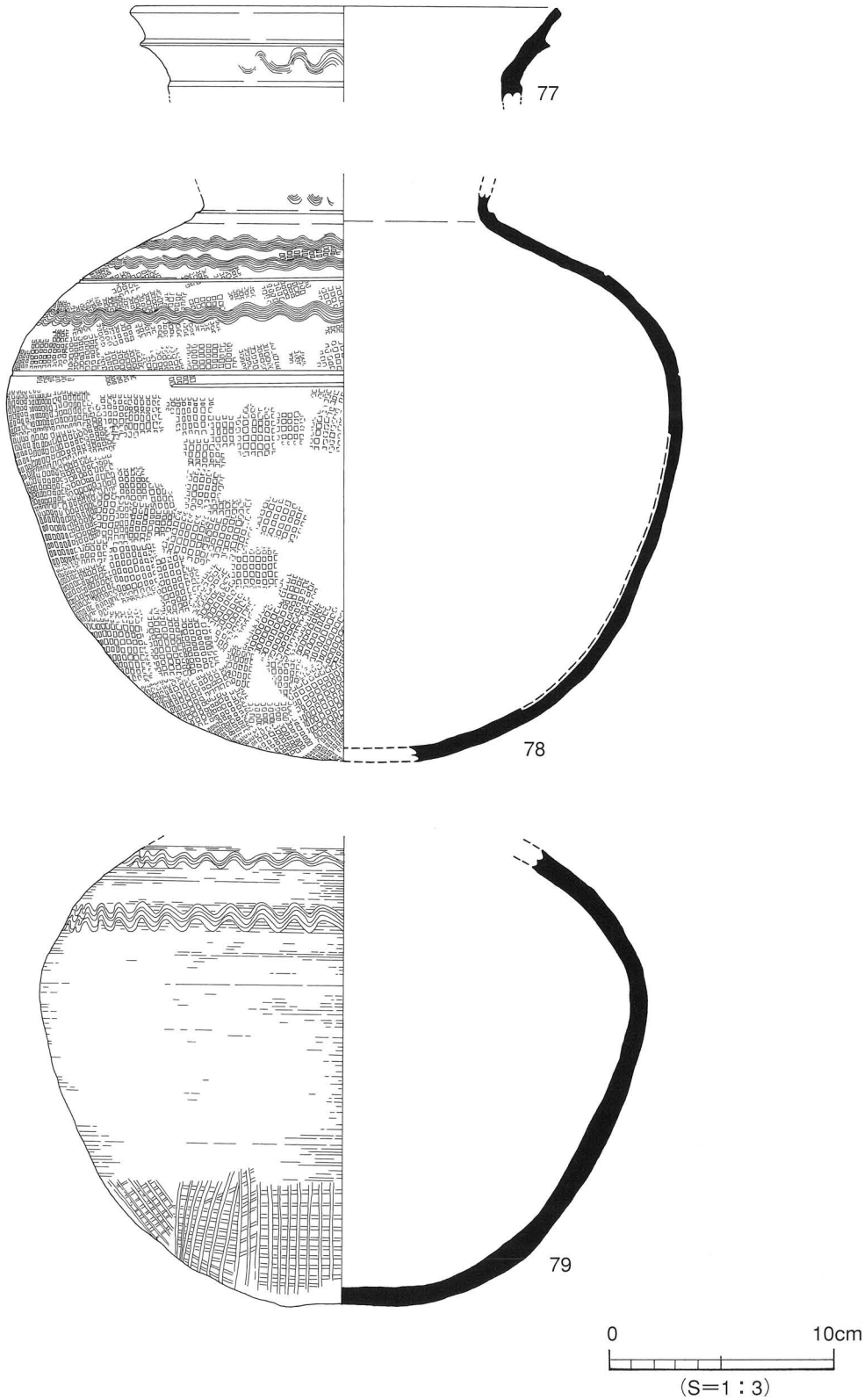






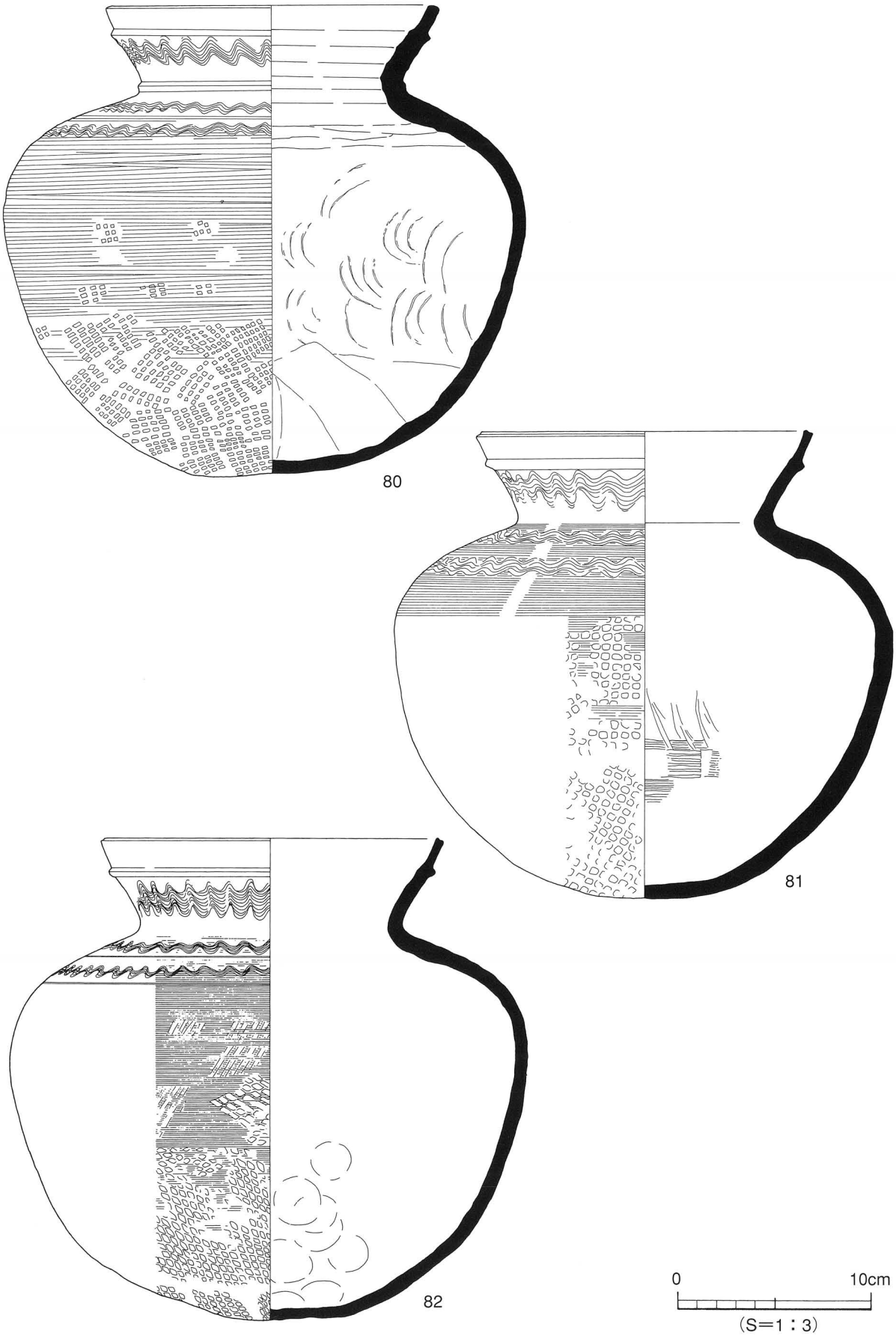
75　福音小学校構内遺跡　76　東山古墳群9号墳

第74図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（15）　壺（7）



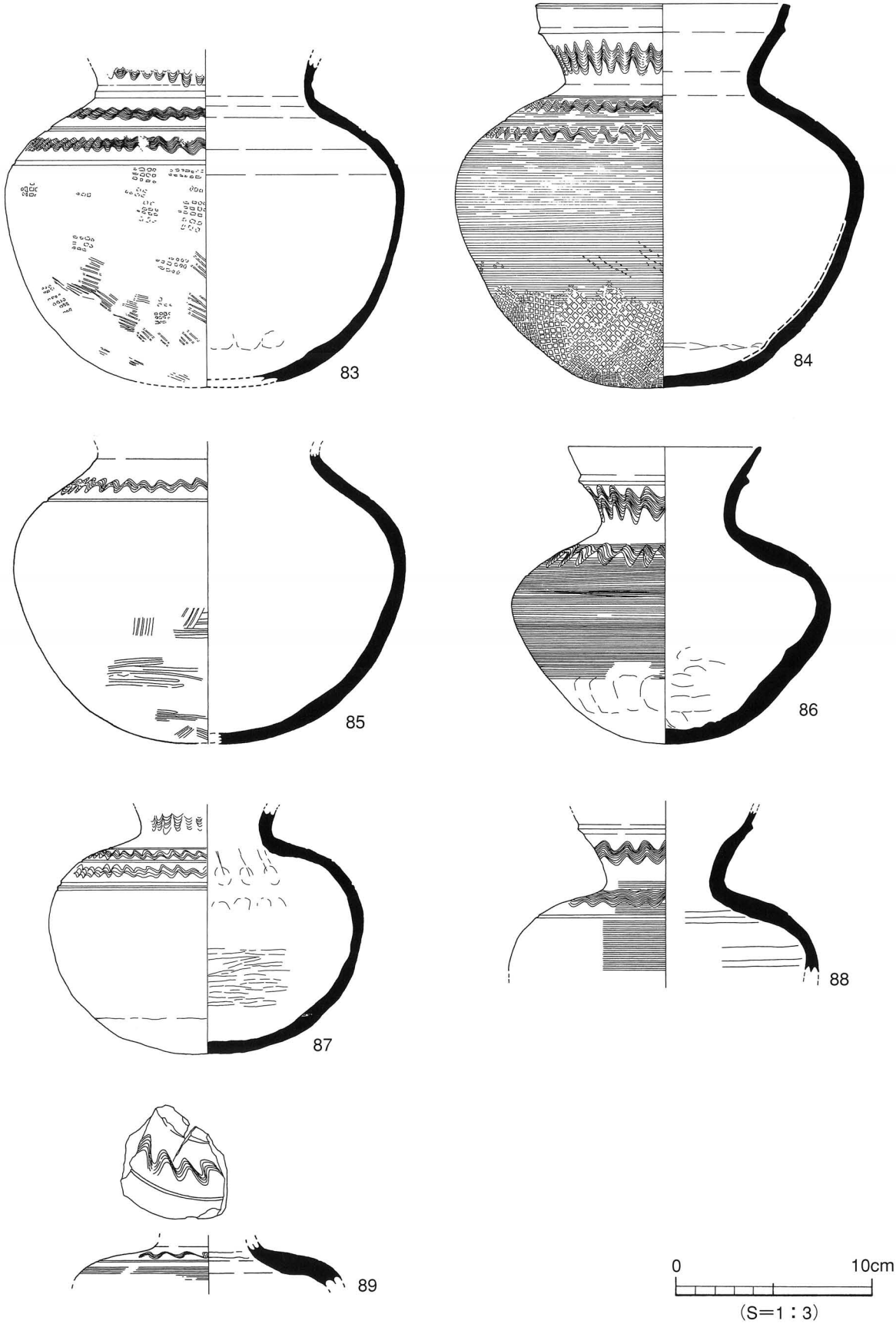
77　土壇原古墳群Ⅴ遺跡5号墳
78　土壇原古墳群Ⅴ遺跡12号墳　79　八尾南遺跡

第75図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（16）　壺（8）



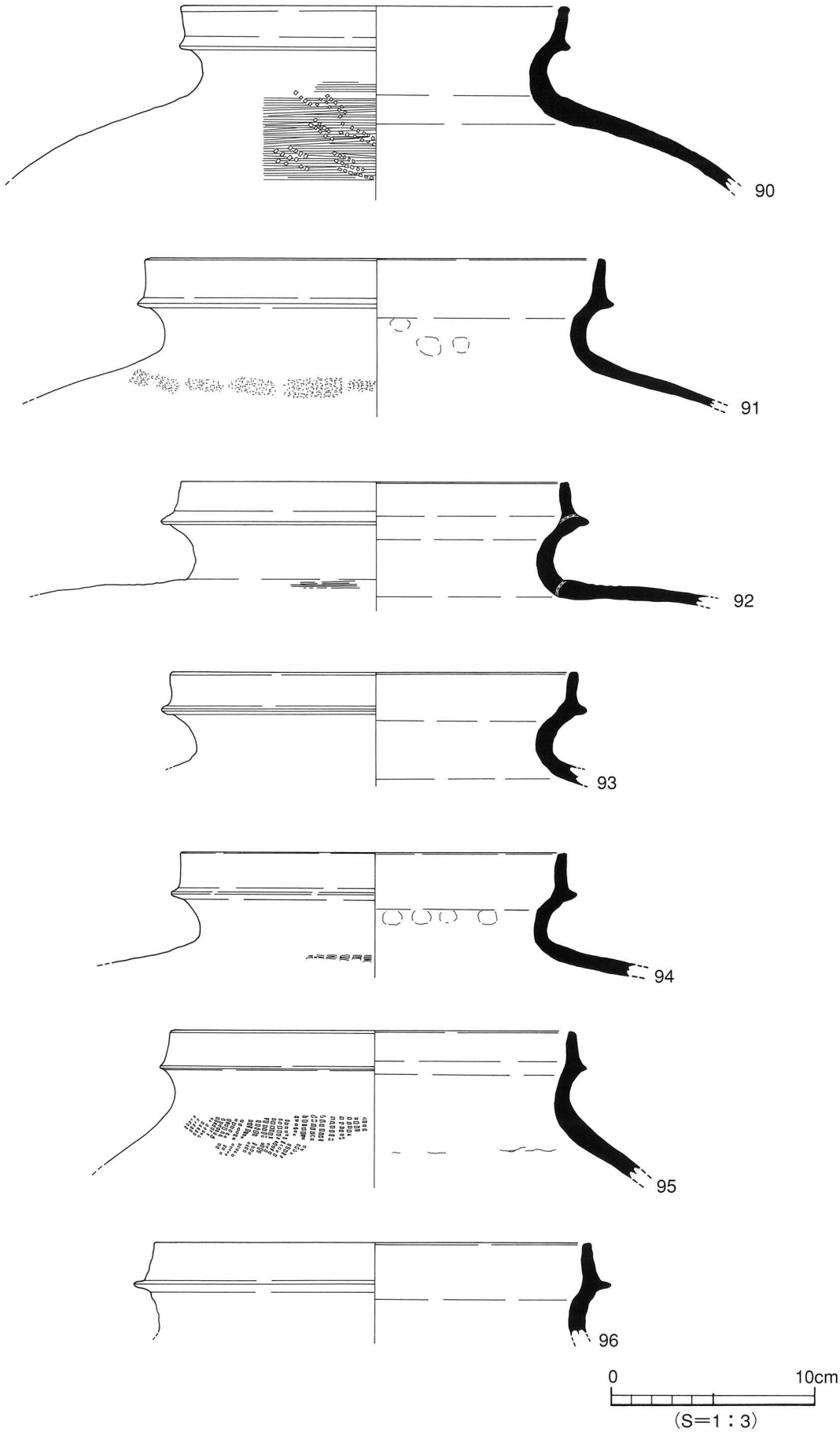
80　出作遺跡　81　東山古墳群5次調査地　82　東野お茶屋台9号墳

第76図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（17）　壺（9）



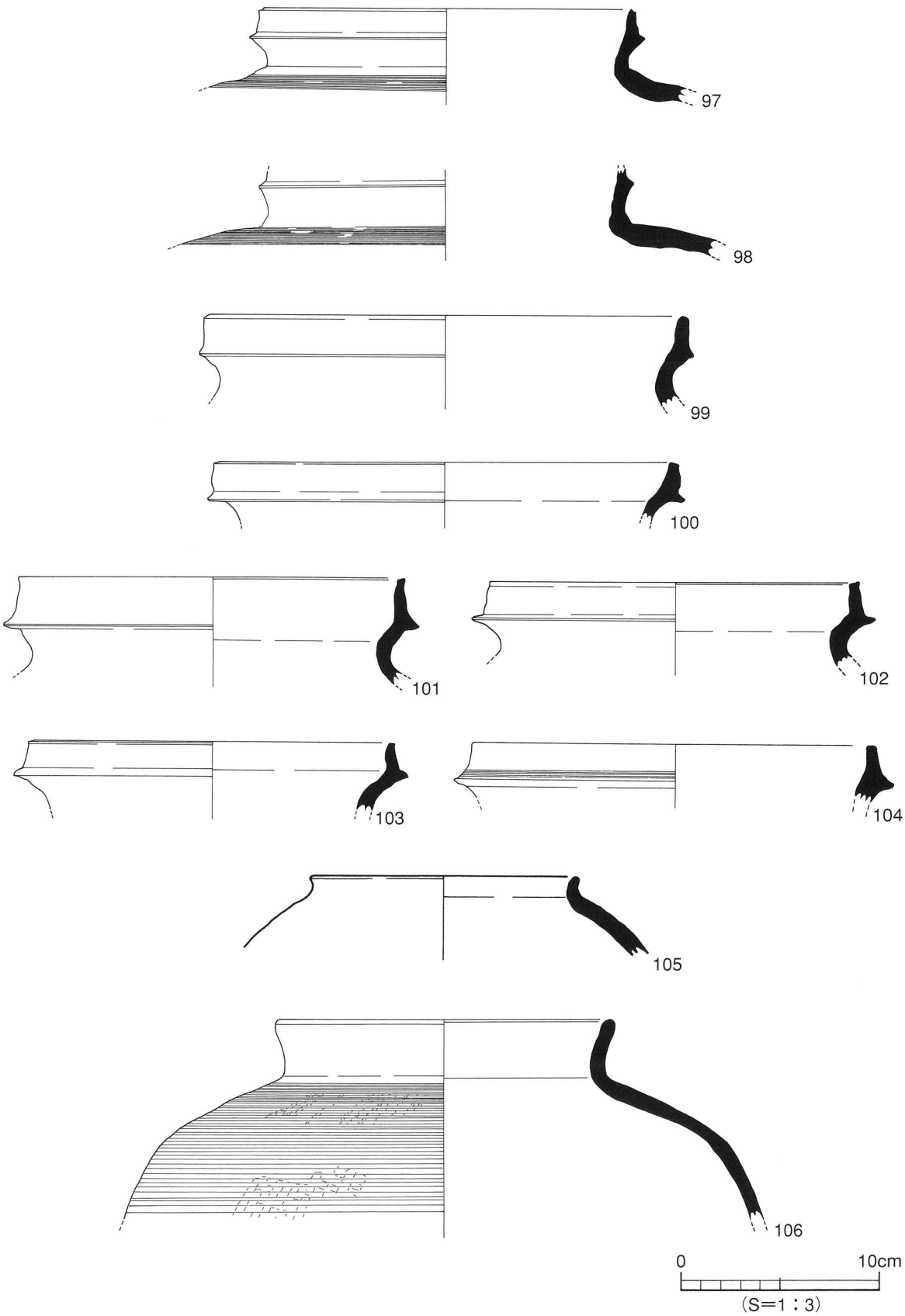
83・86・87　船ケ谷遺跡4次調査地　84　土壇原古墳群Ⅴ遺跡9号方形周溝墓
85　福音小学校構内遺跡　88　東雲神社遺跡　89　樽味四反地遺跡5次調査地

第77図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（18）　壺（10）



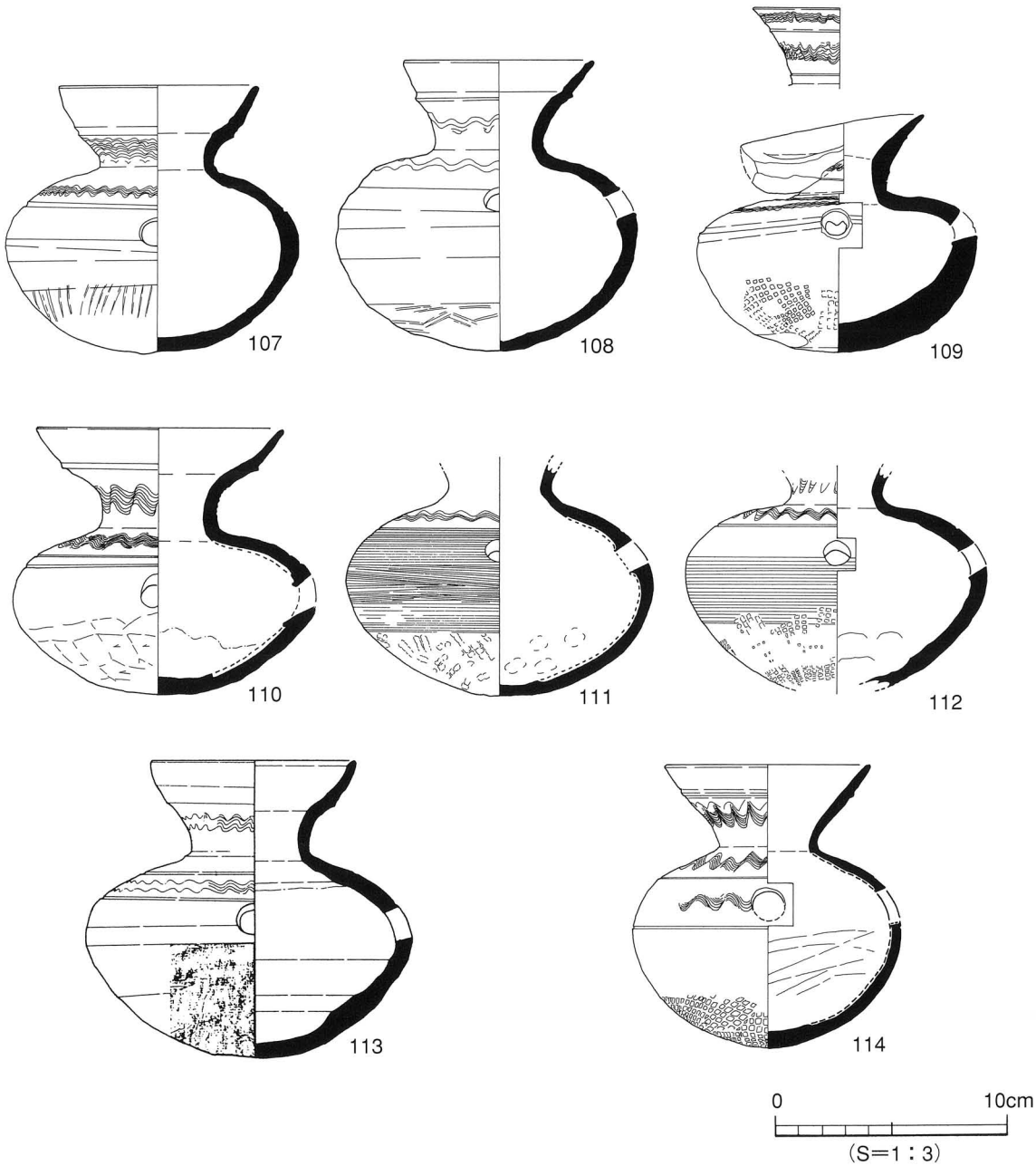
90　出作遺跡　91・95　土壇原古墳群16号墳　92　土壇原古墳群Ⅴ遺跡8号墳
93　土壇原古墳群Ⅴ遺跡5号墳　94・96　土壇原古墳群17号墳

第78図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（19）　壺（11）



97・101・102　土壇原古墳群17号墳　98・99　土壇原古墳群15号墳
100　土壇原古墳群11号墳　103　土壇原古墳群Ⅴ遺跡7号墳
104　畑寺竹ケ谷5号墳　105　出作遺跡
106　片山・太郎丸遺跡

第79図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（20）　壺（12）

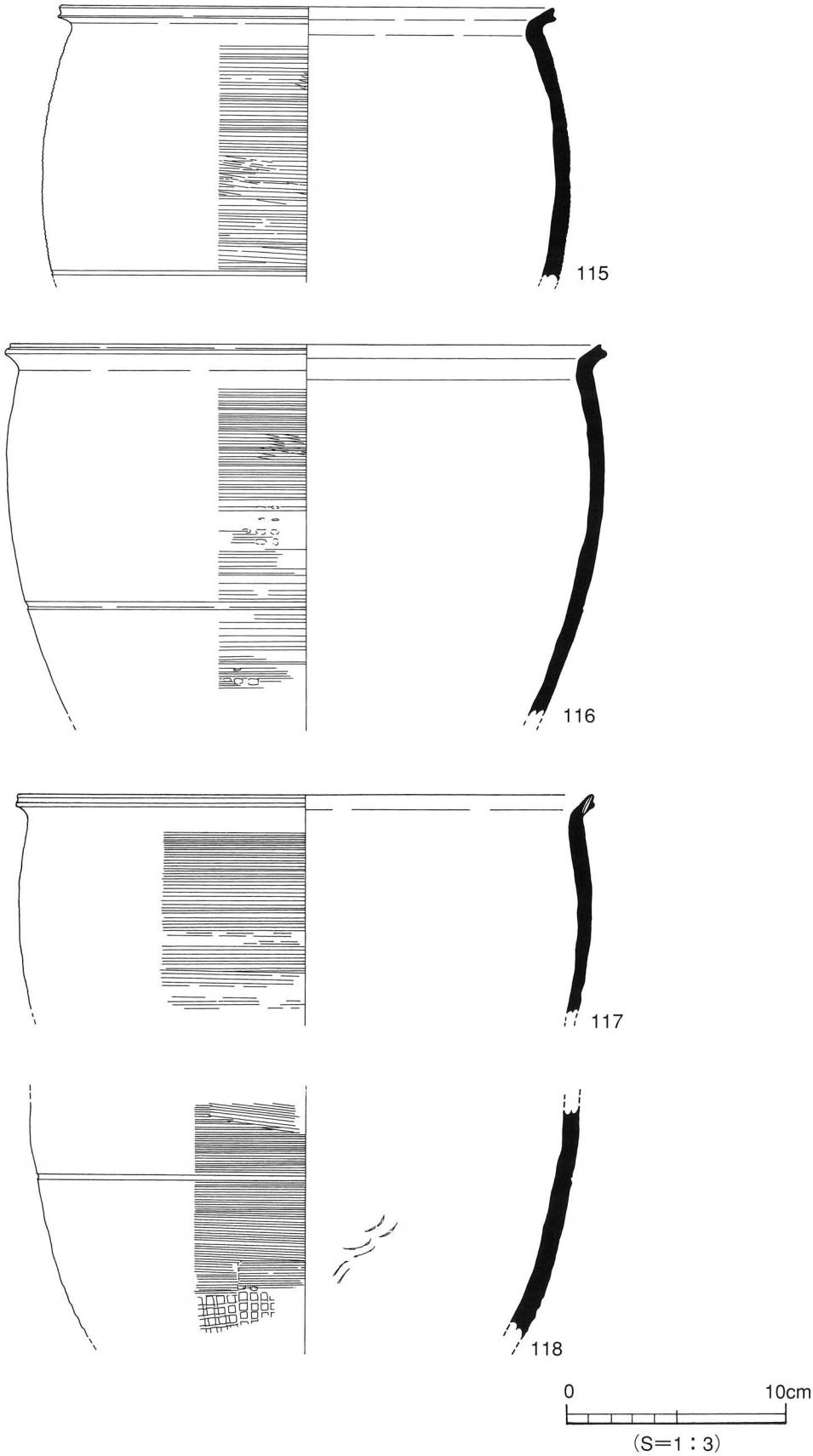


107・108　出作遺跡　109　片山・太郎丸遺跡
110・111　船ケ谷遺跡4次調査地　112　土壇原古墳群17号墳
113　黒石山古墳群　114　土壇原古墳群16号墳
第80図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（21）　聰

この把手付椀は市場南組1号窯跡からは出土していない。ただし、形態からは陶邑系須恵器と考えられるものの他の器種と同様に灰白色の色調を呈していることなどから、123・124・127～129・131について胎土分析を実施した結果、市場南組窯跡との結果が得られた。そのため、製作技術は陶邑系工人の手によるが、胎土は他の器種と同様地元の粘土を使用したものと推定される。

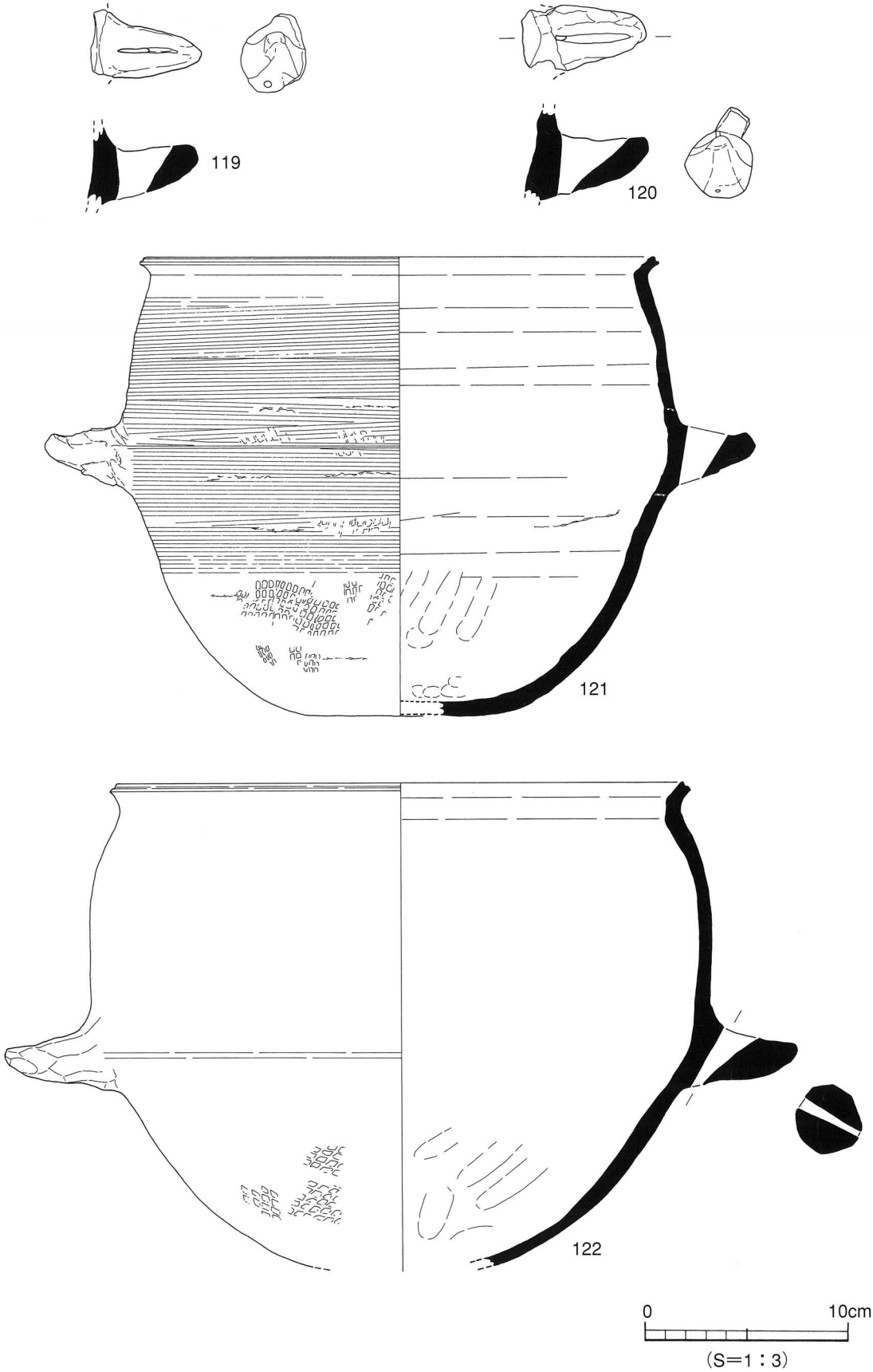
(7)甕(第84～88図)

口縁端部の形態から２分類できるため、甕Ａ・Ｂとして分類を行った。



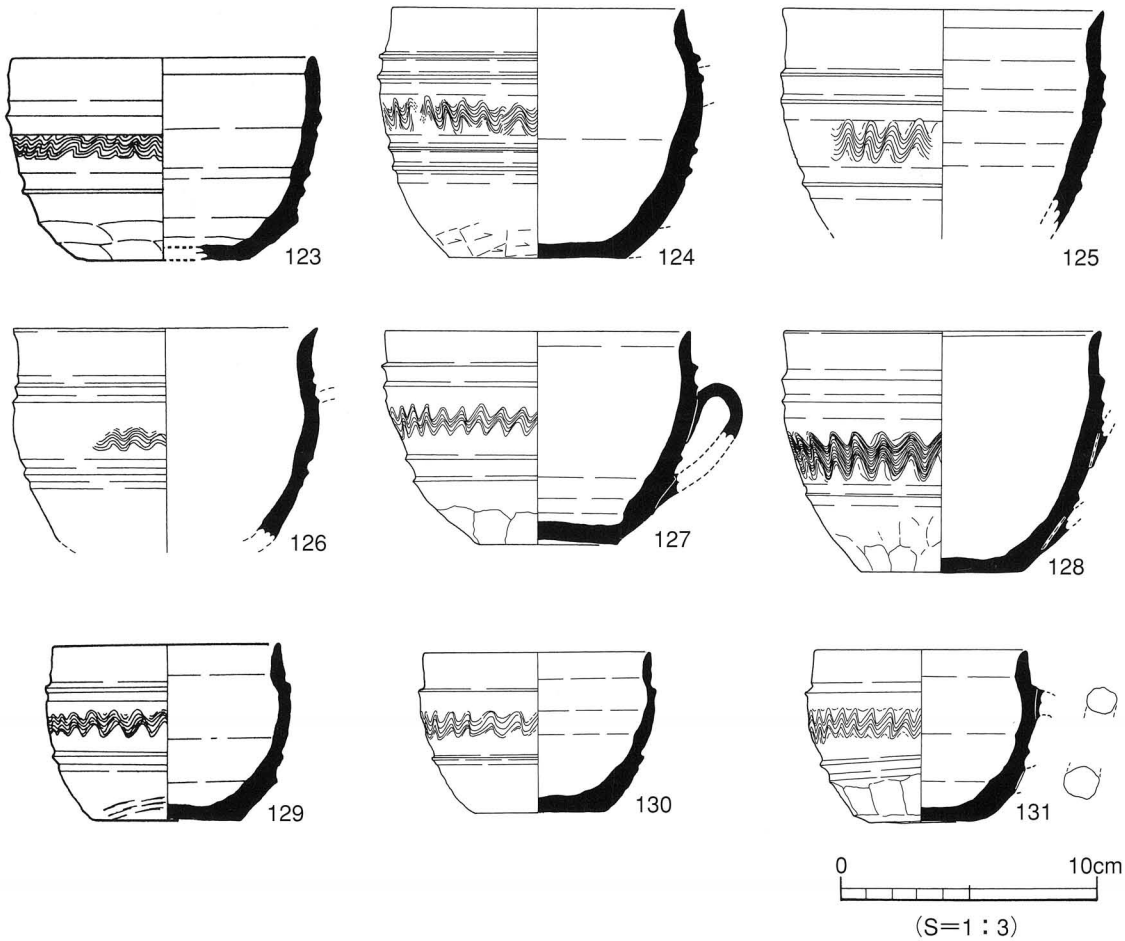
115・116　片山・太郎丸遺跡　117・118　船ケ谷遺跡4次調査地

第81図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（22）　把手付鍋（1）



119　出作遺跡　120・122　北井門遺跡
121　船ケ谷遺跡4次調査地

第82図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（23）　把手付鍋（2）



123・129　出作遺跡　124・125　船ケ谷遺跡4次調査地
126　福音小学校構内遺跡　127　土壇原古墳群13号墳
128　高橋湯ノ窪遺跡3次調査地　130　片山・太郎丸遺跡
131　土壇原古墳群17号墳

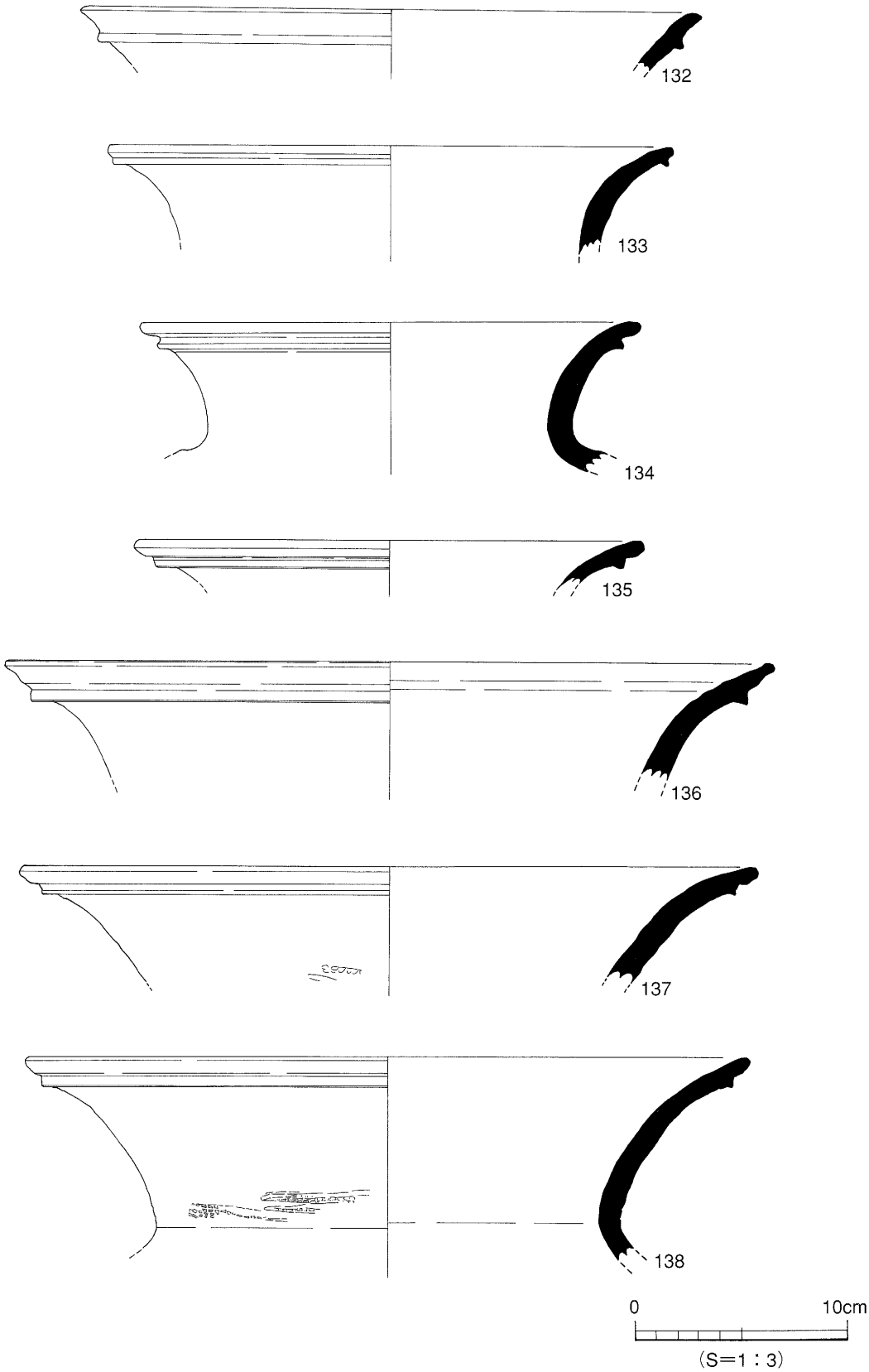
第83図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（24）　把手付埦

甕Aは端部を丸く、または尖り気味におさめるもので、いずれも口縁部が大きく外反し、端部直下には断面三角形の突帯を貼り付ける。甕Aは13点（132～144）ある。いずれも口縁部が大きく外反し、端部直下には断面三角形の突帯を貼り付け、端部は丸くおさめる。143と144は波状文の有無で異なる点もみられるが、ほぼ同形態をなすものである。

甕Bは口縁部は肩部からほぼ直立して長く伸び、突帯付近で大きく外反し端部に至る。口縁端部を断面「コ」の字形におさめるもので、4点（145～148）ある。148は口縁部が短めに立ち上がり、口縁端部を上下に拡張する。

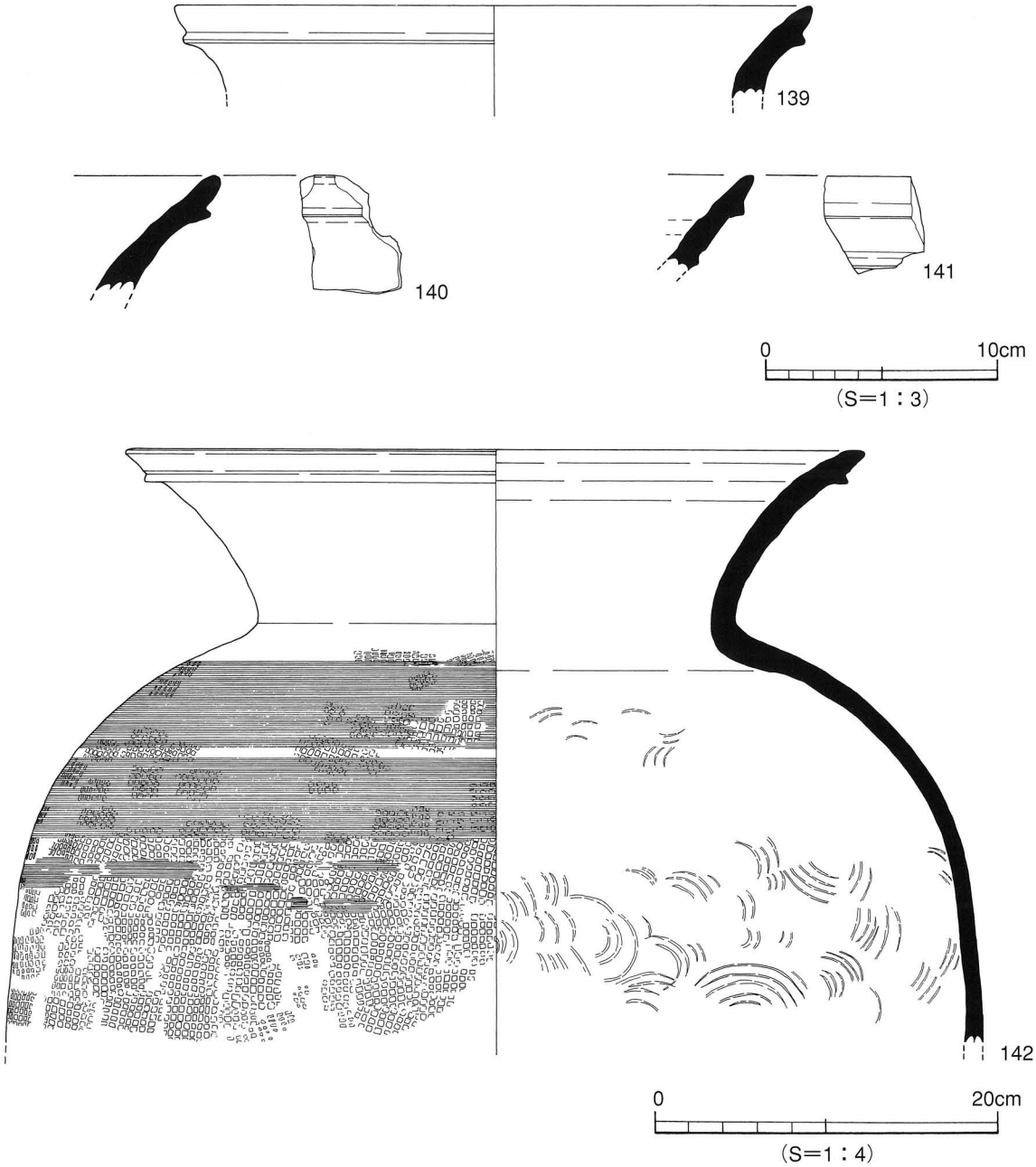
(8)土錘

市場南組1号窯跡資料に12点報告がある。形態は所謂竹輪形を呈し、いずれも長さ10㎝前後、径4㎝前後を測り、中央の円孔は径1㎝前後である。外面には指による成形痕が明瞭に残る。現在のところ、同窯跡以外の遺跡からは確認されていない。



132～135　片山・太郎丸遺跡　136～138　土壇原古墳群12号墳

第84図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（25）　甕（1）



139　土壇原古墳群17号墳　140　土壇原古墳群L5杭
141　土壇原古墳群12号墳　142　土壇原古墳群16・17号墳

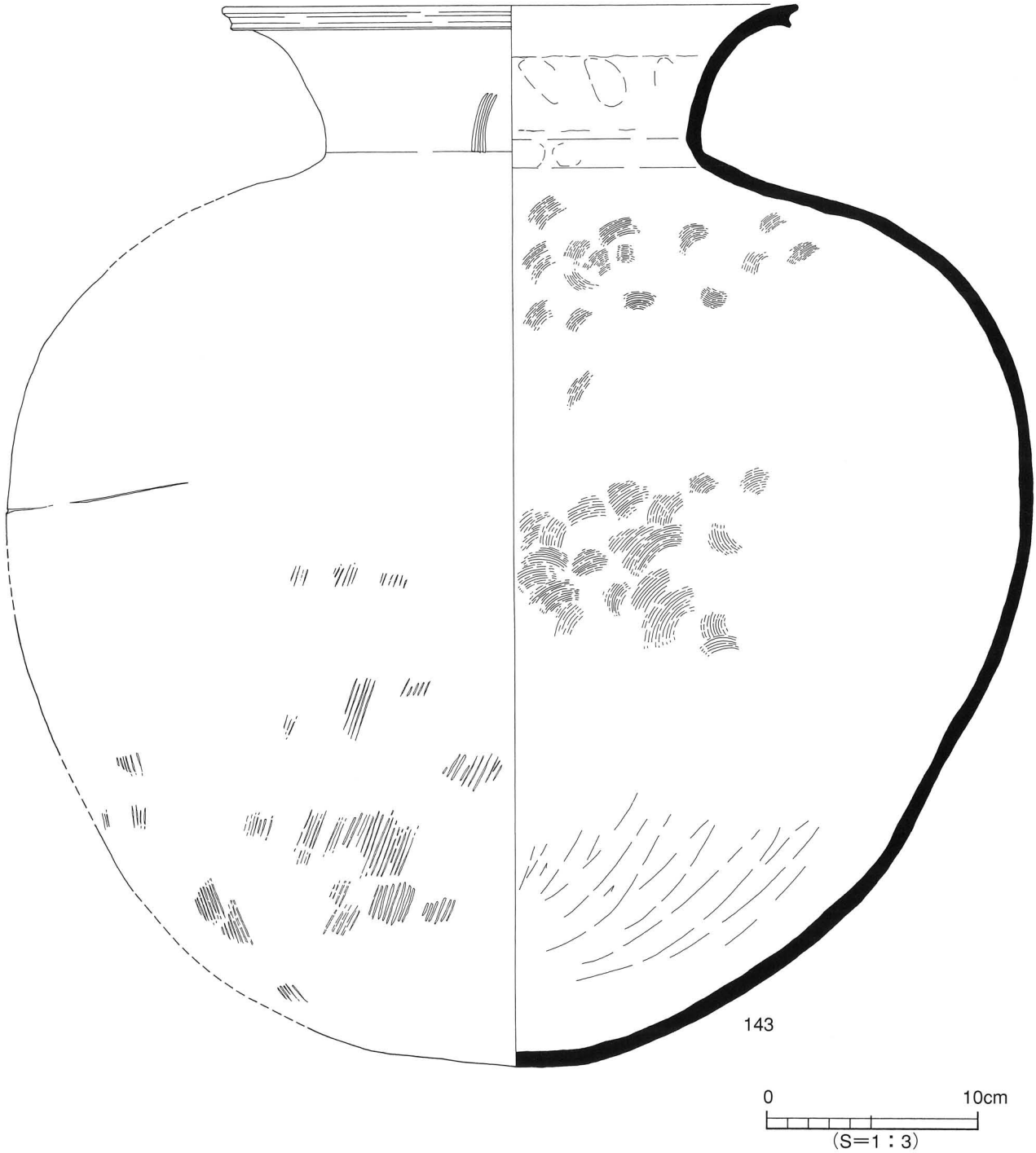
第85図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（26）　甕（2）

5．出作・市場型須恵器の特徴

以上の須恵器を器種ごとに特徴を列記してみると下記のとおりである。

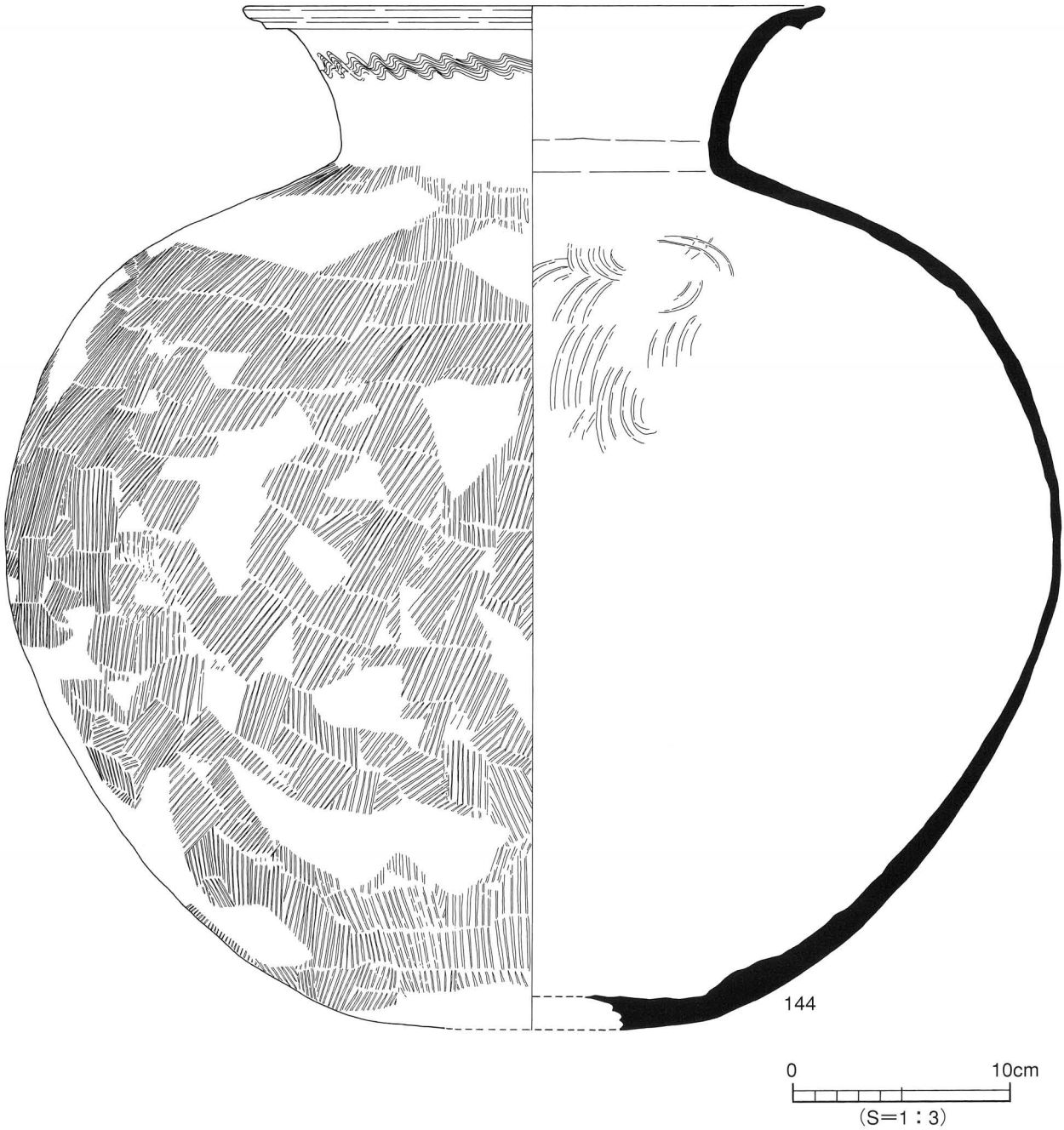
(1)高坏

まず高坏は、口径が13～15㎝前後と大きく、坏部外面に格子タタキ痕を残すこと、脚部の柱部と裾部を一条の突帯で区分する、透かしを持たない、脚端部を「コ」の字形におさめる点などが挙げられ、同時期の陶邑系須恵器と容易に区別が可能である。特に格子タタキ痕を残すことは最大の特徴で、後述する器台と同様な製作方法により製作されたことが考えられる。この形態などから、Ⅰ類のものとⅡ類のものとがあることが考えられる。



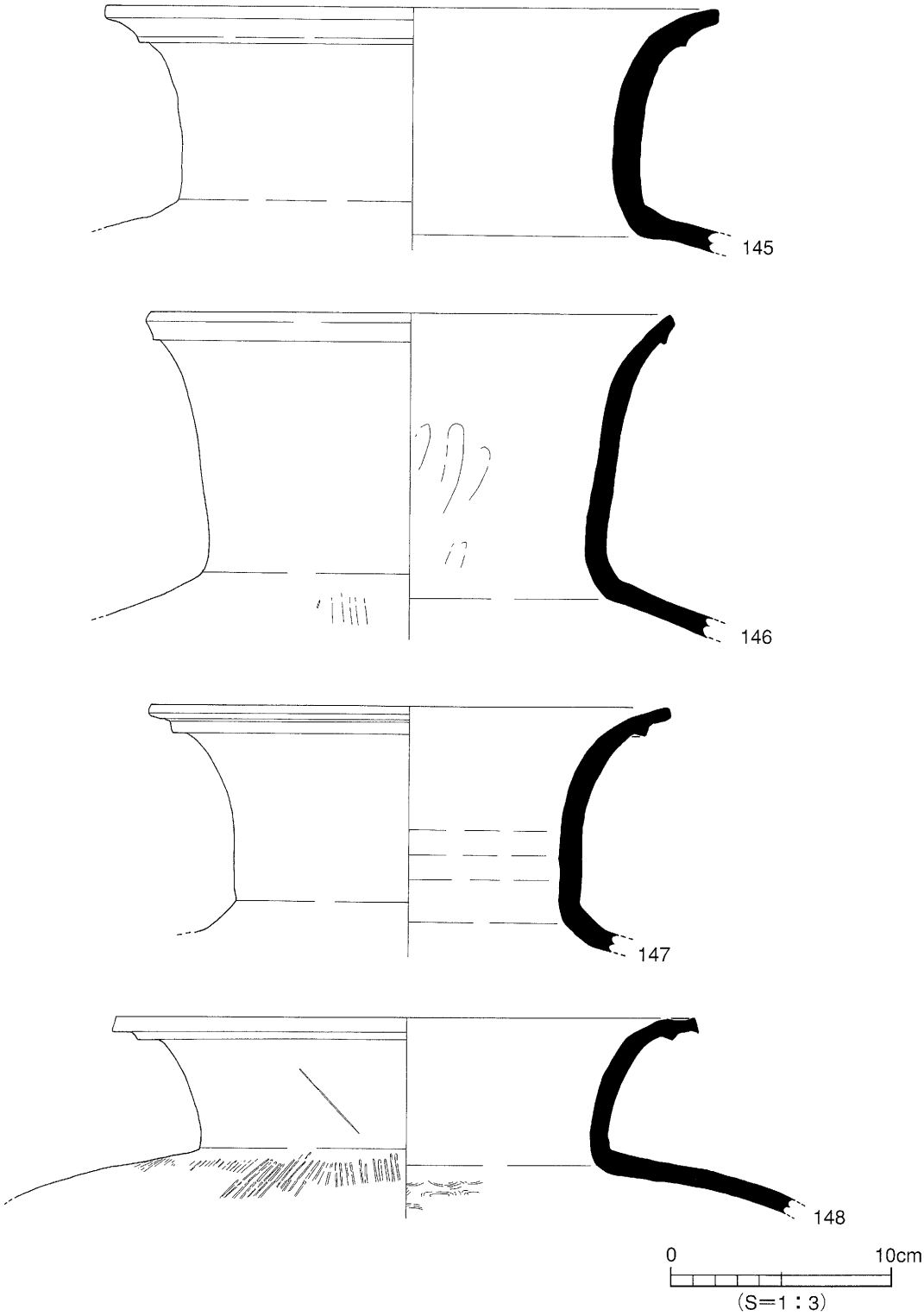
143　土壇原古墳群12号墳

第86図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（27）　甕（3）



144　土壇原古墳群13号墳

第87図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（28）　甕（4）



145　片山・太郎丸遺跡　146　土壇原古墳群16号墳
147　土壇原古墳群Ⅴ遺跡7号墳
148　土壇原古墳群12号墳

第88図　市場南組1号窯跡関連資料実測図（29）　甕（5）

(2)器台

器台もまた坏部外面に格子タタキ痕を残すことで同時期の陶邑系須恵器と容易に区別が可能である。さらに器台脚端部の製作方法が高坏の脚端部のそれと類似している。1類と3類とは類似点が認められるが、2類のみが脚部の透かしを有しない点、坏部と脚部の接合部に断面三角形の突帯を巡らせている点などで区別され、Ⅱ類の可能性がある。

(3)壺

壺Aはほぼ球形の胴部に格子タタキ痕を残す点と、口縁端部下に一条の突帯を巡らすとともに頸部と肩部の境にも明瞭な突帯を巡らしている点が特徴である。市場南組1号窯跡から肩部に波状文を巡らす壺が出土しているが、同タイプのものが船ヶ谷遺跡４次調査地で出土した62である。

壺Bは口縁端部の突帯付近で内湾し、端部を断面「コ」の字形におさめる点で壺Aと区別される。前述した高坏の脚部を反転させると壺Bの口縁部と類似することから、何らかの規則が働いているものと推定される。

壺Cは全体に厚手のつくりで、口縁端部下に突帯を巡らし内湾気味におさめており、端部は断面「コ」の字形をなしている。頸部と肩部の境に明瞭な突帯を巡らし口縁部に一条、肩部に一条または二条の波状文を施し沈線で区画する。壺の大小があるにしても波状文の施される位置に規則性が見られる点は重要である。

壺Dは形態的に壺Bと類似する点が多いが、短い頸部が内傾したのち大きく外反している点と、口縁部が短くほぼ直立し二重口縁状をなしている点が挙げられる。こうした形態の壺は市場南組1号窯跡からは出土しておらず、Ⅱ類の可能性がある。

(4)瓾

瓾は扁球形の体部に、口縁部はやや外反しながら立ち上がり、外面の一条の突帯からは屈曲して湾曲気味に立ち上がり、端部はやや尖り気味におさめる。口縁部突帯以下に波状文を施し、また肩部に一条または二条の波状文を施し沈線で区画する。こうした文様構成などから類推すると、瓾は壺Cの系譜を引くものといえる。ただし、稀にⅡ類の可能性があるものも含まれている。

(5)把手付鍋

把手付鍋は、口縁部を「く」の字形に折り曲げ、やや胴張りの体部に平底の底部を有する。把手部は牛角状を呈し、上面に切り込みをもつ。

(6)把手付埦

ほとんどのものが二条突帯・一条波状文の組み合わせで施文される。こうした文様構成は陶邑系須恵器にもあるため、Ⅲ類と考えられる。ただし、前項でも触れたように市場南組窯跡周辺の地元の粘土を使用して製作された可能性が考えられる。

(7)甕

口縁部や口縁端部の形態からA・Bの2種類に分類できるが、いずれもⅢ類と考えられる。

(8)土錘

土錘は、竹輪形を呈しており、特徴的な形態から容易に判別が可能である。

6. まとめ

本稿は、市場南組1号窯跡の関連資料を集成し、器種ごとに特徴を抽出した結果、Ⅰ類は、高坏・器台１類・壺Ａ・壺Ｂ・壺Ｃ・瓲・把手付鍋・土錘、Ⅱ類は、器台２類・壺Ｄ、Ⅲ類は、壺Ｅ・甑・把手付埦・甕Ａ・甕Ｂに分類することが可能となった。ただし、器種によってはⅠ類のみだけでなく、Ⅱ類の可能性があるものも含まれており、今後の類例の増加によってさらに細分が可能となるであろう。

また本稿では触れなかったが、現在のところⅠ類が松山平野のみならず近畿・中国・九州地方にまで広く分布している理由に明快な解答を持ちえていないが、他の渡来系遺物との関係から生産地と消費地との関係が明らかとなるであろう。

本稿をまとめるにあたって、下記の方々に多大なるご教示・ご指導を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

阿部敬生・井出耕二・岡田敏彦・岡戸哲紀・亀田修一・小林利晴・定森秀夫・柴田昌児・田中清美・谷若倫郎・富田尚夫・長井数秋・西岡誠司・平井泰男・正岡睦夫・三辻利一・三吉秀充・向井孝光・森下大輔・山内英樹・米田敏幸・渡部明夫(順不同・敬称略)

また遺物整理や図面作成などに際して松山市埋蔵文化財センターの職員及び作業員の方々に貴重な時間を割いてご協力を頂きました。厚く感謝申し上げる次第です。

[註]

1)主なものとしては、第5回歴博国際シンポジウム「古代東アジアにおける倭と加耶の交流」2002 国立歴史民俗博物館、日本考古学協会2003年滋賀大会「渡来人の受容と生産組織」2003 日本考古学協会、平成13年度春季特別展「韓国より渡り来て」2001 滋賀県立安土城考古博物館、平成13年度秋季特別展「渡来文化の波」2001 和歌山市立博物館などがある。松山市考古館でも平成14年度特別展「海を渡ってきた　ひと・もの・わざ」2002、平成15年度特別展「渡来人の足跡」2003を開催している。

2)定森秀夫1995「陶質土器・初期須恵器からみた瀬戸内と朝鮮」『古代王権と交流6』名著出版

3)三吉秀充2003「伊予出土陶質土器に関する基礎的研究」『古文化談叢』第49集　古文化研究会

4)定森秀夫1993「出作遺跡の非陶邑系須恵器・陶質土器」『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会

5)梅木謙一1994「松山平野における非陶邑系須恵器に関する一考察」『東山古墳群－4・5次調査－』松山市教育委員会・財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

6)三吉秀充2002「伊予出土の陶質土器と市場南組窯系須恵器をめぐって」『陶質土器の受容と初期須恵器の生産』愛媛大学考古学研究室

7)長井数秋1992「松山平野の須恵器編年」『愛媛考古学』12　愛媛考古学協会

1994「伊予市市場南組１号窯跡出土の須恵器」『ソーシアル・リサーチ』第20号　ソーシアル・リサーチ研究会

8)作田一耕ほか2000「市場南組窯跡」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅣ－伊予市編Ⅲ－』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

9)山之内志郎 2004「愛媛県における初期須恵器の一様相」『韓式系土器研究Ⅷ』韓式系土器研究会

10)谷若倫郎ほか1993『出作遺跡Ⅰ』松前町教育委員会

11)森　光晴1993『下三谷片山・太郎丸埋蔵文化財調査報告書』伊予市教育委員会

12)本稿では研究史について触れなかったため、註9文献を参考にされたい。

13)前掲5文献中より。

No.	遺　跡　名	陶質土器	出作・市場型須恵器	朝鮮系軟質土器	算盤玉形紡錘車
1	松山市船ヶ谷遺跡2次調査地	×	◎	○	×
2	松山市船ヶ谷遺跡4次調査地	◎	◎	◎	×
3	松山市船ヶ谷向山古墳	×	○	×	×
4	松山市美沢遺跡	×	○	×	×
5	松山市松環古照遺跡	×	○	×	×
6	松山市辻町遺跡2次調査地	×	○	◎	×
7	松山市東雲神社遺跡	×	○	×	×
8	松山市東野お茶屋台古墳群	×	◎	×	×
9	松山市畑寺竹ヶ谷古墳群	×	○	×	×
10	松山市素鵞小学校構内遺跡	×	○	×	×
11	松山市樽味高木遺跡3次調査地	×	×	○	×
12	松山市樽味四反地遺跡5次調査地	×	○	○	×
13	松山市樽味四反地遺跡7次調査地	×	×	○	○
14	松山市筋違F遺跡	×	○	○	×
15	松山市筋違H遺跡	×	○	×	×
16	松山市筋違L遺跡	×	×	◎	×
17	松山市福音小学校構内遺跡	×	◎	×	×
18	松山市北久米浄蓮寺遺跡3次調査地	×	◎	×	×
19	松山市旗立C遺跡	×	○	×	×
20	松山市東山古墳群4次調査地	×	○	×	×
21	松山市東山古墳群5次調査地	×	○	×	×
22	松山市五郎兵衛谷古墳	×	○	×	×
23	松山市小野周辺	◎	×	×	×
24	松山市北井門遺跡	×	◎	○	×
25	松山市・砥部町土壇原古墳群	◎	◎	×	×
26	伊予郡松前町出作遺跡	×	◎	×	×
27	伊予市下三谷片山・太郎丸遺跡	○	◎	○	○
28	伊予市猿ヶ谷2号墳封土内	◎	×	×	○
29	伊予市市場南組窯跡	×	◎	×	×

表33　松山平野の古墳時代朝鮮半島系遺物出土遺跡一覧
（凡例）　◎…複数器種の土器　　○…1器種の土器　　×…なし

写真1　高坏(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真2　高坏(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真3　壺A(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真4　壺B(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真5　壺C(土壇原古墳群Ⅴ遺跡12号墳)
愛媛県教育委員会蔵

写真6　壺C(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真7　甑(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真8　把手付鍋(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真9　把手付埦(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真10　甕(土壇原古墳群12号墳)
愛媛県教育委員会蔵

写真11　陶質土器　長頸壺(松山市小野周辺)

写真12　陶質土器　長頸壺(朝倉村樹之本古墳)
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター蔵

写真13
陶質土器
(伊予市猿ヶ谷2号墳封土内)
愛媛県歴史文化博物館蔵

写真14
陶質土器
小型器台
(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真15
陶質土器
高坏・短頸壺
(朝倉村城ヶ谷古墳・朝倉村)
朝倉村教育委員会蔵

写真16　陶質土器　短頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳)
宇和町歴史民俗資料館蔵

写真17　陶質土器　高坏(宇和町伊勢山大塚古墳)
個人蔵

写真18　陶質土器　台付長頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳)
宇和町歴史民俗資料館蔵

写真19　陶質土器　長頸壺(宇和町伊勢山大塚古墳)
個人蔵

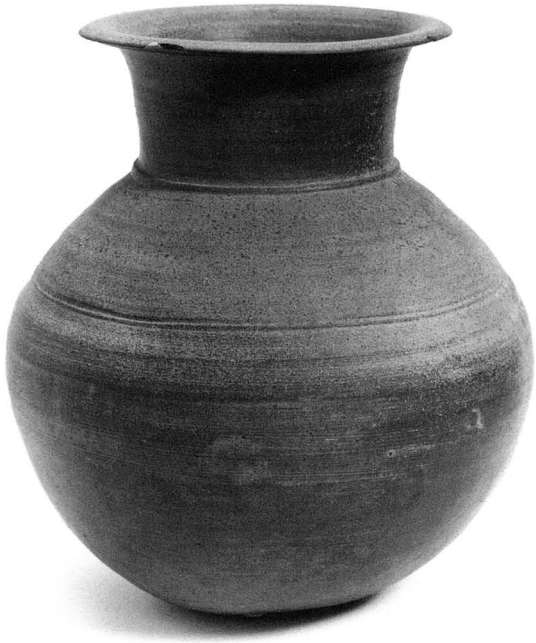


写真20　陶質土器　長頸壺(宇和町)
宇和町歴史民俗資料館蔵

写真21　陶質土器　坏付壺(<上>玉川町別所・<下>土壇原古墳群9号墳)
<上>玉川町教育委員会蔵　<下>愛媛県教育委員会蔵

写真22　陶質土器　壺(宇和町岩木)　個人蔵

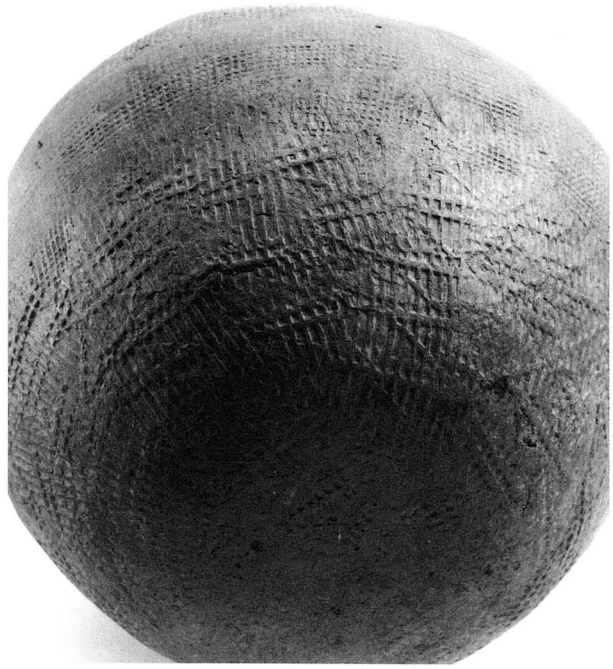


写真23　陶質土器　壺(底部)

写真24　朝鮮系軟質土器(船ヶ谷遺跡4次調査地)

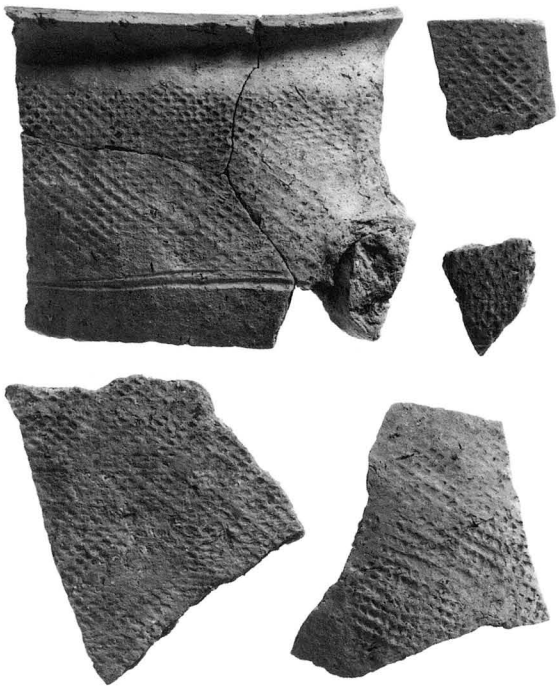


写真25　朝鮮系軟質土器(船ヶ谷遺跡4次調査地)

写真26　算盤玉形紡錘車
(<手前>猿ヶ谷2号墳封土内<左>伊予市片山・太郎丸遺跡<右>筋違B遺跡)
<手前>愛媛県歴史文化博物館蔵<左>伊予市教育委員会蔵<右>

第6章　ま　と　め

本調査では、古墳を6次調査1区から2基（24号墳、25号墳）、2区から5基（20号墳、26号墳、27号墳、28号墳、29号墳）の計7基を検出した。

ここでは古墳の構築方法、出土遺物、時期と変遷について考える。以下、調査成果を項目別に記述する。

1. 石室の構築方法

墳形は、24号墳、20号墳、26号墳、27号墳が円形、28号墳、29号墳は方形であり、25号墳は小石室で削平を受け墳形が確定できなかった。

主体部は、24号墳、20号墳、27号墳は横穴石室、28号墳、29号墳は木棺痕跡は確認できなかったが木棺直葬と考えられる。また、石室の構築方法が調査できたのは、4基（24号墳・25号墳・20号墳・27号墳）で、その構築方法は墓壙構築の地山成形の差により二つに分けられる。一つは、竪穴状に掘窪めるもので（24号墳・25号墳）、もう一つは、斜面の地山を「L」字状（20号墳・27号墳）に切り取るものである。

1）竪穴状の墓壙をもつ石室

24号墳は、尾根線に直行する方向に正方形状の墓壙を掘窪め、閉寒部は尾根線に近い標高の高い方向に階段状に掘窪めた所で行われる。玄門部で段を降りる構造である。

25号墳は、小石室である。尾根に直行する方向に「コ」の字状に地山を切り取る。

2）断面が「L」字状の墓壙をもつ石室

20号墳は、斜面に位置し尾根に平行する方向に地山を「L」字状に切り取る。玄室と羨道部の床面は同一の高さである。27号墳は、斜面に位置し尾根に平行する方向に「L」字状の墓壙を掘窪める。玄室と羨道部の床面は同一の高さである。

このように本調査では、二つの墓壙の構築方法を検出するにいたった。

2. 遺物

古墳7基からは、須恵器、土師器、鉄器、耳環、ガラス玉が出土した。　24号墳では、主体部から須恵器、鉄鏃、刀子、ガラス玉、管玉、勾玉、周溝内から須恵器、鉄鏃が出土した。鉄鏃は、石室内と周溝内から先端部の形状が判別できるものが5点あり、それぞれ、法量と形状に違いが見られ興味深いものである。

25号墳からは、須恵器と耳環が出土した。須恵器の壺形土器は、奥壁中央部玉石上面で正置の状態で出土し、壺の頸部から口縁部が欠失していた。出土状況からは埋葬時の状態をとどめていると判断でき、壺は口頸部を打ち欠いたものを副葬した、打ち欠き土器と考えられる。

20号墳からは、須恵器、土師器、耳環が出土した。このうち土師器の鉢形土器が完形品で1点出土した。

27号墳からは、須恵器、土師器、鉄器が出土した。須恵器の口縁部と高台部が欠失しており、打ち欠かれた土器の可能性が考えられる。

29号墳からは、鉄鋌と鉄刀が出土した。鉄鋌の出土は松山平野では報告例のない大変貴重なものであり、鉄製武具を研究する上での基礎資料となるものである。また、鉄刀は「く」の字状に折り曲げられている。折り曲げられた鉄刀の出土例は、松山市土壇原遺跡10号墳から1点あり、29号墳出土が松山平野では二例目となる。今後、古墳の副葬品、集落出土品など鉄製の折り曲げ行為について注目するものである。

3. 時期と変遷

本調査で検出した古墳の時期は、出土した遺物からすると、24号墳・25号墳は6世紀後半、20号墳は7世紀後半から8世紀、27号墳は7世紀前半、28号墳・29号墳は5世紀以降となり26号墳は出土遺物がなく主体部構造も不明のため時期は確定できていない。

そして、古墳の時期と立地関係を見ると、最も古い5世紀以降の28号墳・29号墳は丘陵中腹の斜面にあり方墳で主体部は木棺直葬と考えられる。次の、6世紀後半の24号墳・25号墳は丘陵の高い位置にあり、円墳で尾根に直行する方向の石室を構築している。つづく、7世紀前半の27号墳は丘陵中腹の斜面にあり、円墳で主体部は尾根に平行する方向に石室を構築する。7世紀後半から8世紀の20号墳は、丘陵中腹の斜面あり、円墳で主体部は尾根に平行する方向に石室を構築するのである。

よって、古墳は時期により立地と主体部に違いが見られ、石室構造にも違いが見られるのである。

4. 位置付け

ここでは、東山古墳群1次～6次調査で検出した古墳を概観し、本調査で確認した7基の古墳について位置付けを行いたい。

東山古墳群内ではこれまでに確認された古墳は29基がある。そのうち、本格的に調査された古墳は、中期から終末までの13基である。墳形には円墳10基、方墳2基があり、主体部には横穴式石室7基、竪穴系横口石室3基、竪穴式小石室1基、木棺2基がある。

中期以降の古墳は、東山28・29号墳の2基である。両墳は丘陵中腹にあり、墳形は方墳である。主体部は木棺直葬と考えられる。東山29号墳の主体部からは鉄鋌と折り曲げられた鉄刀が出土した。

後期古墳は11基ある。6世紀中は東山鳶が森2号墳である。東山鳶が森2号墳は丘陵頂上部に位置し、墳形は円墳で、主体部は横穴式石室である。出土遺物には玉類と腕釧、耳環の装飾品、鉄鏃、鉄斧、馬具などの鉄製品と人骨が出土し、墳丘からは円筒埴輪が出土した。6世紀後半は東山24・25号墳の2基である。両墳は丘陵尾根付近にあり、墳形は24号墳が円墳、25号墳は不明である。主体部は24号墳は竪穴系横口石室、25号墳は竪穴式小石室である。24号墳の開口方向は南側にあり、標高の高い方向に開口している。6世紀末～7世紀初頭は東山鳶が森1・4・8号墳の3基である。1・4号墳は丘陵頂上部に位置し、8号墳は丘陵中腹に位置する。墳形は円墳である。主体部は横穴式石室である。出土遺物には、4・8号墳から多数の玉類と鉄製品、装飾品が出土している。7世紀前半は東山27号墳がある。27号墳は丘陵中腹にあり、墳形は円墳である。主体部は横穴式石室である。7世紀後半は東山19・20号墳2基である。両墳は丘陵中腹に位置し、墳形は円墳である。主体部は横穴式石室である。

調査結果、中期古墳は丘陵中腹に位置し墳形は方墳である。後期古墳は、墳形が円墳で1墳丘に複数の主体部をもつものがあり、主体部には横穴式石室と竪穴系横口石室がある。竪穴系横口石室は頂上部付近に構築することが明らかになった。今後調査が行われていない主体部の調査が進めばより一層時期と立地の関係と石室構造が明確になるであろう。

5. 結び

東山古墳群では、公園整備に伴って4度の発掘調査を行い、古墳時代中期から終末期までの墳墓が多数検出され、松山平野における有数の群集墳であることが明らかとなった。主たる成果は、群集墳の推移を示し、横穴式石室の築造に地域色を見出したことである。くわえて、前回の報告(『東山古墳群－4・5次調査』)で取り上げた非陶邑系須恵器は、胎土分析等により地方窯が存在することを明らかにし、本報告の第５章考察では愛媛県内出土の渡来系遺物を検討することで、東山古墳群出土遺物が「出作・市場型須恵器」であることを明らかにした。この結果は、5世紀後半の東山古墳群の埋葬者が平野内の交流を含めて、朝鮮半島文化との接触を持ち得たことを示すものである。

なお、本書では東山古墳群に関連すると考えられる同時期集落の南中学校構内遺跡を報告に加えた。東山古墳群の被葬者像を明らかにするためにも、今後は周辺集落の分析が必要になろう。

第89図　東山古墳群調査地位置図　　(S=1：2,500)

表34　東山古墳群　古墳一覧表

遺跡名	番号	立地	標高 m	時期	墳形	規模 m	周溝	主体部	規模 m	玄室及び木棺 敷石	玉石	貼床	仕切	袖	羨道 規模 m	墓道	開口方向	出土遺物 主体部	周溝	墳丘	備考
東山鳶が森古墳群	1号A	丘陵頂上	43.40	6C末～7C初	円	11		竪穴系	2.9×1.3		○							耳環・小玉			
	B	〃	〃	〃	〃	〃		〃	2.3×1.1		○										
	2号	丘陵頂上	42.60	6C中	円	13		横穴式石室	2.3×0.85～1.05		○						西南西	須恵器、玉類、腕釧、耳環、鉄製品		円筒埴輪	人骨
	3号	丘陵中腹	41.60		円	12		竪穴系横口石室	2.2×1.1									土師器、鉄製品		弥生土器	人骨
	4号A	丘陵中腹	38.60	6C末～7C初	円	13.7	○	横穴式石室	3.2×1.55～1.8	○	○			○	(　)×0.9～1.1		西南西	須恵器、玉類、鉄製品			排水溝
	B	〃	〃	〃	〃	〃		〃	2.3×1.0		○				0.9×0.6		西南西	耳環、玉類、鉄製品			
	5号	丘陵中腹	42.00		(円)	壊滅（14）															
	6号	丘陵中腹	42.20	7C後	円	19	○	横穴式石室	4.2×1.8～1.9	○	○		○	○	2.8×1.2			須恵器、玉類、耳環、銅鏡片、鉄製品	須恵器		
	7号	丘陵中腹	39.20			壊滅（15）	○														
東山鳶が森古墳群2次調査	8号A	丘陵中腹	38.60	6C末～7C初	円	14		横穴式石室									南南西	耳環、玉類、鉄製品			
	B																西南西	耳環、玉類、鉄製品			
	C																	須恵器、耳環、玉類、鉄製品			
東山古墳群4次調査	9号	丘陵中腹	41.60		円	10～12	○												須恵器、土師器		旧地形の上に主体部
	欠番																				
	11号	丘陵頂上	43.80		円			未調査													
	12号	丘陵中腹	42.80		円		○	〃													
	13号	丘陵中腹	39.80		円	12～14	○	〃											須恵器		
	14号	丘陵中腹	33.20		円		○	〃													
	15号	丘陵中腹	42.20		円	12～14	○	〃											須恵器		
	16号	丘陵中腹	38.20		方	7	○	木棺直葬											〃		
	17号	丘陵中腹	37.80		方		○	〃							3.8×1.3				〃		
	18号	丘陵中腹	38.60		方		○	〃											〃		
東山古墳群5次調査	19号	丘陵中腹	37.00	7C後	円	20	○	横穴式石室	3.8×1.3	○	○		○				南南西	須恵器、耳環、玉類、鉄製品			
	20号	丘陵中腹	33.20	〃	円	12	○	〃		○	○						南	須恵器、土師器、耳環			
	21号	丘陵中腹	41.40					〃			○										
	22号	丘陵中腹	34.80					未調査							3.21×1.36						
	23号	丘陵中腹	34.80					〃							1.77×0.93						
東山古墳群6次調査	24号	丘陵頂上	44.80	6C後	円	10	○	竪穴系横口石室	3.21×1.36	○	○						西南西	須恵器、玉類、鉄製品	須恵器、鉄製品		
	25号	丘陵頂上	44.60	〃				竪穴小石室	1.77×0.93	○	○						南	須恵器、耳環			
	26号	丘陵中腹	34.00		円	11	○														
	27号	丘陵中腹	31.00	7C前	円	8.45	○	横穴式石室			○						南	須恵器、耳環	須恵器		
	28号	丘陵中腹	31.20	中期以降	方		○	木棺直葬													
	29号	丘陵中腹	31.00	〃	方		○	〃										鉄鋌、鉄刀			折り曲げられた鉄刀

【文献】西尾幸則 1981『東山鳶が森古墳群調査報告書』　田城武志 1994『東山古墳群』「4・5次調査」　栗田茂敏 1995『四国における横穴石室の成立と展開』「古代学協会四国支部第9回徳島大会」

附章　南中学校構内遺跡（1次調査）の調査

松山市教育委員会社会教育課は、昭和50年4月～5月に市立南中学校構内で、運動場増設に伴う事前の埋蔵文化財の発掘調査を行った。調査の結果、古墳時代中期の集落跡を確認し、竪穴式住居址1棟、掘立柱建物跡1棟と、弥生時代～古墳時代の土器・石器を検出した。以下、調査内容を記す。

南中学校は、松山平野中央部の沖積地、標高22～23mに立地する。構内は「163　南中学校遺物包蔵地」に指定され、周辺には弥生時代～古代の遺跡が分布している。本調査の対象地は、中学校構内のグランド南東部にあたり、面積は南北10m、東西15mの150㎡である。調査では、西側で竪穴式住居址（SB1）と、東側で掘立柱建物跡（掘立1）を検出した（写真1）。

竪穴式住居址SB1は写真2で、住居址の約2分の1を検出し、平面形態は四角形を呈する。検出面から床面までの深さは浅く、住居内からは土師器、弥生土器、石器が出土している（第91図1～11）。

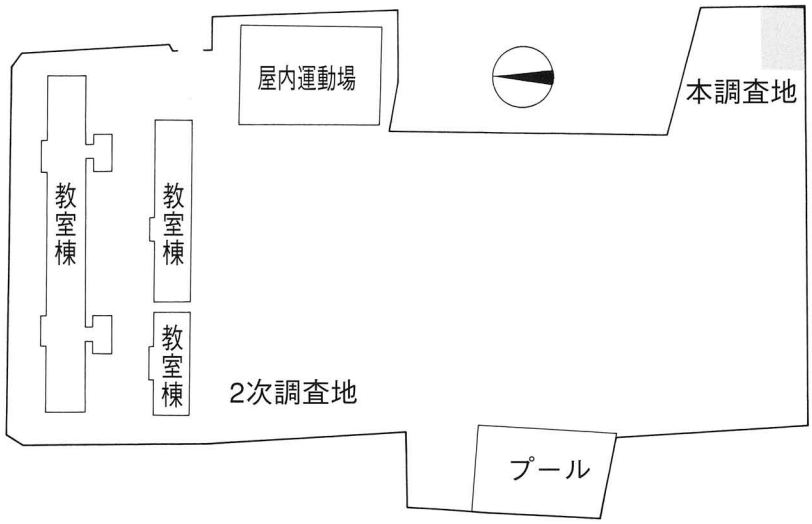
1～8は土師器で、1は甕、2～8は高坏になり、5世紀後半に比定される。9・10は弥生土器で、9は前期の壺底部、10は後期の壺ないし鉢の底部になる。11は砥石で、四面に砥面が見られ、石材は石英粗面岩である。住居址の時期は出土品から5世紀後半とする。

掘立柱建物跡1号（掘立1）は写真3で、1間四方の建物である。出土品は第91図12～14で、12・13はコシキ、14は高坏で、5世紀後半に比定される。建物の時期は出土品から5世紀後半とする。

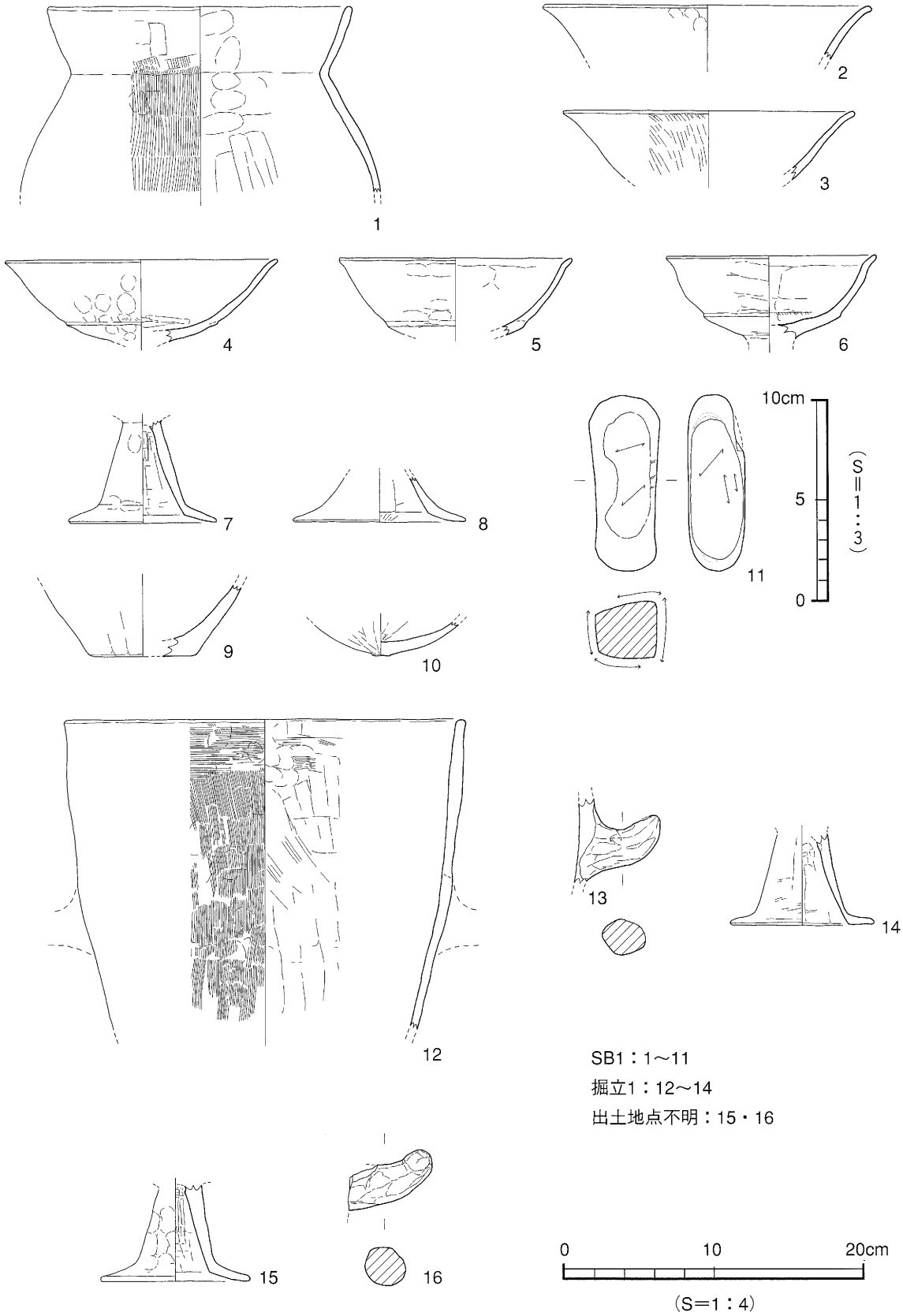
この他に、調査区内からは土師器の高坏脚部（15）やコシキの握り手部（16）が出土し、いずれも5世紀後半とみられる。

以上から、南中学校構内の南には、古墳時代中期の集落跡が存在し、竪穴式住居と掘立柱建物とで構成されていたことが判明した。

遺　跡　名：南中学校構内遺跡（１次調査地）
調　査　地：松山市東石井町678番地内（松山市立南中学校構内）
調 査 期 間：昭和50年4月30日～同年５月15日
調 査 面 積：150㎡
調 査 担 当：森　光晴
（註）今回の報告では、記録類が充分でなく、詳細な報告をすることが出来なかった。



第90図　調査地位置図（S＝1：2000）



第91図　出土遺物実測図

表1　出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(20.4) 残高 12.3	口縁部は内湾して立ち上がる。端部は丸い。	㊐ナデ ㊥ハケ	ナデ	乳褐色 乳褐色	石・長(1~3) 金 ◎	SB1	
2	高坏	口径(22.0) 残高 3.5	外反する口縁部は、端部が面をなす。	ナデ	ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1) ◎	SB1	
3	高坏	口径(19.4) 残高 4.6	外反する口縁部は、端部が丸い。	ミガキ(マメツ)	ミガキ(マメツ)	淡橙褐色 淡橙褐色	密 金 ◎	SB1	
4	高坏	口径 18.3 残高 5.5	外反する口縁部は、端部付近で、ゆるやかに折り曲がる。	ナデ	ナデ	乳白色 橙褐色	石・長(1) ◎	SB1	
5	高坏	口径(15.6) 残高 5.1	外反する口縁部は、端部付近で、ゆるやかに折り曲がる。	ナデ	ナデ	橙褐色 橙褐色	石・長(1~2) 金 ◎	SB1	
6	高坏	口径(14.1) 残高 5.6	坏底部と口縁部境は段をなす。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	密 金 ◎	SB1	
7	高坏	底径(10.0) 残高 6.9	柱裾部境の内面は稜をなす。	ナデ	ナデ(工具痕)	淡黄褐色 淡黄褐色	密 金 ◎	SB1	
8	高坏	底径(13.6) 残高 3.1	柱裾部境の内面は稜をなす。	マメツ(ミガキ)	㊦ケズリ ㊨ヨコナデ	橙茶色 橙茶色	密 ◎	SB1	
9	壺	底径(7.2) 残高 4.6	平底の底部。	ナデ	ナデ	淡黄色 茶褐色	石・長(1~2) 赤色粒・安山岩 ◎	SB1	
10	鉢	底径(1.2) 残高 2.1	突出する小さい底部。	マメツ	マメツ	淡黄色 淡灰色	石・長(1~2) ◎	SB1	
12	甑	口径(27.0) 残高 20.2	直立する口縁部は、端部が面をなす。	ハケ	ハケ→ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1~2) 金 ◎	掘立1	
13	甑	残高 5.4	握手部は角柱状で、端部が上方を向く。	ナデ	ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1~2) ◎	掘立1	
14	高坏	底径(9.6) 残高 5.2	柱裾部境の内面は稜をなす。	ナデ(工具痕)	㊦ケズリ ㊨ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	密 ◎	掘立1	
15	高坏	底径(10.0) 残高 6.4	柱裾部境の内面は稜をなす。	㊦ナデ ㊨ヨコナデ	㊦ケズリ ㊨ヨコナデ	黄茶色 黄茶色	密 ◎	地点不明	
16	甑	直径 2.5	握手部は円柱状で、端部が上方を向く。	ナデ		淡橙褐色 淡橙褐色	石・長(1~3) ◎	地点不明	

表2　出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
11	砥石	完存	石英粗面岩	8.7	3.6	2.8	125	SB1	

写真1
調査地全景（西より）

写真2
SB1（西より）

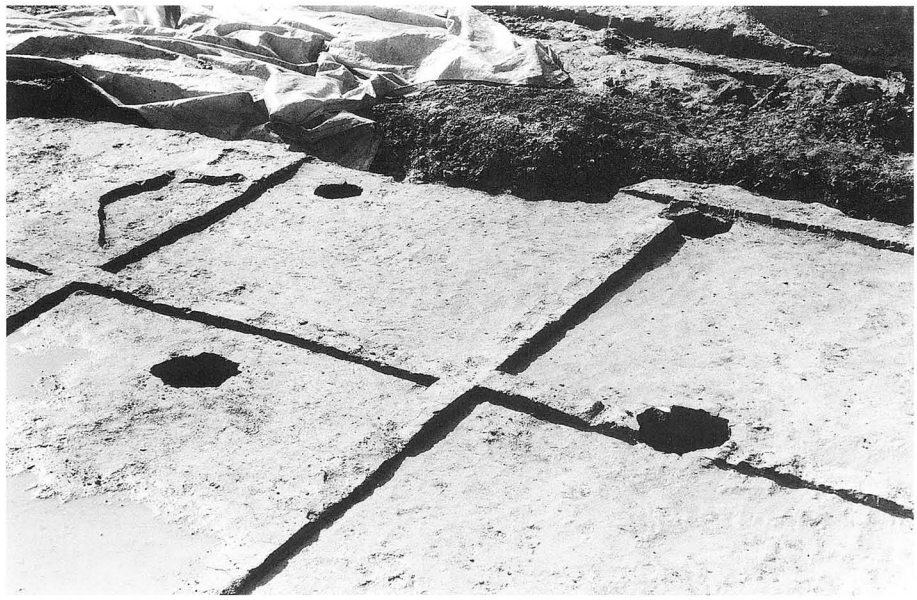


写真3
掘立1（南より）

写　真　図　版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。ただし、3次調査は35㎜カラーネガを基にした。一部の撮影には高所作業車・やぐらを使用した。

なお、東山古墳群の現況は、2003年12月に撮影したものである。

使用機材：

カメラ　トヨフィールド45A　　レンズ　スーパーアンギュロン90㎜他
　　アサヒペンタックス67　　ペンタックス67　55㎜他
　　ニコンニューFM2　　ズームニッコール28～85㎜他
フィルム　白　黒　プラスXパン・ネオパンSS
　　カラー　エクタクロームEPP

2．遺物は、4×5判で撮影した。巻頭原色図版の写真のほかは、すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ　トヨビュー45G
レンズ　ジンマーS240㎜F5.6他
ストロボ　コメット/CA32・CB2400
スタンド等　トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム　白　黒　プラスXパン・ネオパンアクロス
　　カラー　エクタクロームEPP

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機　ラッキーMD・90MS
レンズ　エル・ニッコール135㎜F5.6A・50㎜F2.8N
印画紙　イルフォードマルチグレードⅣRCペーパー

4．製版　写真図版175線
印刷　平版オフセット印刷
用紙　マットコート135kg
製本　アジロ綴

【参考】　『埋文写真研究』vol. 1～13
　　『報告書制作ガイド』

［大西朋子］

1．東山古墳群遠景（南西より）

2．3次調査地現況（南より）

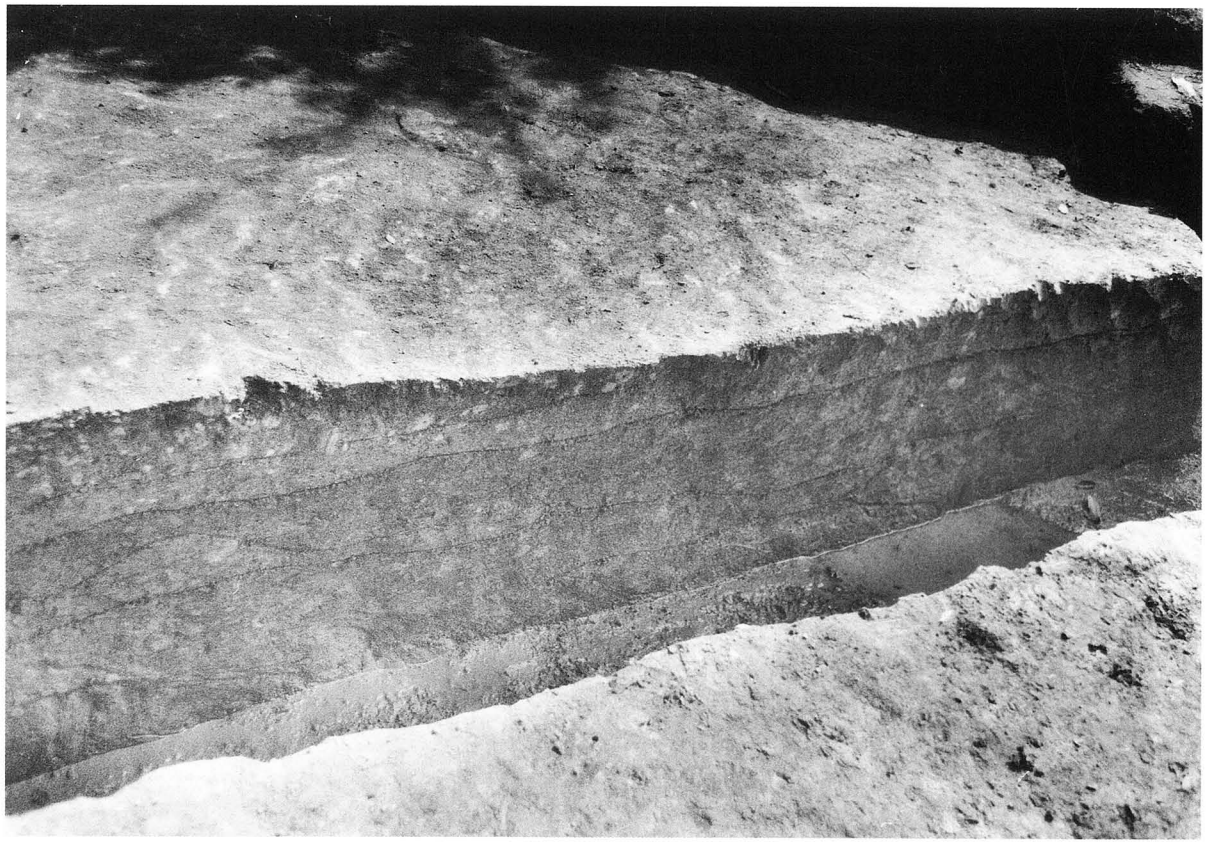
1. AT1区 完掘状況(1)(西より)

2. AT1区 完掘状況(2)(西より)

1. AT2区 完掘状況(1)(西より)

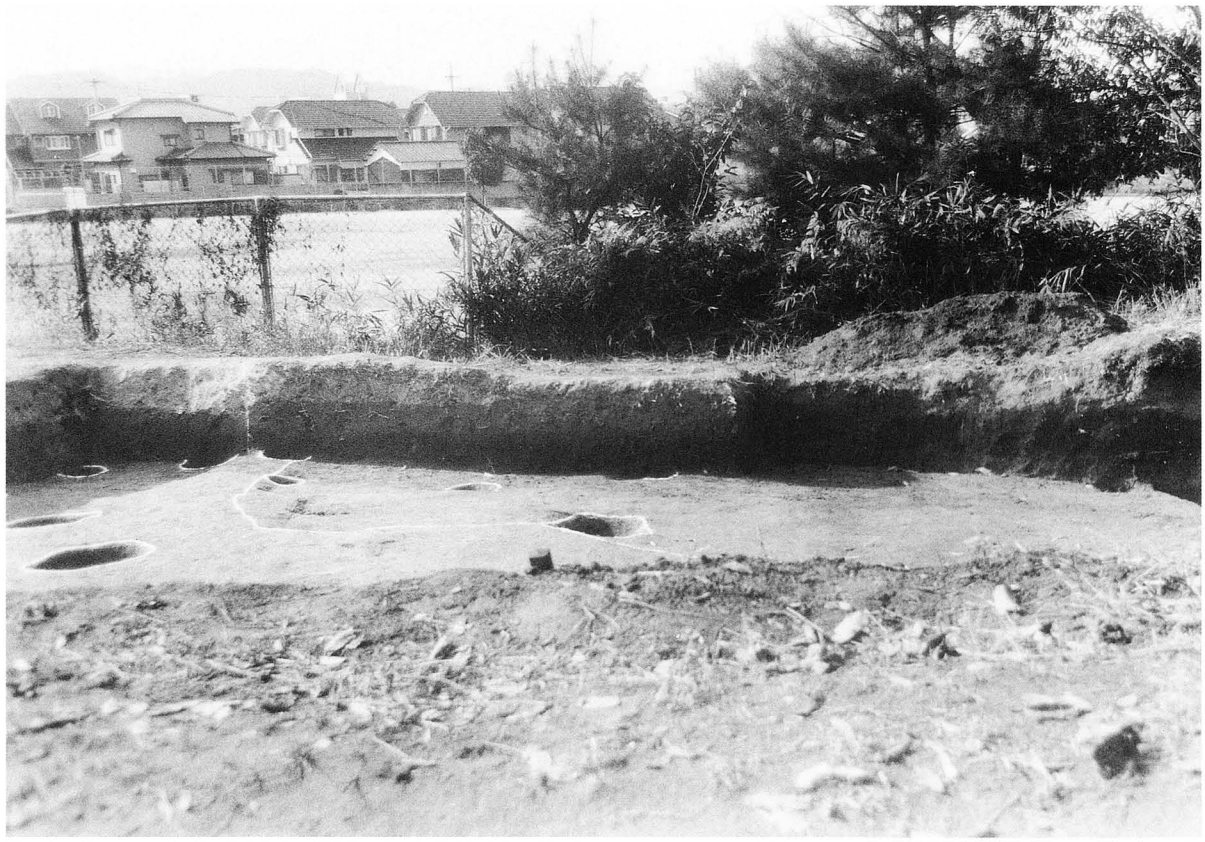
2. AT2区 完掘状況(2)(北東より)

1. AT3区　完掘状況（西より）

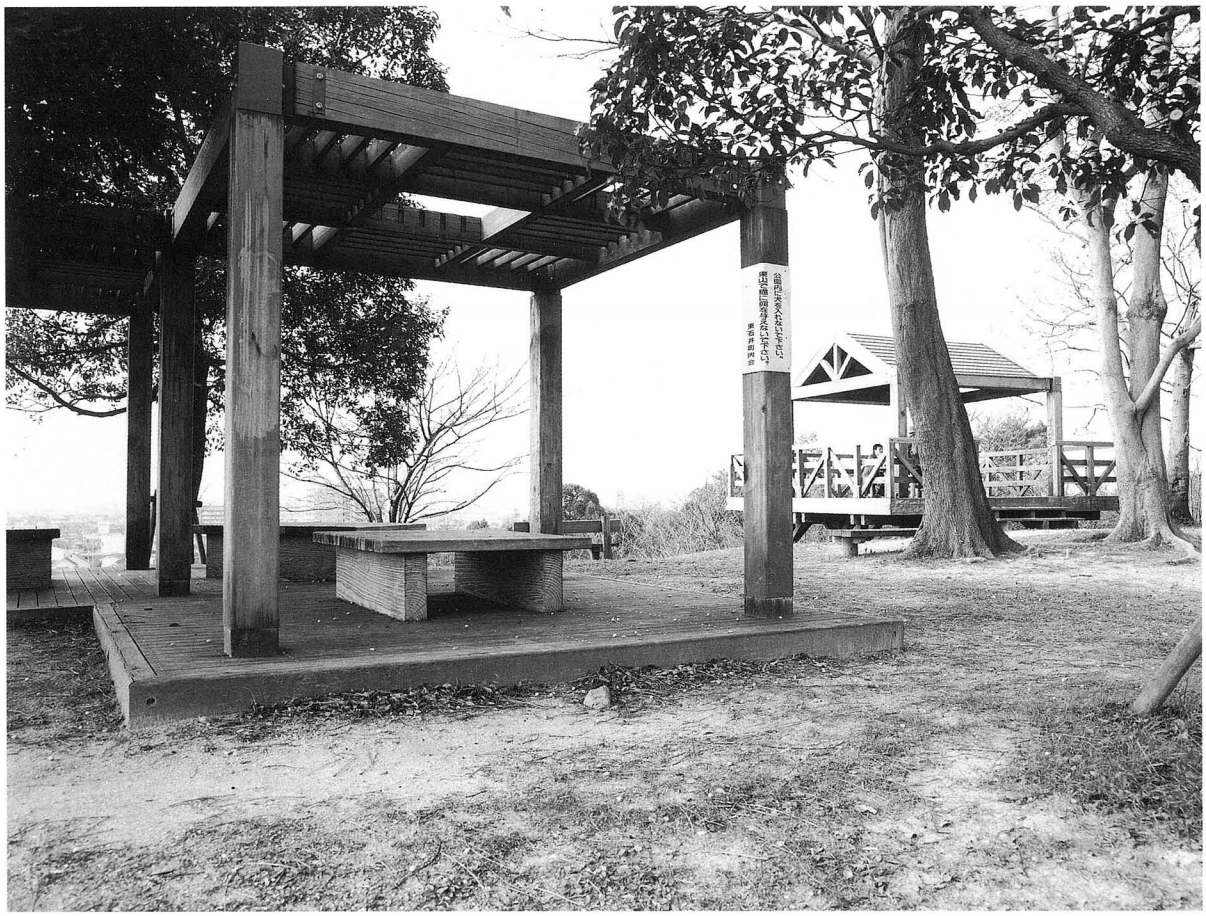


2. AT4区・AT5区　東西ベルト土層状況（北より）

1. BT3区　完掘状況（北東より）



2. BT4区・BT5区　完掘状況（北東より）



1．6次調査地1区現況（北より）

2．6次調査地2区現況（南東より）

1．1区検出状況（北より）

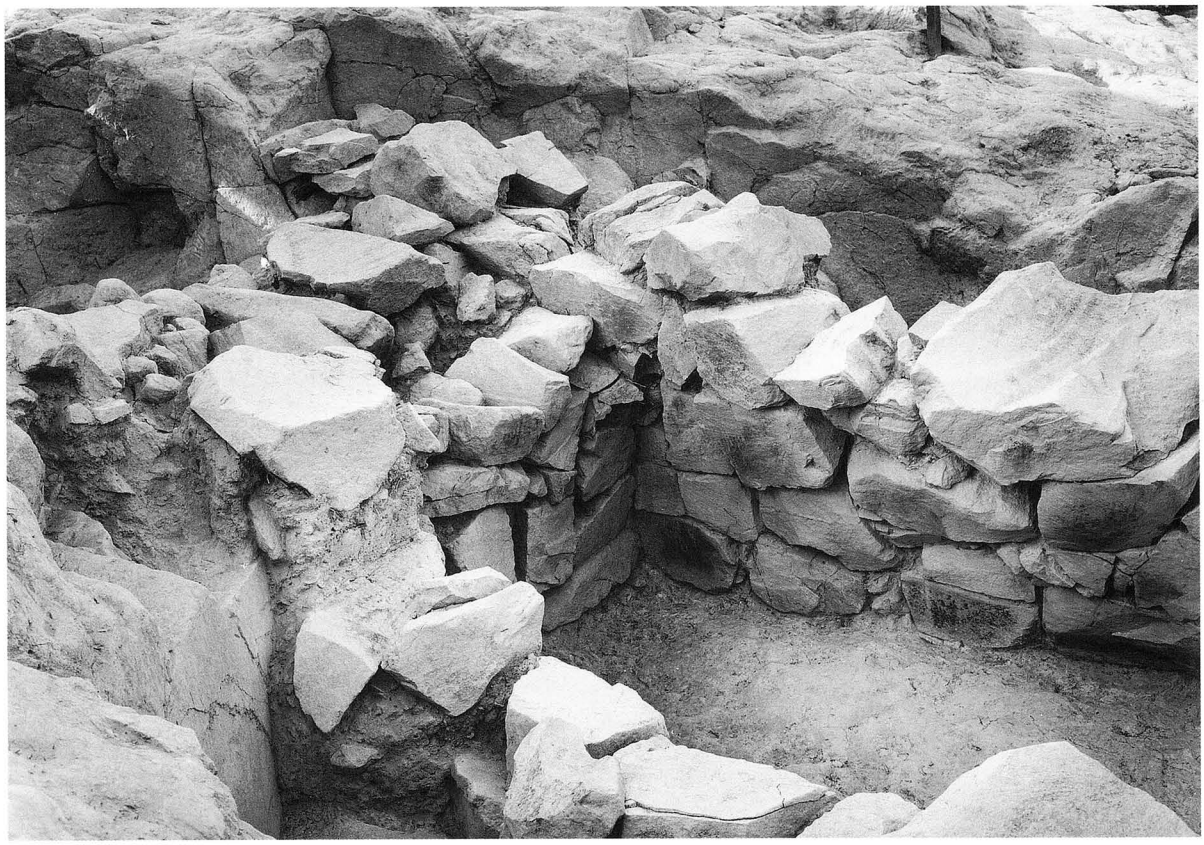
2．1区　完掘状況（北より）

1．24号墳石室完掘状況（西より）

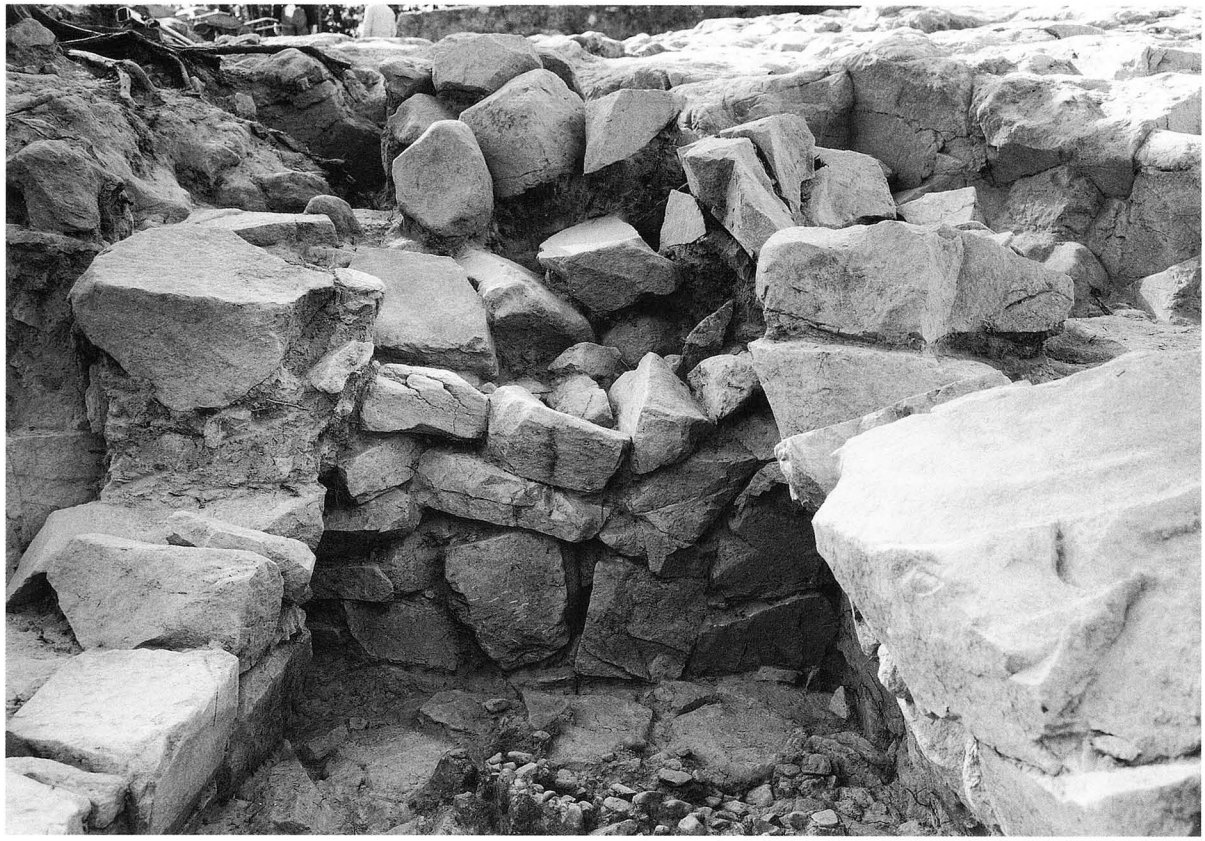
1. 24号墳石室・周溝完掘状況（北より）

2. 24号墳床面検出状況（1）（東より）

1. 24号墳床面検出状況（2）（東より）



2. 24号墳閉塞状況（1）（南より）

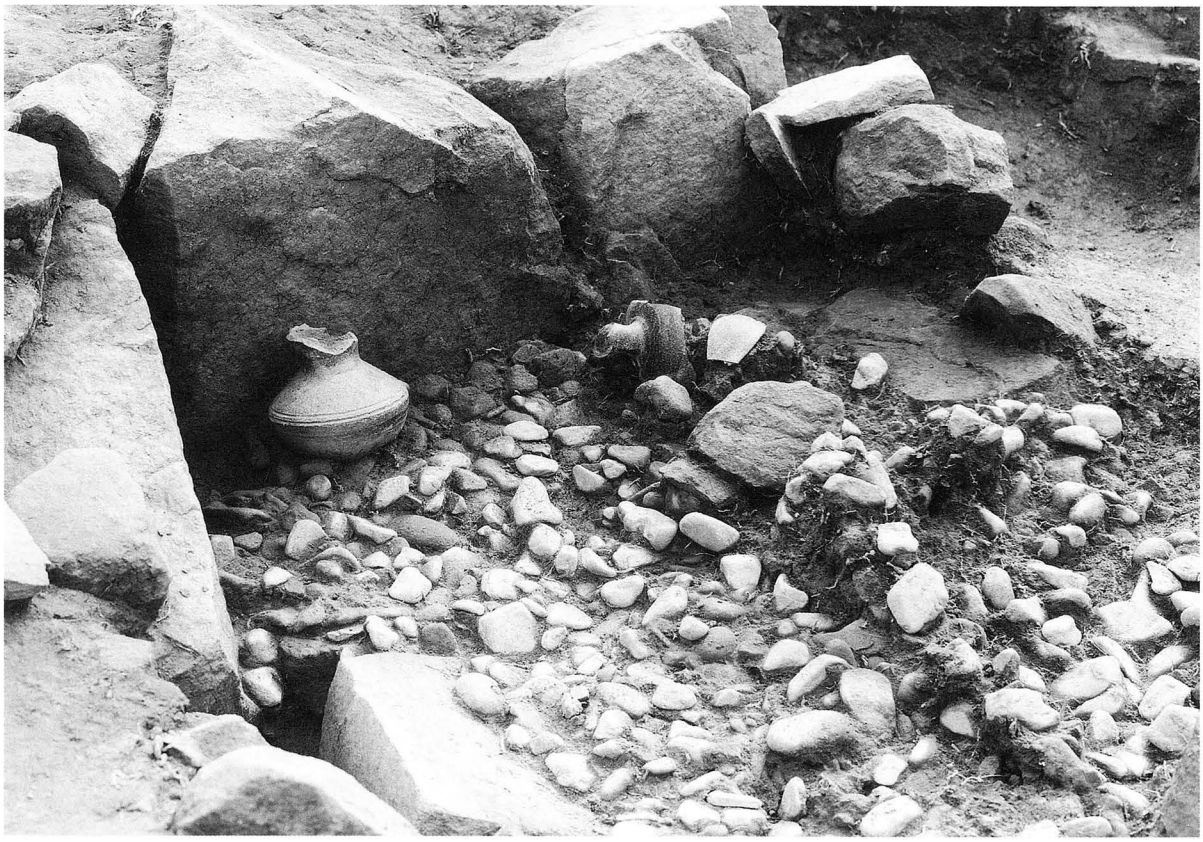


1. 24号墳閉塞状況（2）（東より）

2. 24号墳閉塞石除去後状況（東より）

1．25号墳検出状況（奥）（東より）

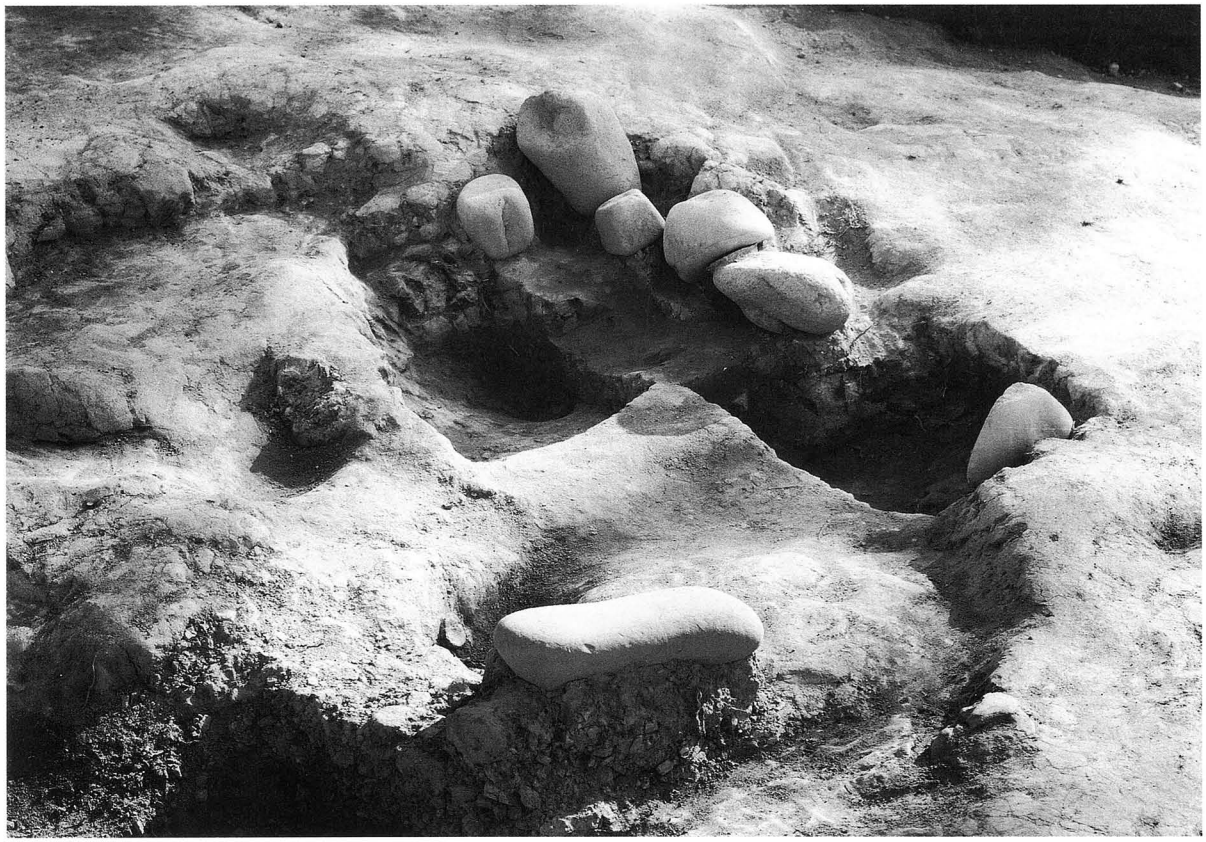
2．25号墳床面検出状況（西より）



1．25号墳遺物出土状況（西より）

2．25号墳床面検出状況（西より）

1. SK101・SK102完掘状況（北東より）



2. SK101完掘状況（北東より）

1. SK102 完掘状況（北東より）

2. SK102 遺物出土状況（北東より）

1. SX101・SX102 完掘状況（北より）

2. SX101遺物出土状況（北より）

1. SX102 完掘状況(1)(南より)

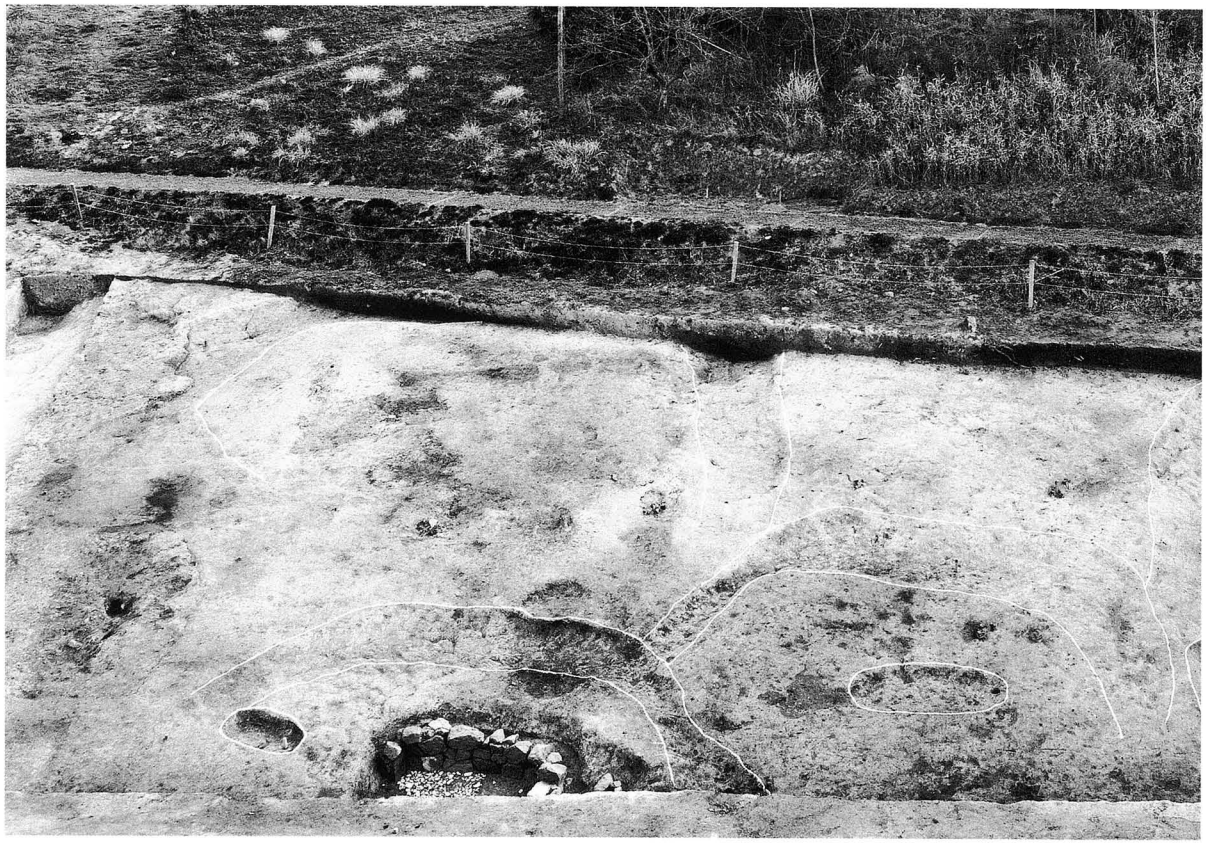
2. SX102 完掘状況(2)(東より)

1．2区　検出状況（西より）

2．2区完掘状況（西より）

1. 20号墳石室内遺物出土状況（南より）

2. 20号墳床面検出状況（南より）



1. 26号墳・27号墳・28号墳完掘状況（西より）

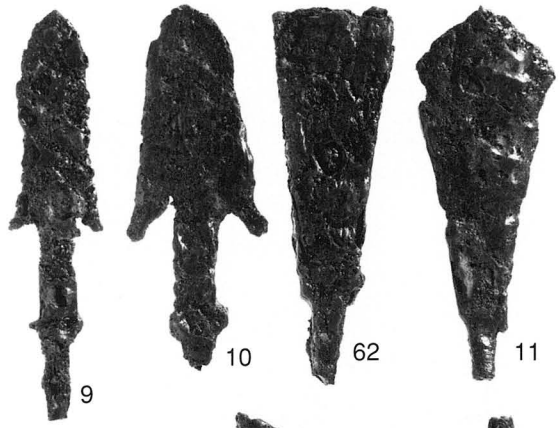
2. 27号墳完掘状況（西より）

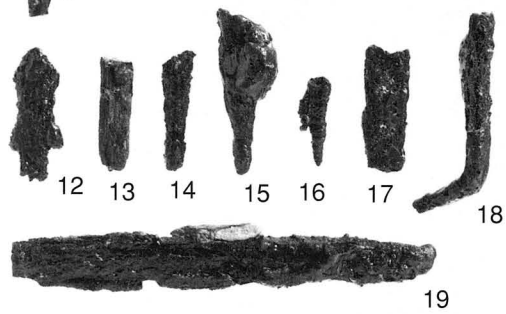
1. 27号墳周溝内遺物出土状況（東より）

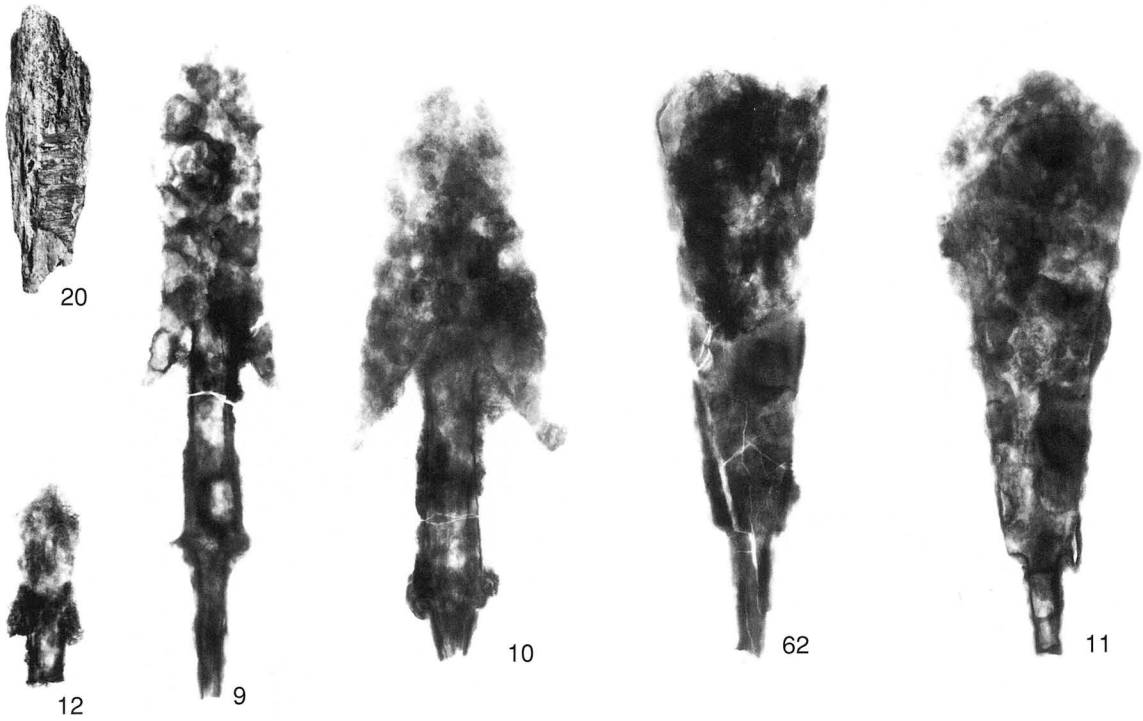
2. 29号墳完掘状況（南より）

1. 29号墳鉄鉾出土状況（西より）

2. 29号墳鉄刀出土状況（北より）







1．24号墳主体部・周溝内（62）出土遺物

64

63

65

67

68

69

70

71

99

1. 25号墳（63～65）、SK102（67）、SK103（68、69）、SX101（70、71、99）出土遺物

107

108

114

117

118

120

121

122

1. SX101出土遺物

125

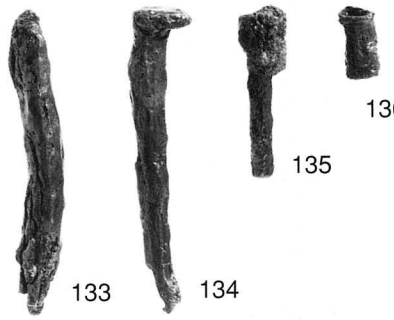
123

126

128

132

130


133 134 135 136

137

139

140

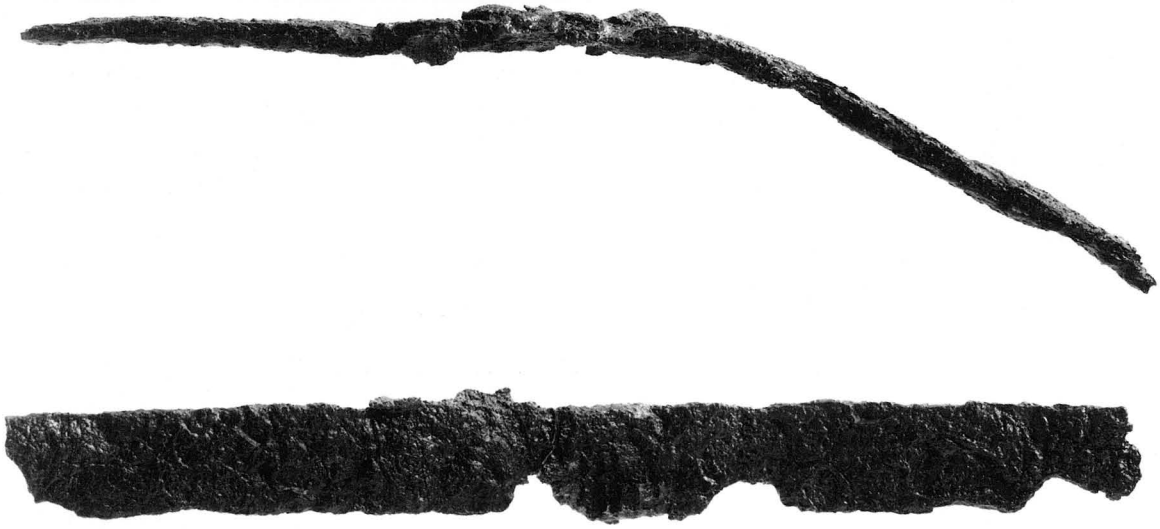
141

144

1. 20号墳（123・125・126）、27号墳石室内（128・130・132～136）、羨道部（137）、周溝内（139～141・144）出土遺物

146

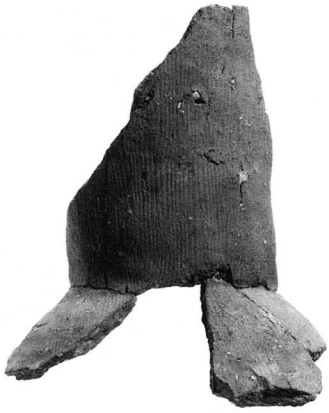
1．29号墳出土遺物



147

169

171

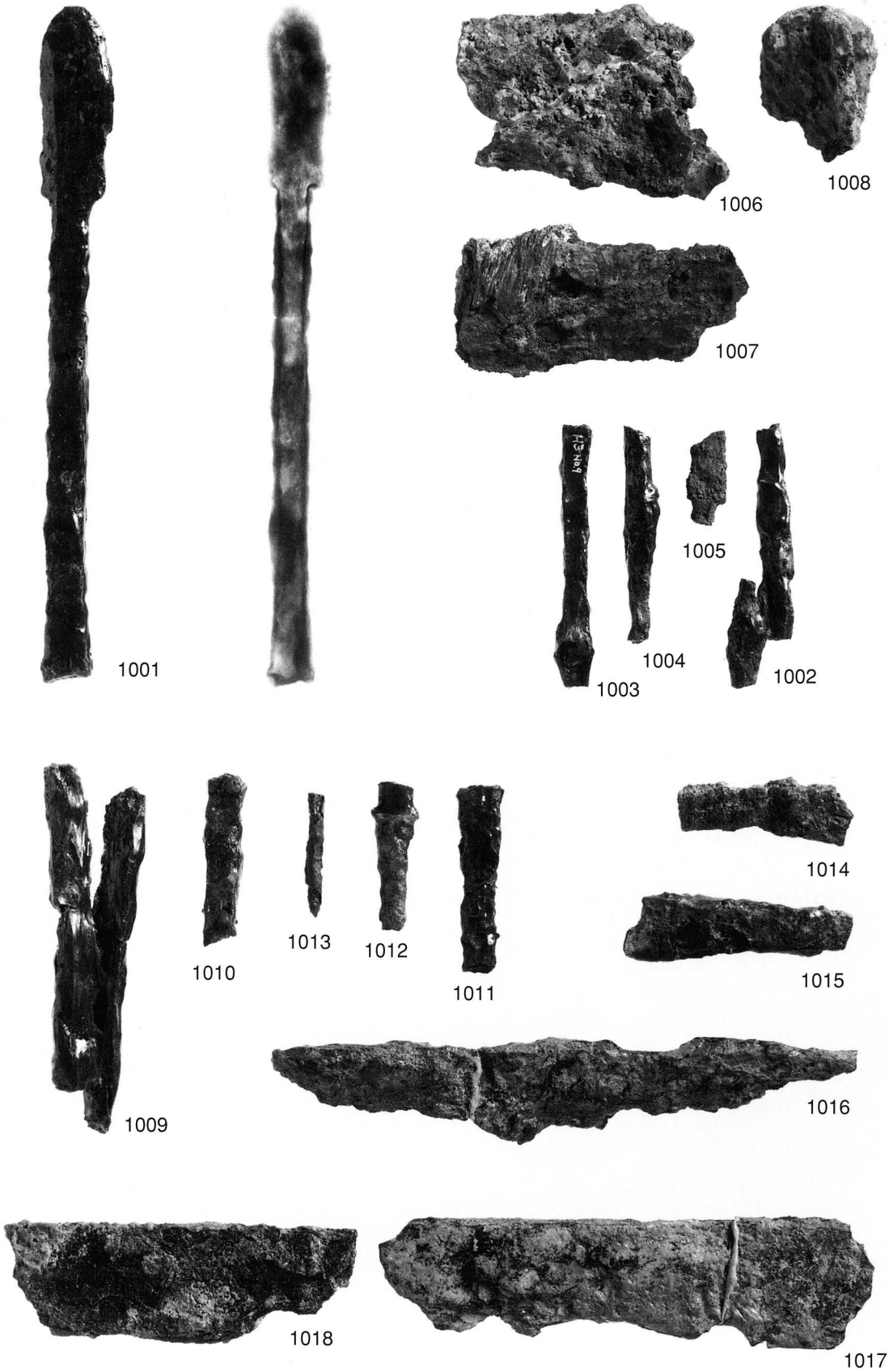


170

172

173

1. 29号墳（147）、その他出土地点不明（169～173）、出土遺物



1．東山鳶が森古墳群1次調査地1号墳（1001）、3号墳（1002～1008）、4号墳（1009～1018）出土遺物

東山鳶が森古墳群

1. 東山鳶が森古墳群1次調査地6号墳（1019～1022）、2次調査地8号墳（1023～1032）、出土遺物

1039

1040

1041

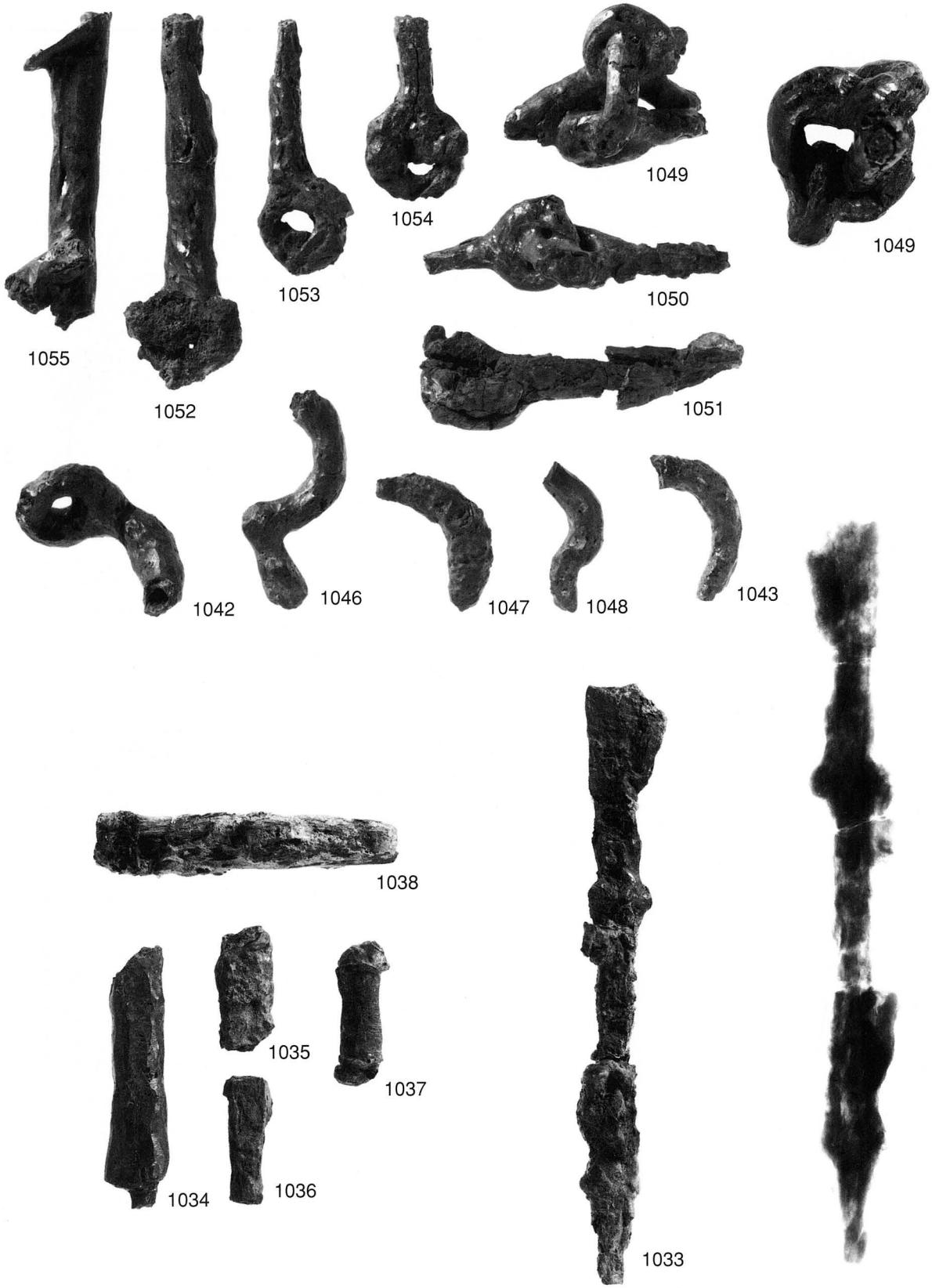
1044

1045

1044

1041

1．寄贈品（1）


1049
1054
1049
1053
1050
1055
1052
1051
1042
1046
1047
1048
1043
1038
1035
1037
1034
1036
1033

1．寄贈品(2)

報告書抄録

ふりがな	ひがしやまこふんぐん
書名	東山古墳群Ⅱ
副書名	３次調査・６次調査
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第97集
編著者名	髙尾和長・山之内志郎・梅木謙一
編集機関	松山市教育委員会 （財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委:〒790－0003　松山市三番町6丁目6－1　℡　089－948－6605 埋　文:〒791－8032　松山市南斎院町乙67－6　℡　089－923－6363
発行年月日	西暦　2004年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村名	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしやま 東山3次調査地	まつやま しひがしいしいちょう 松山市東石井町乙３９番地１ほか	38201		33°48′45″	132°47′02″	19881026～19881120	500㎡	公園整備
ひがしやま 東山6次調査地	まつやま しひがしいしいちょう 松山市東石井町乙３９番地１ほか	38201		33°48′45″	132°47′02″	19921101～19930331	1,100㎡	公園整備
みなみちゅうがっこうこうない 南中学校構内１次調査地	まつやま しひがしいしいちょう 松山市東石井町６７８番地	38201		33°48′10″	138°46′44″	19750430～19750515	150㎡	運動場増設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東山３次調査地	古墳	古墳時代	周溝・溝・柱穴	土師器	
東山６次調査地	古墳	弥生時代前期～古墳時代後期	土坑・周溝・主体部	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・鉄製品	鉄鉾・折り曲げ鉄刀の出土
南中学校構内１次調査地	集落	古墳時代	竪穴式住居址・掘立柱建物跡	弥生土器・土師器・石器	

松山市文化財調査報告書　第97集

東山古墳群 Ⅱ

― 3次調査・6次調査 ―

平成16年3月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL（089）948-6605
財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
TEL（089）923-6363

印刷　明星印刷工業株式会社
〒790-0056　松山市土居田町500番地
TEL（089）971-7111